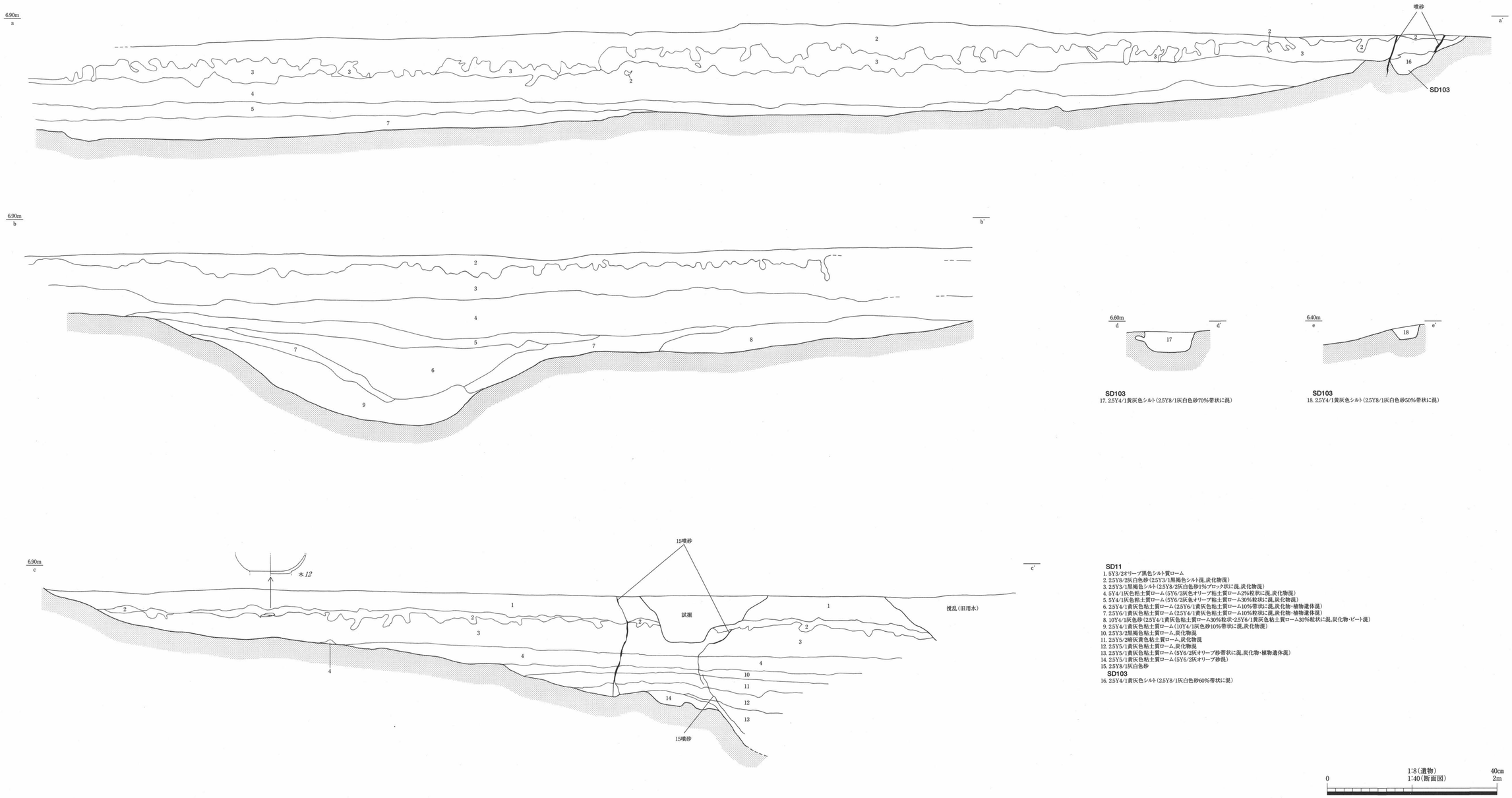
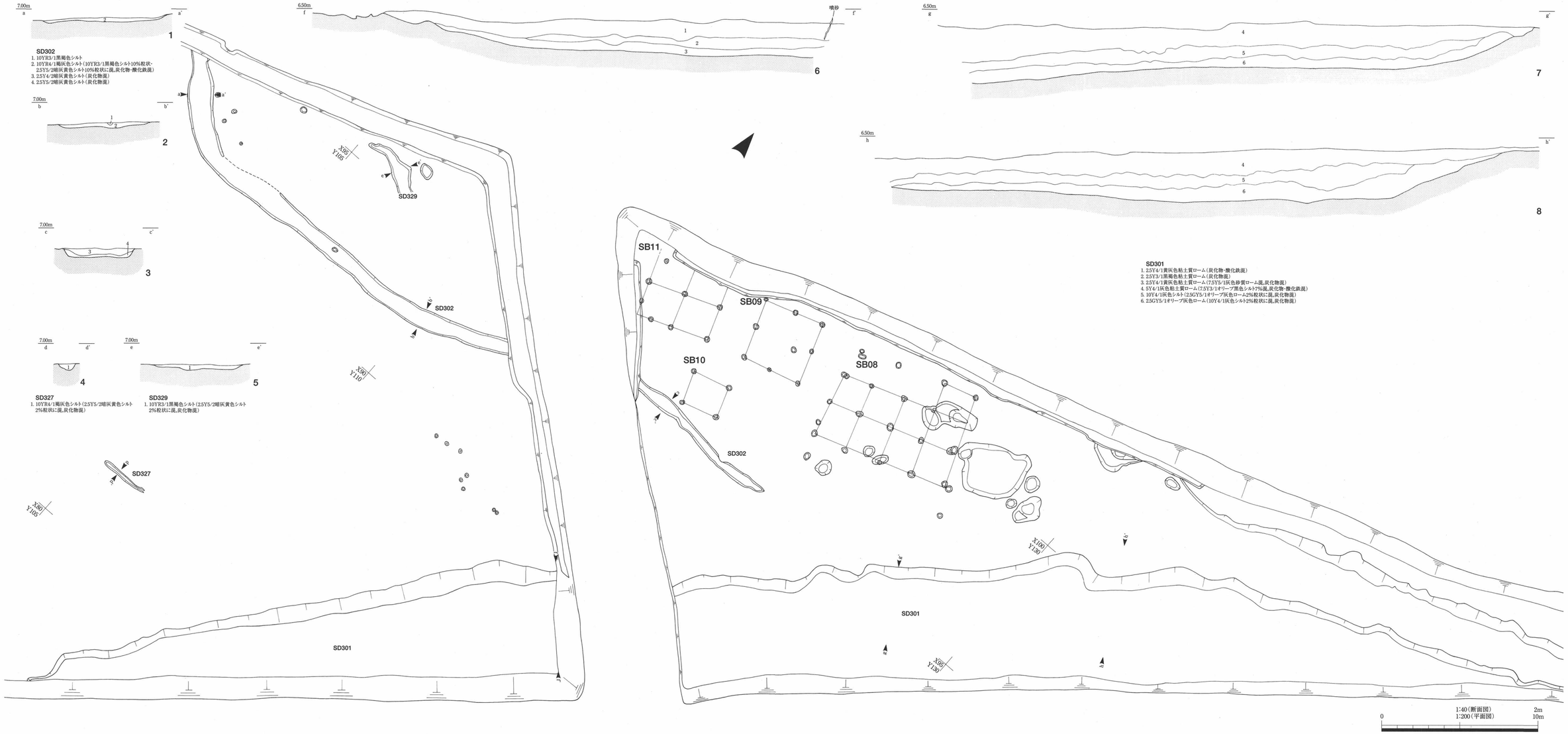


第47図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

SD11・SD103

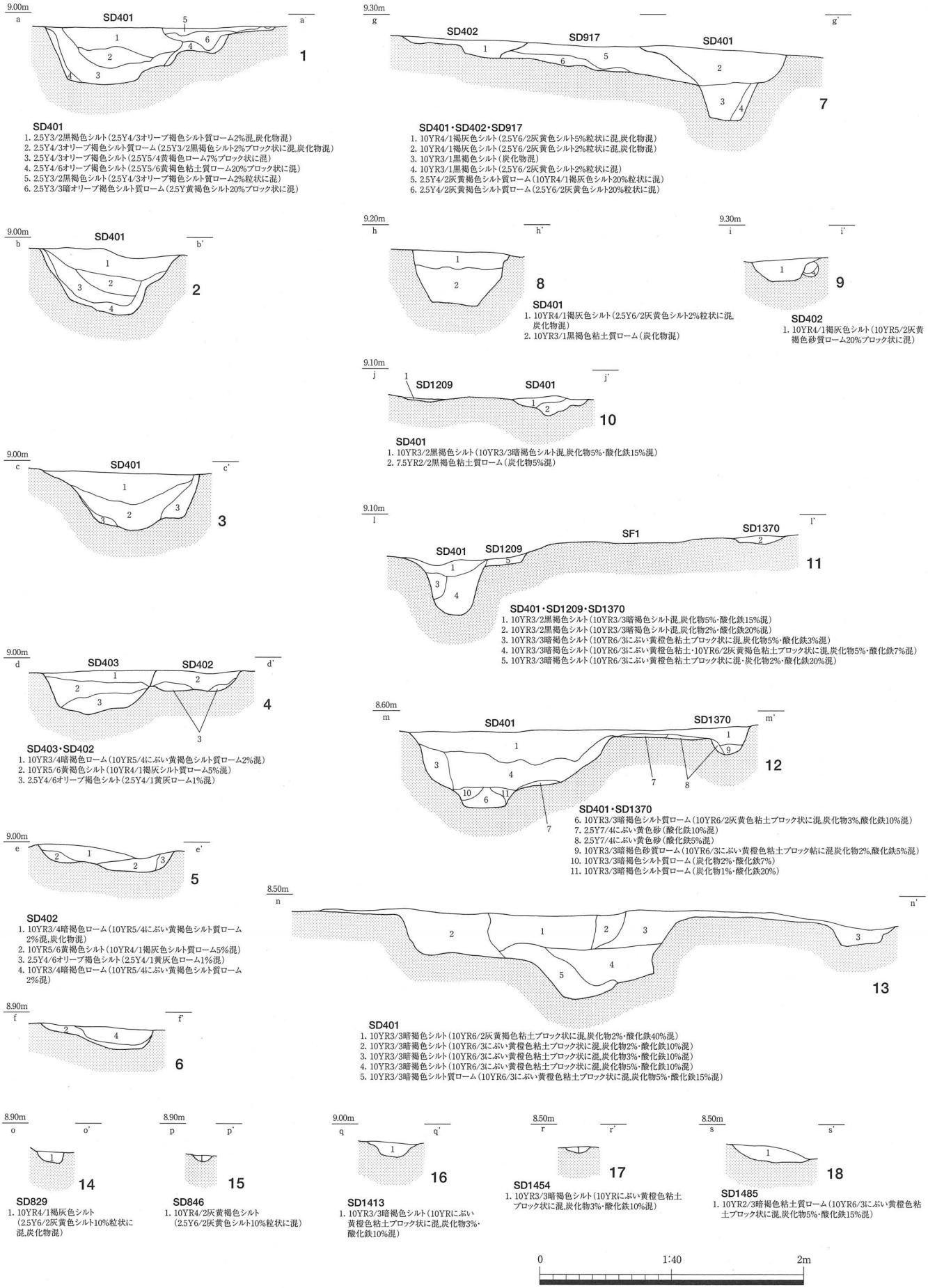


第48図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

1～3. SD302　4. SD327　5. SD329　6～8. SD301

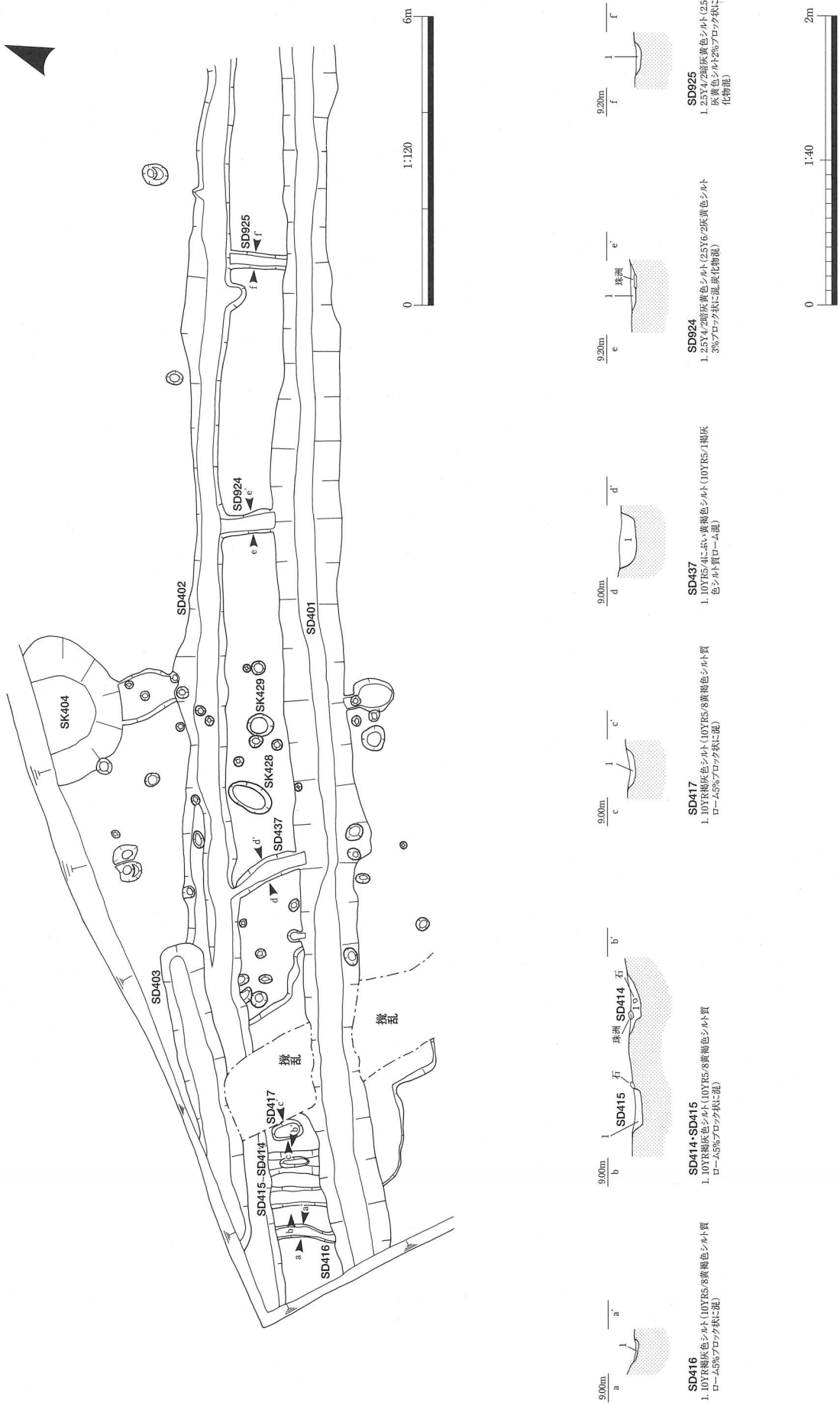
第49図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

SB12～SB26　SF1　SD401～SD403・SD829・SD846・SD914～SD916・SD1209・SD1370・SD1413
SD1454・SD1485・SD1504



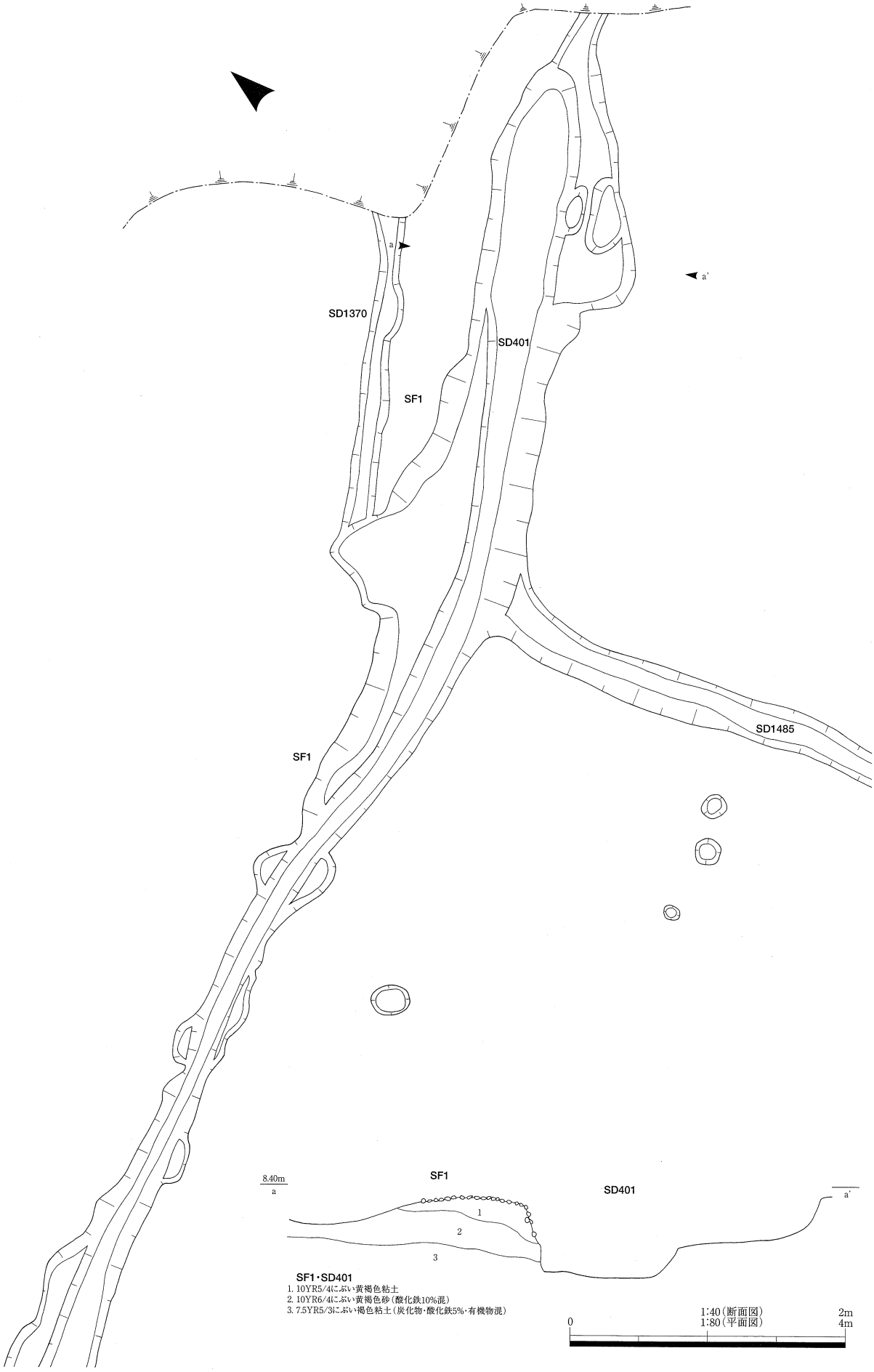
第50図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

1～3. SD401　4. SD402・SD403　5・6. SD402　7. SD401・SD402・SD917　8. SD401　9. SD402　10. SD401・SD1209　11・12. SD401・SD1209・SD1370　13. SD401　14. SD829　15. SD846　16. SD1413　17. SD1454　18. SD1485

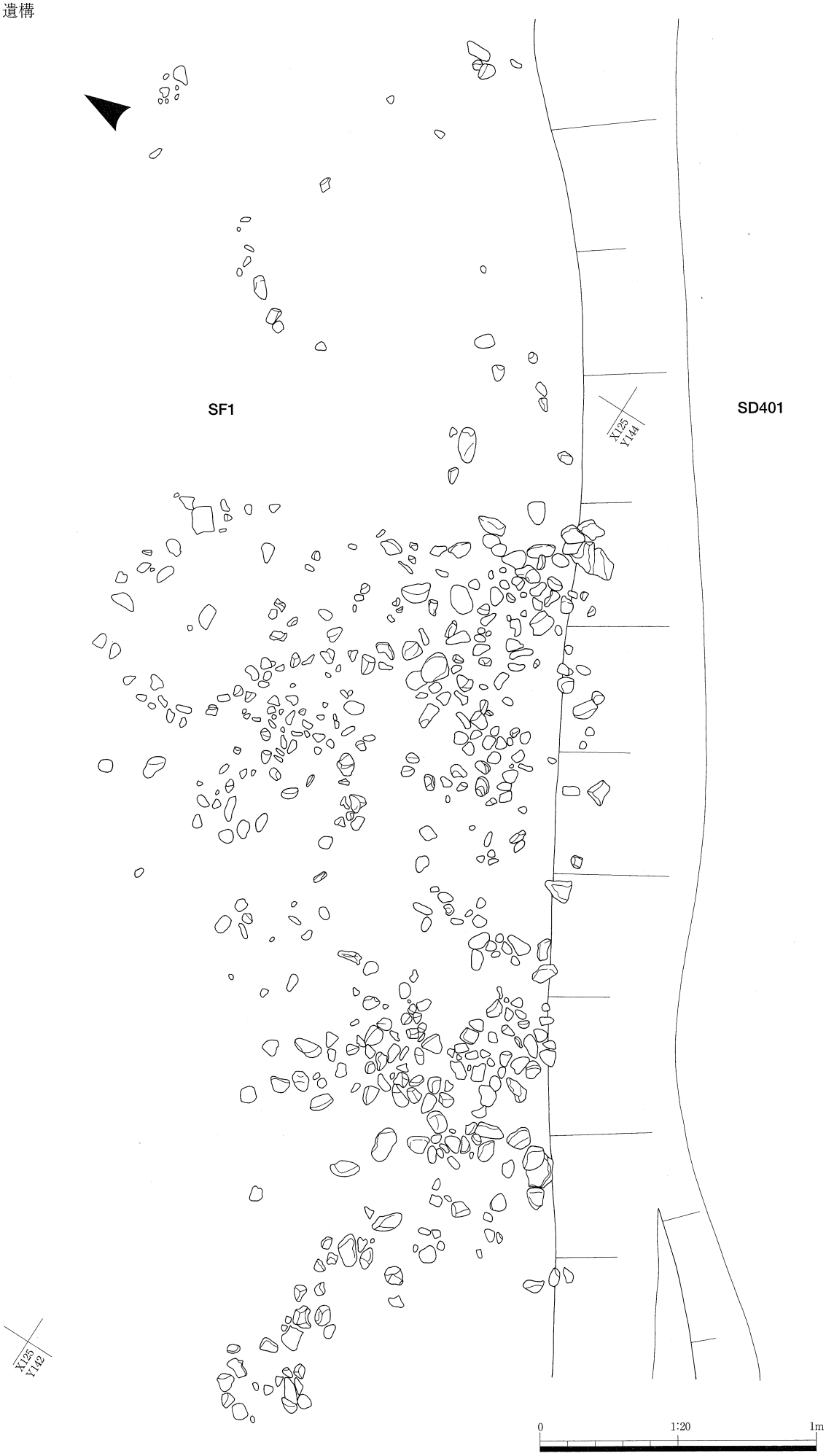


第51図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

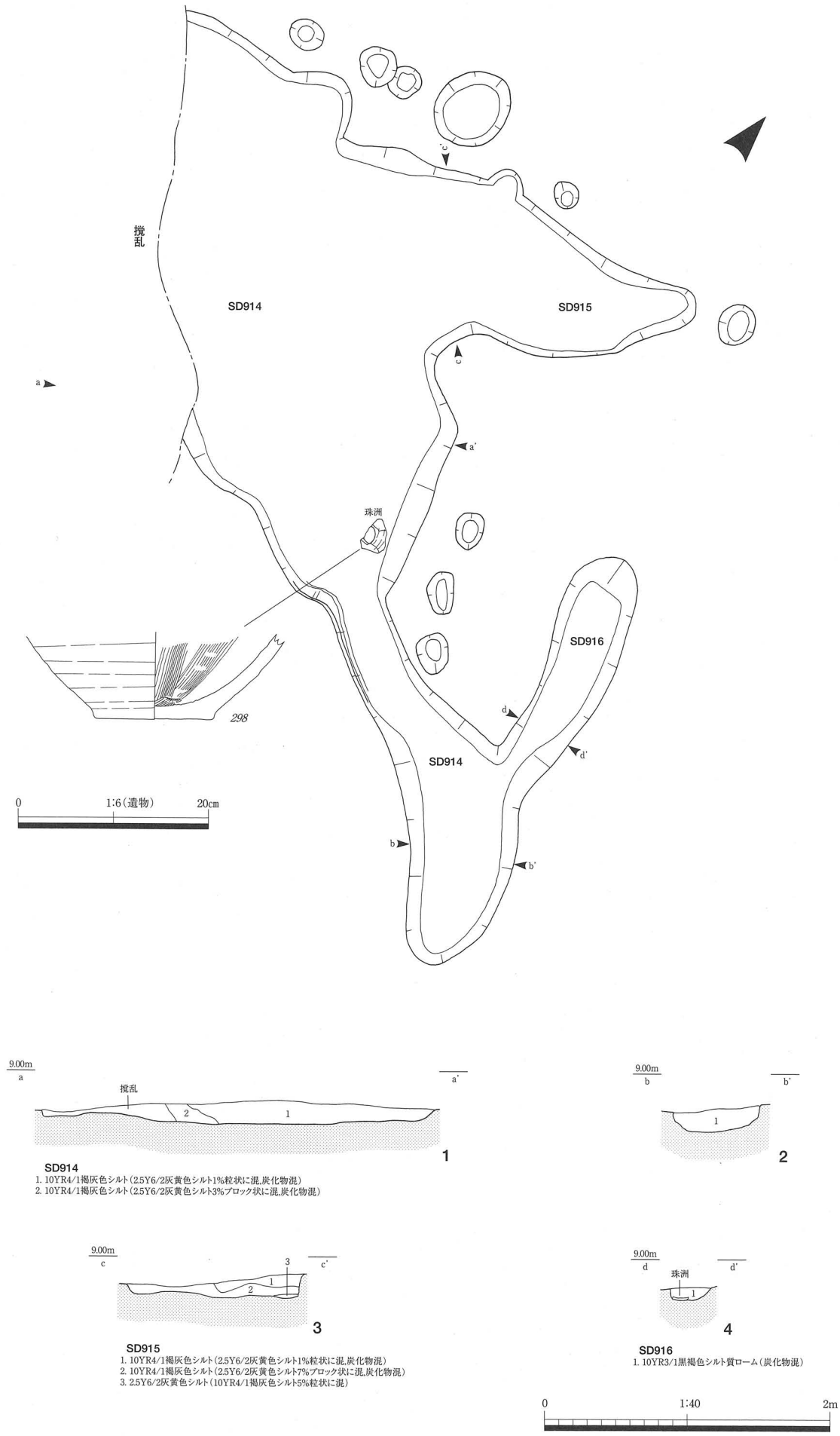
SD416・SD414・SD415・SD417・SD437・SD924・SD925



第52図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図
SF1・SD401・SD1370

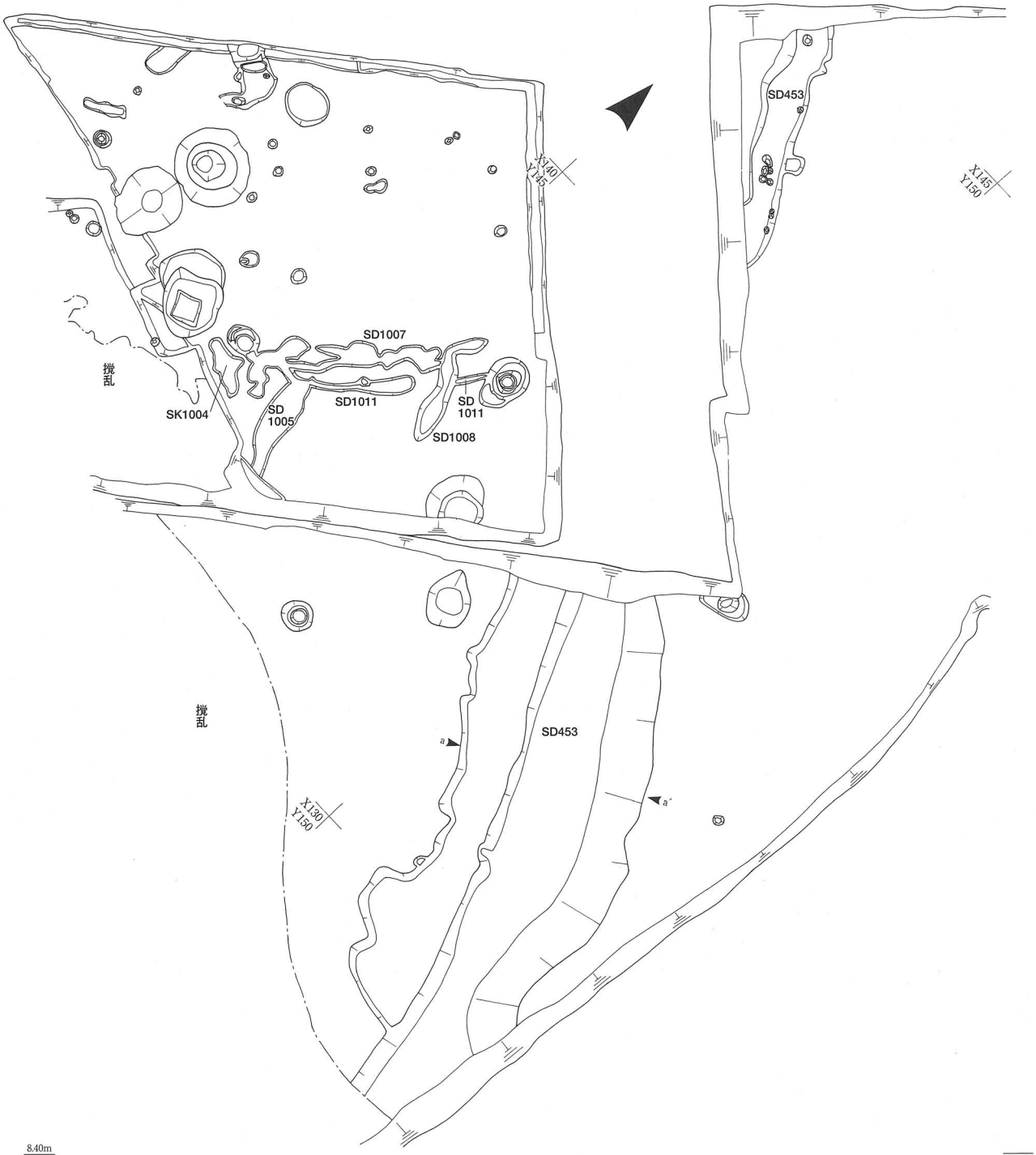


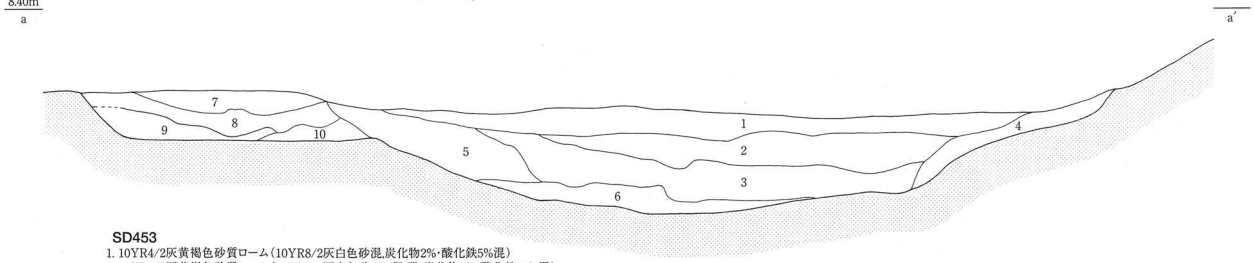
第53図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図
SF1　バラス検出状況



第54図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

1・2. SD914　3. SD915　4. SD916





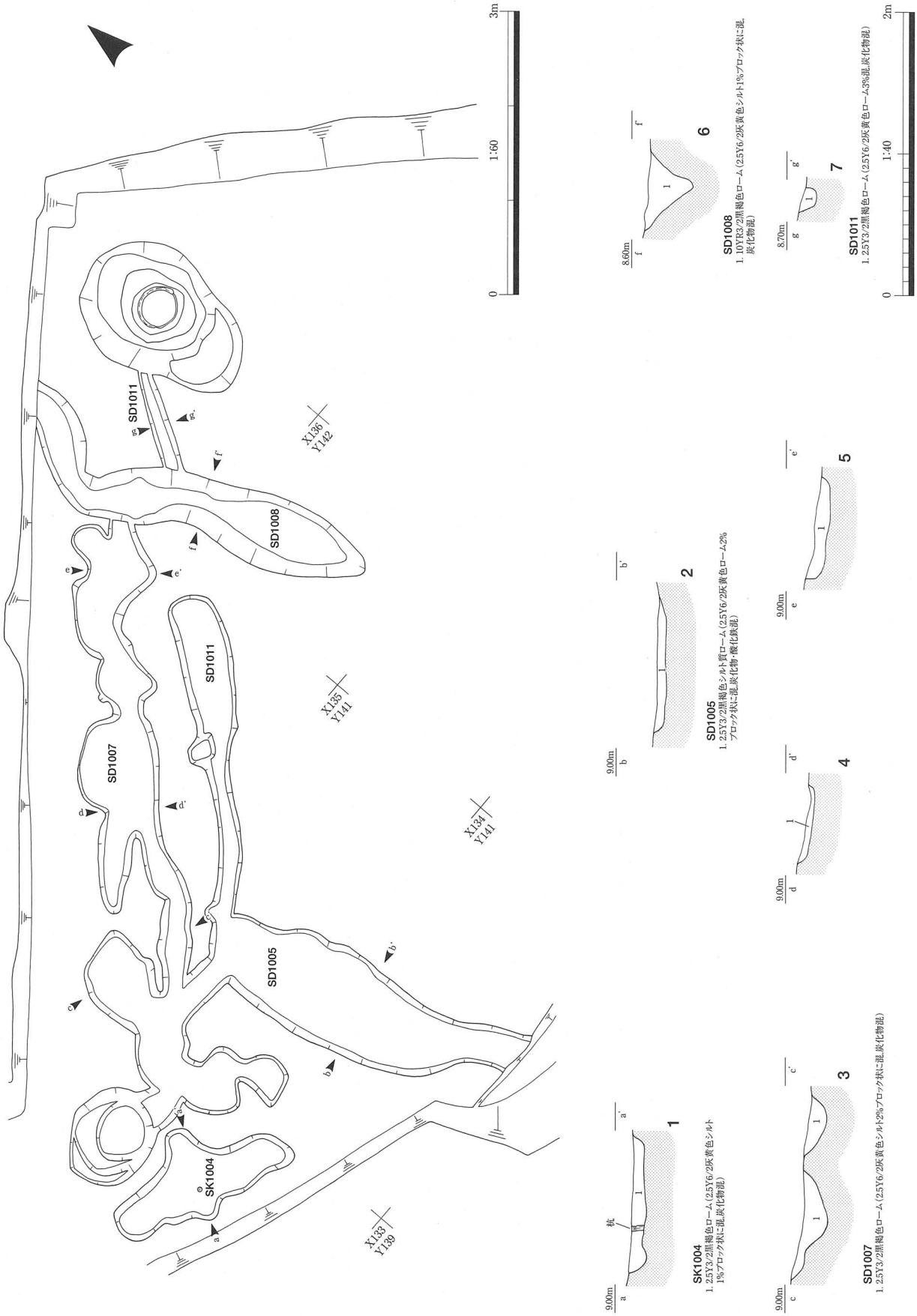
SD453

1. 10YR4/2灰黄褐色砂質ローム（10YR8/2灰白色砂混,炭化物2%・酸化鉄5%混）
2. 10YR4/2灰黄褐色砂質ローム（10YR8/2灰白色砂20%混,礫・炭化物3%・酸化鉄10%混）
3. 10YR3/2黒褐色砂質ローム（10YR8/3浅黄橙色砂50%混,礫・炭化物5%・酸化鉄30%混）
4. 2.5Y6/2灰黄色シルト（2.5Y4/1黄灰色粘土質ローム混,酸化鉄10%混）
5. 10YR4/2灰黄褐色粘土質ローム（炭化物2%・酸化鉄20%混）
6. 10YR5/2灰黄褐色砂（礫混）
7. 2.5Y4/1黄灰色粘土質ローム（2.5Y7/2灰黄色粘土ブロック状に混,炭化物2%・酸化鉄5%混）
8. 2.5Y7/3浅黄色砂（10YR4/2灰黄色シルト混,炭化物2%混）
9. 2.5Y7/2灰黄色粘土（10YR4/2灰黄褐色砂混,酸化鉄10%混）
10. 7.5YR3/1黒褐色粘土質ローム（2.5Y7/2灰黄色粘土ブロック状に混,炭化物1%・酸化鉄2%混）

1:40（断面図）　2m
1:200（平面図）　10m
0

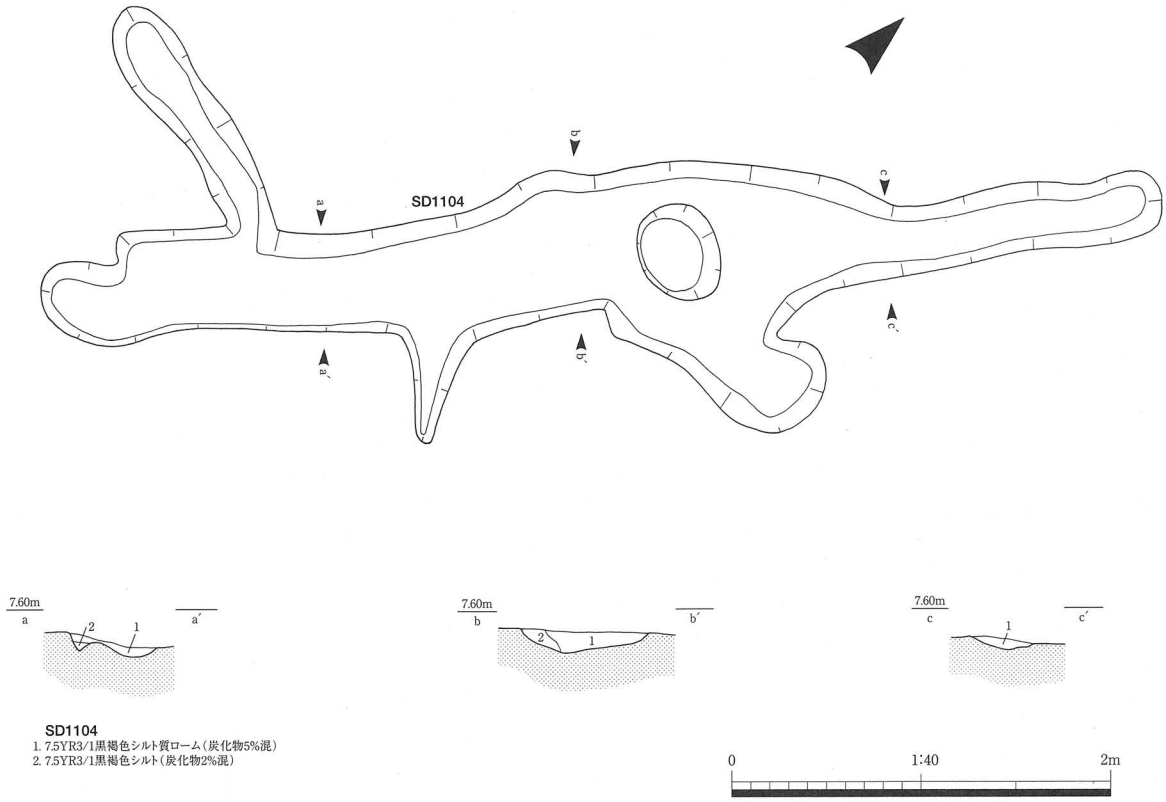
第55図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

SD453・SK1004・SD1005・SD1007・SD1008・SD1011



第56図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

1. SK1004　2. SD1005　3～5. SD1007　6. SD1008　7. SD1011



第57図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図
SD1104

E　井戸

451号井戸（ＳＥ451，第58図）

Ｃ２地区のＳＫ450に隣接する。平面形は円形を呈し，掘形の直径は2.59m，深さは2.5mである。井戸底の標高は6.48mである。断面形は上部が擂鉢状，下部が円筒状のロート形を呈する。上層は黒褐色ローム・暗灰黄色ローム・灰色シルト質ローム・黄灰色ローム等を基調とする土層がレンズ状に堆積し，井戸廃絶後意図的に埋められた土と推測される。上層埋土を除去した時点で円形の酸化鉄層を検出した。酸化鉄層はオリーブ黒色シルト層の周囲に酸化鉄が付着したもので約35cmの高さがあり，井戸枠の痕跡と推定される。酸化鉄層の周囲の黒色シルト・黒褐色シルトは裏込めの土とみられる。下層は黒色シルト・灰色シルトが混じる緑灰色シルトで，使用時から廃絶後にかけて徐々に埋積した土層と推測される。井戸底は灰オリーブ色粘土質ローム層の途中まで掘り込まれ，現在湧水はみられない。使用時にも粘土質ローム層から湧水があったか不明であり，天水を溜めた井戸の可能性もある。

出土遺物は縄文土器（*304*）・土師器・須恵器（*305*）・中世土師器（*306*）・珠洲・加工板（*77*）・鉄滓（*50*）・種実（クリ・モモ）である。土器はすべて破片で土師器が多い。加工板は３点，鉄滓は１点である。種実の放射性炭素年代は13世紀末～14世紀であり，ＳＥ451は該期に埋められた遺構と推定する。

503号井戸（ＳＥ503，第59図，図版22）

Ｃ４地区東側に位置し，ＳＥ504に隣接し，ＳＢ19の敷地範囲と重複する。平面形は円形を呈し，直径は2.56m，深さは2.14mである。井戸底の標高は7.18mである。断面形は擂鉢状で下半がすぼむ。上層は灰黄色シルト・黒褐色シルト・褐灰色シルト等を基調とするシルト質の土がレンズ状に何層も重なって堆積し，井戸廃絶後に意図的に埋められた土と推測される。下層は黒褐色粘土質ロームが厚く堆積し，最下層に薄く明緑灰色砂が堆積する。最下層は井戸使用時の堆積層，下層は使用時から廃絶後にかけて徐々に埋積した土層と推測される。掘形は黒褐色ピート・明緑灰色砂が帯状に混じる褐灰色ローム・黒褐色粘土質ローム層に達した辺りからややすぼみ，これを掘り抜いて，井戸底は明緑灰色シルト層の途中まで掘り込まれている。現在湧水はみられないが，明緑灰色シルト層はやや砂っぽく，この上面でわずかに水が滲み出るので，周辺にＳＤ301・ＳＤ453などの水流があればその伏流水を得ることができたのかもしれない。

出土遺物は土師器・中世土師器（*307*・*308*）・珠洲・粘土塊・鉄滓（*41*）・焼けた自然礫である。土師器の小破片が多く，珠洲は甕・擂鉢・壺の破片が数点ある。鉄滓は２点，粘土塊は１点である。遺物は主に上層から出土しており，その年代からＳＥ503は13世紀以降に埋められたものと推定する。

504号井戸（ＳＥ504，第59図，図版22）

Ｃ４地区東側に位置し，ＳＥ503に隣接する。ＳＢ９の北側に位置する。平面形は円形で，直径2.52m，深さは2.00mである。井戸底の標高は7.44mである。断面形は擂鉢状で下半がすぼむ。上層は黒褐色シルト・灰黄褐色シルト等を基調とするシルト質の土がレンズ状に堆積し，下層は黄灰色粘土質ローム・シルトに明緑灰色砂・灰黄色シルト等がブロック状に混じる。上・下層ともに粒・ブロック状の混入土が多いことから，井戸廃絶後に意図的に埋められた土と推測される。掘形は明黄褐色砂が帯状に混じる灰黄色シルト質ローム層に達した辺りからややすぼみ，これを掘り抜いて，黒褐色ピート・明緑灰色砂・明緑灰色シルトが互層になる層の途中まで掘り込まれている。現在湧水はみられないが，周辺にＳＤ301・ＳＤ453などの水流があれば明緑灰色砂層を通じてその伏流水を得ることができたのかもしれない。

出土遺物は土師器・須恵器・珠洲・中国製白磁（*309*）・粘土塊・鉄滓（*60*）・めのう剥片（*21*）である。珠洲は壺・甕の破片が数点あり，中国製白磁は１点のみである。焼成された粘土塊が多く出土したが，近接するＳＥ508の暖房具？の一部である可能性がある。鉄滓は１点である。遺物は主に上層から出土しており，その年代からＳＥ504は12世紀後半以降に埋められたものと推定する。

508号井戸（ＳＥ508，第60図，図版22）

Ｃ４地区中央に位置し，ＳＢ17の庇部分と重複する。平面形は円形で，直径3.16m，深さ2.16mである。井戸底の標高は7.34mである。断面形は擂鉢状で下半がすぼみ，ロート状に近い。上層は黒褐色シルト質ローム・明黄褐色シルト質ローム・黒色シルト質ローム・灰黄褐色シルト質ローム等を基調とする土がレンズ状に薄く重なって堆積し，井戸廃絶後に意図的に埋められた土と推測される。下層は灰黄褐色シルトが厚く堆積し，最下層に明緑灰色粘土質ロームが薄く堆積する。下層・最下層は使用時から廃絶後にかけて徐々に埋積した土層と推測される。掘形は褐灰色粘土質ロームに黒褐色ピート・明緑灰色砂が帯状に混じる層に達した辺りからややすぼみ，これを掘り抜いて，植物遺体の混じる褐灰色粘土質ローム層の上面まで掘り込まれている。現在湧水はみられないが，周辺にＳＤ301・ＳＤ453などの水流があれば明緑灰色砂層を通じてその伏流水を得ることができたのかもしれない。また，太い噴砂が上がってきていることから，そう遠くない深さに粗砂の層があると推測される。

出土遺物は縄文土器・土師器（*310*～*312*）・須恵器（*313*～*315*）・中世土師器（*316*～*349*）・珠洲（*351*～*353*）・中国製青磁・中国製白磁（*350*）・餃子型土製品（*354*）・土製暖房具？（*355*）・漆器・加工板（*64*・*66*）・砥石（*17*）・鉄滓（*42*・*59*）・刀子（*19*・*20*）・釣針状製品（*23*）・種実（モモ・トチノキ）である。中世土師器の小皿が最も多く，まとまって出土したが，完形のものはわずか１点で，口縁残存率が50％を超えるものは少なく小破片が多い。中国製青磁碗は１点で小片のため図示できないが，太宰府分類同安窯系碗Ｉ１ｂ類で，12世紀中頃～後半のものである。遺物は須恵器が下層から出土した他はすべて上層からの出土で，井戸廃絶時に埋土とともに埋められたものと考えられる。井戸祭祀の可能性もあるが，出土遺物の種類が多岐に亘っており，大量にある反面完形品も少ないことから，不要品を投棄したものと推測する。遺物の年代と種実の放射性炭素年代[注14]から，ＳＥ508は12世紀後半に構築され，13世紀中頃に最終的に埋没したものと推定する。

693号井戸（ＳＥ693，第60図）

Ｃ４地区中央に位置し，ＳＢ18の南に隣接し，ＳＢ16の範囲と重複する。平面形は円形を呈し，直径1.18m，深さは2.36mである。井戸底の標高は7.06mである。断面形は円筒状である。上層は検出面近くの地山である灰黄色シルトが粒状に混じる黒褐色シルト等がレンズ状に堆積し，井戸廃絶後に意図的に埋められた土とみられる。下層は明緑灰色粘土混じりの灰色粘土質ローム・黒褐色粘土質ロームが厚く堆積し，井戸使用時から廃棄後にかけて徐々に埋積した土層と推測される。掘形は褐灰色粘土質ロームに黒褐色ピート・灰黄色砂を掘り抜いて，明緑灰色シルト層の途中まで掘り込まれている。現在湧水はみられないが，周辺にＳＤ301・ＳＤ453などの水流があれば明緑灰色シルト層を通じてその伏流水を得ることができたのかもしれない。

出土遺物は土師器・珠洲・中国製青磁・板状金属製品（*33*）である。土師器の小片が多く，珠洲は数点，中国製青磁は碗１点，鉄滓は１点である。中国製青磁碗は小片のため図示できないが，龍泉窯系で内面に劃花文があり，12世紀後半～13世紀前半のものである。出土した層はほとんどが上層である。遺物から，ＳＥ693は12世紀後半～13世紀前半に埋没した遺構と推定する。

注14　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「Ⅸ．放射性炭素年代測定　１．手洗野赤浦遺跡・岩坪岡田島遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定」

716号井戸（ＳＥ716，第61図，図版22）

Ｃ４地区中央北端に位置し，ＳＢ17の庇部分と重複する。平面形は円形を呈し，調査区外に延びる。確認できる範囲での直径は1.31m，深さは1.74mである。井戸底の標高は8.04mである。断面は円筒状で，上方が少し広がる。下部が若干膨らむのは井戸壁が崩落したためであろう。埋土は地山の灰黄色シルトが高い混合比で粒状に混じる黒褐色シルトが厚く堆積し，井戸廃絶後に意図的に埋められた土とみられる。下層は明緑灰色砂混じりの黒褐色粘土質ロームで層厚は薄く，井戸使用時から廃棄後に埋積した土層と推測される。掘形は上面からの灰黄色・褐灰色シルト層を掘り抜き，明褐色砂が帯状に混じる灰黄色シルト質ロームの途中まで掘り込まれているとみられた。しかし，明褐色砂が混じる層は遺構下で黒褐色ピート層を割ってにぶい黄橙色砂層に沈み込んでいる状態であることから，この部分がＳＥ216の最下層で，砂層の流動により掘形が不明瞭になったものである可能性も考えられる。現在湧水はみられないが，周辺にＳＤ301・ＳＤ453などの水流があれば砂層を通じてその伏流水を得ることができたのかもしれない。

出土遺物は古代の土師器だが，同期の建物等が周囲に存在しないことから，中世の遺構と推定する。

850号井戸（ＳＥ850，第61図，図版22）

Ｃ４地区西側北端に位置し，古代の溝ＳＤ697と切り合うが，近距離に古代・中世ともに建物等はみられない。平面形は円形で，直径1.11m，深さは2.3mである。井戸底の標高は6.92mである。掘形は円筒状を呈する。埋土は上層に地山の灰黄色シルト・緑灰色砂質ローム等が高い混合比で粒状に混じる暗灰黄色シルト・黒色粘土質ロームが堆積し，井戸廃絶後に意図的に埋められた土とみられる。下層は黒色粘土質ロームが厚く堆積し，最下層は黄灰色シルトに明緑灰色砂が帯状に混じる。最下層は井戸使用時に，下層は使用時から廃絶後にかけて徐々に埋積したものと推測される。地山は黄灰色・灰黄色・褐灰色等のシルト層の間に何層かの砂層が堆積するが，掘形はこれらのシルト・砂層を掘り抜き，黒褐色ピートが混じる褐灰色粘土質ロームの下の植物遺体が混じる明緑灰色シルト質ロームの途中まで掘り込まれている。現在湧水はみられないが，明緑灰色シルト質ロームはやや砂っぽいので周辺にＳＤ301・ＳＤ453などの水流があればその伏流水を得ることができたのかもしれない。

出土遺物は土師器・須恵器・珠洲・羽口（*37*・*39*）・鉄滓（*52*・*53*）である。土器は小片で少数であり上層からの出土であるが，羽口・鉄滓はすべて下層から出土しており，井戸使用時に付近で鍛冶が行われていた可能性がある。

1001号井戸（ＳＥ1001，第62・63図，図版23）

Ｃ２地区南西端からＣ５地区北西端にまたがり，ＳＫ450に隣接する。平面形は楕円形に近い不整形で，長径は2.94m，短径は2.00mを呈し，北側は段が付いている。深さは2.08mである。井戸底の標高は7.0mである。掘形は上部が擂鉢状，下部が円筒状のロート形を呈する。下部には木組の井戸側が残存し，宇野氏分類ではＢⅢａ２類縦板組横桟どめ井戸にあたる。縦板を横桟で保持し，支柱を入れて補強したものである。材は，横桟がスギ，支柱はスギとクリ，縦板はスギが多いがヒノキもある。縦板は，東西南の３面においては34.8～18.4cmの幅をもつ縦板２枚の間に幅の狭い添板を１枚重ね合わせ，掘形の内法に合わせて全体の幅を調節する。西面・南面では中央の添板の他に端２箇所に添板をあてる。添板が裏側（壁面側）になる。北面においては幅の狭い板を12枚，内法に合わせて並べるが，場所により１枚のところと２～３枚重なるところがあり，内側の１枚を縦板としたが縦板・添板の区別ははっきりしない。横桟は上段は北・西２面，下段は４面が遺存しており，仕口は目違い枘で組まれる。上段よりも下段の横桟の方が幅も厚みもあり，しっかりしたものである。支柱

で支えるため，上段は軽量を，下段は頑強を期したものであろう。4隅に支柱が遺存しているが，南東隅のものだけが円柱で遺存状態が悪く，他は角柱で遺存状態が良好であることから，3本は修理によって取り替えられた可能性もある。埋土断面から擂鉢状の上部にも木組があったとみられ，木組内には黒褐色粘土質ローム・オリーブ黒色シルト質ロームが埋積する。上部の裏込は黄灰色シルト質ローム・灰黄色シルト・黒色シルトを基調とする土である。下部は北側にのみ掘形がみられ灰黄色シルト・褐灰色ローム・明褐灰色シルト・緑灰色砂・明緑灰色シルトを基調とする土が入る。

以上のことからＳＥ1001の構築方法は以下のように推測される。まず擂鉢状の穴を掘り，北面から作業者が内部に降りていくことを想定して北側に足場となる部分を一段掘り下げる。次に木組みの井戸側を入れて立てるために東西南の3面は地山の壁面を垂直に立ち上げるように掘削し，3面の添板・縦板をはり付ける。北側のみやや広めの掘形を設ける。下段横桟を組んで据え付け支柱を立てて上段横桟を乗せた後，北側の縦板を据えながら掘形を埋めていく。間隙ができた部分には添板を多めに差し込む。北側の縦板がすべて幅が狭いのはこうした工程を踏むからであろう。その後上部の掘形を埋めて完成となる。掘形は，黒色シルト・明緑褐色シルトを掘り抜いて，明緑灰色砂質ローム上面に達している。明緑灰色砂質ロームからは現在も著しい湧水がみられる。

出土遺物は縄文土器・弥生土器・土師器（*358*）・須恵器・中世土師器（*356*・*357*・*359*）・珠洲（*360*～*364*）・中国製青磁（*365*）・中国製白磁（*366*～*368*）・土製暖房具（*369*）・漆器（*13*・*16*）・加工板（*61*・*62*）・底板（*9*）・井戸枠（*17*～*49*）・雁股鏃（*21*）・鉄滓である。木製品はすべて井戸枠内からの出土で，井戸枠内上位から中位にかけて板状の木製品が多数出土しており，縦板の一部の可能性もある。漆器は割れて破片状になったもの（*13*）が井戸枠内の中位で出土し，ほぼ完形の皿（*16*）が井戸底面直上で出土した。底面で出土した皿は，底部に穿孔とみられる方形の穴があり，井戸の祭祀に関わるものであろうか。曲物側板の一部も出土したが，井戸枠内中位からであり，水溜はなかったものと考えられる。土器・陶磁器のうち井戸枠内で出土したものは土師器（*358*）・珠洲（*362*）・中国製白磁（*366*・*368*）の4点の他に土師器小片1点，珠洲甕1点のみで，他は掘形の上部からであり，特に中世土師器・珠洲の破片が多数出土した。完形のものはない。珠洲・輸入陶磁器が12世紀中頃～後半の範疇でおさまり，底板の放射性炭素年代が12世紀末～13世紀[注15]，縦板の年輪年代が1193年・1187年を示す[注16]ことから，ＳＥ1001は12世紀末に構築され，13世紀前半に廃絶されたものと推定する。

1006号井戸（ＳＥ1006，第64図，図版24）

Ｃ5地区中央北側に位置する。ＳＤ453に近く，ＳＥ1009が南側に隣接する。平面形は楕円形で，長径1.92m，短径1.34m，深さ1.38mである。井戸底の標高は7.30mである。掘形は擂鉢状を呈する。井戸底には直径約47cmの曲物が据えられていたが，調査時に南側を破損した。埋土は暗灰黄色シルト質ローム・黄灰色シルト質ローム・オリーブ黒色シルト等が上層に堆積し，井戸廃絶後に意図的に埋め戻された土と推測する。下層の曲物周囲の灰黄色シルトは裏込の土とみられる。曲物内には上位から中位にかけて灰黄色シルトがブロック状に混じる黄灰色シルト，底には灰白色シルトをブロック状に含む黒色シルト質ロームが約10cm堆積する。掘形は有機物の混じる黒色シルト質ローム層を掘り抜き，明緑灰色シルト層の直上に達している。曲物が据えられているので確実に井戸として使用されたものと考えるが，現在湧水はみられない。周辺にＳＤ301・ＳＤ453などの水流があれば，明緑灰色シルト層を通じてその伏流水を得ることができたのかもしれない。

出土遺物は須恵器杯1点（*370*）・甕1点，中世土師器皿多数（*371*～*373*），珠洲擂鉢2点（*374*・*375*），漆器数点，曲物1点である。土師器破片が特に多く，土器はほとんどが掘形の上部から出土し

注15　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所「Ⅸ．放射性炭素年代測定　1．手洗野赤浦遺跡・岩坪岡田島遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定」
注16　第二分冊　自然科学分析　光谷拓実「Ⅹ．手洗野赤浦遺跡・岩坪岡田島遺跡出土木製品の年輪年代」

ている。漆器は椀または皿の破片が曲物内から数点出土し，漆を塗布した布片が掘形の中位で出土した。棒状の木も底部近くで出土したが，加工痕はみられなかった。遺物の年代から，ＳＥ1006は12世紀末～13世紀前半の遺構と推定する。

1009号井戸（ＳＥ1009，第64図，図版24）

Ｃ５地区中央南側に位置する。ＳＤ453に近く，北側にはＳＥ1006，南側にはＳＥ1205が隣接する。平面形は円形で，直径1.81m，深さ1.30mである。井戸底の標高は6.9mである。掘形断面は上部が擂鉢状に開き，下部も袋状に膨らむ。埋土は上層に地山の灰黄色粘土質ロームが混じるオリーブ黒色シルト質ローム・灰黄色シルト等が堆積し，井戸廃絶に伴って意図的に埋められた土と推測される。下層は灰色砂が約30cm堆積しており，井戸使用時から廃絶後にかけて堆積した土と推測される。掘形は有機物の混じる黒色シルト質ローム層を掘り抜き，明緑灰色シルト層の途中まで掘り込まれる。現在も底面付近から若干の湧水がみられた。

出土遺物は土師器小片１点，曲物１点（*7*），漆を塗布した布片である。曲物は底板が付いた状態で底面付近で出土し，布片は掘形の中位で出土した。詳細年代を推定できる遺物はないが，近距離に12世紀後半のＳＥ1205があり，時期は若干異なるものと考えられる。

1101号井戸（ＳＥ1101，第65図）

Ｃ６地区中央に位置する。平面形は円形で直径1.74m，深さ1.12mである。井戸底の標高は6.4mである。断面は上部が擂鉢状に開き，下方は円筒状を呈するロート形である。埋土は上層は黒褐色シルト質ローム・にぶい黄橙色粘土質ローム・浅黄橙色粘土質ローム等を基調とし，下層には褐色粘土・オリーブ灰色粘土・オリーブ黒色粘土等粘性の高い土が堆積する。掘形は有機物を多量に含む黒褐色粘土層を掘り抜いて，オリーブ灰色シルト層上面まで掘り込まれている。さらに約40cm下にはオリーブ灰色粘土層がある。現在湧水はみられず井戸とする確証はないが，地山の有機物を含む黒褐色粘土層を掘り抜いている点はＣ７地区の井戸の傾向に似ており，下八ヶ用水を境にＣ７地区北側調査区よりも標高がかなり下がることから，削平により井戸の底部分が残った可能性があると考える。

出土遺物は土師器甕片多数（*376*），須恵器杯２点（*377*・*378*）・杯蓋１点，珠洲甕１点である。古代の遺物が多いが，珠洲が出土しているので中世の遺構と推定する。

1102号井戸（ＳＥ1102，第65図）

Ｃ６地区北端に位置する。平面形は円形で直径98cm，深さ56cmである。井戸底の標高は6.88mである。断面は下部が袋状に膨れる。埋土は黒褐色粘土がブロック状に混じる緑灰色粘土質ロームの単層である。掘形は有機物の混じるにぶい褐色粘土を掘り抜き，有機物の混じる赤黒色粘土の途中まで掘り込まれている。現在湧水はみられず，井戸とする確証はないが，周辺に建物等の遺構が見られず，下八ヶ用水を境にＣ７地区北側調査区よりも標高がかなり下がることから，削平により井戸の底部分が残ったものである可能性があると考える。

出土遺物は中世土師器の小破片が多く，詳細時期は不明であるが，中世の遺構と推定する。

1103号井戸（ＳＥ1103，第65図，図版25）

Ｃ６地区中央に位置する。平面形は円形を呈し，直径1.75m，深さ52cmである。井戸底の標高は6.86mである。埋土は黒褐色シルト質ローム・にぶい黄橙色粘土質ローム・黒褐色粘土・浅黄粘土質ローム等を基調とする土が薄いレンズ状に堆積する。現在湧水はみられず，井戸とする確証はないが，周辺に建物等の遺構が見られず，下八ヶ用水を境にＣ７地区北側調査区よりも標高がかなり下がることから，削平により井戸の底部分が残ったものである可能性があると考える。

出土遺物は珠洲（*379*）１点のみだが，その年代から12世紀後半～13世紀前半の遺構と推定する。

1105号井戸（ＳＥ1105，第65図，図版25）

Ｃ６地区南側に位置する。平面形は円形を呈し，直径1.32m，深さ79cmで，円形の浅い突出部がある。井戸底の標高は6.66mである。断面は底部が平坦なバケツ形を呈する。埋土は上層には黒褐色シルト質ローム・暗灰黄色シルト・黒褐色粘土・黄褐色粘土等を基調とする土がレンズ状に堆積し，下層には灰色砂質ロームが水平堆積する。井戸であれば下層は使用中に堆積したものと推測される。掘形は有機物が混じる黒褐色粘土層を掘り抜いて，オリーブ粘土層の上面まで掘り込まれている。現在湧水はみられず，井戸とする確証はないが，周辺に建物等の遺構が見られず，下八ヶ用水を境にＣ７地区北側調査区よりも標高がかなり下がることから，削平により井戸の底部分が残った可能性もあると考える。ただし，井戸底が粘土層の上面であることから湧水の可能性は低く，天水を溜めた井戸であったかもしれない。

出土遺物は中世土師器・珠洲（*380*・*381*）・土錘（*382*）・砥石（*18*）である。珠洲の甕・擂鉢片が多く，中世土師器は小片１点である。土器は主に上層から出土したが，砥石は底面で出土した。遺物の年代から，ＳＥ1105は13世紀中頃～14世紀中頃の遺構と推定する。

1106号井戸（ＳＥ1106，第66図）

Ｃ６地区中央に位置する。平面形は隅丸方形を呈し，規模は1.65m×1.57mで，深さは0.91mである。井戸底の標高は6.53mである。断面は擂鉢状を呈する。埋土は黒褐色シルト質ローム・にぶい黄橙色質シルト・黒褐色粘土・浅黄橙色粘土質ローム・暗灰黄色粘土・黄灰色粘土・にぶい黄橙色粘土等が薄いレンズ状に堆積する。底面付近の地山はにぶい黄橙色粘土層で，現在湧水はみられず，井戸とする確証はないが，周辺に建物等の遺構が見られず，下八ヶ用水を境にＣ７地区北側調査区よりも標高がかなり下がることから，削平により井戸の底部分が残った可能性もあると考える。ただし，井戸底が粘土層の上面であることから湧水の可能性は低く，天水を溜めた井戸であったかもしれない。

出土遺物は土師器甕片等多数，須恵器杯１点（*383*）・瓶１点（*384*）で，中位から出土した。古代の遺物しか出土していないが，周辺の遺構の年代から中世の可能性が高いと考える。

1116号井戸（ＳＥ1116，第66図）

Ｃ６地区北側に位置する。平面形は円形で直径99cm，深さ90cmである。井戸底の標高は6.46mである。断面はやや上方が広がる円筒形である。埋土は上層では黒褐色粘土混じりの緑灰色粘土質ロームが灰黄色シルト・灰色シルト質ロームを割って入り，掘り直された痕跡であろうか。下層は灰オリーブ粘土質シルト・灰色粘土が堆積する。掘形は有機物の混じる黒褐色粘土層・オリーブ灰色シルト層を掘り抜き，オリーブ灰色粘土層の途中まで掘り込まれている。現在湧水はみられず，井戸とする確証はないが，周辺に建物等の遺構が見られず，下八ヶ用水を境にＣ７地区北側調査区よりも標高がかなり下がることから，削平により井戸の底部分が残った可能性もあると考える。ただし，井戸底が粘土層の上面であることから湧水の可能性は低く，天水を溜めた井戸であったかもしれない。

出土遺物は土師器の甕等の小片が数点と須恵器杯片１点が出土しているが，周辺の遺構の年代から中世の可能性が高いと考える。

1119号井戸（ＳＥ1119，第66図）

Ｃ６地区南側に位置する。平面形は円形で，直径85cm，深さ22cmである。井戸底の標高は6.3mである。埋土は灰白色砂・オリーブ黒色粘土混じりの灰色粘土である。現在湧水はみられず，井戸とする確証はないが，周辺に建物等の遺構が見られず，下八ヶ用水を境にＣ７地区よりも標高がかなり下

がることから，削平により井戸の底部分が残った可能性もあると考える。ただし，井戸底が粘土層の上面であることから湧水の可能性は低く，天水を溜めた井戸であったかもしれない。出土遺物はないが，周辺の遺構の年代から中世の遺構の可能性が高いと考える。

1120号井戸（ＳＥ1120，第66図，図版25）

Ｃ６地区北側に位置する。平面形は円形で直径77㎝，深さ32㎝である。井戸底の標高は6.30ｍである。埋土は灰色シルト混じりの黄灰色砂質ローム・暗オリーブ灰色シルトで，断面は逆台形を呈する。現在湧水はみられず，井戸とする確証はないが，周辺に建物等の遺構が見られず，下八ヶ用水を境にＣ７地区北側調査区よりも標高がかなり下がることから，削平により井戸の底部分が残った可能性もあると考える。ただし，井戸底が粘土層の上面であることから湧水の可能性は低く，天水を溜めた井戸であったかもしれない。

出土遺物は土師器甕等の破片であるが，周辺の遺構の年代から中世の遺構に含めておく。

1204号井戸（ＳＥ1204，第67図，図版25）

Ｃ７地区中央北側に位置する。平面形はやや不整な円形で，直径1.74ｍ，深さは2.14ｍである。井戸底の標高は7.06ｍである。断面は円筒形である。埋土は上層に暗褐色シルト・暗褐色粘土質ローム・黒色シルト質ローム・灰黄褐色粘土を基調として地山の灰黄褐色粘土がブロック状に混じる土が堆積し，下層に黒色シルトが厚く堆積する。上層は井戸廃絶後に意図して埋められた土で，下層は使用時から廃絶後にかけて徐々に埋積した土と推測される。掘形は有機物の混じる黒褐色粘土層を掘り抜いて，オリーブ灰色シルト層の途中まで掘り込まれている。現在湧水はみられないが，オリーブ灰色シルト層はやや砂っぽいので周辺にＳＤ301・ＳＤ453などの水流があればその伏流水を得ることができたのかもしれない。

出土遺物は土師器甕等多数（*385*・*386*），中世土師器皿数点（*387*），珠洲壺（*388*）・擂鉢（*389*）・甕各数点，中国製青磁碗２点（*390*・*391*）・皿１点，曲物，鉄滓１点（*47*）である。土器は土師器甕の小破片が多い。曲物は小破片で，井戸枠として使用されたものかどうかは不明である。遺物の年代からＳＥ1204は12世紀後半～13世紀前半の遺構と推定する。

1205号井戸（ＳＥ1205，第67図）

Ｃ７地区東側北端に位置する。ＳＤ453に近く，北側にＳＥ1009が隣接する。平面形はやや不整な楕円形を呈する。長径1.93ｍ，短径1.40ｍ，深さ90㎝である。井戸底の標高は7.0ｍである。断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘土質ローム・暗灰黄色粘土・暗灰黄色粘土質ロームを基調とし地山のにぶい黄褐色粘土がブロック状に混じる層や，黒色粘土・灰黄色シルト層等が薄い層をなして重なる。井戸として使用された時期に堆積したとみられる層はない。有機物が混じる黒褐色粘土を掘り抜き，灰オリーブ色粘土が混じる黄灰色粘土層の途中まで掘り込まれている。現在湧水はみられず，土坑の可能性もあるが，黒褐色粘土層を掘り抜いていることから井戸に含めておく。ただし，井戸底が粘土層の上面であることから湧水の可能性は低く，天水を溜めた井戸であったかもしれない。

出土遺物は珠洲甕（*392*）の破片１点のみで，その年代から遺構の時期は12世紀後半と推定する。

1229号井戸（ＳＥ1229，第67図）

Ｃ７地区西側に位置し，ＳＢ21～23の南側にあるが，建物群からはやや離れた位置にある。平面形は隅丸方形で，長軸1.88ｍ，短軸1.77ｍ，深さ1.7ｍである。井戸底の標高は6.7ｍである。断面は擂鉢状で下部がすぼむ。埋土は上層では地山のにぶい黄橙色粘土が混じる暗褐色粘土質ローム・黒色シルトが暗褐色シルトを割って入り込んだような断面形態で，下層が埋まった後掘り直されたものかとも

思われるが，平面では埋土の違いは確認されていない。下層は地山のにぶい黄橙色粘土が混じる暗褐色粘土・にぶい黄色粘土・灰色粘土等で，井戸として使用中に堆積したとみられる層はなく，井戸であれば廃絶後に埋め戻された土と考えられる。掘形は灰色砂層を掘り抜いて，有機物の混じる黒色粘土層を少し掘り込んでいる。黒色粘土層を掘り抜かない点はＣ地区の他の井戸と異なるが，灰色砂層からの湧水があった可能性もある。反面，井戸以外の性格をもつ土坑の可能性もある。

出土遺物は土師器小片多数，須恵器杯１点，中世土師器皿多数（*393*・*394*），珠洲甕多数（*396*）・擂鉢多数（*397*），中国製青磁碗１点（*395*），加工板数点（*72*），曲物１点，釘１点（*25*）である。土器は珠洲甕・擂鉢，土師器の小片が多い。曲物は側板の小片のため井戸枠に使用されたものかは不明である。加工板についても縦板等の井戸枠部材の可能性もあるが，少数であり，立った状態では出土していないので確証はない。遺物の年代から13世紀前半の遺構と推定する。

1260号井戸（ＳＥ1260，第68図）

Ｃ７地区東側北端に位置し，ＳＥ1205が東側に隣接する。平面形は円形を呈し，直径1.04m，深さ1.06mである。井戸底の標高は7.42mである。断面は円筒形に近い擂鉢状を呈し，下部がすぼむ。埋土は地山のにぶい黄橙色粘土等が混じる暗褐色シルト・暗褐色粘土質ローム・暗灰黄色シルト質ロームがレンズ状に堆積する。掘形は有機物が混じる黒褐色粘土の上面まで掘り込んでいる。現在湧水はみられず，黒色粘土層を掘り抜かない点がＣ地区の他の井戸と異なるので，井戸以外の性格を持つ土坑の可能性もある。出土遺物は中世土師器と珠洲の小片が数点あるが，詳細時期は不明である。

1291号井戸（ＳＥ1291，第68図，図版25）

Ｃ７地区中央に位置し，ＳＢ24が東側に隣接する。平面形は円形で，直径1.25m，深さ1.24mである。井戸底の標高は7.12mである。断面は円筒形である。埋土は暗褐色粘土質ローム・暗褐色粘土・暗褐色シルトを基調とする土で，上層から下層まで地山のにぶい黄橙色粘土・灰黄褐色粘土等がブロック状に混じり，井戸使用時に堆積したとみられる層はない。掘形はにぶい褐色粘土層を掘り抜いて灰色砂の途中まで掘り込まれている。現在湧水はみられないが，ＳＤ301に水流があれば灰色砂を通じてその伏流水を得ることができたのかもしれない。

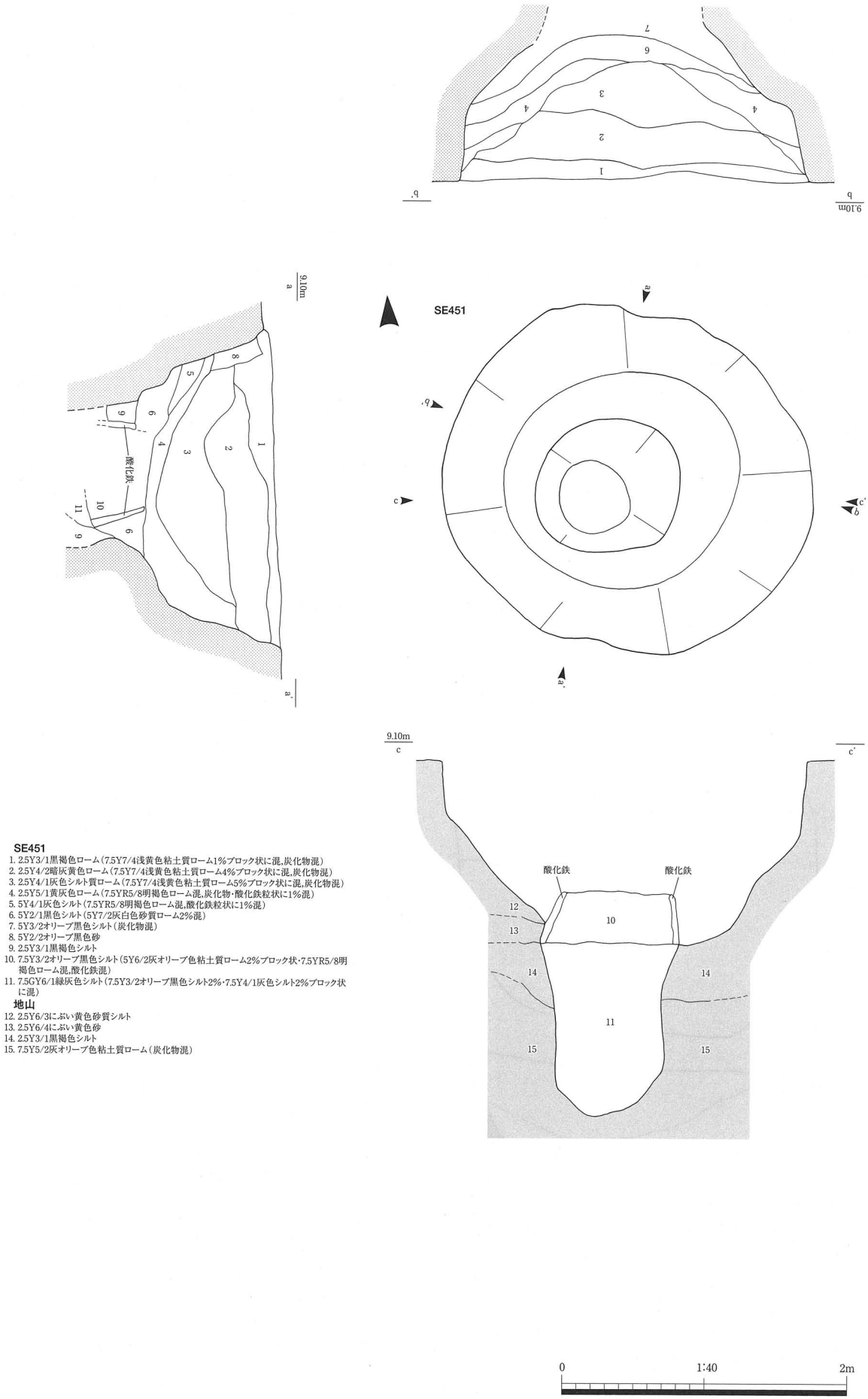
出土遺物は中世土師器小片数点，珠洲小片１点，横櫛１点（*1*），曲物，加工板（*50*・*51*），加工棒（*52*）である。曲物は側板の割れた小破片が多く出土したが，井戸枠として使用されたものかは不明である。加工板は長さ20～50㎝前後のものが埋土の中位から下位にかけて数点出土しており，縦板の一部であった可能性もある。遺構の年代は，中世土師器の形態と，加工版の放射性炭素年代が12世紀後半～13世紀中頃であること[注17]から13世紀中頃～後半と推定する。

1299号井戸（ＳＥ1299，第68図，図版17）

Ｃ７地区中央に位置し，ＳＢ25の南側に隣接する。平面形は円形で，直径1.03m，深さ62㎝である。井戸底の標高は7.66mである。埋土は上層が暗褐色シルト，下層が暗褐色粘土質ロームで，上下層とも地山のにぶい黄橙色粘土がブロック状に混じる。井戸として使用中に堆積したとみられる土はない。掘形は灰色砂層の途中まで掘り込まれている。現在湧水はみられず，黒色粘土層を掘り抜かない点がＣ地区の他の井戸と異なるので，井戸以外の性格を持つ土坑の可能性もある。切り合いではＳＤ1504より新しく，存続時期が異なることからＳＢ25に伴う遺構の可能性がある。

出土遺物は土師器甕等小片数点，須恵器杯１点（*400*），中世土師器皿１点（*398*），珠洲擂鉢１点（*399*）・甕１点，釘１点（*27*）である。遺構の年代は，遺物から13世紀中頃～14世紀中頃と推定する。

注17　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「Ⅸ．放射性炭素年代測定　１．手洗野赤浦遺跡・岩坪岡田島遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定」



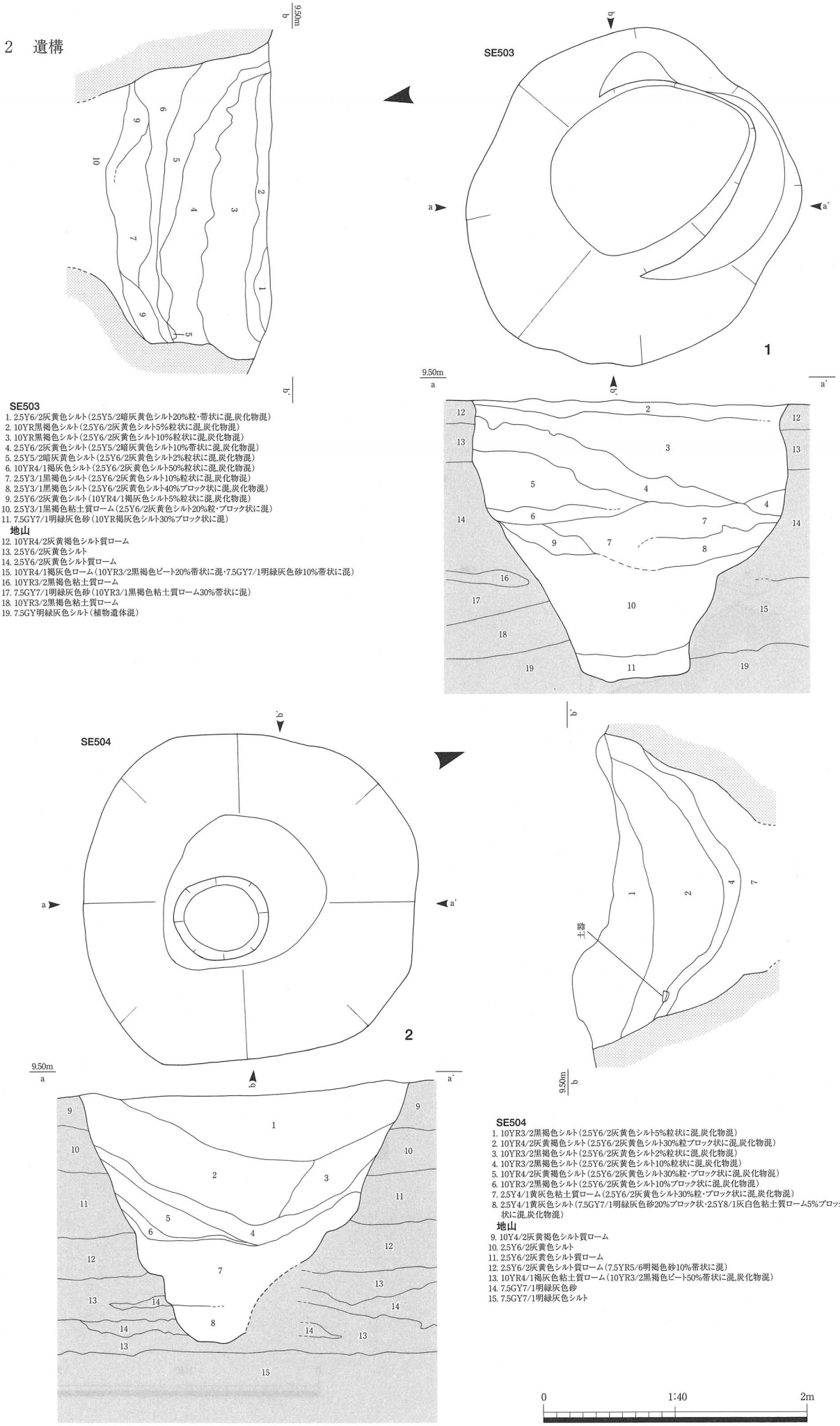
SE451

1. 2.5Y3/1黒褐色ローム（7.5Y7/4浅黄色粘土質ローム1%ブロック状に混,炭化物混）
2. 2.5Y4/2暗灰黄色ローム（7.5Y7/4浅黄色粘土質ローム4%ブロック状に混,炭化物混）
3. 2.5Y4/1灰色シルト質ローム（7.5Y7/4浅黄色粘土質ローム5%ブロック状に混,炭化物混）
4. 2.5Y5/1黄灰色ローム（7.5YR5/8明褐色ローム混,炭化物・酸化鉄粒状に1%混）
5. 5Y4/1灰色シルト（7.5YR5/8明褐色ローム混,酸化鉄粒状に1%混）
6. 5Y2/1黒色シルト（5Y7/2灰白色砂質ローム2%混）
7. 5Y3/2オリーブ黒色シルト（炭化物混）
8. 5Y2/2オリーブ黒色砂
9. 2.5Y3/1黒褐色シルト
10. 7.5Y3/2オリーブ黒色シルト（5Y6/2灰オリーブ色粘土質ローム2%ブロック状・7.5YR5/8明褐色ローム混,酸化鉄混）
11. 7.5GY6/1緑灰色シルト（7.5Y3/2オリーブ黒色シルト2%・7.5Y4/1灰色シルト2%ブロック状に混）

地山

12. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト
13. 2.5Y6/4にぶい黄色砂
14. 2.5Y3/1黒褐色シルト
15. 7.5Y5/2灰オリーブ色粘土質ローム（炭化物混）

第58図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図
SE451



SE503

1. 2.5Y6/2灰黄色シルト(2.5Y5/2暗灰黄色シルト20%粒・帯状に混,炭化物混)
2. 10YR黒褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト5%粒状に混,炭化物混)
3. 10YR黒褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト10%粒状に混,炭化物混)
4. 2.5Y6/2灰黄色シルト(2.5Y5/2暗灰黄色シルト10%帯状に混,炭化物混)
5. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト2%粒状に混,炭化物混)
6. 10YR4/1褐灰色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト50%粒状に混,炭化物混)
7. 2.5Y3/1黒褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト10%粒状に混,炭化物混)
8. 2.5Y3/1黒褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト40%ブロック状に混,炭化物混)
9. 2.5Y6/2灰黄色シルト(10YR4/1褐灰色シルト5%粒状に混,炭化物混)
10. 2.5Y3/1黒褐色粘土質ローム(2.5Y6/2灰黄色シルト20%粒・ブロック状に混)
11. 7.5GY7/1明緑灰色砂(10YR褐灰色シルト30%ブロック状に混)

地山

12. 10YR4/2灰黄褐色シルト質ローム
13. 2.5Y6/2灰黄色シルト
14. 2.5Y6/2灰黄色シルト質ローム
15. 10YR4/1褐灰色ローム(10YR3/2黒褐色ピート20%帯状に混・7.5GY7/1明緑灰色砂10%帯状に混)
16. 10YR3/2黒褐色粘土質ローム
17. 7.5GY7/1明緑灰色砂(10YR3/1黒褐色粘土質ローム30%帯状に混)
18. 10YR3/2黒褐色粘土質ローム
19. 7.5GY明緑灰色シルト(植物遺体混)

SE504

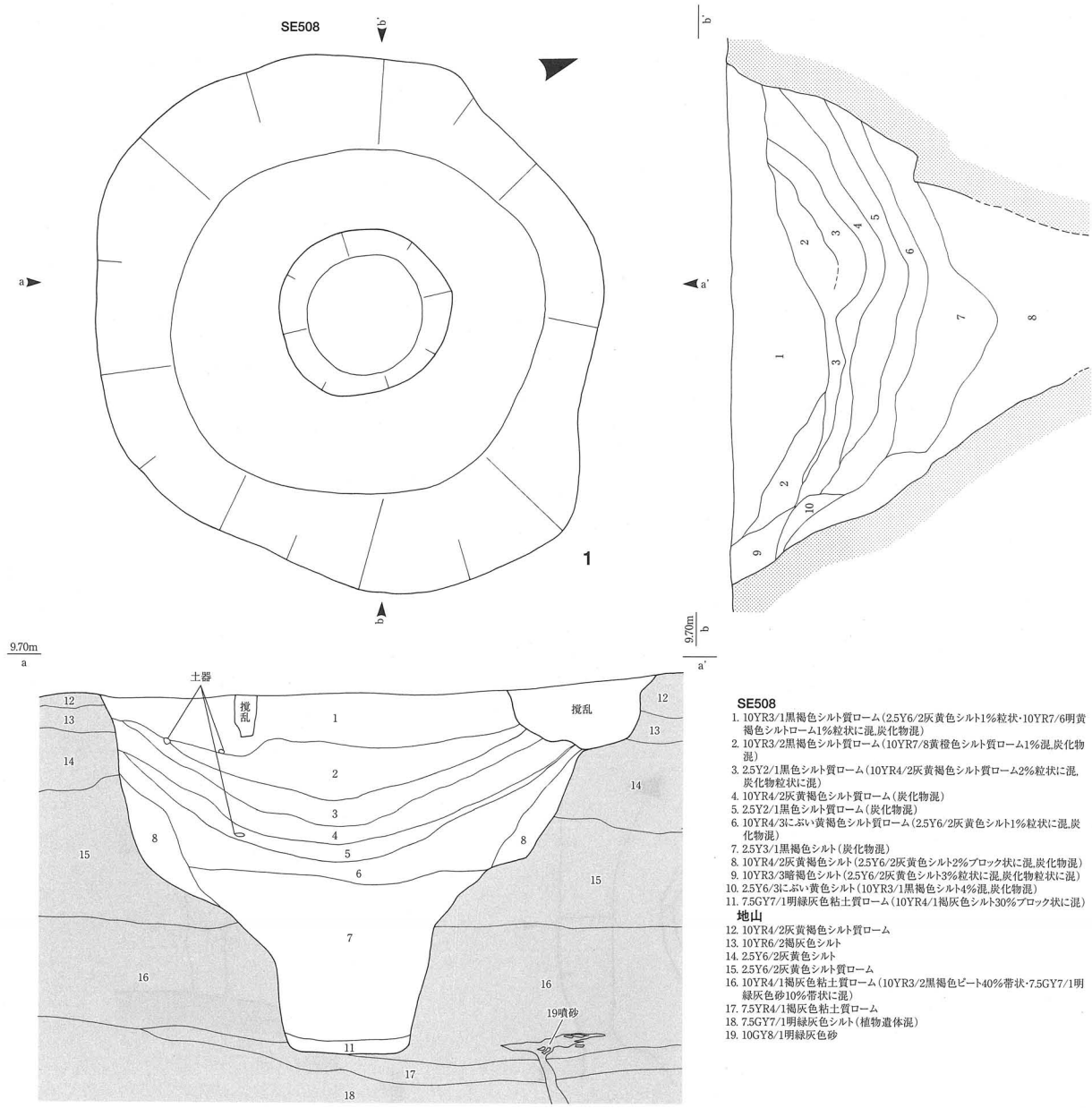
1. 10YR3/2黒褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト5%粒状に混,炭化物混)
2. 10YR4/2灰黄褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト30%粒ブロック状に混,炭化物混)
3. 10YR3/2黒褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト2%粒状に混,炭化物混)
4. 10YR3/2黒褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト10%粒状に混,炭化物混)
5. 10YR4/2灰黄褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト30%粒・ブロック状に混,炭化物混)
6. 10YR3/2黒褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト10%ブロック状に混,炭化物混)
7. 2.5Y4/1黄灰色粘土質ローム(2.5Y6/2灰黄色シルト30%粒・ブロック状に混,炭化物混)
8. 2.5Y4/1黄灰色シルト(7.5GY7/1明緑灰色砂20%ブロック状・2.5Y8/1灰白色粘土質ローム5%ブロック状に混,炭化物混)

地山

9. 10Y4/2灰黄褐色シルト質ローム
10. 2.5Y6/2灰黄色シルト
11. 2.5Y6/2灰黄色シルト質ローム
12. 2.5Y6/2灰黄色シルト質ローム(7.5YR5/6明褐色砂10%帯状に混)
13. 10YR4/1褐灰色粘土質ローム(10YR3/2黒褐色ピート50%帯状に混,炭化物混)
14. 7.5GY7/1明緑灰色砂
15. 7.5GY7/1明緑灰色シルト

第59図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

1. SE503　2. SE504

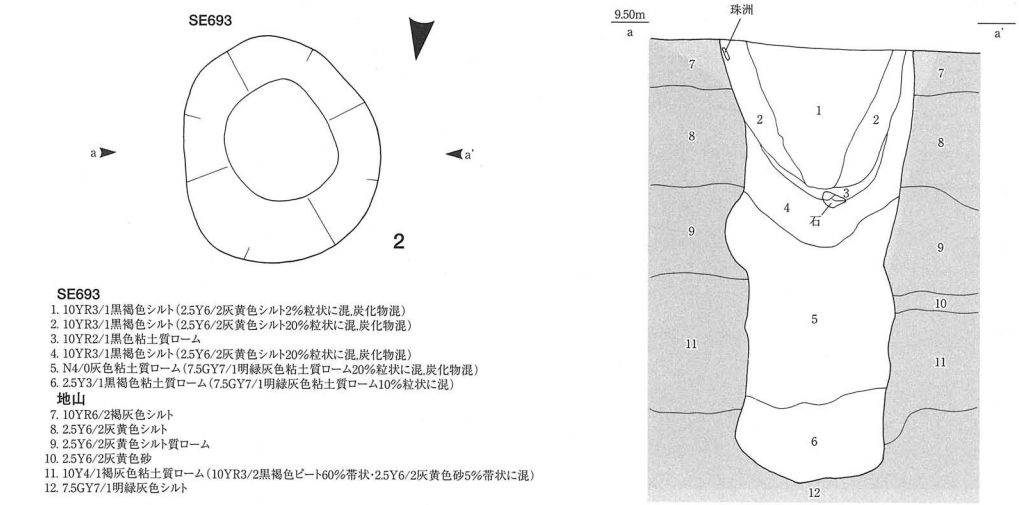


SE508

1. 10YR3/1黒褐色シルト質ローム（2.5Y6/2灰黄色シルト1%粒状・10YR7/6明黄褐色シルトローム1%粒状に混,炭化物混）
2. 10YR3/2黒褐色シルト質ローム（10YR7/8黄橙色シルト質ローム1%混,炭化物混）
3. 2.5Y2/1黒色シルト質ローム（10YR4/2灰黄褐色シルト質ローム2%粒状に混,炭化物粒状に混）
4. 10YR4/2灰黄褐色シルト質ローム（炭化物混）
5. 2.5Y2/1黒色シルト質ローム（炭化物混）
6. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質ローム（2.5Y6/2灰黄色シルト1%粒状に混,炭化物混）
7. 2.5Y3/1黒褐色シルト（炭化物混）
8. 10YR4/2灰黄褐色シルト（2.5Y6/2灰黄色シルト2%ブロック状に混,炭化物混）
9. 10YR3/3暗褐色シルト（2.5Y6/2灰黄色シルト3%粒状に混,炭化物粒状に混）
10. 2.5Y6/3にぶい黄色シルト（10YR3/1黒褐色シルト4%混,炭化物混）
11. 7.5GY7/1明緑灰色粘土質ローム（10YR4/1褐灰色シルト30%ブロック状に混）

地山

12. 10YR4/2灰黄褐色シルト質ローム
13. 10YR6/2褐灰色シルト
14. 2.5Y6/2灰黄色シルト
15. 2.5Y6/2灰黄色シルト質ローム
16. 10YR4/1褐灰色粘土質ローム（10YR3/2黒褐色ピート40%帯状・7.5GY7/1明緑灰色砂10%帯状に混）
17. 7.5YR4/1褐灰色粘土質ローム
18. 7.5GY7/1明緑灰色シルト（植物遺体混）
19. 10GY8/1明緑灰色砂



SE693

1. 10YR3/1黒褐色シルト（2.5Y6/2灰黄色シルト2%粒状に混,炭化物混）
2. 10YR3/1黒褐色シルト（2.5Y6/2灰黄色シルト20%粒状に混,炭化物混）
3. 10YR2/1黒色粘土質ローム
4. 10YR3/1黒褐色シルト（2.5Y6/2灰黄色シルト20%粒状に混,炭化物混）
5. N4/0灰色粘土質ローム（7.5GY7/1明緑灰色粘土質ローム20%粒状に混,炭化物混）
6. 2.5Y3/1黒褐色粘土質ローム（7.5GY7/1明緑灰色粘土質ローム10%粒状に混）

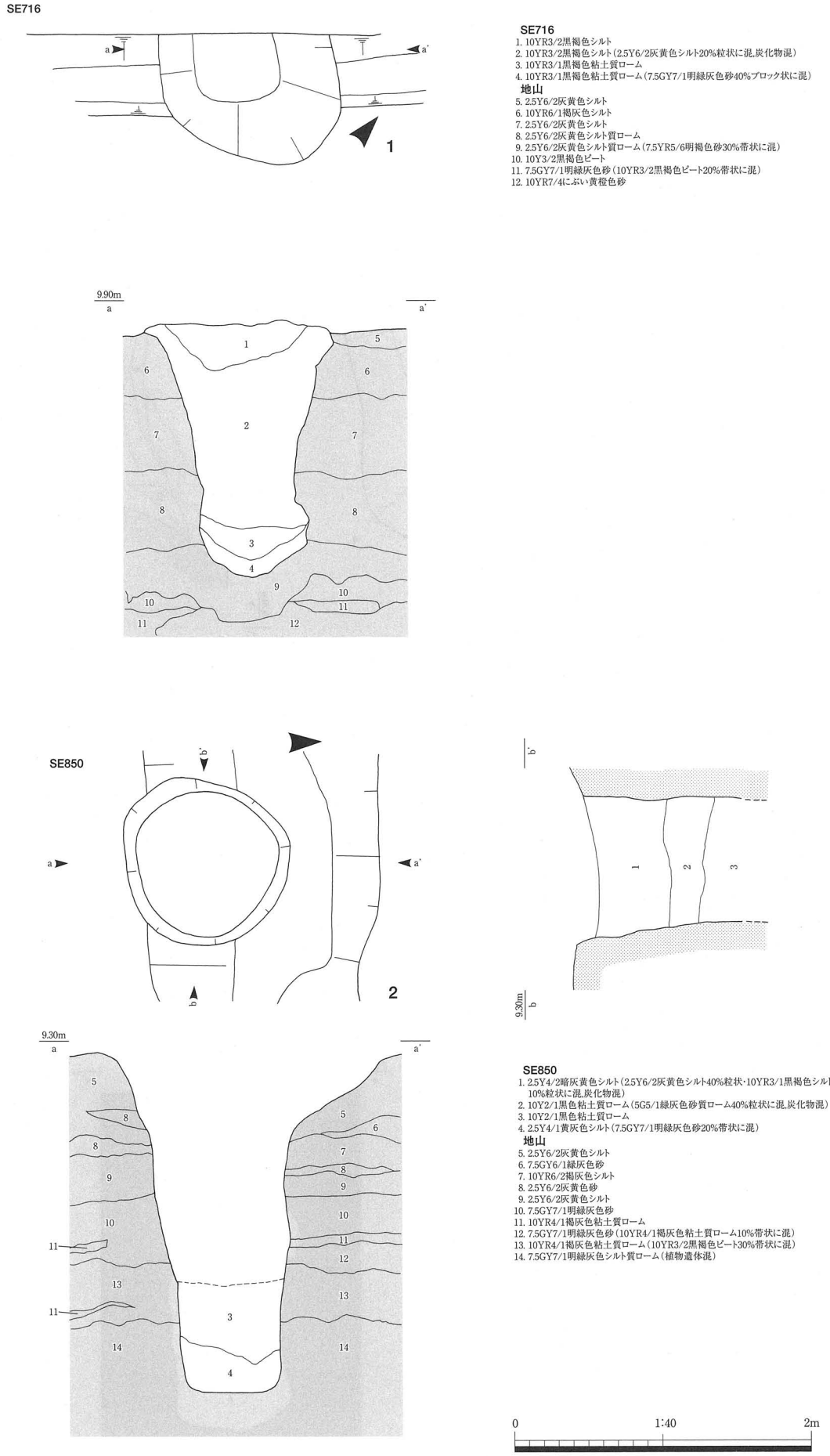
地山

7. 10YR6/2褐灰色シルト
8. 2.5Y6/2灰黄色シルト
9. 2.5Y6/2灰黄色シルト質ローム
10. 2.5Y6/2灰黄色砂
11. 10Y4/1褐灰色粘土質ローム（10YR3/2黒褐色ピート60%帯状・2.5Y6/2灰黄色砂5%帯状に混）
12. 7.5GY7/1明緑灰色シルト

0　1:40　2m

第60図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

1. SE508　2. SE693



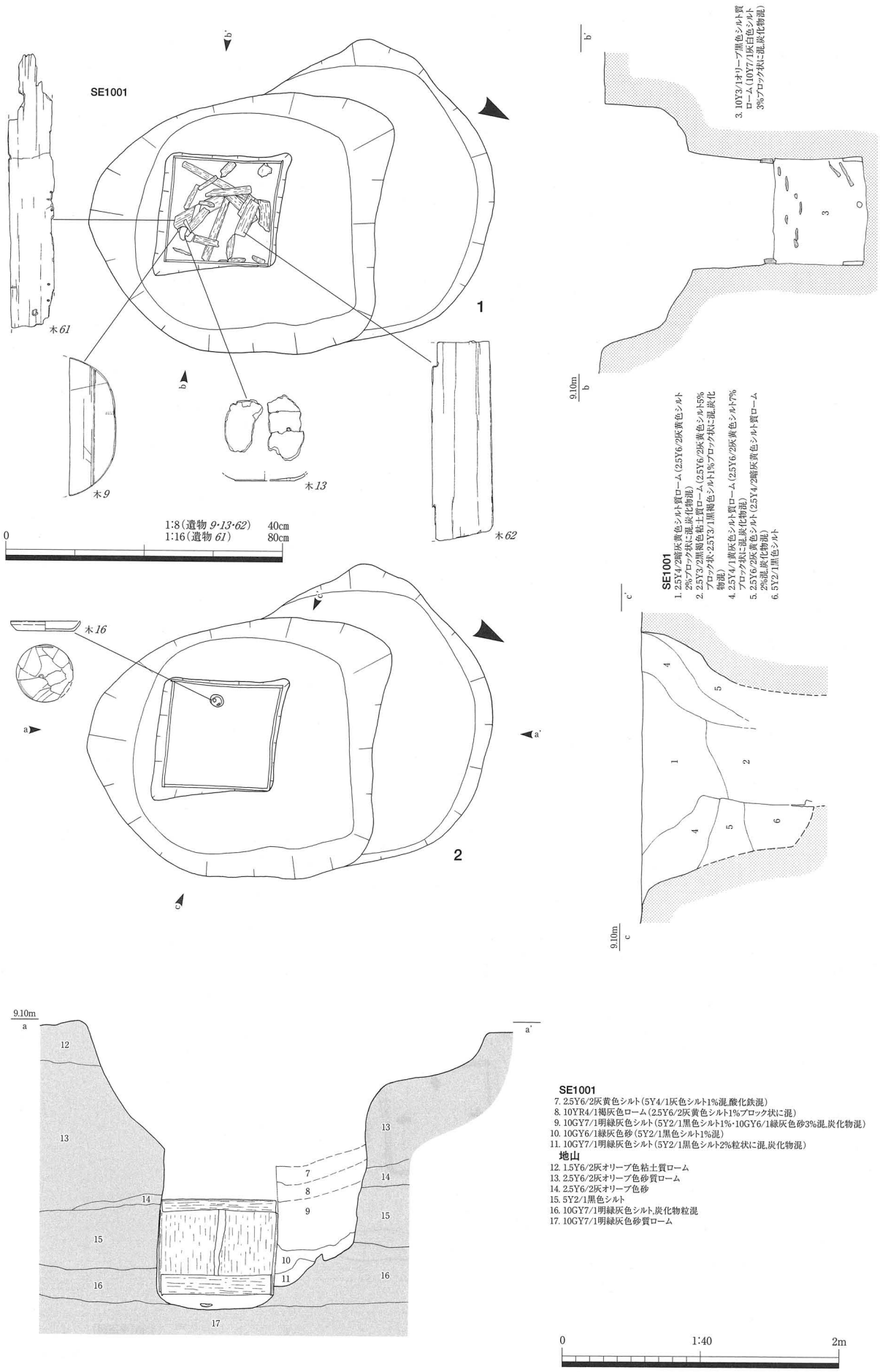
SE716
1. 10YR3/2黒褐色シルト
2. 10YR3/2黒褐色シルト（2.5Y6/2灰黄色シルト20%粒状に混,炭化物混）
3. 10YR3/1黒褐色粘土質ローム
4. 10YR3/1黒褐色粘土質ローム（7.5GY7/1明緑灰色砂40%ブロック状に混）

地山
5. 2.5Y6/2灰黄色シルト
6. 10YR6/1褐灰色シルト
7. 2.5Y6/2灰黄色シルト
8. 2.5Y6/2灰黄色シルト質ローム
9. 2.5Y6/2灰黄色シルト質ローム（7.5YR5/6明褐色砂30%帯状に混）
10. 10Y3/2黒褐色ピート
11. 7.5GY7/1明緑灰色砂（10YR3/2黒褐色ピート20%帯状に混）
12. 10YR7/4にぶい黄橙色砂

SE850
1. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト（2.5Y6/2灰黄色シルト40%粒状・10YR3/1黒褐色シルト10%粒状に混,炭化物混）
2. 10Y2/1黒色粘土質ローム（5G5/1緑灰色砂質ローム40%粒状に混,炭化物混）
3. 10Y2/1黒色粘土質ローム
4. 2.5Y4/1黄灰色シルト（7.5GY7/1明緑灰色砂20%帯状に混）

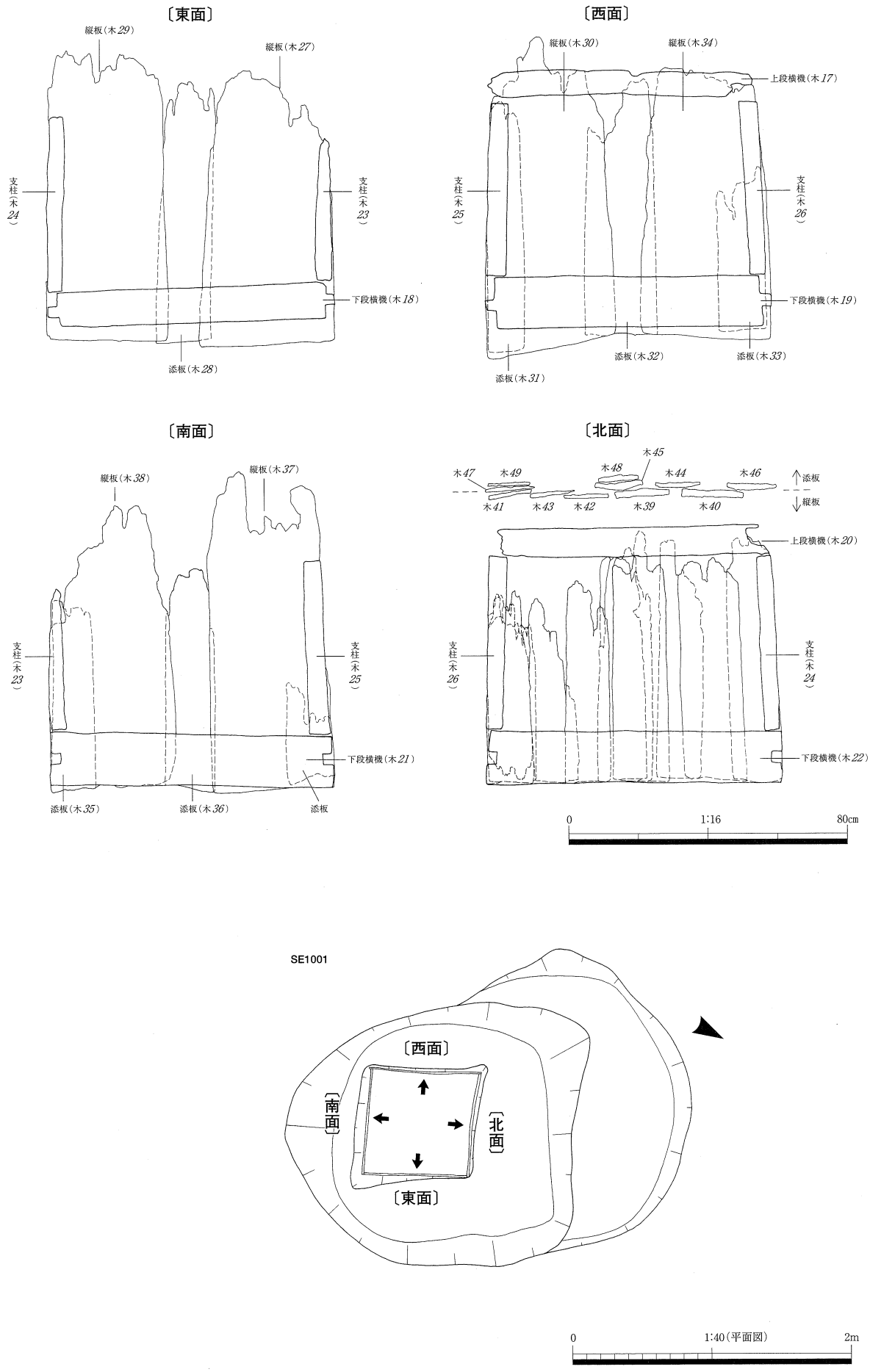
地山
5. 2.5Y6/2灰黄色シルト
6. 7.5GY6/1緑灰色砂
7. 10YR6/2褐灰色シルト
8. 2.5Y6/2灰黄色砂
9. 2.5Y6/2灰黄色シルト
10. 7.5GY7/1明緑灰色砂
11. 10YR4/1褐灰色粘土質ローム
12. 7.5GY7/1明緑灰色砂（10YR4/1褐灰色粘土質ローム10%帯状に混）
13. 10YR4/1褐灰色粘土質ローム（10YR3/2黒褐色ピート30%帯状に混）
14. 7.5GY7/1明緑灰色シルト質ローム（植物遺体混）

第61図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図
1. SE716　2. SE850



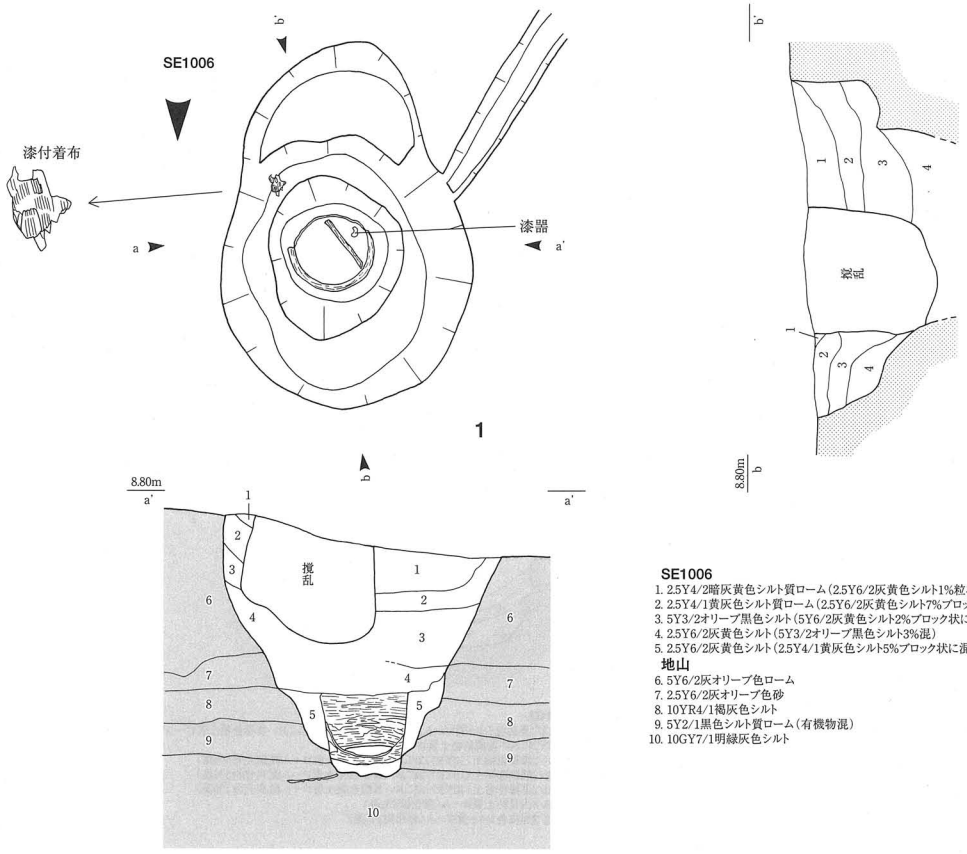
第62図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

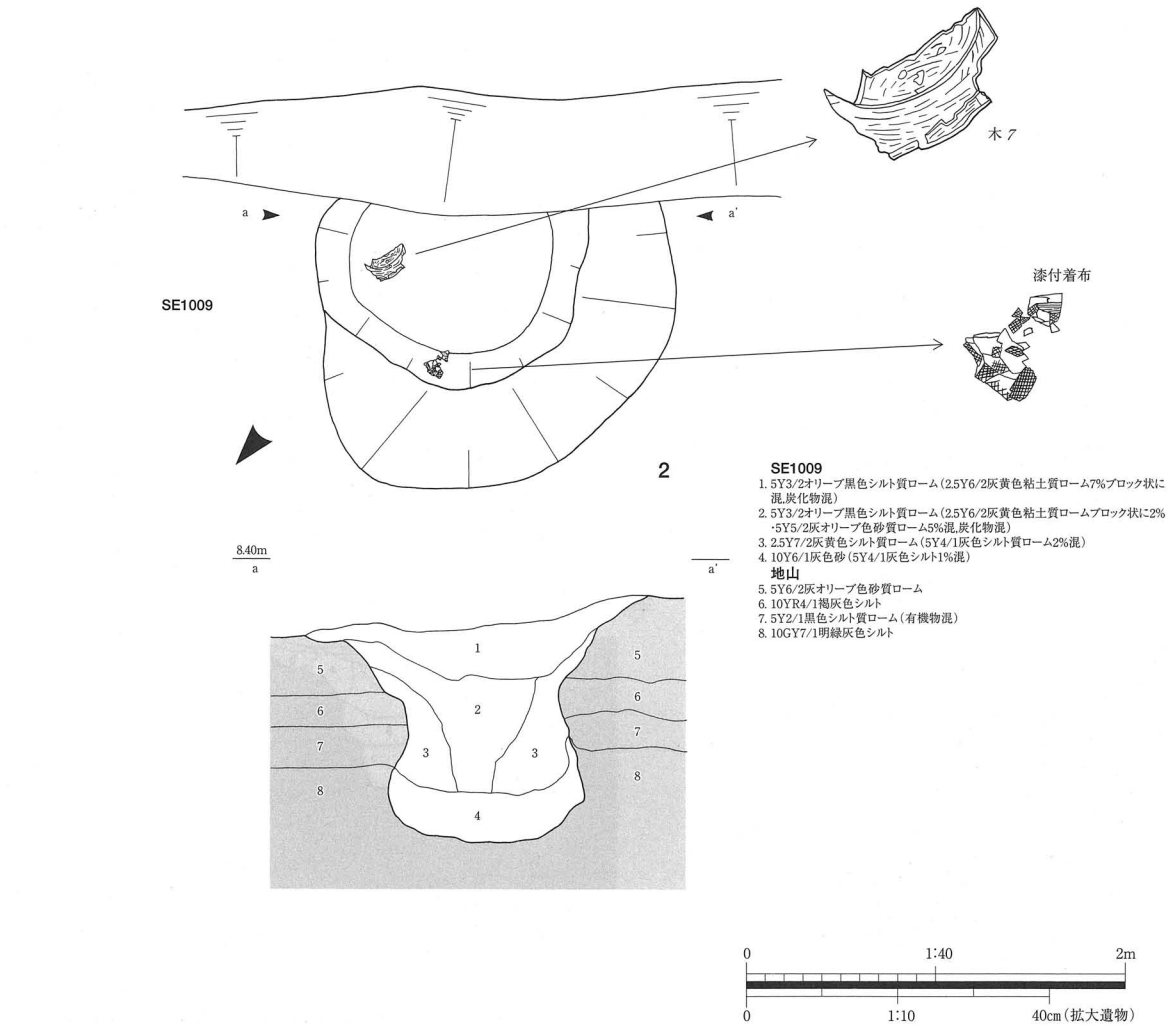
1・2. SE1001



第63図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

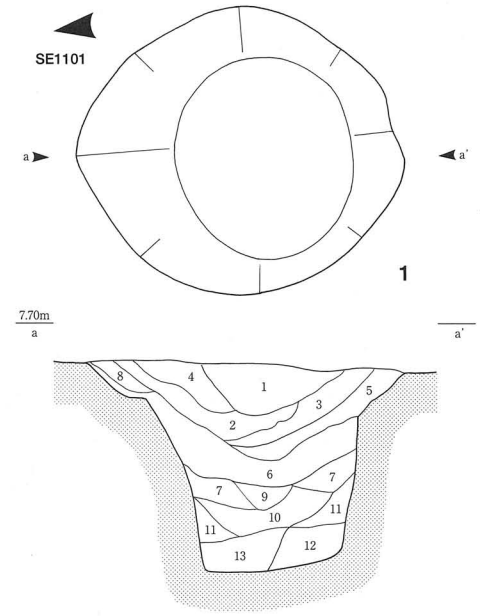
SE1001　井戸側構造（出土状況と圧痕から復原）



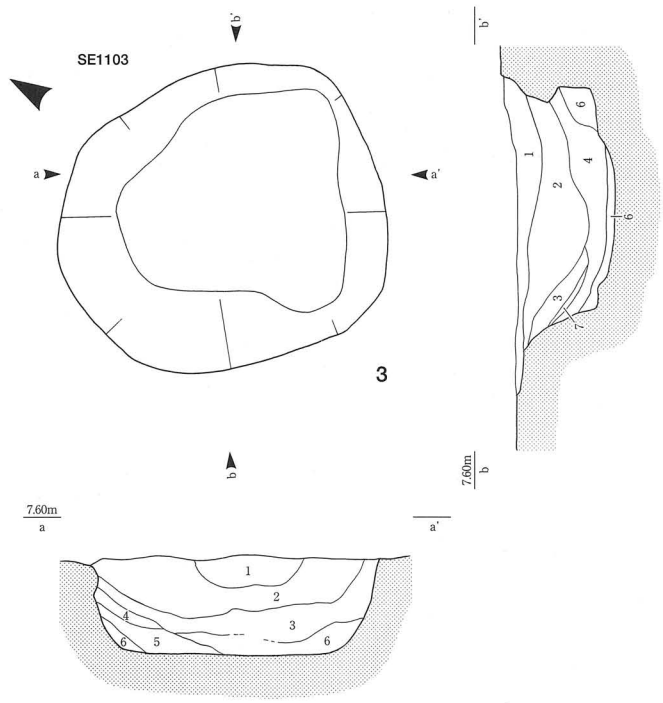


第64図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

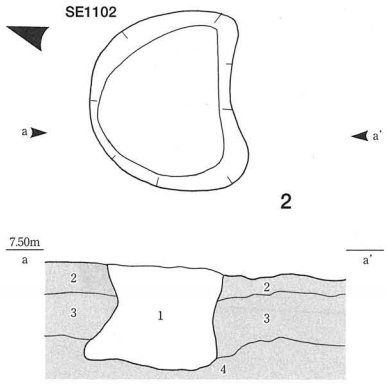
1. SE1006　2. SE1009



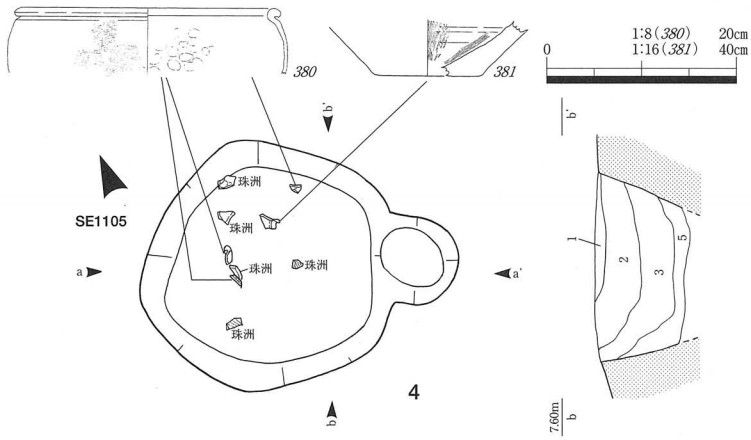
SE1101
1. 7.5YR3/1黒褐色シルト質ローム（炭化物5%混）
2. 7.5YR3/1黒褐色シルト質ローム（10YR7/2にぶい黄橙色粘土質ロームブロック状に混）
3. 10YR7/2にぶい黄橙色粘土質ローム（炭化物2%混）
4. 10YR7/2にぶい黄橙色粘土質ローム（7.5YR3/1黒褐色シルト質ローム混）
5. 10YR2/2黒褐色粘土（10YR7/2にぶい黄橙色粘土質ローム混,炭化物5%混）
6. 10YR8/3浅黄橙色粘土質ローム（炭化物2%混）
7. 10YR2/2黒褐色粘土（炭化物2%・酸化鉄10%混）
8. 10YR7/2にぶい黄橙色シルト質ローム
9. 10YR4/4褐色粘土（酸化鉄20%混）
10. 10YR4/1灰褐色粘土（炭化物1%・酸化鉄5%混）
11. 2.5GY5/1オリーブ灰色粘土（炭化物10%・酸化鉄2%混）
12. 5Y3/2オリーブ黒色粘土（炭化物10%・酸化鉄2%混）
13. 5Y3/2オリーブ黒色粘土質ローム（炭化物5%・酸化鉄5%混）

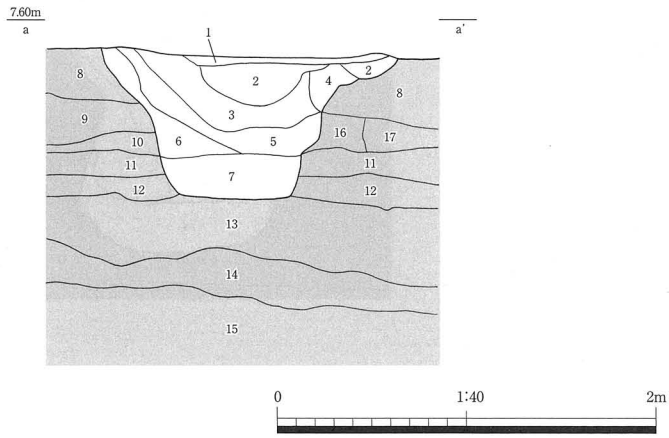


SE1103
1. 7.5YR3/1黒褐色シルト質ローム,炭化物5%混（10YR7/2にぶい黄橙色粘土質ロームブロック状に混,炭化物2%混）
2. 10YR7/2にぶい黄橙色粘土質ローム（炭化物2%混）
3. 10YR2/2黒褐色粘土（10YR7/2にぶい黄橙色粘土質ローム混,炭化物5%混）
4. 10YR2/2黒褐色粘土（10YR7/2にぶい黄橙色粘土質ローム混,炭化物3%混）
5. 10YR2/2黒褐色粘土（10YR7/2にぶい黄橙色粘土質ローム混,炭化物1%混）
6. 10YR8/3浅黄粘土質ローム（酸化鉄2%混）
7. 10YR2/2黒褐色シルト質ローム（炭化物2%混）



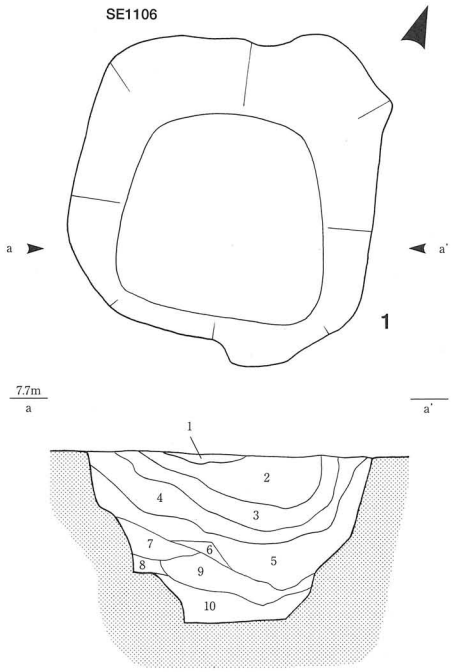
SE1102
1. 10GY5/1緑灰色粘土質ローム（2.5Y3/2黒褐色粘土10%・10YR3/1黒褐色粘土10%ブロック状に混）
地山
2. 10YR6/4にぶい黄橙色砂（酸化鉄10%混）
3. 7.5YR5/3にぶい褐色粘土（炭化物・酸化鉄5%・有機物混）
4. 2.5YR2/1赤黒色粘土（有機物混）



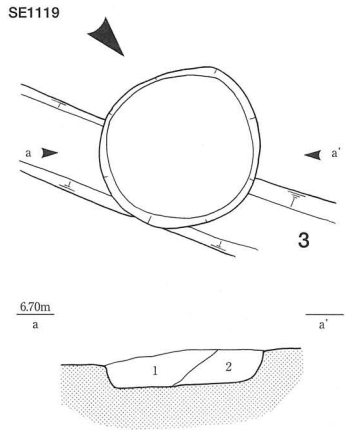


SE1105
1. 7.5YR3/1黒褐色シルト質ローム（炭化物5%混）
2. 7.5YR3/1黒褐色シルト（炭化物2%混）
3. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト（炭化物2%・酸化鉄10%混）
4. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質ローム（炭化物2%・酸化鉄5%混）
5. 10YR3/2黒褐色粘土（炭化物2%・酸化鉄10%混）
6. 2.5Y5/3黄褐色粘土（炭化物2%・酸化鉄10%混）
7. 10Y4/1灰色砂質ローム（炭化物5%・酸化鉄20%混）
地山
8. 10YR6/4にぶい黄橙色砂（酸化鉄10%混）
9. 10YR6/4にぶい黄橙色砂
10. 2.5Y3/2黒褐色粘土（炭化物1%・酸化鉄5%混）
11. 10YR2/2黒褐色粘土（炭化物2%・酸化鉄2%混）
12. 7.5YR3/1黒褐色粘土（有機物混）
13. 5Y3/2オリーブ黒色粘土（炭化物5%・酸化鉄5%混）
14. 2.5GY5/1オリーブ灰色シルト（炭化物2%・酸化鉄10%混）
15. 2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質ローム（炭化物5%・酸化鉄2%混）
16. 7.5Y5/1灰色砂（炭化物3%・酸化鉄20%混）
17. 10YR4/3にぶい黄褐色粘土質ローム（炭化物2%・酸化鉄10%混）

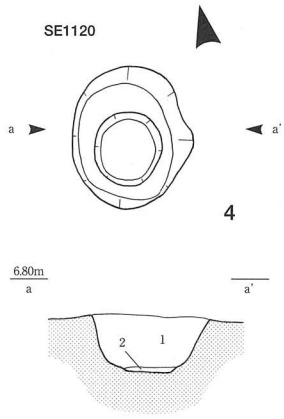
第65図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図
1. SE1101　2. SE1102　3. SE1103　4. SE1105



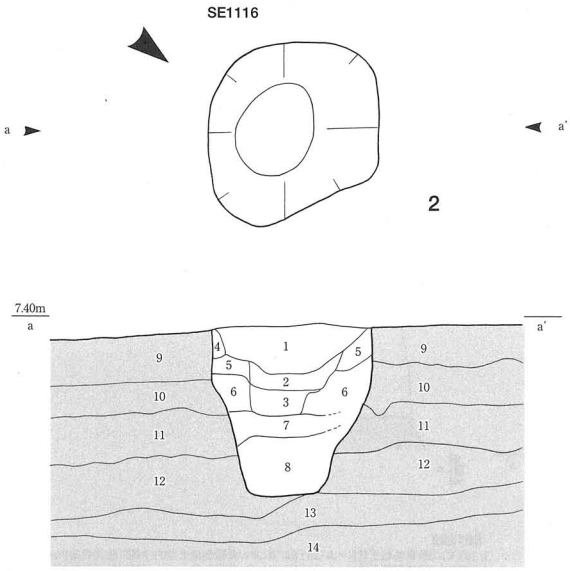
SE1106
1. 7.5YR3/1黒褐色シルト質ローム（炭化物5%混）
2. 7.5YR3/1黒褐色シルト質ローム（10YR7/2にぶい黄橙色粘土質ロームブロック状に混,炭化物2%混）
3. 10YR7/2にぶい黄橙色粘土質ローム（炭化物2%混）
4. 10YR2/2黒褐色粘土（10YR7/2にぶい黄橙色粘土質ローム,炭化物5%混）
5. 10YR8/3浅黄橙色粘土質ローム（炭化物2%混）
6. 10YR8/3浅黄橙色砂質ローム（炭化物2%・酸化鉄10%混）
7. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土（炭化物5%・酸化鉄10%混）
8. 7.5YR3/1黒褐色粘土（有機物混）
9. 5Y6/2灰オリーブ色粘土質ローム（炭化物2%・酸化鉄5%混）
10. 2.5Y6/1黄灰色粘土（炭化物2%・酸化鉄5%混）



SE1119
1. 10Y7/2灰白色砂（炭化物2%・有機物混）
2. 10Y4/1灰色粘土（2.5GY5/1オリーブ灰色粘土ブロック状に混,炭化物1%・酸化鉄2%混）



SE1120
1. 2.5Y4/1黄灰色砂質ローム（10Y4/1灰色シルトブロック状に混,炭化物2%・酸化鉄15%混）
2. 2.5GY暗オリーブ灰色シルト

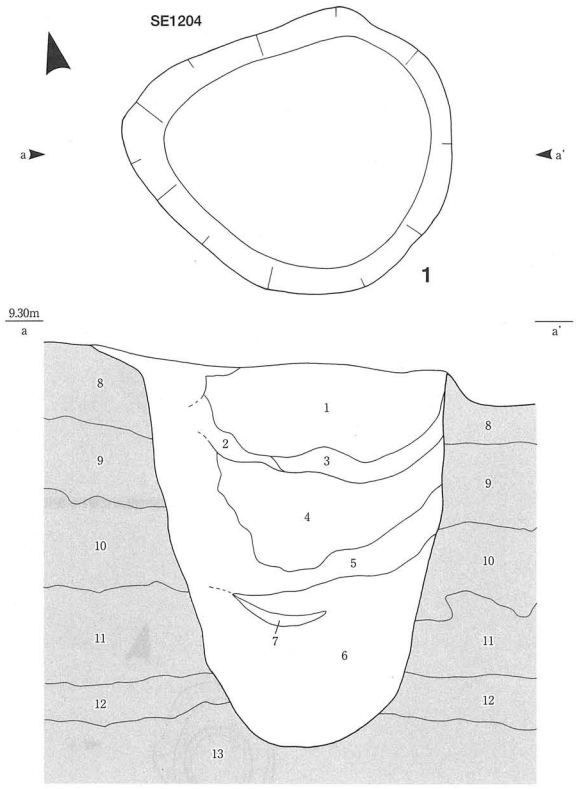


SE1116
1. 10G5/1緑灰色粘土質ローム（2.5Y3/2黒褐色粘土・10YR3/1黒褐色粘土ブロック状に混）
2. 10G5/1緑灰色粘土質ローム（2.5Y3/2黒褐色粘土・10YR3/1黒褐色粘土ブロック状に混,酸化鉄10%混）
3. 10G5/1緑灰色粘土質ローム（2.5Y3/2黒褐色粘土・10YR3/1黒褐色粘土ブロック状に混,酸化鉄5%混）
4. 10YR4/1褐灰色粘土（酸化鉄10%混）
5. 2.5Y5/1灰黄色シルト（炭化物5%・酸化鉄2%混）
6. 5Y6/1灰色シルト質ローム（10YR2/1黒色粘土混）
7. 5Y4/2灰オリーブ色粘土質ローム（酸化鉄1%混）
8. 5Y4/1灰色粘土（炭化物5%・酸化鉄2%混）

地山
9. 7.5YR5/3にぶい褐色粘土（炭化物・酸化鉄5%・有機物混）
10. 7.5YR3/1黒褐色粘土（有機物混）
11. 10Y4/2オリーブ灰色粘土（炭化物5%・酸化鉄2%混）
12. 10Y4/2オリーブ灰色シルト質ローム（炭化物10%・酸化鉄10%混）
13. 2.5GY5/1オリーブ灰色粘土（炭化物20%・酸化鉄5%混）
14. 10Y3/2オリーブ灰色粘土（炭化物10%・酸化鉄2%混）

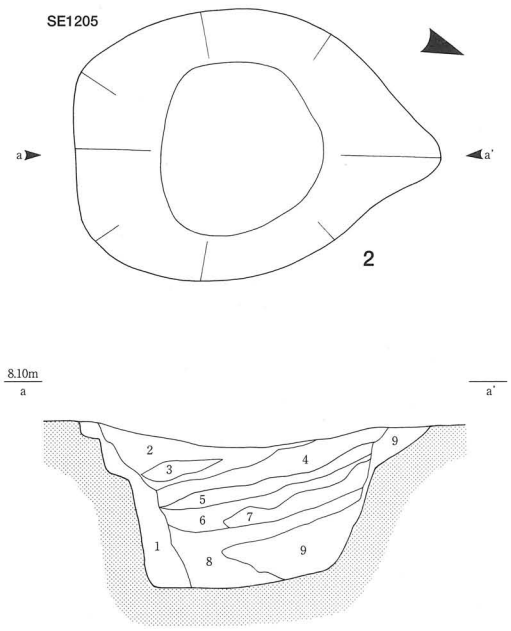
第66図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

1. SD1106　2. SE1116　3. SE1119　4. SE1120

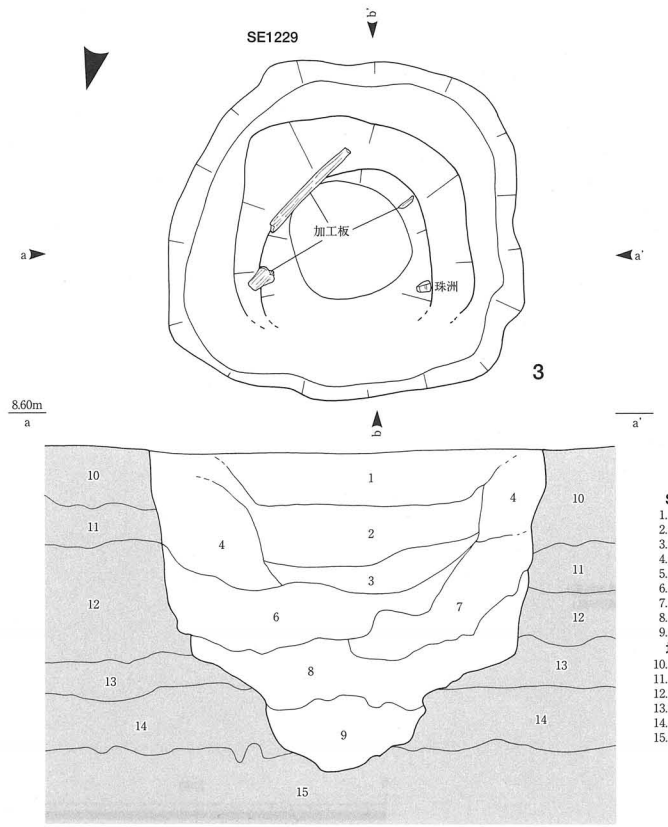


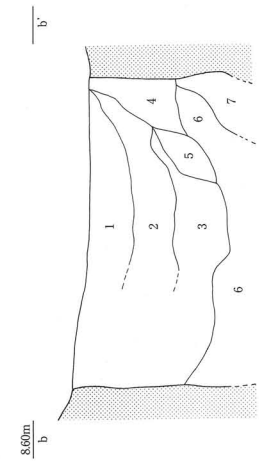
SE1204
1. 10YR3/3暗褐色シルト（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物7%・酸化鉄3%混）
2. 10YR3/3暗褐色粘土質ローム（10YR6/2灰黄褐色粘土ブロック状に混,炭化物1%・酸化鉄2%混）
3. 10YR3/4暗褐色粘土質ローム（炭化物7%混）
4. 7.5YR1.7/1黒色シルト質ローム（10YR6/2灰黄褐色粘土ブロック状に混,炭化物3%・酸化鉄3%混）
5. 10YR4/2灰黄褐色粘土（10YR6/2灰黄褐色粘土・シルトブロック状に混,炭化物7%・酸化鉄10%混）
6. 7.5YR1.7/1黒色シルト
7. 10YR4/2灰黄褐色粘土（10YR6/2灰黄褐色粘土・シルトブロック状に混,炭化物3%・酸化鉄5%混）

地山
8. 10YR5/4にぶい黄褐色粘土
9. 10YR6/4にぶい黄橙色砂（酸化鉄10%混）
10. 7.5YR5/3にぶい褐色粘土（炭化物・酸化鉄5%・有機物混）
11. 7.5YR3/1黒褐色粘土（有機物混）
12. 2.5GY5/1オリーブ灰色シルト（炭化物2%・酸化鉄7%混）
13. 5G5/1オリーブ灰色砂質ローム（炭化物・酸化鉄2%混）



SE1205
1. 10YR3/3暗褐色粘土質ローム（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物5%・酸化鉄10%混）
2. 10YR3/3暗褐色粘土質ローム（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物3%・酸化鉄5%混）
3. 2.5Y6/2灰黄色砂
4. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状・10YR3/3暗褐色粘土質ローム混,炭化物10%・酸化鉄20%混）
5. 10YR3/3暗褐色粘土質ローム（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,酸化鉄10%混）
6. 10YR3/3暗褐色粘土質ローム（2.5Y6/2灰黄色粘土ブロック状に混,炭化物3%・酸化鉄10%混）
7. 2.5Y6/2灰黄色粘土（酸化鉄40%混）
8. 10YR2/1黒色粘土（炭化物3%・酸化鉄5%混）
9. 2.5Y6/2灰黄色シルト（炭化物2%・酸化鉄10%混）



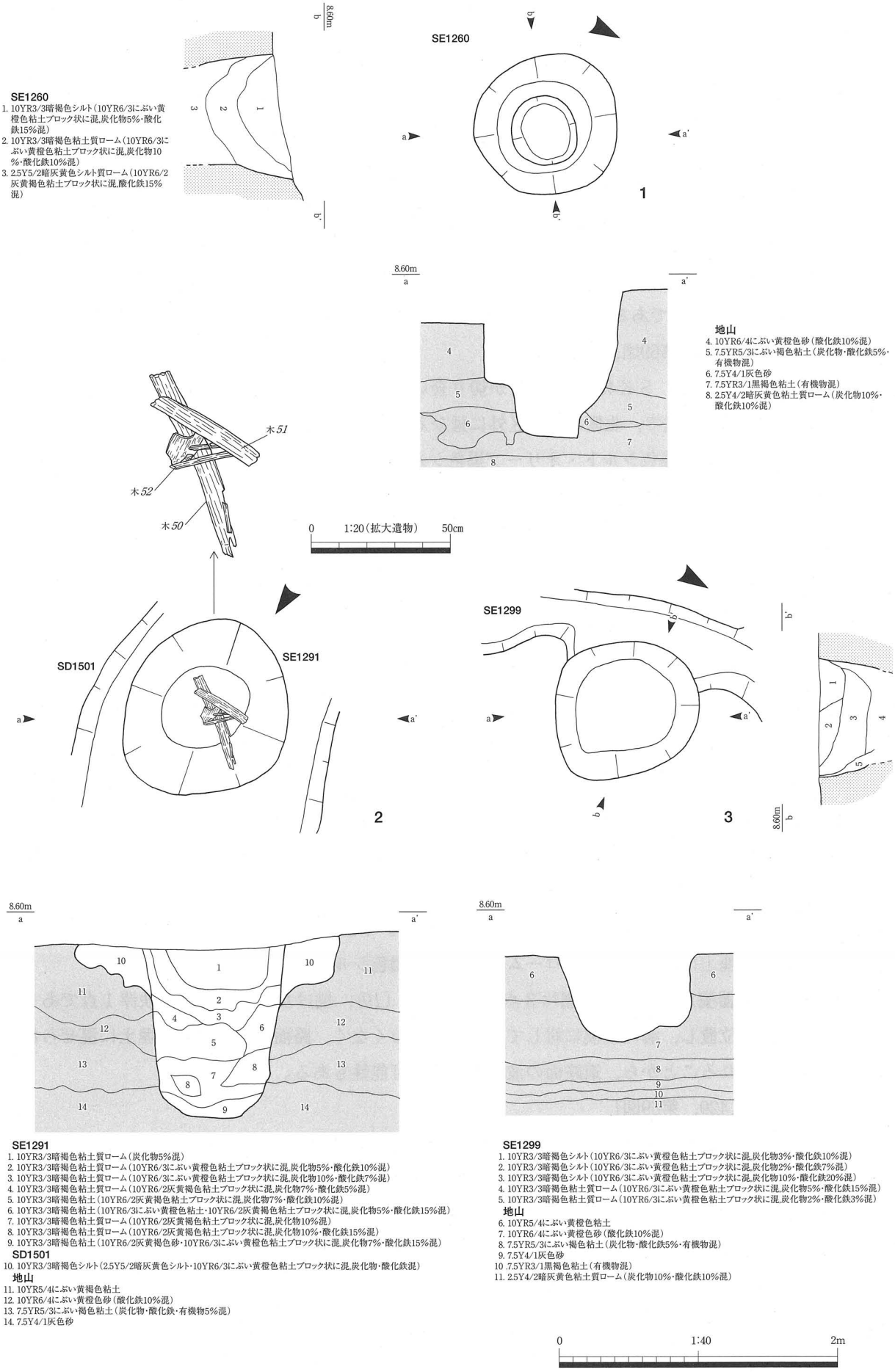


SE1229
1. 10YR3/3暗褐色粘土質ローム（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物3%・酸化鉄5%混）
2. 10YR3/3暗褐色粘土質ローム（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物5%・酸化鉄10%混）
3. 7.5YR2/1黒色シルト（10YR8/3浅黄橙色粘土ブロック状に混）
4. 10YR3/3暗褐色シルト（10YR6/3にぶい黄橙色シルトブロック状に混,炭化物1%・酸化鉄7%混）
5. 10YR3/3暗褐色シルト（10YR6/3にぶい黄橙色粘土質ロームブロック状に混,酸化鉄10%混）
6. 10YR3/3暗褐色粘土（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物3%・酸化鉄20%混）
7. 2.5Y6/4にぶい黄色粘土（炭化物2%・酸化鉄20%混）
8. 7.5Y4/1灰色粘土（10YR3/3暗褐色粘土・10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混）
9. 7.5Y4/1灰色粘土

地山
10. 10YR5/4にぶい黄褐色粘土
11. 10YR6/4にぶい黄橙色砂（酸化鉄10%混）
12. 7.5YR5/3にぶい褐色粘土（炭化物・酸化鉄5%・有機物混）
13. 7.5Y4/1灰色砂
14. 7.5Y4/1灰色砂（7.5YR3/1黒褐色粘土混）
15. 7.5YR3/1黒褐色粘土（有機物混）

0　1:40　2m

第67図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図
1. SE1204　2. SE1205　3. SE1229



第68図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

1. SE1260　2. SE1291・SD1501　3. SE1299

F　土坑

144号土坑（ＳＫ144，第25図，図版26）

Ｂ２地区東側に位置し，ＳＢ３の範囲内にある。平面形は円形を呈し，直径30cm，深さ16cmである。埋土は暗灰黄色シルトが混じる黒褐色シルトの単層である。切り合いではＳＢ３のＳＰ227より新しい。底面付近から完形に近い中世土師器（*401*）が出土しており，建物廃絶後の地鎮遺構の可能性がある。

189号土坑（ＳＫ189，第69図）

Ｂ２地区東側に位置し，ＳＢ７に隣接する。平面形は円形を呈し，直径27cm，深さ12cmである。埋土は暗灰黄色シルトが混じる黒褐色シルトの単層である。柱穴状の小規模な土坑である。

出土遺物は土錘（*402*）である。

404号土坑（ＳＫ404，第69図，図版26）

Ｃ３地区北端に位置し，ＳＫ439と接するが切り合いはない。平面形は円形で，直径3.00m，深さ0.88mである。大型の土坑で，北側は調査区外に延びる。断面は擂鉢状を呈する。埋土は，オリーブ黒色シルト質ローム・黒褐色シルト・オリーブ黒色シルト・灰色シルト質ロームを基調とする土層の水平堆積となっている。

出土遺物は須恵器小片数点・中世土師器皿数点（*403・404*），珠洲擂鉢１点（*405*）・甕数点（*230*）・壺１点，粘土塊多数・羽口数点（*35・38*），鉄滓多数（*46・51・54・61*）である。中世土師器皿の小片や珠洲甕体部片が多く，珠洲甕片にはＳＤ401との接合資料（*230*）もある。鉄滓・羽口のほか，製鉄に関連するものと推測される粘土塊が多く出土したことから，製鉄関連の廃棄土坑と考えられる。遺構の年代は，遺物から13世紀前半と推定する。

413号土坑（ＳＫ413，第69図）

Ｃ３地区東端に位置し，ＳＤ401とＳＤ402の間にある。平面形は円形で，直径30cm，深さ22cmである。柱穴状の小規模な土坑である。埋土は黄褐色シルト質ローム・オリーブ褐色シルトを基調とする。上面に珠洲甕片２点と小石がのっていたが，ＳＦ１の道路面に位置するので，路面の補強または補修に関連する可能性もある。

428号土坑（ＳＫ428，第69図，図版18）

Ｃ３地区東側に位置し，ＳＤ401とＳＤ402の間にある。平面形は楕円形で，長径92cm，短径53cm，深さ９cmである。埋土はオリーブ褐色ローム混じりの暗褐色シルト質ロームである。

出土遺物は須恵器甕片１点，珠洲甕片３点，砥石１点（*19*），焼けた自然礫１点，鉄滓１点である。ＳＦ１の道路面に位置し，溝の規模に対して遺物量が少なくなく，路面補強のために埋土に混ぜられた可能性が考えられることから，道路面の波板状圧痕の可能性もある。

429号土坑（ＳＫ429，第69図）

Ｃ３地区東側に位置し，ＳＤ401とＳＤ402の間にある。平面形は円形で，直径52cm，深さ４cmである。埋土はオリーブ褐色ローム混じりの暗褐色シルト質ロームである。

出土遺物は土師器小片１点，珠洲甕１点，中国製青磁皿１点（*406*）で，他に自然礫が上面にあった。ＳＦ１の道路面に位置し，溝の規模に対して遺物量が少なくなく，路面補強のために埋土に混ぜられた可能性が考えられることから，道路面の波板状圧痕の可能性もある。遺物の年代から，12世紀中頃～後半の遺構と推定する。

450号土坑（ＳＫ450，第70図，図版26）

Ｃ２地区西側に位置し，ＳＥ451・ＳＥ1001に隣接する。平面形は円形で，直径2.40m，深さ1.10mである。埋土は６層に分かれて水平堆積し，各層に地山の浅黄色粘土質ローム等が混入する。上層は黒褐色シルト質ローム・黒褐色シルト，下層はオリーブ黒色粘土質ロームを基調とする。

出土遺物は縄文土器小片多数，土師器小片多数，須恵器甕１点，珠洲擂鉢（*407*・*408*）・甕・壺，中国製青磁碗１点，粘土塊，骨片である。中国製青磁は，太宰府分類の龍泉窯系碗Ⅱｂ類の小片で13世紀前半のものである。骨は細片である。遺構の性格は不明であるが，遺物の年代から，13世紀前半の遺構と推定する。

466号土坑（ＳＫ466，第70図）

Ｃ２地区中央北側に位置する。平面形は円形で，直径1.43m，深さ12cmである。埋土は地山の黄褐色粘土質ローム混じりの黒褐色シルト，褐灰色シルト混じりの黄褐色粘土質ロームである。

出土遺物は土師器小片数点，珠洲甕１点である。浅い土坑で，性格は不明である。

467号土坑（ＳＫ467，第70図）

Ｃ２地区中央に位置する。平面形は不整形で，規模は72cm×40cmで，深さは14cmである。埋土は褐灰色シルト混じりの黄褐色粘土質ロームである。

出土遺物は粘土塊が２点である。浅い土坑で，性格は不明である。

505号土坑（ＳＫ505，第71図）

Ｃ４地区東側に位置し，ＳＥ503に隣接し，ＳＢ19の範囲内にある。平面形は円形で，規模は直径1.31m，深さは84cmである。断面は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色シルト・黒褐色シルト・灰黄褐色砂質ローム・褐灰色シルトを基調とし，５層に分かれほぼ水平堆積になっているが，上層から下層まで地山の灰黄色シルト等が混じる土で，堆積の時期差はあまりないものと考えられる。

出土遺物は中世土師器小片多数，須恵器杯１点，粘土塊多数である。

514号土坑（ＳＫ514，第71図，図版26）

Ｃ４地区東側に位置し，ＳＥ503・ＳＥ504の南に隣接し，ＳＢ19の範囲内にある。平面形は楕円形で，長径1.12m，短径86cmで，深さ22cmである。埋土は地山の灰黄色シルト混じりの黒褐色シルト，褐灰色シルトを基調とし，上下２層に分かれる。出土遺物はない。

536号土坑（ＳＫ536，第71図）

Ｃ４地区中央にあり，付近に遺構は少ない。平面形は不整形で，規模は83cm×27cm，深さ25cmである。埋土は地山の灰黄色シルト混じりの黒褐色シルトである。

出土遺物は土師器小片１点，須恵器杯蓋１点，珠洲甕１点である。

540号土坑（ＳＫ540，第71図，図版26）

Ｃ４地区中央にあり，付近に遺構は少ない。平面形は円形で，直径37cm，深さ26cmである。埋土は地山の灰黄色シルト混じりの黒褐色シルトである。

出土遺物は中世土師器の破片１点（*409*）で，埋土の中位から出土した。

562号土坑（ＳＫ562，第71図）

Ｃ４地区東側に位置し，ＳＥ504の南に隣接する。平面形は不整形で，規模は35cm×27cmで，深さは12cmである。柱穴状の小穴である。埋土は地山の灰黄色シルト混じりの褐灰色シルトである。

出土遺物は土師器の小片が多く，他に割れた土錘１点（*410*）がある。

578号土坑（ＳＫ578，第71図，図版26）

Ｃ４地区中央に位置し，ＳＢ18の東側に隣接する。平面形は円形で，直径1.28m，深さ70cmである。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の灰黄色シルト混じりの黒褐色シルト・暗灰黄色シルトである。出土遺物は土師器の小片が多く，他に須恵器杯片１点，珠洲甕片１点がある。

607号土坑（ＳＫ607，第71図，図版26）

Ｃ４地区中央に位置し，ＳＢ18の東側に隣接する。平面形は円形で，直径24cm，深さ27cmである。柱穴状の小穴である。埋土は地山の灰黄色シルト混じりの黒褐色シルトである。底面でほぼ完形の中世土師器皿（*411*）が仰向けでやや斜めになった状態で出土した。

645号土坑（ＳＫ645，第71図，図版26）

Ｃ４地区中央に位置し，ＳＢ16・ＳＢ18に隣接する。平面形は楕円形で，長径1.57m，短径1.35m，深さ58cmである。埋土は地山の灰黄色シルト混じりの褐灰色シルトである。

出土遺物は土師器小片２点，須恵器甕２点，焼けた自然礫１点である。

673号土坑（ＳＫ673，第72図）

Ｃ４地区中央東よりに位置し，ＳＥ603の南に隣接する。平面形は楕円形で，長径58cm，短径50cm，深さ30cmである。埋土は地山の灰黄色シルト混じりの黒褐色シルト・褐灰色シルトである。

出土遺物は中世土師器皿片が多く，他に珠洲壺１点，粘土塊１点がある。

727号土坑（ＳＫ727，第72図）

Ｃ４地区中央東よりに位置し，ＳＢ18の南に隣接する。平面形は円形で，直径27cm，深さは22cmである。柱穴状の小規模な土坑である。埋土は地山の灰黄色シルト・にぶい黄褐色シルト混じりの黒色シルトである。

出土遺物は中世土師器皿（*412*）の底部片である。

743号土坑（ＳＫ743，第19・21図，図版27）

Ｃ４地区南東部に位置する。平面形は不整形で，深さは12cmであり，調査区外に延びるため全容は不明である。上面から中世の柱穴状の土坑が掘り込まれており，これらより古い。ＳＤ843との切り合いは明確でなく一連の遺構の可能性もある。

出土遺物は土師器（*414*），須恵器（*413*），珠洲（*415*），釘？（*26*）である。

836号土坑（ＳＫ836，第21図，図版12）

Ｃ４地区南東部に位置する。平面形は楕円形で，規模は95cm×65cmで，深さは19cmである。埋土は灰黄褐色シルト質ロームである。古代の溝ＳＤ744を切る。出土遺物はない。

844号土坑（ＳＫ844，第19・21図）

Ｃ４地区南東部に位置に位置する。平面形は隅丸方形で，規模は89cm×51cmで，深さは17cmである。埋土は地山の灰黄色シルト混じりの黒褐色シルトである。切り合いではＳＤ843より古い。出土遺物はない。

845号土坑（ＳＫ845，第72図）

Ｃ４地区南西部に位置し，ＳＢ14・ＳＢ15の範囲内にあるので，建物に伴う遺構の可能性もあるが，浅い土坑で性格は不明である。平面形は隅丸方形で，長軸1.47m，短軸1.32m，深さ12cmである。埋土は地山の灰黄色シルト混じりの黒褐色シルトである。

出土遺物は珠洲甕（*416*）の破片１点で，その年代から13世紀前半～中頃の遺構と推定する。

891号土坑（ＳＫ891，第72図）

Ｃ４地区西側に位置し，ＳＤ914の北に隣接する。平面形は円形で，直径27㎝，深さ14㎝である。柱穴状の小穴である。埋土は地山の灰黄色シルト混じりの黒褐色シルトである。

出土遺物は珠洲甕（*417*）の口縁部片１点である。遺物から，13世紀前半の遺構と推定する。

896号土坑（ＳＫ896，第72図，図版27）

Ｃ４地区西側に位置し，ＳＤ401に隣接する。平面形は方形で，長軸3.30m，短軸2.10mで，深さは74㎝である。断面形は逆台形で，東側は一段高くなる。埋土はレンズ状に堆積し，上層は黒褐色ローム・黄灰色シルト質ロームで地山の灰黄色シルトの混合率が下層に比べて高く，ＳＫ896が機能しなくなった後に埋め戻した土と推測される。下層は灰オリーブ砂質ローム・黒褐色砂質ローム・灰オリーブ砂質ロームで，上層より砂っぽい堆積層となっている。長軸がＳＤ401と平行であることから道路ＳＦ１及び側溝に関連する施設の可能性も考えられ，道路と同時期の遺構と推測されるが，性格は不明である。切り合いでは古代の溝ＳＤ744を切る。

出土遺物は珠洲擂鉢数点（*418*）・壺１点である。

903号土坑（ＳＫ903，第72図）

Ｃ４地区西側に位置する。平面形は円形で，直径24㎝，深さ11㎝である。柱穴状の浅い小規模な土坑である。埋土は地山の灰黄色シルトが混じる褐灰色シルトである。

出土遺物は土師器の小片１点，須恵器猿面硯（*419*）の破片１点である。猿面硯は平安時代後期のものであるが，Ｃ地区では当該期の遺構が他には検出されていないため，中世の遺構と考えておく。

1003号土坑（ＳＫ1003，第72図）

Ｃ５地区西側に位置する。ＳＤ1007と接するが新旧は不明である。平面形は楕円形で，長径1.00m，短径86㎝で，深さ76㎝である。埋土は灰オリーブ色シルト質ローム・黒色ローム・オリーブ黒色シルトを基調とし，ほぼ水平堆積であるが，上層には焼土と多量の炭化物が混じる。

出土遺物は土師器小片と粘土塊が多く，他に須恵器甕１点，中世土師器皿１点（*421*），焼けた自然礫１点である。土師器の年代から12世紀後半頃の遺構と推定する。

1004号土坑（ＳＫ1004，第55・56図）

Ｃ５地区西端に位置する。ＳＤ1007に隣接し，平面形は不整形で浅く，ＳＤ1007の一部である可能性もある。長さ1.95m，幅98㎝で，深さは12㎝である。埋土は灰黄色シルト混じりの黒褐色ロームである。

出土遺物は土師器小片１点，須恵器甕１点である。

1108号土坑（ＳＫ1108，第73図，図版25）

Ｃ６地区南側に位置し，ＳＥ1105の南に隣接する。平面形は楕円形で，長径80㎝，短径70㎝，深さ46㎝である。埋土は黒褐色シルト質ローム・黒褐色シルトである。

出土遺物は刀子１点（*18*）である。

1208号土坑（ＳＫ1208，第73図，図版17）

Ｃ７地区西側に位置し，ＳＢ21～23の範囲内にある。平面形は不整形で，溝状の浅い落ち込みである。幅は1.32m，深さは20㎝である。埋土は暗褐色シルト・にぶい黄褐色粘土を基調とする。建物に関連する土坑の可能性もあるが性格は不明である。

出土遺物は中世土師器・珠洲の小破片と銭１点（*5*）である。

1213号土坑（ＳＫ1213，第73図）

Ｃ７地区の西側に位置し，ＳＢ23の北東に隣接する。平面形は不整形で，長軸1.54ｍ，短軸94㎝，深さは42㎝である。底面は平坦でなく，柱穴状に深くなる部分もある。埋土は地山のにぶい黄橙色粘土が混じる灰黄褐色粘土質ロームの単層である。切り合いではＳＫ1214より古い。出土遺物はない。

1214号土坑（ＳＫ1214，第73図）

Ｃ７地区の西側に位置し，ＳＢ23の北東に隣接する。平面形は楕円形で，規模は1.02ｍ×78㎝で，深さは34㎝である。埋土はにぶい黄褐色シルト質ローム・黄褐色粘土質ローム・にぶい黄橙色粘土・灰黄褐色粘土を基調とする。切り合いではＳＫ1213より新しい。出土遺物はない。

1215号土坑（ＳＫ1215，第73図）

Ｃ７地区の西側に位置し，ＳＢ23の範囲内にある。平面形は円形で，直径72㎝，深さ25㎝である。埋土は地山のにぶい黄橙色粘土が混じる暗褐色シルトの単層である。

出土遺物は中世土師器の小破片である。

1216号土坑（ＳＫ1216，第73図）

Ｃ７地区の西側に位置し，ＳＢ23の範囲内にある。平面形は楕円形で，規模は80㎝×67㎝で，深さは６㎝である。埋土は地山のにぶい黄橙色粘土が混じる暗褐色シルトの単層で浅い。

出土遺物は中世土師器の小破片である。

1217号土坑（ＳＫ1217，第73図，図版17）

Ｃ７地区の西側に位置し，ＳＢ21～23の範囲内にある。平面形は不整形で，長軸1.19ｍ，短軸95㎝，深さ19㎝である。埋土は地山のにぶい黄橙色粘土が混じる灰黄褐色粘土質ロームの単層である。切り合いではＳＢ21のＳＰ1261，ＳＢ22のＳＰ1262より古く，ＳＤ697より新しい。出土遺物はない。

1218号土坑（ＳＫ1218，第73図）

Ｃ７地区の西側に位置し，ＳＢ23の範囲内にある。平面形は隅丸で，長軸1.10ｍ，短軸81㎝，深さは12㎝である。埋土は地山のにぶい黄橙色粘土が混じる暗褐色シルトの単層で浅い。出土遺物はない。

1219号土坑（ＳＫ1219，第74図，図版17）

Ｃ７地区の西側に位置し，ＳＢ21～23の範囲内にある。平面形は不整形で，長軸1.26ｍ，短軸1.07ｍ，深さは13㎝である。埋土は黄色粘土が混じる灰黄褐色粘土質ロームの単層で，浅い。ＳＫ1220と接するが切り合いは不明である。

出土遺物は中世土師器皿１点，珠洲小片である。

1220号土坑（ＳＫ1220，第74図，図版17）

Ｃ７地区の西側に位置し，ＳＢ21～23の範囲内にある。平面形は不整形で，長軸1.43ｍ，短軸96㎝，深さ13㎝である。埋土は黄色粘土が混じる灰黄褐色粘土質ロームの単層で，浅い。ＳＫ1219と接するが切り合いは不明である。出土遺物はない。

1223号土坑（ＳＫ1223，第74図，図版17）

Ｃ７地区の西側に位置し，ＳＢ21～23の北側にある。平面形は隅丸方形で，長軸1.27ｍ，短軸80㎝，深さ67㎝である。底面は平坦ではなく一部が深くなっている。出土遺物はない。

1226号土坑（ＳＫ1226，第74図，図版17）

Ｃ７地区西側に位置する。ＳＢ23の東側に隣接し，建物に関連する遺構の可能性もあるが性格は不明である。平面形は方形で，長軸2.27ｍ，短軸1.59ｍ，深さ18㎝である。埋土は地山のにぶい黄褐色粘土が混じる暗褐色粘土質ロームの単層で，浅い。切り合いでは古代の溝ＳＤ697を切る。出土遺物はない。

1230号土坑（ＳＫ1230，第74図，図版17）

Ｃ７地区西側に位置し，ＳＢ23の範囲内にある。平面形は方形で，長軸2.39m，短軸1.35m，深さ30cmである。埋土は地山のにぶい黄橙色粘土が混じる暗褐色シルトの単層である。竪穴状の土坑で，建物の南東隅にあり，土間の可能性もある。切り合いではＳＫ1231を切る。

出土遺物は土師器・中世土師器・珠洲の小破片である。

1231号土坑（ＳＫ1231，第74図，図版17）

Ｃ７地区西側に位置し，ＳＢ23の範囲内にある。建物に関連する遺構の可能性もあるが性格は不明である。平面形は隅丸方形で，長軸96cm，深さ16cmである。埋土は暗褐色シルト・黒褐色シルト・にぶい黄色粘土が水平堆積する。切り合いではＳＫ1230に切られる。出土遺物はない。

1241号土坑（ＳＫ1241，第74図）

Ｃ７地区西側に位置し，ＳＢ23の範囲内にある。平面形は楕円形で，長軸57cm，短軸42cm，深さ20cmである。埋土は地山のにぶい黄橙色粘土が混じる暗褐色シルトの単層である。

出土遺物は中世土師器皿２点（*422*），珠洲の小片１点，漆器片１点である。

1266号土坑（ＳＫ1266，第74図）

Ｃ７地区西側に位置し，ＳＢ23の範囲内にある。平面形は楕円形で，長軸83cm，短軸55cm，深さ16cmである。埋土は地山のにぶい黄橙色粘土が混じる暗褐色シルトの単層である。切り合いでは古代の溝ＳＤ697を切る。一部撹乱に切られている。出土遺物はない。

1277号土坑（ＳＫ1277，第75図，図版27）

Ｃ７地区西側に位置し，ＳＢ23の範囲内にある。ＳＫ1278に隣接する。平面形は不整形で，長軸1.48m，短軸1.44m，深さ24cmである。埋土は地山のにぶい黄橙色粘土等が混じる暗褐色シルト・黒褐色シルト質ロームである。出土遺物はない。

1278号土坑（ＳＫ1278，第75図）

Ｃ７地区西側に位置し，ＳＢ23の範囲内にある。ＳＫ1277に隣接する。平面形は不整形で，長軸1.14m，短軸61cm，深さ18cmである。埋土は地山のにぶい黄橙色シルト等が混じる暗褐色シルト・暗褐色シルトが混じる黒褐色シルトの水平体積で撹乱に一部切られている。

出土遺物は中世土師器皿１点，珠洲小片１点，鋏（*22*）の他に金属製品の小破片が３点ある。

1294号土坑（ＳＫ1294，第75図）

Ｃ７地区西側に位置し，ＳＢ23の南側に隣接する。平面形は円形で，直径77cm，深さ22cmである。埋土は暗褐色シルト・暗灰黄色シルトの水平体積で，地山のにぶい黄橙色シルトが混じる。出土遺物はない。

1296号土坑（ＳＫ1296，第75図，図版27）

Ｃ７地区中央に位置し，ＳＢ25の南に隣接する。平面形は円形で，直径83cm，深さは26cmである。埋土は上層に地山のにぶい黄橙色シルトが混じる暗褐色シルト，下層に黒褐色シルトが堆積し，その間から珠洲甕（*420*）が割れた状態で出土した。完形ではないが，口縁部残存率は40％あり，体部下半までの破片がある。切り合いではＳＤ1504より新しく，ＳＢ25と同時期の遺構である可能性がある。出土遺物の年代からは13世紀前半以降と推定される。

出土遺物は珠洲甕（*420*）の他には土師器甕片と中世土師器皿片が多く，須恵器甕片１点，杯片１点，釘（*28*）がある。やや大型の土坑で，遺物量も多いことから廃棄土坑と考えられる。

1300号土坑（ＳＫ1300，第75図，図版27）

Ｃ７地区南西部に位置する。平面形は方形に近い不整形で，長軸4.01m，短軸3.36m，深さは42cm

である。埋土は灰白色砂・灰白色シルトが混じるオリーブ黒色シルトの単層である。ＳＢ８に隣接し，底面は平坦で，建物に伴う竪穴状遺構の可能性があるが性格は不明である。

出土遺物は土師器椀２点（*425・426*），須恵器杯数点（*423*），珠洲壺１点（*424*），土錘１点（*427*）である。出土遺物の年代から，12世紀後半の遺構と推定する。

1301号土坑（ＳＫ1301，第76図）

Ｃ７地区南西部に位置する。平面形は不整形で，長軸3.28m，短軸1.41m，深さ58cmである。底面は平坦でなく，一部深くなる部分もある。埋土はオリーブ黒色シルトを基調とする。切り合いではＳＢ８より古い。

出土遺物は中世土師器の小片が多く，他に珠洲甕片１点，加工板（*75*）がある。遺構の年代は，中世土師器皿に柱状高台部分の破片があることから，12世紀中頃と推定する。

1302号土坑（ＳＫ1302，第76図）

Ｃ７地区南西部に位置し，Ｃ７地区を分断する「下八ヶ用水」の堤防下にのびている。平面形は不整形で，長軸3.11m，短軸1.38m，深さ60cmである。埋土は黒褐色シルト質ローム・オリーブ黒色粘土質ローム・オリーブ黒色シルトである。出土遺物は漆器椀（*11*）である。

1303号土坑（ＳＫ1303，第76図）

Ｃ７地区南西部に位置し，ＳＫ1300の東側に隣接する。平面形は楕円形で，長径1.08m，短径91cm，深さ34cmである。断面は逆台形を呈する。埋土はオリーブ黒色シルト質ローム・オリーブ黒色シルトを基調とする。

出土遺物は中世土師器皿の小片で，柱状高台部分である。遺物から12世紀中頃の遺構と推定する。

1304号土坑（ＳＫ1304，第76図）

Ｃ７地区南西部に位置し，ＳＫ1302の東側に隣接する。平面形は楕円形で，長径1.03m，短径63cm，深さ20cmである。埋土はオリーブ黒色シルト・灰白色砂である。出土遺物は土師器小片である。

1305号土坑（ＳＫ1305，第76図）

Ｃ７地区南西部に位置し，ＳＫ1300の東側に隣接する。平面形は不整形で，長軸2.12m，短軸1.46m，深さは38cmである。底面は平坦ではなく一部が深くなる。埋土はオリーブ黒色シルト質ローム・オリーブ黒色シルトである。

出土遺物は中世土師器皿の小片が多く，他に加工板２点（*73・74*）がある。中世土師器皿はロクロ成形の皿底部片，有台の底部片等がある。

1313号土坑（ＳＫ1313，第76図）

Ｃ７地区南西部に位置し，ＳＢ８の南側に隣接する。平面形は円形で，直径1.02m，深さ29cmである。埋土はオリーブ黒色シルトの単層である。出土遺物は土師器の小片が１点あるのみである。

1326号土坑（ＳＫ1326，第76図，図版25・27）

Ｃ７地区南西部に位置し，ＳＫ1300の南東に隣接する。平面形は円形で，直径63cm，深さは14cmである。埋土は灰白色砂混じりのオリーブ黒色シルトの単層である。

出土遺物は土師器小片２点と加工板であり，板は折り重なるように出土した。

1371号土坑（ＳＫ1371，第77図，図版27）

Ｃ７地区中央やや東よりに位置し，ＳＢ26の西側に隣接する。平面形は方形で，長軸1.81m，短軸1.36m，深さ25cmである。埋土は地山の黄橙色粘土がブロック状に混じる暗褐色シルトの単層である。浅い竪穴状の土坑で，長軸方向がＳＢ26の主軸方向に近いことから，ＳＢ26に関連する遺構の可能性

も考えられる。

出土遺物は中世土師器（*428・429*）・珠洲・銭（*1～3・8～11・14・15*）である。珠洲は甕片が多く，中世土師器皿片も多く出土した。銭は図示していないものも含めて合計10枚あり，これらは一列に重なった状態で出土したことから，紐等は残存していないが緡銭または紙や布に包まれた状態で埋められたとみられる。銭は地鎮等の祭祀に使用される例が多く，隣接するＳＢ26の柱穴でも完形の中世土師器２点が埋納されていることから，ＳＫ1371も祭祀関連の土坑の可能性が考えられる。

1373号土坑（ＳＫ1373，第77図）

Ｃ７地区中央やや東よりに位置し，ＳＢ26の範囲内にある。ＳＫ1374に隣接する。平面形は円形で，直径77cm，深さ24cmである。埋土は地山のにぶい黄色シルトが混じる暗褐色シルトの単層である。出土遺物はない。

1374号土坑（ＳＫ1374，第77図）

Ｃ７地区中央やや東よりに位置し，ＳＢ26の範囲内にある。ＳＫ1373に隣接する。平面形は円形で，直径56cm，深さ９cmである。埋土は地山のにぶい黄橙色粘土が混じる暗褐色シルトの単層である。出土遺物はない。

1444号土坑（ＳＫ1444，第77図）

Ｃ７地区中央やや東よりに位置し，ＳＢ26の西側に隣接する。平面形は円形で，直径1.08mで，深さは40cmである。底面は平坦でなく，中央が深くなる。埋土は地山のにぶい黄橙色粘土が混じる暗褐色粘土質ロームの単層である。

遺物は中世土師器皿の小破片が多数出土しており，非ロクロ成形のものが含まれる。

1445号土坑（ＳＫ1445，第77図，図版21・27）

Ｃ７地区中央やや東よりに位置し，ＳＤ1485・ＳＤ1504の分岐点に位置する。平面形は方形で，規模は2.95m×1.51m，深さは60cmである。埋土は暗褐色粘土質ロームを基調とし，地山のにぶい黄褐色粘土等が混じる。また層間ににぶい黄褐色砂質ローム層が斜めに入り込んでいる。ＳＤ1485・ＳＤ1504とは埋土の切り合いがなく同時期に埋められた可能性が高い。ＳＫ1445がＳＤ1485に伴うものとすれば貯水槽等として設けられたものであろうか。また，ＳＤ1485・ＳＤ1504に囲まれた範囲内には中世土師器や銭等を埋納した柱穴・土坑があり，ＳＫ1445もそれらに関係するものかもしれない。出土遺物はない。

1477号土坑（ＳＫ1477，第77図，図版27）

Ｃ７地区中央やや東よりに位置し，ＳＢ26の範囲内にある。ＳＫ1478に隣接する。平面形は楕円形で，長径84cm，短径68cm，深さ19cmである。埋土は地山のにぶい黄橙色粘土が混じる暗褐色シルトの単層である。出土遺物は中世土師器の小片１点，珠洲擂鉢１点（*431*）である。

1478号土坑（ＳＫ1478，第77図）

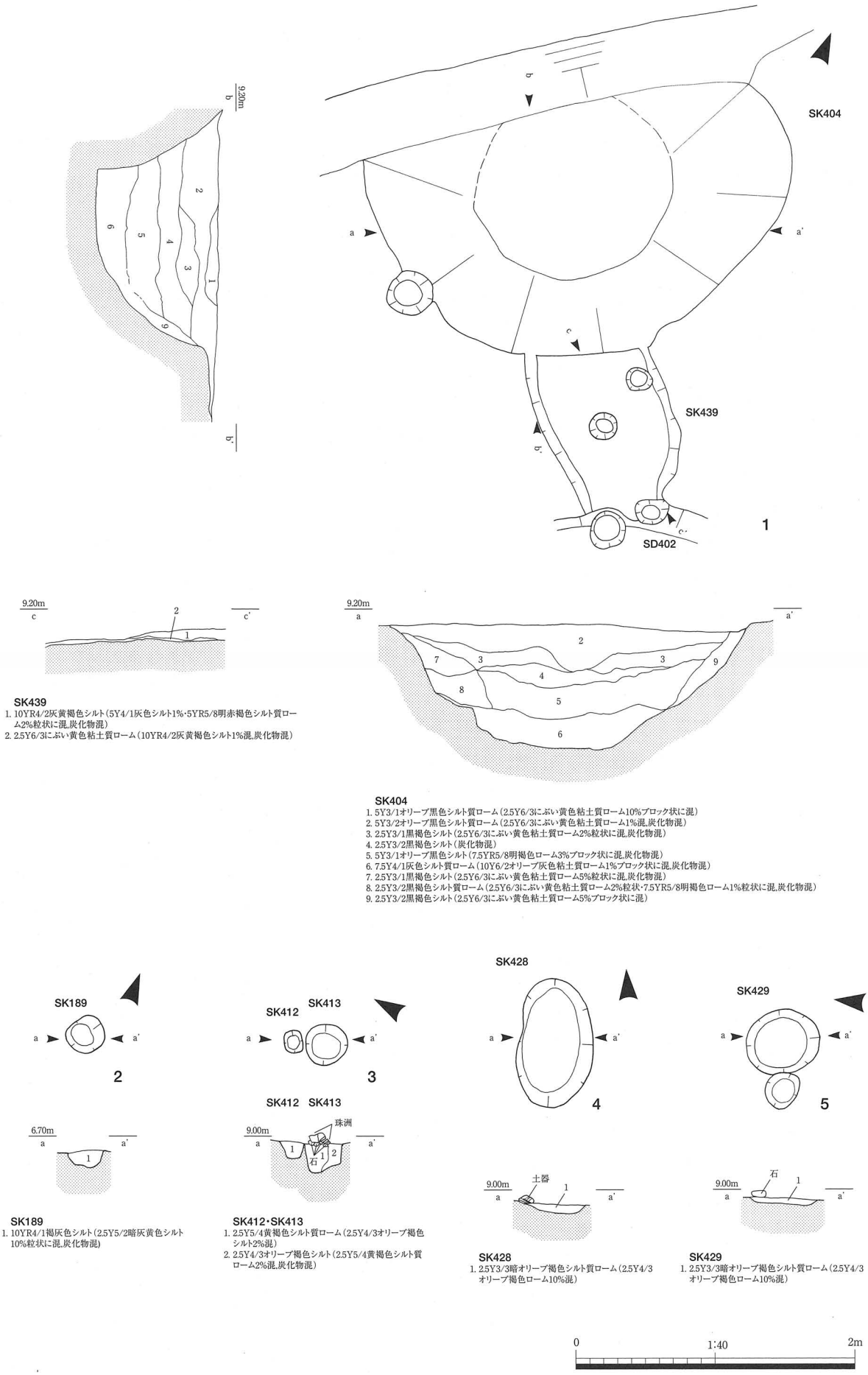
Ｃ７地区中央やや東よりに位置し，ＳＢ26の範囲内にある。ＳＫ1477に隣接する。平面形は円形で，直径75cm，深さ21cmである。埋土は地山のにぶい黄橙色粘土等が混じる暗褐色シルトである。

出土遺物は中世土師器の小片１点，珠洲甕と擂鉢の小片が各１点出土した。

1480号土坑（ＳＫ1480，第77図）

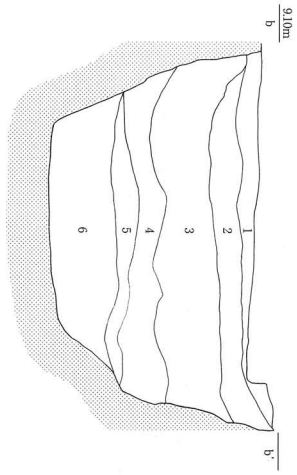
Ｃ７地区中央やや東よりに位置し，ＳＢ26の南側に隣接する。平面形は不整形で，長軸1.37m，短軸91cm，深さ24cmである。底面は平坦でなく凹凸がある。埋土は上層が地山のにぶい黄橙色粘土が混じる暗褐色シルト，下層が灰黄褐色粘土である。出土遺物はない。

（越前慎子）

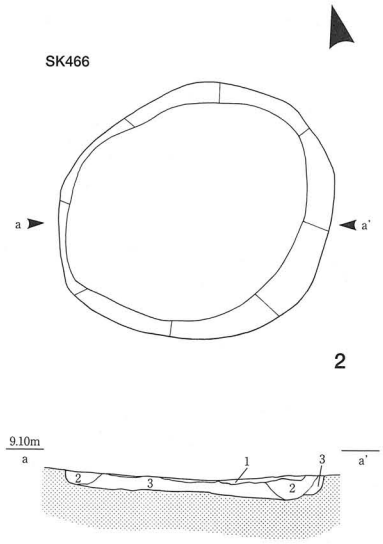


第69図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

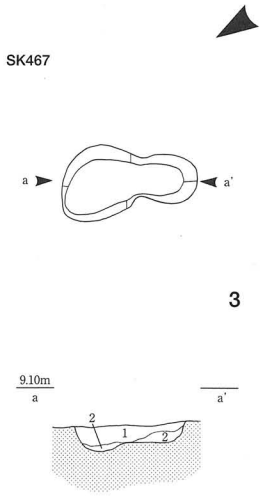
1. SK404・SK439　2. SK189　3. SK412・SK413　4. SK428　5. SK429



SK450
1. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム（2.5Y7/3浅黄色粘土質ローム1%粒状に混,炭化物混）
2. 2.5Y3/1黒褐色シルト（2.5Y7/3浅黄色粘土質ローム3%ブロック状に混,炭化物混）
3. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム（2.5Y7/3浅黄色粘土質ローム2%ブロック状に混,炭化物混）
4. 10YR3/1黒褐色シルト（2.5Y7/3浅黄色粘土質ローム1%ブロック状に混,炭化物混）
5. 10YR3/1黒褐色シルト（7.5YR5/8明褐色ローム5%混）
6. 7.5Y3/1オリーブ黒色粘土質ローム（2.5Y7/3浅黄色粘土質ローム1%ブロック状に混,炭化物混）



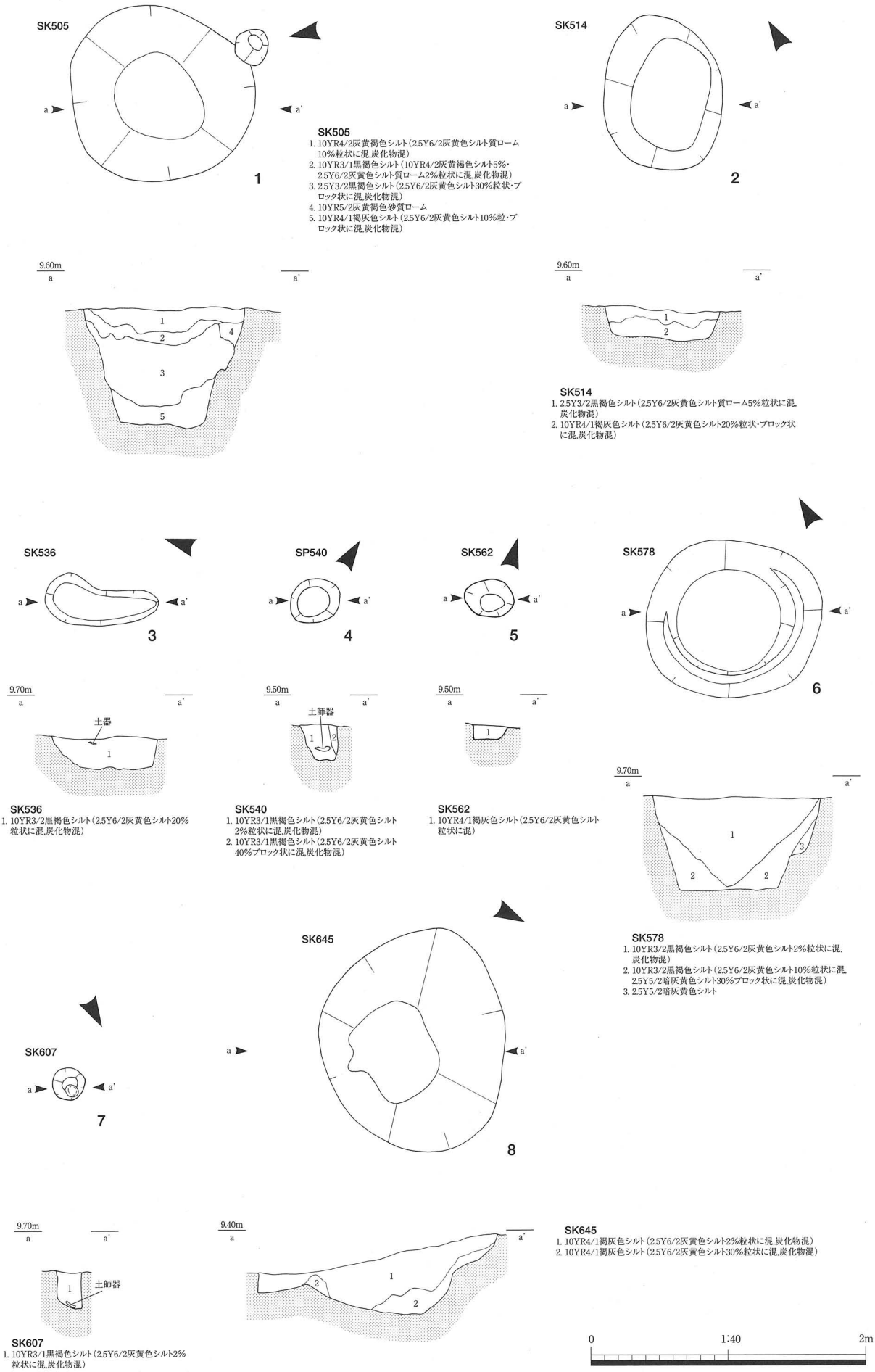
SK466
1. 10YR3/1黒褐色シルト（10YR5/6黄褐色粘土質ローム1%混,炭化物混）
2. 10YR3/2黒褐色シルト（10YR5/6黄褐色粘土質ローム5%ブロック状に混）
3. 10YR5/6黄褐色粘土質ローム（10YR5/1褐灰色シルト1%混）



SK467
1. 10YR5/6黄褐色粘土質ローム（10YR5/1褐灰色シルト2%ブロック状に混）
2. 10YR5/6黄褐色粘土質ローム（10YR5/1褐灰色シルト1%混）

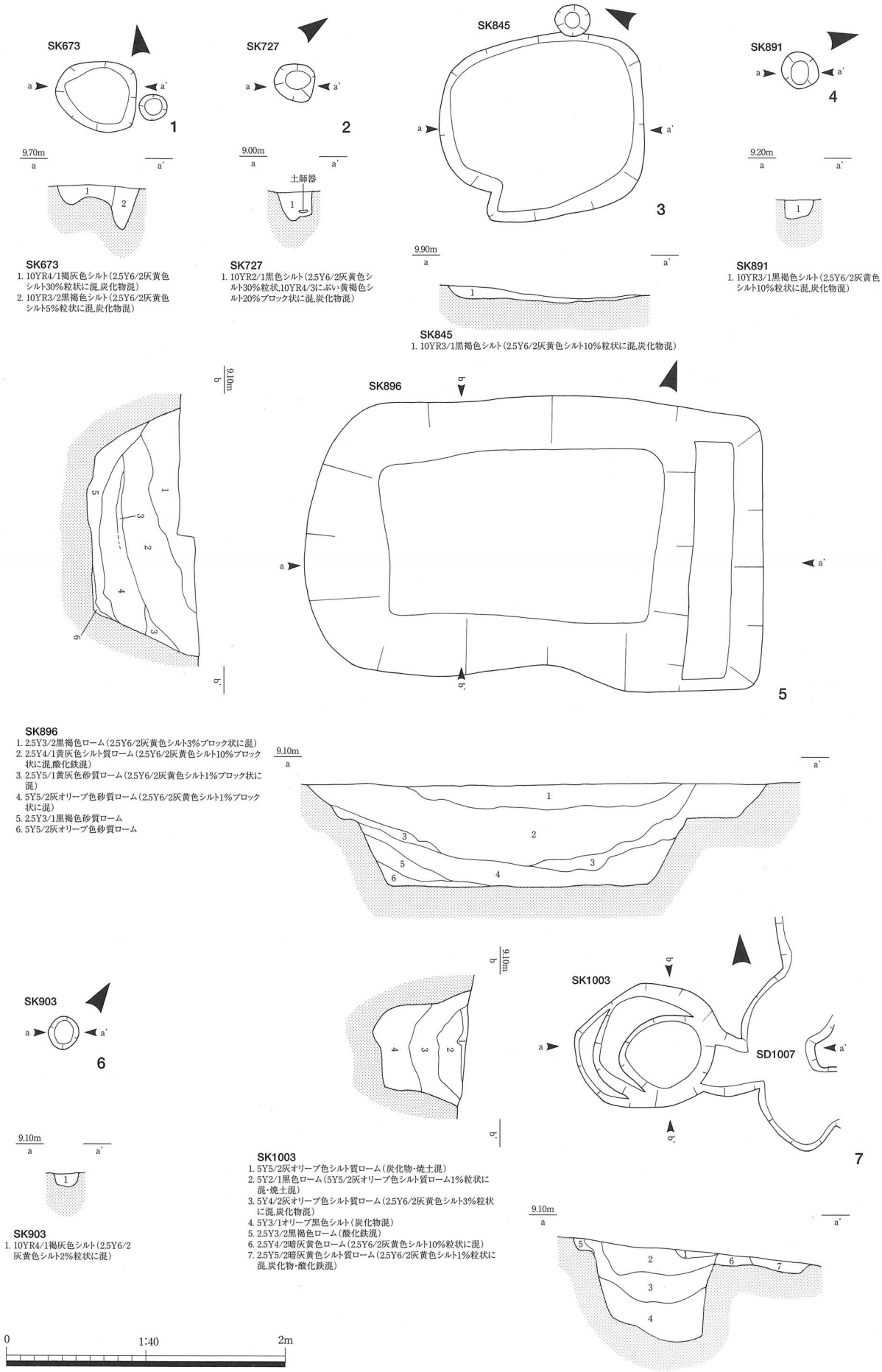
0　1:40　2m

第70図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図
1. SK450　2. SK466　3. SK467



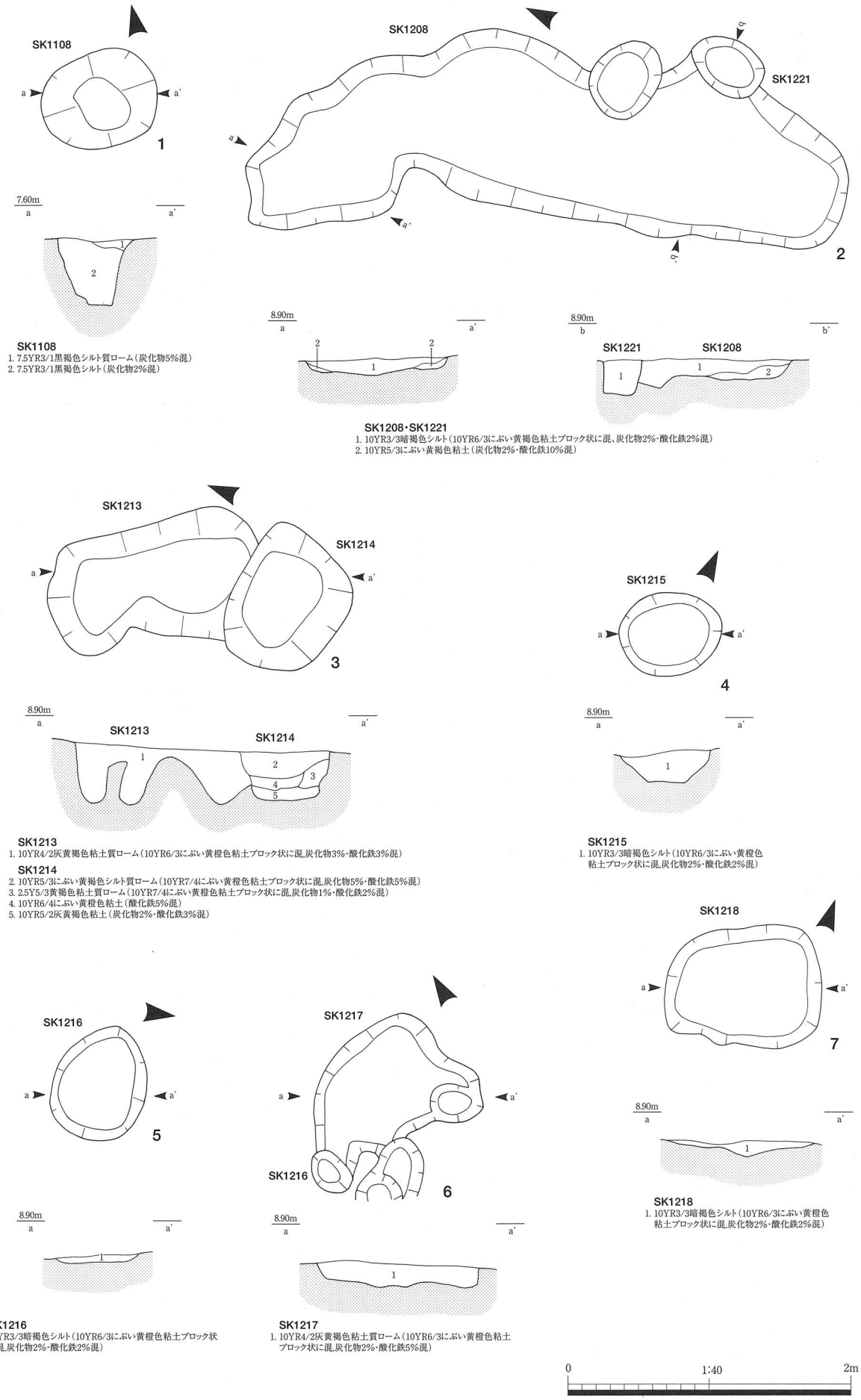
第71図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

1. SK505　2. SK514　3. SK536　4. SK540　5. SK562　6. SK578　7. SK607　8. SK645



第72図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

1. SK673　2. SK727　3. SK845　4. SK891　5. SK896　6. SK903　7. SK1003



SK1108
1. 7.5YR3/1黒褐色シルト質ローム（炭化物5%混）
2. 7.5YR3/1黒褐色シルト（炭化物2%混）

SK1208・SK1221
1. 10YR3/3暗褐色シルト（10YR6/3にぶい黄褐色粘土ブロック状に混、炭化物2%・酸化鉄2%混）
2. 10YR5/3にぶい黄褐色粘土（炭化物2%・酸化鉄10%混）

SK1213
1. 10YR4/2灰黄褐色粘土質ローム（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物3%・酸化鉄3%混）

SK1214
2. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト質ローム（10YR7/4にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物5%・酸化鉄5%混）
3. 2.5Y5/3黄褐色粘土質ローム（10YR7/4にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物1%・酸化鉄2%混）
4. 10YR6/4にぶい黄橙色粘土（酸化鉄5%混）
5. 10YR5/2灰黄褐色粘土（炭化物2%・酸化鉄3%混）

SK1215
1. 10YR3/3暗褐色シルト（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物2%・酸化鉄2%混）

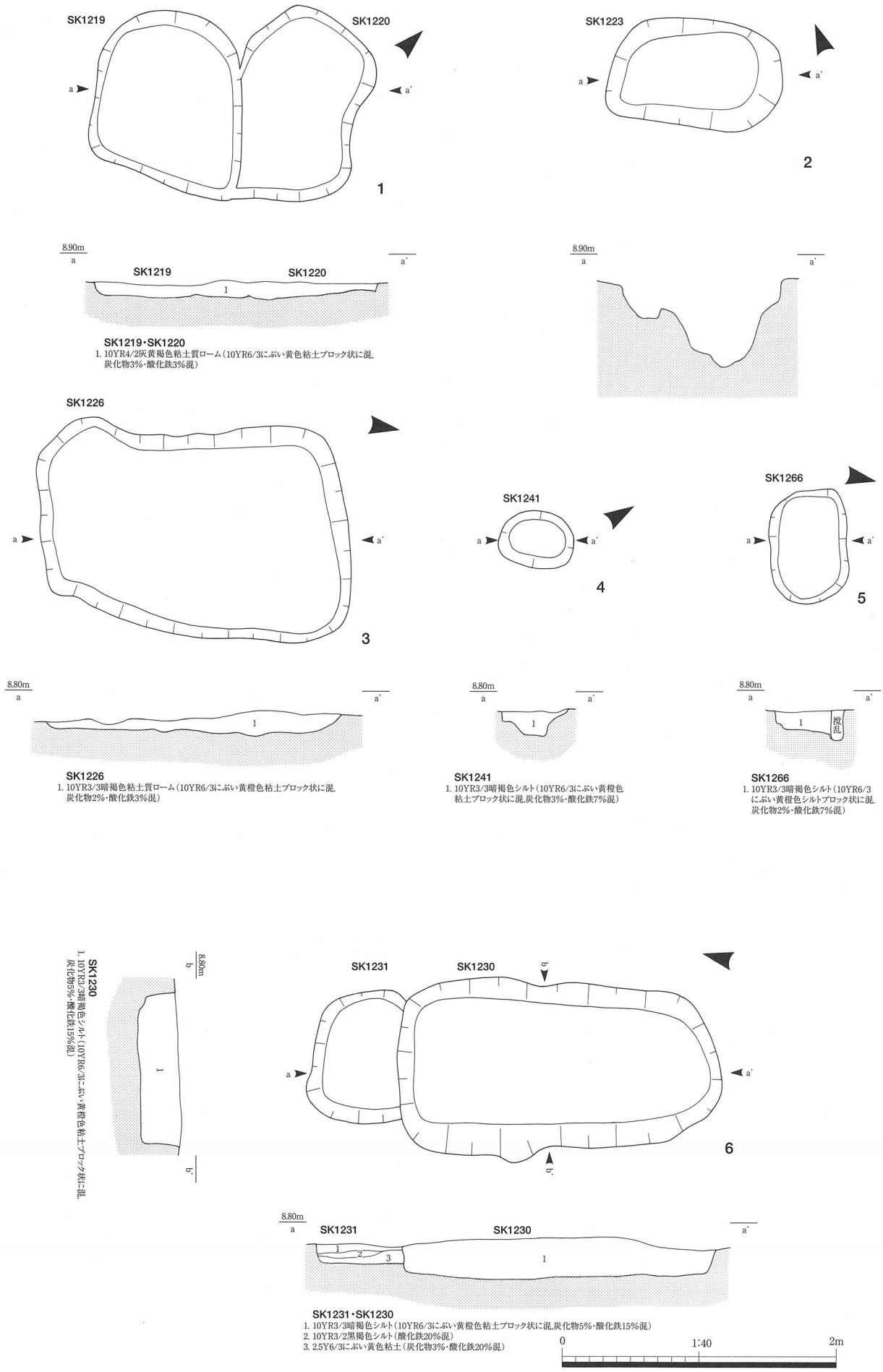
SK1218
1. 10YR3/3暗褐色シルト（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物2%・酸化鉄2%混）

SK1216
1. 10YR3/3暗褐色シルト（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物2%・酸化鉄2%混）

SK1217
1. 10YR4/2灰黄褐色粘土質ローム（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物2%・酸化鉄5%混）

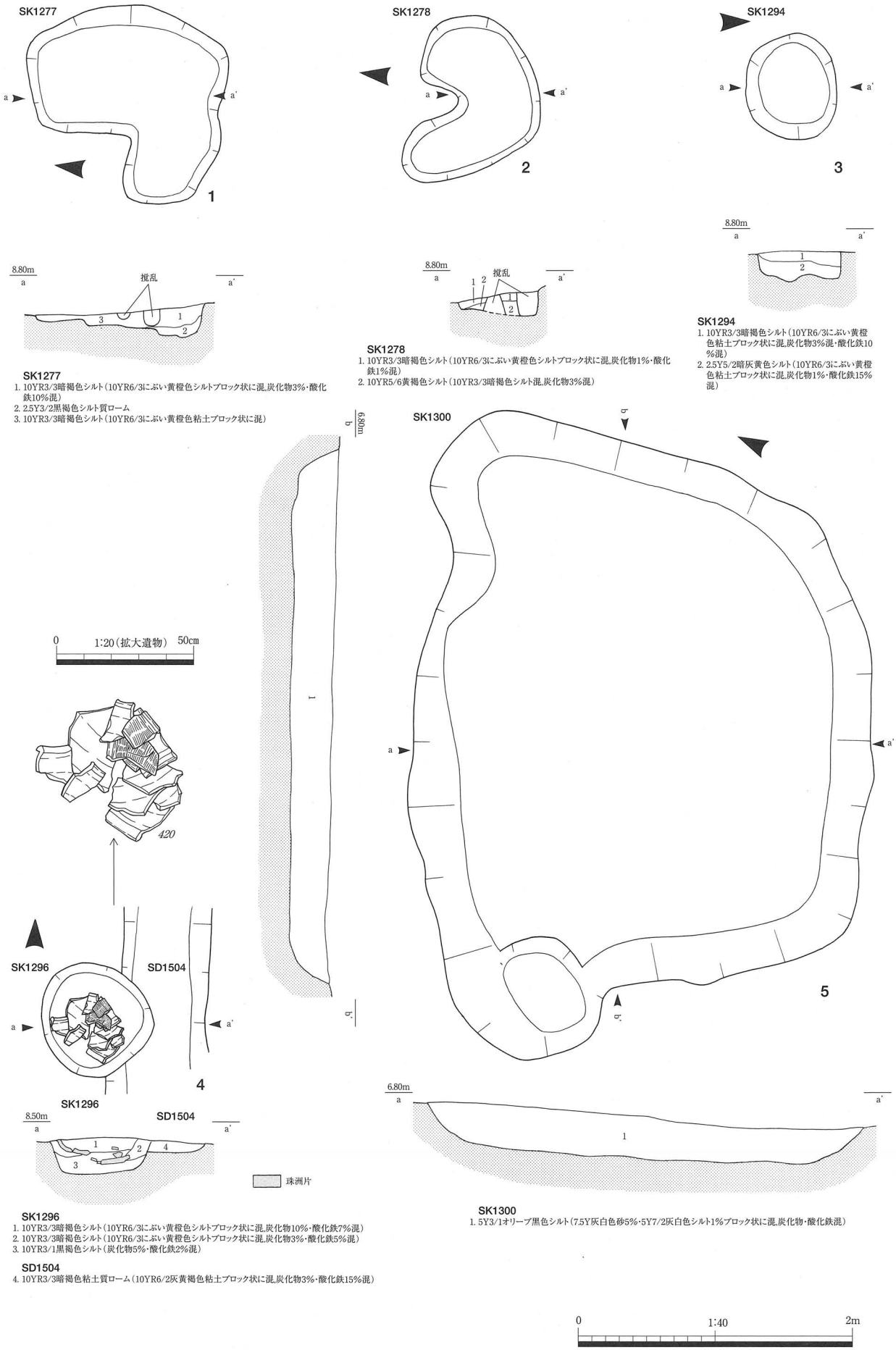
第73図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

1. SK1108　2. SK1208・SK1221　3. SK1213・SK1214　4. SK1215　5. SK1216　6. SK1217
7. SK1218



第74図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

1. SK1219・SK1220　2. SK1223　3. SK1226　4. SK1241　5. SK1266　6. SK1230・1231



SK1277
1. 10YR3/3暗褐色シルト（10YR6/3にぶい黄橙色シルトブロック状に混,炭化物3%・酸化鉄10%混）
2. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム
3. 10YR3/3暗褐色シルト（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混）

SK1278
1. 10YR3/3暗褐色シルト（10YR6/3にぶい黄橙色シルトブロック状に混,炭化物1%・酸化鉄1%混）
2. 10YR5/6黄褐色シルト（10YR3/3暗褐色シルト混,炭化物3%混）

SK1294
1. 10YR3/3暗褐色シルト（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物3%混・酸化鉄10%混）
2. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト（10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック状に混,炭化物1%・酸化鉄15%混）

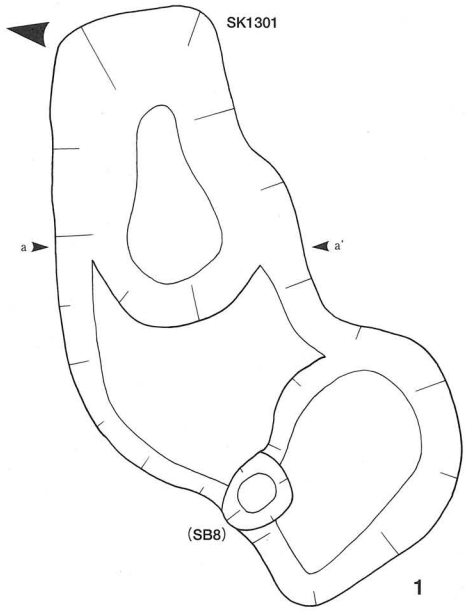
SK1296
1. 10YR3/3暗褐色シルト（10YR6/3にぶい黄橙色シルトブロック状に混,炭化物10%・酸化鉄7%混）
2. 10YR3/3暗褐色シルト（10YR6/3にぶい黄橙色シルトブロック状に混,炭化物3%・酸化鉄5%混）
3. 10YR3/1黒褐色シルト（炭化物5%・酸化鉄2%混）

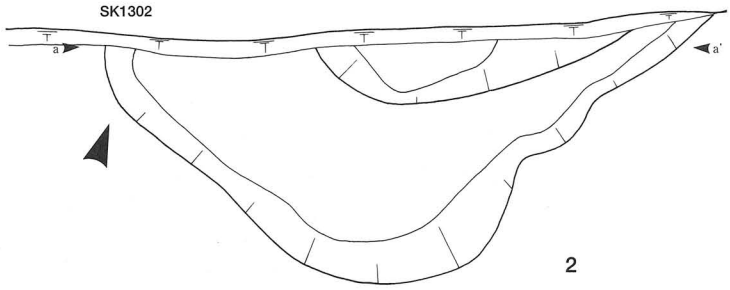
SD1504
4. 10YR3/3暗褐色粘土質ローム（10YR6/2灰黄褐色粘土ブロック状に混,炭化物3%・酸化鉄15%混）

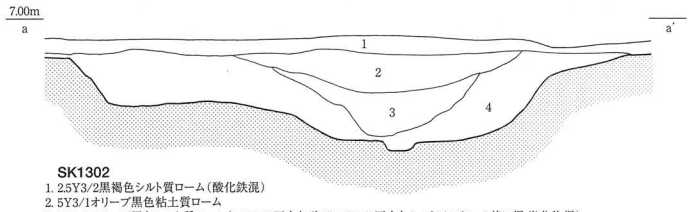
SK1300
1. 5Y3/1オリーブ黒色シルト（7.5Y灰白色砂5%・5Y7/2灰白色シルト1%ブロック状に混,炭化物・酸化鉄混）

第75図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

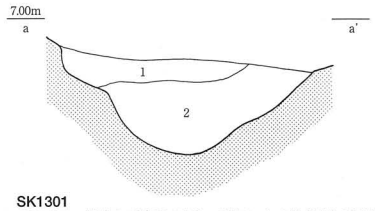
1. SK1277　2. SK1278　3. SK1294　4. SD1504・SK1296　5. SK1300



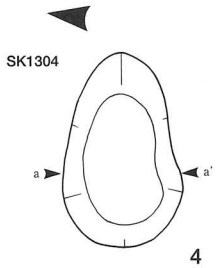


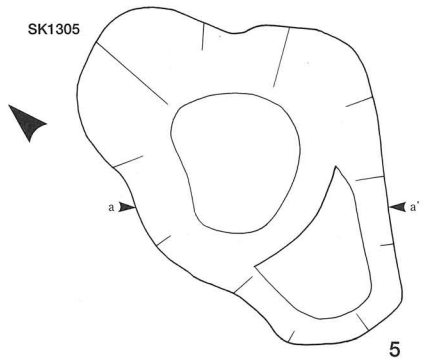


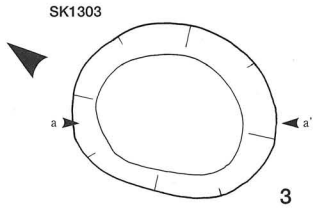
SK1302
1. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム（酸化鉄混）
2. 5Y3/1オリーブ黒色粘土質ローム
3. 5Y3/1オリーブ黒色シルト質ローム（7.5Y7/2灰白色砂1%・5Y7/2灰白色シルト2%ブロック状に混,炭化物混）
4. 5Y3/2オリーブ黒色シルト（5Y7/2灰白色砂5%混,炭化物混）

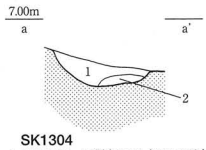


SK1301
1. 5Y3/1オリーブ黒色シルト（5Y3/2オリーブ黒色シルト3%混,炭化物・酸化鉄混）
2. 5Y3/2オリーブ黒色シルト（炭化物混）

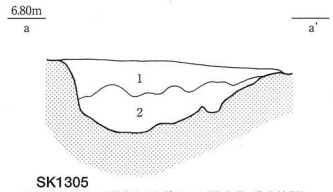




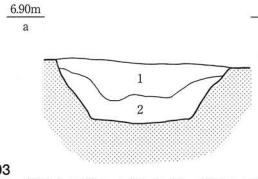




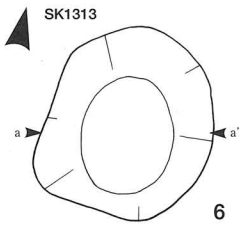
SK1304
1. 5Y3/1オリーブ黒色シルト（5Y7/2灰白色砂3%混,炭化物混）
2. 5Y7/2灰白色砂（5Y3/1オリーブ黒色シルト1%ブロック状に混）

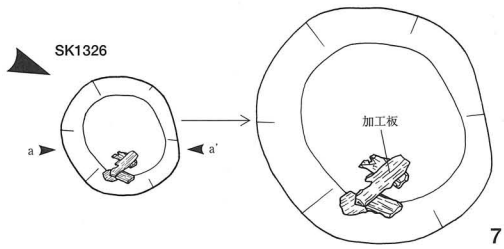


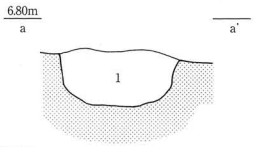
SK1305
1. 5Y3/2オリーブ黒色シルト質ローム（炭化物・酸化鉄混）
2. 5Y3/1オリーブ黒色シルト（炭化物混）



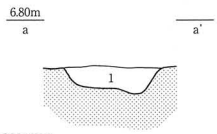
SK1303
1. 5Y3/2オリーブ黒色シルト質ローム（5Y3/1オリーブ黒色シルト1%・5Y7/2灰白色砂2%混,炭化物・酸化鉄混）
2. 5Y3/1オリーブ黒色シルト（5Y7/2灰白色砂1%混,炭化物混）







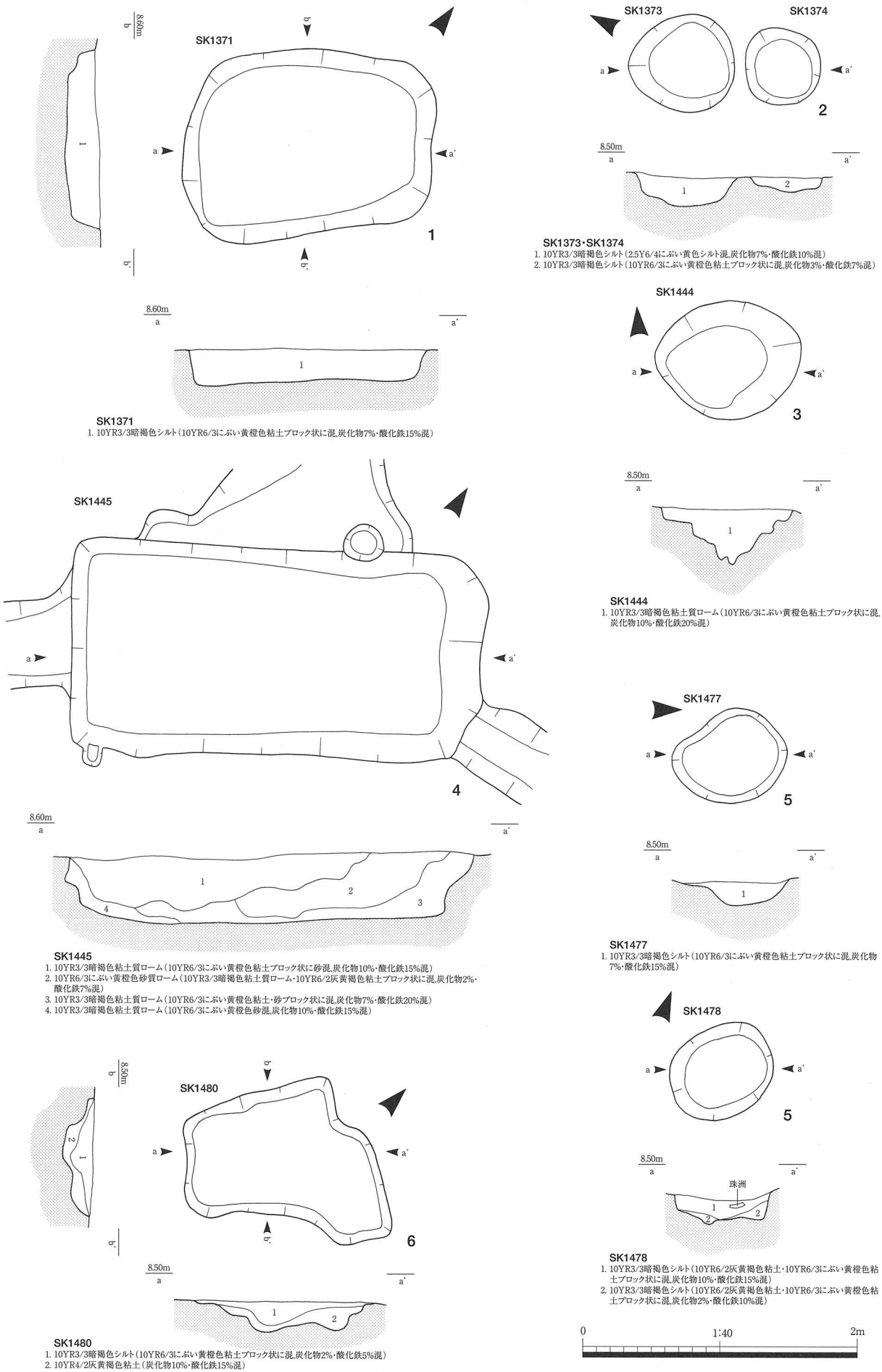
SK1313
1. 5Y3/1オリーブ黒色シルト（5Y7/2灰白色砂3%混,炭化物混）



SK1326
1. 5Y3/1オリーブ黒色シルト（5Y7/2灰白色砂2%ブロック状に混,炭化物・酸化鉄混）

第76図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

1. SK1301　2. SK1302　3. SK1303　4. SK1304　5. SK1305　6. SK1313　7. SK1326



第77図　岩坪岡田島遺跡　中世遺構実測図

1. SK1371　2. SK1373・SK1374　3. SK1444　4. SK1445　5. SK1477　6. SK1480　7. SK1478

（4）中世末期～近世

A　溝

1号溝（ＳＤ１，第78図）

Ａ地区中央を南北方向に走る直線的な溝である。中世包含層であるⅡ層上面で検出しており，Ⅲ層上面で検出された中世の遺構より新しい時期の遺構である。最大幅は58cmで，深さは８cmである。埋土はⅢ層の浅黄色砂が混じる灰色粘土質ロームである。ＳＤ２・ＳＤ３とほぼ直交し，同時期の遺構と考えられる。Ⅱ層の遺物の年代から16世紀以降の遺構と考えられ，安政地震によると推定される噴砂がＩｂ層上面に達していることから，下限は1858年と推定される。

2号溝（ＳＤ２，第78図）

Ａ地区中央を東西方向に走る直線的な溝である。中世包含層であるⅡ層上面で検出しており，Ⅲ層上面で検出された中世の遺構より新しい時期の遺構である。最大幅は96cmで，深さは８cmである。埋土はⅢ層の浅黄色砂が混じる灰色粘土質ロームである。ＳＤ１にほぼ直交し，ＳＤ３と併走し，同時期の遺構と考えられる。出土遺物は珠洲擂鉢１点で，口縁部端面に櫛歯波状文を施したⅤ期のものであるが，Ⅱ層の遺物の年代から16世紀以降の遺構と考えられ，安政地震によると推定される噴砂がＩｂ層上面に達していることから，下限は1858年と推定される。

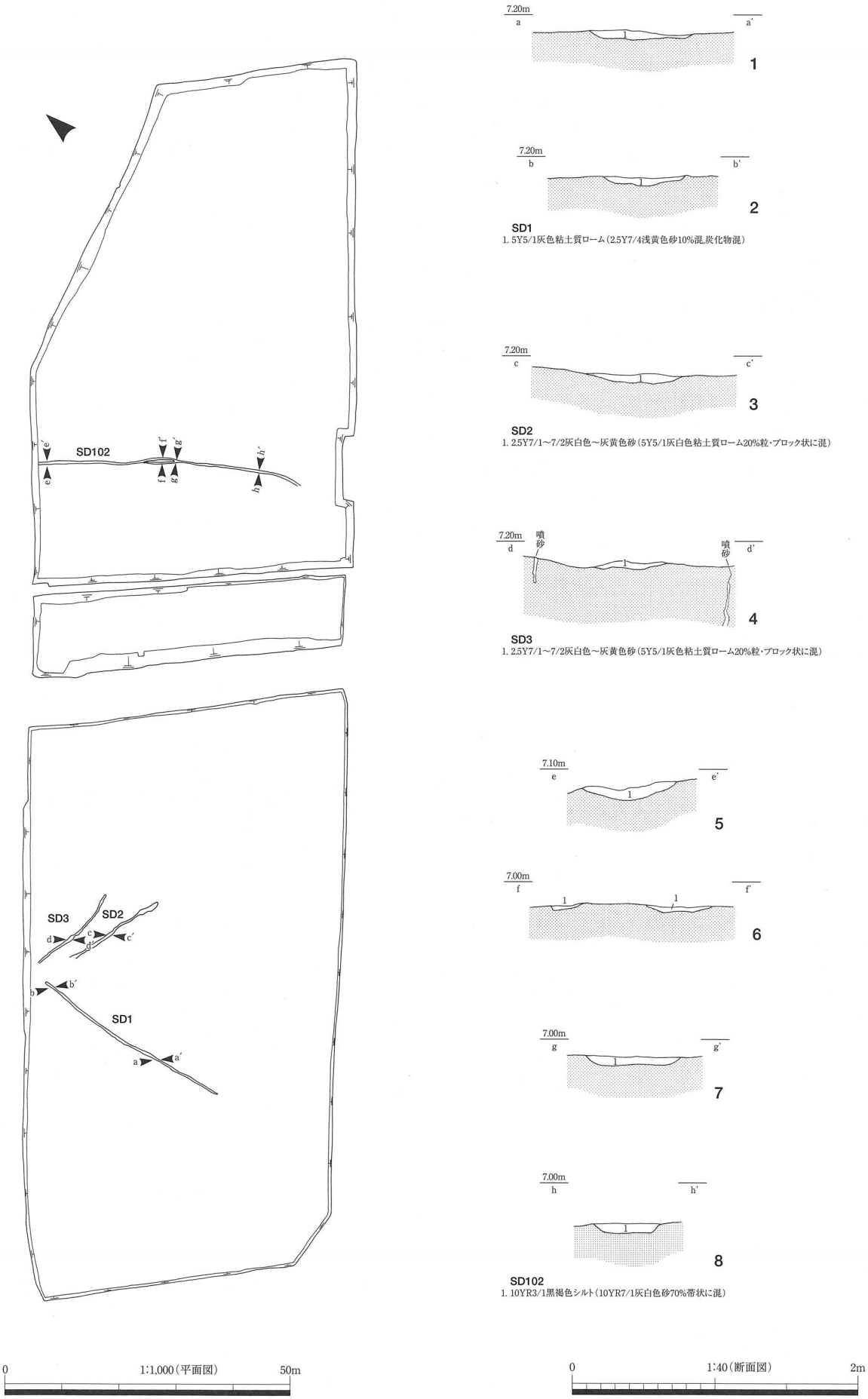
3号溝（ＳＤ３，第78図，図版20）

Ａ地区中央を東西方向に走る直線的な溝である。中世包含層であるⅡ層上面で検出しており，Ⅲ層上面で検出された中世の遺構より新しい時期の遺構である。最大幅は72cmで，深さは６cmである。埋土はⅢ層の浅黄色砂が混じる灰色粘土質ロームである。ＳＤ１にほぼ直交し，ＳＤ２と併走し，同時期の遺構と考えられる。Ⅱ層の遺物の年代から16世紀以降の遺構と考えられ，安政地震によると推定される噴砂がＩｂ層上面に達していることから，下限は1858年と推定される。

102号溝（ＳＤ102，第78図）

Ｂ２地区中央を横断する直線的な溝である。中世包含層であるⅡ層上面で検出しており，Ⅲ層上面で検出された中世の遺構より新しい時期の遺構である。最大幅は70cmで，深さは13cmである。埋土は灰白色砂が帯状に混じる黒褐色シルトである。

出土遺物は中世土師器（*119*・*120*）・土錘である。中世土師器皿はロクロ成形で柱状高台の破片がある。出土遺物は中世のものであるが，Ⅱ層上面で検出していることや，周囲の掘立柱建物との方向が異なることから，中世末期～近世の遺構の可能性が高いと考える。また，安政地震によると推定される噴砂がＩｂ層上面に達していることから，下限は1858年と推定される。



第78図　岩坪岡田島遺跡　中世末期～近世遺構実測図

1・2. SD1　3. SD2　4. SD3　5～8. SD102

第11表　岩坪岡田島遺跡　中世　建物一覧

建物	桁行(m)	梁行(m)	面積(㎡)	棟方位	柱穴規模・径(m)	柱穴規模・深さ(m)	柱間距離・桁(m)	柱間距離・梁(m)	柱穴と出土遺物	挿図	写真図版
SB3	9.25	8.35	76.87	N−72°−E	0.22～0.60	0.08～0.70	0.50～2.45	1.90～4.30	SP107～110,SP114,SP116,SP128～134,SP139,SP143(中世土師器),SP145～147,SP149(中世土師器),SP176～178,SP180(中世土師器),SP220,SP221,SP224,SP227,SP230,SP234(柱),SP235	24・25	14
SB4	4.85	3.75	17.67	N−12°−W	0.21～1.03	0.11～0.44	1.25～2.20	1.75～2.00	SP112,SP113(中世土師器・土錘),SP118,SP119(中世土師器),SP120～123,SP171(中世土師器),SP172,SP174,SP219	24・26	14
SB5	6.10	5.20	29.74	N−2°−E	0.22～0.41	0.09～0.52	0.70～2.05	1.55～1.90	SP151,SP152,SP154～156,SP162,SP164～166,SP195,SP197,SP201(中世土師器),SP202(柱),SP203～SP205,SP250	27・28	14
SB6	3.80	3.70	13.04	N−2°−E	0.22～0.62	0.12～0.34	1.70～2.10	1.60～1.85	SP157,SP160,SP161(中世土師器),SP184～186,SP194,SP198,SP199	27・28	14
SB7	4.60	3.75	16.98	N−77°−W	0.23～0.40	0.14～0.42	2.15～2.35	1.80～1.95	SP190～193,SP200,SP211(中世土師器),SP212,SP213,SP216	27・28	14
SB8	8.80	4.25	40.25	N−73°−E	0.26～0.49	0.12～0.48	1.90～4.25	2.00～2.25	SP1308,SP1309,SP1312,SP1315～1318,1SP1319(土師器),SP1320,SP1321,SP1324,SP1349,SP1505,SP1506,SP1509,SP1510(柱)	29・30	16
SB9	4.00	3.90	15.35	N−17°−W	0.23～0.34	0.20～0.46	1.90～2.10	1.80～2.05	SP1325,SP1327,SP1330,SP1340・1341,1343～1345	29・31	14
SB10	2.45	2.10	5.05	N−75°−E	0.31～0.38	0.28～0.54	2.40～2.45	2.10	SP1331～1334	29・31	14
SB11			測定不能	N−18°−W	0.31～0.35	0.19～0.36			SP1335～1337,SP1339,SP1347	29・31	14
SB12	7.85	5.55	43.16	N−75°−E	0.20～0.41	0.06～0.46	1.45～4.10	2.60～2.80	SP698(土師器),SP707,SP712(土師器),SP734,SP852,SP855,SP857,SP867,SP869,SP920	32・33・49	15
SB13	5.60	3.15	17.45	N−75°−E	0.20～0.68	0.13～0.37	1.65～3.40	1.15～3.10	SP702,SP709,SP711,SP725(中世土師器・珠洲),SP728,SP747,SP820(焼石),SP859,SP863,SP866	32・33・49	15
SB14	6.50	4.60	29.9	N−12°−W	0.37～0.73	0.14～0.42	2.35～4.55	2.20～2.40	SP750(土師器・焼石),SP762,SP770,SP804,SP807,SP816,SP832(珠洲)	32・34・49	15
SB15	5.10	3.38	17.13	N−14°−W	0.20～0.36	0.06～0.24	1.20～2.15	1.50～1.80	SP757(土師器),SP760,SP763,SP779,SP787,SP794,SP799,SP805,SP806,SP828	32・34・49	15
SB16	8.70	6.50	55.36	N−84°−E	0.23～0.32	0.08～0.45	1.80～6.00	2.95～6.35	SP610(土師器・須恵器),SP623,SP637,SP639,SP644(土師器),SP661,SP678,SP681,SP683	35・36・49	16
SB17	(11.50)	(7.60)	測定不能	N−7°−W	0.29～0.48	0.09～0.37			SP566(土師器),SP567,SP569,SP572(土師器)SP576,SP580,SP584,SP589(中世土師器),SP594(土師器・土製品),SP613(中世土師器),SP694,SP809(土師器)	35・36・49	16
SB18	7.95	7.90	67.26	N−84°−W	0.21～0.46	0.03～0.40	2.10～3.50	1.65～2.40	SP590,SP591,SP598,SP605(中世土師器),SP609,SP617(土師器),SP618(土師器),SP619(縄文土器),SP625,SP629,SP633,SP635,SP647,SP650,SP659,SP676(鉄滓),SP928	35・38・49	16
SB19	12.60	6.55	81.64	N−76°−E	0.27～0.62	0.16～0.41	1.70～6.35	2.00～6.55	SP513,SP526,SP529,SP547,SP552(土師器),SP553,SP554,SP564,SP1358～1360,SP1361(土師器),SP1365,SP1377,SP1388	37・39・49	
SB20	5.30	4.50	22.75	N−29°−W	0.32～0.52	0.22～0.30	2.50～5.30	2.15～4.25	SP1366,SP1367(中世土師器・珠洲),SP1368,SP1369(土師器),SP1380	37・38・49	17
SB21	6.60	5.25	40.86	N−70°−E	0.30～0.69	0.10～0.38	2.05～4.35	2.45～5.25	SP1244,SP1248,SP1250,SP1254,SP1256,SP1261,SP1267,SP1276,SP1497	40・41・49	17
SB22	7.80	3.90	28.87	N−74°−E	0.22～0.51	0.12～0.40	1.85～4.00	1.90～3.60	SP1245,SP1249,SP1251,SP1255,SP1257,SP1259,SP1262,SP1273,SP1285,SP1286,SP1290	40・41・49	
SB23	8.70	7.35	63.14	N−75°−E	0.28～0.86	0.09～0.44	1.95～4.30	2.10～4.70	SP1212,SP1222(須恵器・中世土師器・珠洲),SP1228,SP1232(中世土師器),SP1239,SP1242,SP1247(中世土師器),SP1253,SP1269,SP1270,SP1274,SP1275(中世土師器),SP1279,SP1496	40・42・49	17
SB24	4.78	3.90	18.39	N−65°−E	0.28～0.50	0.17～0.25	2.38	1.80～2.00	SP1391,SP1392,SP1408,SP1409(須恵器・中世土師器),SP1460,SP1484	42・49	16
SB25	4.75	3.20	15.16	N−70°−E	0.25～0.40	0.12～0.26	1.35～3.10	1.55～3.20	SP1423,SP1424(土師器・珠洲),SP1425,SP1440,SP1443,SP1449,SP1450,SP1452	43・44・49	17
SB26	5.90	1.90	10.89	N−58°−E	0.27～0.35	0.16～0.32	2.10～3.80	1.70～1.90	SP1436(中世土師器),SP1437,SP1474(中世土師器),SP1476,SP1479(珠洲・土錘・粘土塊),SP1481(中世土師器)	43・44・49	17・21

第12表　岩坪岡田島遺跡　中世　柱穴一覧(1)

建物	遺構	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	特記	挿図	写真図版
				長さ	幅	深さ				
SB3	SP 107	B2-SP07	円	0.24	0.22	0.32			24·25	
	SP 108	B2-SP08	楕円	0.48	0.32	0.38			24·25	
	SP 109	B2-SP09	楕円	0.37	0.26	0.34			24·25	
	SP 110	B2-SP10	円	0.39	0.35	0.66			24·25	
	SP 114	B2-SP14	円	0.34	0.29	0.38			24·25	
	SP 116	B2-SP16	円	0.43	0.25	0.70			24·25	
	SP 128	B2-SP28	円	0.29	0.25	0.24			24·25	
	SP 129	B2-SP29	円	0.36	0.31	0.08			24·25	
	SP 130	B2-SP30	円	0.40	0.38	0.38			24·25	
	SP 131	B2-SP31	円	0.43	0.43	0.48			24·25	
	SP 132	B2-SP32	円	0.28	0.22	0.38			24·25	
	SP 133	B2-SP33	円	0.32	0.27	0.31			24·25	
	SP 134	B2-SP34	円	0.33	0.32	0.32			24·25	
	SP 139	B2-SP39	円	0.43	0.40	0.42			24·25	
	SP 143	B2-SP43	円	0.60	0.54	0.48	中世土師器		24·25	
	SP 145	B2-SP45	円	0.34	0.27	0.60			24·25	
	SP 146	B2-SP46	円	0.34	0.32	0.54			24·25	
	SP 147	B2-SP47	楕円	0.44	0.28	0.34			24·25	
	SP 149	B2-SP49	円	0.32	0.30	0.52	中世土師器(*77*)		24·25	
	SP 176	B2-SP76	円	0.27	0.25	0.62			24·25	
	SP 177	B2-SP77	楕円	0.51	0.33	0.42			24·25	
	SP 178	B2-SP78	円	0.38	0.37	0.42			24·25	
	SP 180	B2-SP80	円	(0.36)	0.35	0.62	中世土師器	<SP235	24·25	
	SP 220	B2-SP120	円	0.28	0.27	0.30		<SP113	24·25	
	SP 221	B2-SP121	円	0.30	0.28	0.28			24·25	
	SP 224	B2-SP124	円	0.39	0.35	0.32			24·25	
	SP 227	B2-SP127	円	(0.31)	0.27	0.36		<SK144	24·25	
	SP 230	B2-SP130	円	0.28	0.20	0.30			24·25	
	SP 234	B2-SP134	円	0.32	0.29	0.54	柱(*54*)		24·25	
	SP 235	B2-SP135	円	0.28	0.22	0.59		>SP180	24·25	
SB4	SP 112	B2-SP12	円	0.33	0.27	0.44			24·26	
	SP 113	B2-SP13	円	0.39	0.37	0.44	中世土師器,土錘	>SP220	24·26	
	SP 118	B2-SP18	円	0.32	0.30	0.42			24·26	
	SP 119	B2-SP19	円	0.21	0.20	0.25	中世土師器		24·26	
	SP 120	B2-SP20	円	0.26	0.25	0.42			24·26	
	SP 121	B2-SP21	円	0.35	0.23	0.42			24·26	
	SP 122	B2-SP22	円	0.29	0.24	0.48			24·26	
	SP 123	B2-SP23	円	0.26	0.22	0.34			24·26	
	SP 171	B2-SP71	楕円	1.03	0.46	0.22	中世土師器		24·26	
	SP 172	B2-SP72	円	0.29	0.28	0.11			24·26	
	SP 174	B2-SP74	円	0.27	0.25	0.38			24·26	
	SP 219	B2-SP119	円	0.31	0.29	0.26			24·26	
SB5	SP 151	B2-SP51	円	0.31	0.26	0.30			27·28	
	SP 152	B2-SP52	円	0.41	0.40	0.52			27·28	
	SP 154	B2-SP54	円	0.30	0.27	0.52			27·28	
	SP 155	B2-SP55	円	0.31	0.30	0.34			27·28	
	SP 156	B2-SP56	円	0.25	0.22	0.26			27·28	
	SP 162	B2-SP62	円	0.22	0.21	0.20			27·28	
	SP 164	B2-SP64	円	0.32	0.30	0.28			27·28	
	SP 165	B2-SP65	円	0.35	0.30	0.45			27·28	
	SP 166	B2-SP66	円	0.25	0.23	0.28			27·28	
	SP 195	B2-SP95	円	0.30	0.29	0.18			27·28	
	SP 197	B2-SP97	円	0.24	0.22	0.27			27·28	
	SP 201	B2-SP101	円	0.35	0.31	0.52	中世土師器(*78*)		27·28	
	SP 202	B2-SP102	円	0.38	0.32	0.46	柱		27·28	
	SP 203	B2-SP103	円	0.35	0.23	0.28			27·28	

第12表　岩坪岡田島遺跡　中世　柱穴一覧(2)

建物	遺構	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	特記	挿図	写真図版
				長さ	幅	深さ				
SB5	SP 204	B2-SP104	円	0.26	0.25	0.26			27·28	
	SP 205	B2-SP105	円	0.27	0.27	0.20			27·28	
	SP 250	B2-SP150	円	0.24	0.21	0.09			27·28	
SB6	SP 157	B2-SP57	円	0.30	0.28	0.32			27·28	
	SP 160	B2-SP60	円	0.38	0.34	0.32			27·28	
	SP 161	B2-SP61	楕円	0.62	0.14	0.17	中世土師器		27·28	
	SP 184	B2-SP84	円	0.25	0.23	0.12			27·28	
	SP 185	B2-SP85	円	0.24	0.23	0.20			27·28	
	SP 186	B2-SP86	円	0.30	0.27	0.28			27·28	
	SP 194	B2-SP94	円	0.30	0.26	0.18			27·28	
	SP 198	B2-SP98	円	0.22	0.21	0.17			27·28	
	SP 199	B2-SP99	円	0.26	0.24	0.34			27·28	
SB7	SP 190	B2-SP90	円	0.28	0.26	0.24			27·28	
	SP 191	B2-SP91	円	0.26	0.26	0.40			27·28	
	SP 192	B2-SP92	円	0.29	0.29	0.35			27·28	
	SP 193	B2-SP93	円	0.40	0.28	0.32			27·28	
	SP 200	B2-SP100	円	0.28	0.24	0.30			27·28	
	SP 211	B2-SP111	円	0.27	0.25	0.42	中世土師器		27·28	
	SP 212	B2-SP112	円	0.26	0.22	0.30			27·28	
	SP 213	B2-SP113	円	0.23	0.22	0.14			27·28	
	SP 216	B2-SP116	円	0.28	0.23	0.18			27·28	
SB8	SP 1308	C7-SP108	円	0.45	0.37	0.26			29·30	
	SP 1309	C7-SP109	円	0.37	0.36	0.30			29·30	
	SP 1312	C7-SP112	円	0.38	0.34	0.30			29·30	
	SP 1315	C7-SP115	円	0.39	0.38	0.28			29·30	
	SP 1316	C7-SP116	円	0.35	0.30	0.48			29·30	
	SP 1317	C7-SP117	円	0.49	0.47	0.30			29·30	
	SP 1318	C7-SP118	楕円	0.48	0.33	0.14			29·30	
	SP 1319	C7-SP119	円	0.42	0.39	0.28	土師器		29·30	
	SP 1320	C7-SP120	円	0.29	0.28	0.41			29·30	
	SP 1321	C7-SP121	円	0.30	0.28	0.18			29·30	
	SP 1324	C7-SP124	円	0.32	0.30	0.46		＞SP1323	29·30	
	SP 1349	C7-SP149	楕円	0.39	0.32	0.30			29·30	
	SP 1505	C7-SP305	円	0.48	0.43	0.14		＞SP1506	29·30	
	SP 1506	C7-SP306	円	(0.27)	0.40	0.12		＜SP1505	29·30	
	SP 1509	C7-SP309	円	0.26	(0.25)	0.30		＞SK1307	29·30	
	SP 1510	C7-SP310	円	0.27	0.26	0.46	柱(*53*)		29·30	
SB9	SP 1325	C7-SP125	円	0.23	0.19	0.20			29·31	
	SP 1327	C7-SP127	円	0.28	0.25	0.31			29·31	
	SP 1330	C7-SP130	円	0.33	0.31	0.41			29·31	
	SP 1340	C7-SP140	円	0.28	0.27	0.46			29·31	
	SP 1341	C7-SP141	円	0.31	0.29	0.41			29·31	
	SP 1343	C7-SP143	円	0.25	0.24	0.40			29·31	
	SP 1344	C7-SP144	円	0.34	0.33	0.38			29·31	
	SP 1345	C7-SP145	円	0.28	0.24	0.46			29·31	
SB10	SP 1331	C7-SP131	円	0.38	0.34	0.54			29·31	
	SP 1332	C7-SP132	円	0.36	0.33	0.28			29·31	
	SP 1333	C7-SP133	円	0.31	0.3	0.37			29·31	
	SP 1334	C7-SP134	円	0.32	0.31	0.46			29·31	
SB11	SP 1335	C7-SP135	円	0.33	0.30	0.30			29·31	
	SP 1336	C7-SP136	円	0.35	0.31	0.36			29·31	
	SP 1337	C7-SP137	円	0.31	0.30	0.26			29·31	
	SP 1339	C7-SP139	円	0.34	0.29	0.19			29·31	
	SP 1347	C7-SP147	円	0.33	0.33	0.23			29·31	
SB12	SP 698	C4-SP198	円	0.22	0.21	0.16	土師器		32·33	
	SP 707	C4-SP207	円	0.28	0.25	0.33			32·33	

第12表　岩坪岡田島遺跡　中世　柱穴一覧(3)

建物	遺構	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	特記	挿図	写真図版
				長さ	幅	深さ				
SB12	SP 712	C4-SP212	円	0.34	0.33	0.17	土師器	>SP711	32·33	
	SP 734	C4-SP234	円	0.30	0.28	0.22			32·33	
	SP 852	C4-SP352	円	0.20	0.16	0.15			32·33	
	SP 855	C4-SP355	円	0.30	0.28	0.36			32·33	
	SP 857	C4-SP357	円	0.22	0.19	0.21			32·33	
	SP 867	C4-SP367	楕円	0.41	0.28	0.33			32·33	
	SP 869	C4-SP369	円	0.31	0.30	0.46			32·33	
	SP 920	C4-SP420	円	0.24	0.22	0.06			32·33	
SB13	SP 702	C4-SP202	円	0.26	0.21	0.15			32·33	
	SP 709	C4-SP209	円	0.29	0.28	0.22		<SP708	32·33	
	SP 711	C4-SP211	円	(0.40)	0.27	0.18		<SP712	32·33	
	SP 725	C4-SP225	楕円	0.43	0.26	0.16	中世土師器,珠洲		32·33	
	SP 728	C4-SP228	円	0.36	0.30	0.21			32·33	
	SP 747	C4-SP247	円	0.30	0.27	0.35			32·33	
	SP 820	C4-SP320	楕円	0.68	0.53	0.37	焼石		32·33	
	SP 859	C4-SP359	円	0.23	0.21	0.19			32·33	
	SP 863	C4-SP363	円	0.20	0.20	0.18		>SP864	32·33	
	SP 866	C4-SP366	円	0.30	0.27	0.13			32·33	
SB14	SP 750	C4-SP250	楕円	0.73	0.52	0.42	土師器,焼石	<SK751	32·34	
	SP 762	C4-SP262	不整	0.64	0.60	0.31			32·34	
	SP 770	C4-SP270	楕円	0.43	(0.32)	0.14		<SK769	32·34	
	SP 804	C4-SP304	楕円	0.56	0.43	0.26			32·34	
	SP 807	C4-SP307	円	0.37	0.32	0.26			32·34	
	SP 816	C4-SP316	楕円	0.57	0.43	0.36			32·34	
	SP 832	C4-SP332	楕円	0.45	0.30	0.24	珠洲		32·34	
SB15	SP 757	C4-SP257	円	0.30	0.27	0.20	土師器		32·34	
	SP 760	C4-SP260	円	0.20	0.20	0.15		>SK759	32·34	
	SP 763	C4-SP263	円	0.20	0.18	0.14			32·34	
	SP 779	C4-SP279	円	(0.35)	0.24	0.12		<SK780	32·34	
	SP 787	C4-SP287	円	0.26	0.24	0.14		>SK845	32·34	
	SP 794	C4-SP294	円	0.28	0.23	0.17			32·34	
	SP 799	C4-SP299	円	0.28	0.21	0.24			32·34	
	SP 805	C4-SP305	円	0.36	0.34	0.06			32·34	
	SP 806	C4-SP306	円	0.23	0.18	0.10		>SD846	32·34	
	SP 828	C4-SP328	円	0.22	0.21	0.08			32·34	
SB16	SP 610	C4-SP110	円	0.30	0.26	0.35	土師器,須恵器(*79*)		35·36	
	SP 623	C4-SP123	円	0.29	0.28	0.19			35·36	
	SP 637	C4-SP137	円	0.25	0.23	0.27			35·36	
	SP 639	C4-SP139	円	0.32	(0.19)	0.45		<SK640	35·36	
	SP 644	C4-SP144	円	0.30	0.28	0.26	土師器		35·36	
	SP 661	C4-SP161	円	0.25	0.20	0.32			35·36	
	SP 678	C4-SP178	円	0.23	0.22	0.13			35·36	
	SP 681	C4-SP181	円	0.23	0.21	0.20			35·36	
	SP 683	C4-SP183	円	0.25	0.24	0.08			35·36	
SB17	SP 566	C4-SP66	円	0.29	0.28	0.27	土師器	>SD579	35·36	
	SP 567	C4-SP67	円	0.32	0.28	0.31			35·36	
	SP 569	C4-SP69	円	0.31	0.28	0.28			35·36	
	SP 572	C4-SP72	円	0.34	0.32	0.32	土師器	>SD579	35·36	
	SP 576	C4-SP76	円	0.34	0.26	0.35			35·36	
	SP 580	C4-SP80	円	0.31	0.30	0.37			35·36	
	SP 584	C4-SP84	円	0.30	0.27	0.15			35·36	
	SP 589	C4-SP89	円	0.48	0.45	0.23	中世土師器		35·36	
	SP 594	C4-SP94	円	0.41	0.35	0.24	土師器,土製品		35·36	
	SP 613	C4-SP113	円	0.38	0.37	0.31	中世土師器(*80*)		35·36	
	SP 694	C4-SP194	円	0.34	(0.27)	0.18		<SP695	35·36	
	SP 809	C4-SP309	円	0.35	0.34	0.09	土師器		35·36	

第12表　岩坪岡田島遺跡　中世　柱穴一覧(4)

建物	遺構	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	特記	挿図	写真図版
				長さ	幅	深さ				
SB18	SP 590	C4-SP90	円	0.28	0.26	0.40			35·38	
	SP 591	C4-SP91	円	0.41	0.34	0.20			35·38	
	SP 598	C4-SP98	円	0.29	0.26	0.14			35·38	
	SP 605	C4-SP105	円	0.23	0.22	0.33	中世土師器		35·38	
	SP 609	C4-SP109	円	0.29	0.26	0.27			35·38	
	SP 617	C4-SP117	円	0.26	0.24	0.31	土師器	>SK616	35·38	
	SP 618	C4-SP118	楕円	0.46	0.30	0.19	土師器		35·38	
	SP 619	C4-SP119	円	0.21	0.16	0.03	縄文土器		38	
	SP 625	C4-SP125	円	0.32	0.28	0.27			35·38	
	SP 629	C4-SP129	円	0.25	0.21	0.22			35·38	
	SP 633	C4-SP133	円	0.21	0.21	0.23			35·38	
	SP 635	C4-SP135	円	0.38	0.34	0.30			35·38	
	SP 647	C4-SP147	円	0.31	0.27	0.37			35·38	
	SP 650	C4-SP150	円	0.31	0.30	0.36			35·38	
	SP 659	C4-SP159	円	0.37	0.32	0.25			35·38	
	SP 676	C4-SP176	円	0.35	0.32	0.40	鉄滓(*40*)		35·38	
	SP 928	C4-SP428	円	0.37	0.35	0.28			35·38	
SB19	SP 513	C4-SK13	円	0.54	0.49	0.41		>SD506	37·39	
	SP 526	C4-SK26	円	0.48	0.43	0.28			37·39	
	SP 529	C4-SP29	円	0.35	0.34	0.20			37·39	
	SP 547	C4-SP47	円	0.44	0.38	0.25			37·39	
	SP 552	C4-SK52	楕円	0.62	0.42	0.21	土師器		37·39	
	SP 553	C4-SP53	円	0.47	0.42	0.26			37·39	
	SP 554	C4-SP54	円	0.37	0.34	0.28			37·39	
	SP 564	C4-SP64	円	0.51	0.48	0.20			37·39	
	SP 1358	C7-SP158	円	0.44	0.42	0.20			37·39	
	SP 1359	C7-SP159	円	0.37	0.34	0.16			37·39	
	SP 1360	C7-SP160	円	0.41	0.38	0.18			37·39	
	SP 1361	C7-SP161	円	0.38	0.28	0.22	土師器	<SP1362	37·39	
	SP 1365	C7-SP165	円	0.34	0.33	0.36			37·39	
	SP 1377	C7-SP177	円	0.36	0.32	0.30			37·39	
	SP 1388	C7-SP188	円	0.27	0.26	0.24		>SD1390	37·39	
SB20	SP 1366	C7-SP166	円	0.47	0.37	0.28			37·38	
	SP 1367	C7-SP167	円	0.47	0.46	0.30	中世土師器,珠洲		37·38	
	SP 1368	C7-SP168	円	0.52	0.50	0.24			37·38	
	SP 1369	C7-SP169	円	0.40	0.35	0.22	土師器		37·38	
	SP 1380	C7-SP180	円	0.32	0.31	0.27			37·38	
SB21	SP 1244	C7-SP44	円	0.37	0.33	0.20			40·41	
	SP 1248	C7-SP48	円	0.33	0.32	0.10			40·41	
	SP 1250	C7-SP50	円	0.44	0.36	0.15			40·41	
	SP 1254	C7-SP54	円	0.43	0.38	0.19		>SD697	40·41	
	SP 1256	C7-SP56	楕円	0.30	0.19	0.30			40·41	
	SP 1261	C7-SP61	楕円	0.69	0.41	0.28		>SK1217	40·41	
	SP 1267	C7-SP67	円	0.33	0.28	0.38		>SD697	40·41	
	SP 1276	C7-SP76	円	0.37	0.32	0.14			40·41	
	SP 1497	C7-SP297	円	0.33	0.33	0.25			40·41	
SB22	SP 1245	C7-SP45	円	0.36	0.35	0.16			40·41	
	SP 1249	C7-SP49	円	0.37	0.35	0.08			40·41	
	SP 1251	C7-SP51	円	0.22	(0.14)	0.20		<SK1252	40·41	
	SP 1255	C7-SP55	円	0.31	0.21	0.14		>SD697	40·41	
	SP 1257	C7-SP57	楕円	0.51	0.26	0.12		>SD697	40·41	
	SP 1259	C7-SP59	円	0.36	0.33	0.22			40·41	
	SP 1262	C7-SP62	楕円	0.30	0.24	0.21		>SK1217	40·41	
	SP 1273	C7-SP73	円	0.26	0.25	0.22			40·41	
	SP 1285	C7-SP85	円	0.27	0.22	0.13			40·41	
	SP 1286	C7-SP86	円	0.33	0.23	0.20			40·41	

第12表　岩坪岡田島遺跡　中世　柱穴一覧(5)

建物	遺構	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	特記	挿図	写真図版
				長さ	幅	深さ				
SB22	SP 1290	C7-SP90	円	0.43	0.42	0.40			40·41	
SB23	SP 1212	C7-SP12	楕円	0.86	0.73	0.16			40·42	
	SP 1222	C7-SP22	円	0.54	0.48	0.10	中世土師器,珠洲(*81*)	>SK1208	40·42	
	SP 1228	C7-SP28	円	0.39	0.38	0.22			40·42	
	SP 1232	C7-SP32	円	0.34	0.31	0.44	中世土師器	>SD697	40·42	
	SP 1239	C7-SP39	円	0.42	0.42	0.24			40·42	
	SP 1242	C7-SP42	楕円	0.41	0.38	0.18			40·42	
	SP 1247	C7-SP47	円	0.36	0.32	0.13	中世土師器		40·42	
	SP 1253	C7-SP53	円	0.30	0.29	0.18			40·42	
	SP 1269	C7-SP69	楕円	0.40	0.36	0.09			40·42	
	SP 1270	C7-SP70	円	0.34	0.33	0.18			40·42	
	SP 1274	C7-SP74	円	0.43	0.36	0.23			40·42	
	SP 1275	C7-SP75	円	0.29	0.26	0.10	中世土師器	>SD697	40·42	
	SP 1279	C7-SP79	円	0.30	0.29	0.27			40·42	
	SP 1496	C7-SP296	円	0.28	0.22	0.18		>SD697	40·42	
SB24	SP 1391	C7-SP191	円	0.36	0.34	0.25			42	
	SP 1392	C7-SP192	円	0.43	0.42	0.17			42	
	SP 1408	C7-SP208	円	0.36	0.24	0.20			42	
	SP 1409	C7-SP209	楕円	0.50	0.37	0.24	須恵器,中世土師器		42	
	SP 1460	C7-SP260	円	0.34	0.31	0.20			42	
	SP 1484	C7-SP284	円	0.28	0.27	0.20			42	
SB25	SP 1423	C7-SP223	円	0.28	0.27	0.20			43·44	
	SP 1424	C7-SP224	円	0.30	0.28	0.20	土師器,珠洲(*82*)	>SD1504	43·44	
	SP 1425	C7-SP225	円	0.25	0.24	0.16			43·44	
	SP 1440	C7-SP240	円	0.28	0.27	0.20			43·44	
	SP 1443	C7-SP243	円	0.31	0.30	0.12			43·44	
	SP 1449	C7-SP249	方	0.30	0.27	0.26			43·44	
	SP 1450	C7-SP250	円	0.25	0.23	0.15			43·44	
	SP 1452	C7-SP252	円	0.40	0.20	0.24			43·44	
SB26	SP 1436	C7-SP236	円	0.30	0.26	0.22	中世土師器(*83·84*)		43·44	16
	SP 1437	C7-SP237	円	0.30	0.28	0.32			43·44	
	SP 1474	C7-SP274	円	0.27	0.27	0.16	中世土師器		43·44	
	SP 1476	C7-SP276	円	0.31	0.29	0.24			43·44	
	SP 1479	C7-SP279	円	0.28	0.24	0.18	珠洲,土錘,粘土塊		43·44	
	SP 1481	C7-SP281	楕円	0.35	0.26	0.29	中世土師器		43·44	
SA2	SP 138	B2-SP38	円	0.28	0.25	0.26		>SP234	24·25	
	SP 236	B2-SP136	円	0.25	0.25	0.39			24·25	
	SP 237	B2-SP137	円	0.30	0.29	0.40			24·25	
	SP 248	B2-SP148	円	0.23	0.22	0.29			24·25	
SA3	SP 127	B2-SP27	円	0.29	0.25	0.32			24·25	
	SP 137	B2-SP37	円	0.30	0.21	0.22			24·25	
	SP 222	B2-SP122	円	0.45	0.30	0.40		<SP17	24·25	
	SP 223	B2-SP123	円	0.24	0.22	0.09			24·25	
	SP 228	B2-SP128	円	0.20	0.19	0.42			24·25	
SA4	SP 106	B2-SP06	円	0.26	0.24	0.42	中世土師器(*86*)		24·25	
	SP 111	B2-SP11	円	0.29	0.24	0.30			24	
	SP 117	B2-SP17	円	0.26	0.25	0.34		>SP222	24·25	
	SP 124	B2-SP24	円	0.23	0.20	0.42	中世土師器(*85*)		24·25	
	SP 126	B2-SP26	円	0.27	0.25	0.08			24·25	
	SP 136	B2-SP36	円	0.22	0.19	0.20	中世土師器		24·25	
	SP 229	B2-SP129	円	0.26	0.25	0.46			24·25	
SA5	SP 158	B2-SP58	円	0.19	0.19	0.29			27·28	
	SP 163	B2-SP63	円	0.23	0.20	0.20			27·28	
	SP 206	B2-SP106	円	0.24	0.20	0.20			27·28	
	SP 217	B2-SP117	円	0.28	0.23	0.22	中世土師器(*87*)		27	

第13表　岩坪岡田島遺跡　中世　溝一覧(1)

遺構	旧遺構番号	種類	規模(m)		出土遺物	特記	挿図	写真図版
			幅	深さ				
SD 4	A-SD04	流路	(12.84)	2.00	弥生土器,須恵器(*88·89*),中世土師器(*90·91*),珠洲,中国製白磁,土錘(*92～94*),漆器,柄?(*5*),木地皿(*15*),加工棒(*67*),加工板(*60*),種実		45	20·31
SD 11	A-SD11 B1-SD01 B2-SD01	流路	28.4	2.00	土師器(*96*),須恵器(*95*),黒色土器(*97*),中世土師器(*98～106*),珠洲(*107・108*),古瀬戸(*109*),越中瀬戸(*110*),伊万里,土錘(*111～118*),土製品,漆器(*12·14*),加工板(*59·65·68·69*),加工棒(*56·70*),ウマの歯,種実		46·47	20
SD 103	B2-SD03	流路	0.58	0.24	中世土師器,土錘(*121*)		46·47	
SD 104	B2-SD04	溝	1.40	0.08	中世土師器(*123*),珠洲,土錘(*122*),種実	SP238·240＜SD104＜SK105	24	14
SD 140	B2-SD40	溝	0.72	0.16	中世土師器(*124～126*),中国製白磁(*127*),土錘(*128*)		24	14
SD 141	B2-SD41	溝	0.40	0.06			24	14
SD 142	B2-SD42	溝	0.55	0.08			24	14
SD 150	B2-SD50	溝	1.15	0.09	中世土師器,土錘		27	14
SD 301	B3-SD01 C7-SD01	流路	8.00	0.82	土師器(*129・130・157*),須恵器(*131～134*),黒色土器(*135*)中世土師器(*136～156*),珠洲(*158～205*),中国製青磁(*211・212*),中国製白磁(*208～210・213*),古瀬戸(*206*),瀬戸美濃(*207*),越中瀬戸,土錘(*214～221*),下駄(*4*),紡錘車?(*6*),曲物,井戸枠,円形板,加工棒(*55·57*),加工板,扁平片刃石斧(*2*),石鍋(*22*),砥石(*12・15・20*),銭(*4・7*),羽口(*36*),種実,骨		48	21
SD 302	B3-SD02 C7-SD307	溝	1.59	0.12	土師器,中世土師器		48	
SD 327	B3-SD27	溝	0.25	0.05	土師器		48	
SD 329	B3-SD29	溝	1.14	0.06	土師器,中世土師器		48	
SD 401	C3-SD01 C4-SD01 C7-SD07	溝	1.80	0.70	土師器(*223*),須恵器(*222*),中世土師器(*224・225*),珠洲(*230～254*),中国製白磁,中国製青磁(*227・228*),古瀬戸(*226*),土錘(*229*),土製品,焼石,鉄滓(*43～45·48*),引き手金具(*30*),種実	SP419＞SD401＞SD697·744·917·1209	20·49·50·52	12·19
SD 402	C3-SD02 C4-SD02	溝	1.02	0.18	土師器,須恵器,珠洲(*255*),中国製白磁,土製品,鉄滓	SD403＞SD402＞SD697·744·917	49·50	19
SD 403	C3-SD03	溝	0.87	0.34	土師器,珠洲	＞SD402	49·50	
SD 414	C3-SD14	溝	0.45	0.10	珠洲(*256*)		51	18
SD 415	C3-SD15	溝	0.36	0.11	珠洲(*257・258*)		51	18
SD 416	C3-SD16	溝	0.30	0.04	須恵器,珠洲		51	18
SD 417	C3-SK17	溝	0.37	0.05			51	
SD 437	C3-SD37	溝	0.38	0.12			51	
SD 453	C1-SD53 C7-SD02	溝	4.80	1.26	弥生土器(*259*),土師器,須恵器(*260～266*),中世土師器(*267・268*),珠洲(*274～278・281～296*),越前,加賀(*297*),中国製白磁(*273*),中国製青磁(*271・272*),古瀬戸(*269・270*),越中瀬戸,土錘(*279・280*),鉄滓(*56·57*)		55	
SD 829	C4-SD329	溝	0.26	0.08			49·50	15
SD 837	C4-SD337	溝	0.20	0.08	土師器	＞SD744	21	12
SD 843	C4-SD343	溝	0.32	0.10		＞SK844	19·21	
SD 846	C4-SD346	溝	0.30	0.05			49·50	15
SD 914	C4-SD414	流路	1.83	0.18	土師器,珠洲(*298*),中国製白磁,土製品,焼石		49·54	21

第13表　岩坪岡田島遺跡　中世　溝一覧(2)

遺構	旧遺構番号	種類	規模(m)		出土遺物	特記	挿図	写真図版
			幅	深さ				
SD 915	C4-SD415	流路	1.24	0.18			49・54	
SD 916	C4-SD416	流路	0.52	0.09	珠洲		49・54	
SD 924	C4-SD424	溝	0.48	0.04	珠洲,焼石		51	19
SD 925	C4-SD425	溝	0.36	0.04			51	19
SD 1005	C5-SD05	溝	0.96	0.08	土師器,須恵器		55・56	
SD 1007	C5-SD07	溝	0.87	0.24	縄文土器,土師器,須恵器,鉄滓		55・56	21
SD 1008	C5-SD08	溝	0.78	0.32	土師器,須恵器,珠洲,粘土塊		55・56	
SD 1011	C5-SD11	溝	0.57	0.14			55・56	21
SD 1104	C6-SD04	溝	0.68	0.12	土師器,須恵器(*299*),中世土師器(*300*)		57	
SD 1209	C7-SD09	溝	0.80	0.04	土師器(*301*),珠洲	＜SD401	49・50	12
SD 1370	C7-SD170	溝	0.90	0.06			49・50・52	
SD 1413	C7-SD213	溝	0.42	0.12	須恵器,中世土師器,珠洲		49・50	
SD 1454	C7-SD254	溝	0.23	0.05	須恵器,中世土師器,珠洲		49・50	
SD 1485	C7-SD285	溝	0.58	0.13	土師器,須恵器(*302*),珠洲,鉄滓(*58*)		49・50	21
SD 1504	C7-SD304	溝	0.95	0.10	須恵器(*303*)	＜SK1296・SE1299・SB25	49・75	21

第14表　岩坪岡田島遺跡　中世　井戸一覧

遺構	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	特記	挿図	写真図版
			長さ	幅	深さ				
SE 451	C2-SK51	円	2.59	2.31	2.50	縄文土器(*304*),土師器,須恵器(*305*),中世土師器(*306*),珠洲,加工板(*77*),鉄滓(*50*),粘土塊,種実		58	
SE 503	C4-SE03	円	2.56	2.50	2.14	土師器,中世土師器(*307・308*),珠洲,土製品,焼石,鉄滓(*41*)		59	22
SE 504	C4-SE04	円	2.52	2.46	2.00	土師器,須恵器,珠洲,中国製白磁(*309*),粘土塊,鉄滓(*60*),めのう剥片(*21*)		59	22
SE 508	C4-SE08	円	3.16	3.01	2.16	縄文土器,土師器(*310～312*),須恵器(*313～315*),中世土師器(*316～349*),珠洲(*351～353*),中国製青磁,中国製白磁(*350*),餃子型土製品(*354*),土製暖房具?(*355*),漆器,加工板(*64・66*),砥石(*17*),鉄滓(*42・59*),刀子(*19・20*),釣針状製品(*23*),種実	＞SD579	60	22
SE 693	C4-SE193	円	1.18	1.03	2.36	土師器,珠洲,中国製青磁,板状金属製品(*33*)		60	
SE 716	C4-SE216	円	1.31	0.85	1.74	土師器		61	22
SE 850	C4-SE350	円	1.11	1.10	2.30	土師器,須恵器,珠洲,羽口(*37・39*),鉄滓(*52・53*)	＞SD697	61	22
SE 1001	C2-SK77 C5-SE01	不整	2.94	2.00	2.08	縄文土器,弥生土器,土師器(*358*),須恵器,中世土師器(*356・357・359*),珠洲(*360～364*),中国製青磁(*365*),中国製白磁(*366～368*),土製暖房具(*369*),漆器(*13・16*),加工板(*61・62*),底板(*9*),井戸枠(*17～49*),雁股鏃(*21*),鉄滓		62・63	23
SE 1006	C5-SE06	楕円	1.92	1.34	1.38	須恵器(*370*),中世土師器(*371～373*),珠洲(*374・375*),漆器,曲物		64	24
SE 1009	C5-SE09	円	1.81	(1.45)	1.30	土師器,曲物(*7*),漆製品		64	24
SE 1101	C6-SE01	円	1.74	1.51	1.12	土師器(*376*),須恵器(*377・378*),珠洲		65	
SE 1102	C6-SE02	円	0.98	0.72	0.56	中世土師器		65	
SE 1103	C6-SE03	円	1.75	1.64	0.52	珠洲(*379*)		65	25
SE 1105	C6-SE05	円	1.32	1.12	0.79	中世土師器,珠洲(*380・381*),土錘(*382*),砥石(*18*)		65	25
SE 1106	C6-SE06	隅丸方	1.65	1.57	0.91	土師器,須恵器(*383・384*)		66	
SE 1116	C6-SE16	円	0.99	0.91	0.90	土師器,須恵器		66	
SE 1119	C6-SE19	円	0.85	0.84	0.22			66	
SE 1120	C6-SE20	円	0.77	0.63	0.32	土師器		66	25
SE 1204	C7-SE04	円	1.74	1.43	2.14	土師器(*385・386*),中世土師器(*387*),珠洲(*388・389*),中国製青磁(*390・391*),曲物,鉄滓(*47*)		67	25
SE 1205	C7-SE05	楕円	1.93	1.40	0.90	珠洲(*392*)		67	
SE 1229	C7-SE29	隅丸方	1.88	1.77	1.70	土師器,須恵器,中世土師器(*393・394*),珠洲(*396・397*),中国製青磁(*395*),加工板(*72*),曲物,釘(*25*)		67	
SE 1260	C7-SE60	円	1.04	1.00	1.06	中世土師器,珠洲		68	
SE 1291	C7-SE91	円	1.25	1.17	1.24	中世土師器,珠洲,横櫛(*1*),曲物,加工板(*50・51*),加工棒(*52*)		68	25
SE 1299	C7-SE99	円	1.03	1.03	0.62	土師器,須恵器(*400*),中世土師器(*398*),珠洲(*399*),釘?(*27*)	＞SD1504	68	17

第15表　岩坪岡田島遺跡　中世　土坑一覧(1)

遺構	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	特記	挿図	写真図版
			長さ	幅	深さ				
SK 105	B2−SP05	円	0.54	0.37	0.30		>SD104	24	
SK 144	B2−SP44	円	0.30	0.27	0.16	中世土師器(*401*)	>SP227	25	26
SK 189	B2−SP89	円	0.27	0.27	0.12	土錘(*402*)		69	
SK 238	B2−SP138	円	0.23	0.20	0.38		<SD104	24	
SK 240	B2−SP140	円	0.24	0.23	0.22		<SD104	24	
SK 404	C3−SD04	円	3.00	1.30	0.88	須恵器,中世土師器(*403·404*),珠洲(*405·230*),粘土塊,羽口(*35·38*),鉄滓(*46·51·54·61*)		69	26
SK 413	C3−SP13	円	0.30	0.28	0.22	珠洲		69	
SK 428	C3−SK28	楕円	0.92	0.53	0.09	須恵器,珠洲,砥石(*19*),焼石,鉄滓		69	18
SK 429	C3−SK29	円	0.52	(0.45)	0.04	土師器,珠洲,中国製青磁(*406*),自然礫	<SP408	69	
SK 439	C3−SX39	不整	1.21	0.95	0.11			69	
SK 450	C2−SK50	円	2.40	2.06	1.10	縄文土器,土師器,須恵器,珠洲(*407·408*),中国製青磁,粘土塊,骨片		70	26
SK 466	C2−SK66	円	1.43	1.36	0.12	土師器,珠洲		70	
SK 467	C2−SK67	不整	0.72	0.40	0.14	粘土塊		70	
SK 505	C4−SK05	円	1.31	1.27	0.84	中世土師器,須恵器,粘土塊		71	
SK 514	C4−SK14	楕円	1.12	0.86	0.22			71	26
SK 527	C4−SP27	不整	0.32	0.31	0.31	鉄滓(*49*)			
SK 536	C4−SK36	不整	0.83	0.27	0.25	土師器,須恵器,珠洲		71	
SK 540	C4−SP40	円	0.37	0.32	0.26	中世土師器(*409*)		71	26
SK 562	C4−SP62	不整	0.35	0.27	0.12	土師器,土錘(*410*)		71	
SK 578	C4−SK78	円	1.28	1.15	0.70	土師器,須恵器,珠洲		71	26
SK 607	C4−SP107	円	0.24	0.23	0.27	中世土師器(*411*)		71	26
SK 640	C4−SP140	円	0.31	0.27	0.32		>SP639	36	
SK 645	C4−SK145	楕円	1.57	1.35	0.58	土師器,須恵器,焼石		71	26
SK 673	C4−SP173	楕円	0.58	0.50	0.30	中世土師器,珠洲,粘土塊		72	
SK 695	C4−SP195	不整	0.28	0.27	0.21		>SP694	36	
SK 727	C4−SP227	円	0.27	0.27	0.22	中世土師器(*412*)		72	
SK 743	C4−SX243	不整		2.10	0.12	土師器(*414*),須恵器(*413*),珠洲(*415*),釘?(*26*)	<SP810～813·849	19·21	27
SK 751	C4−SP251	円	0.42	0.38	0.26	焼石	>SP750	34	
SK 836	C4−SK336	楕円	0.95	0.65	0.19		>SD744	21	12
SK 844	C4−SK344	隅丸方	0.89	0.51	0.17		<SD843	19·21	
SK 845	C4−SK345	隅丸方	1.47	1.32	0.12	珠洲(*416*)		72	
SK 891	C4−SK391	円	0.27	0.26	0.14	珠洲(*417*)		72	
SK 896	C4−SK396	隅丸方	3.30	2.10	0.74	珠洲(*418*)	>SD744	72	27
SK 903	C4−SP403	円	0.24	0.22	0.11	土師器,須恵器(*419*)		72	
SK 1003	C5−SK03	楕円	1.00	0.86	0.72	土師器,須恵器,中世土師器(*421*),粘土塊,焼石		72	
SK 1004	C5−SK04	不整	1.95	0.98	0.12	土師器,須恵器		55·56	
SK 1108	C6−SP08	楕円	0.80	0.70	0.46	刀子(*18*)		73	25
SK 1208	C7−SX08	不整		1.32	0.20	中世土師器,珠洲,銭(*5*)		73	17
SK 1213	C7−SK13	不整	1.54	0.94	0.42			73	
SK 1214	C7−SK14	楕円	1.02	0.78	0.34			73	
SK 1215	C7−SK15	円	0.72	0.60	0.25	中世土師器		73	
SK 1216	C7−SK16	楕円	0.80	0.67	0.06	中世土師器		73	

第15表　岩坪岡田島遺跡　中世　土坑一覧(2)

遺構	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	特記	挿図	写真図版
			長さ	幅	深さ				
SK 1217	C7-SK17	不整	1.19	0.95	0.19		SP1261・1262＞SK1217＞SD697	73	17
SK 1218	C7-SK18	隅丸方	1.10	0.81	0.12			73	
SK 1219	C7-SK19	不整	1.26	1.07	0.13	中世土師器,珠洲		74	17
SK 1220	C7-SK20	不整	1.43	0.96	0.13			74	17
SK 1221	C7-SP21	楕円	0.51	0.40	0.27		＞SK1208	73	
SK 1223	C7-SK23	隅丸方	1.27	0.80	0.67			74	17
SK 1226	C7-SK26	方	2.27	1.59	0.18		＞SD697	74	17
SK 1230	C7-SK30	方	2.39	1.35	0.30	土師器,中世土師器,珠洲	＞SK1231	74	17
SK 1231	C7-SK31	隅丸方	0.96	(0.64)	0.16		＜SK1230	74	17
SK 1241	C7-SP41	楕円	0.57	0.42	0.20	中世土師器(*422*),珠洲,漆器		74	
SK 1252	C7-SK52	不整	0.99	0.82	0.32		＞SP1251・SD697	40・41	
SK 1266	C7-SK66	楕円	0.83	0.55	0.16		＞SD697	74	
SK 1277	C7-SK77	不整	1.48	1.44	0.24			75	27
SK 1278	C7-SK78	不整	1.14	0.61	0.18	中世土師器,珠洲,握り鋏(*22*)		75	
SK 1294	C7-SK94	円	0.77	0.76	0.22			75	
SK 1296	C7-SK96	円	0.83	0.82	0.26	土師器,須恵器,中世土師器,珠洲(*420*),釘(*28*)		75	27
SK 1300	C7-SK100	不整	4.01	3.36	0.42	土師器(*425・426*),須恵器(*423*),珠洲(*424*),土錘(*427*)		75	27
SK 1301	C7-SK101	不整	3.28	1.41	0.58	中世土師器,珠洲,加工板(*75*)	＜SK1300	76	
SK 1302	C7-SK102	不整	3.11	1.38	0.60	漆器(*11*)		76	
SK 1303	C7-SK103	楕円	1.08	0.91	0.34	中世土師器		76	
SK 1304	C7-SK104	楕円	1.03	0.63	0.20	土師器		76	
SK 1305	C7-SK105	不整	2.12	1.46	0.38	中世土師器,加工板(*73・74*)		76	
SK 1307	C7-SK107	楕円	1.03	0.58	0.22		＜SB01	29・30	
SK 1313	C7-SK113	円	1.02	0.90	0.29	土師器		76	
SK 1323	C7-SP123	円	(0.18)	0.28	0.35		＜SP1324	30	
SK 1326	C7-SK126	円	0.63	0.60	0.14	土師器,加工板		76	25・27
SK 1371	C7-SK171	方	1.81	1.36	0.25	中世土師器(*428・429*),珠洲,銭(*1～3・8～11・14・15*)		77	27
SK 1373	C7-SK173	円	0.77	0.71	0.24			77	
SK 1374	C7-SK174	円	0.56	0.54	0.09				
SK 1402	C7-SP202	円	0.22	0.20	0.12	珠洲(*430*)		77	
SK 1444	C7-SK244	円	1.08	0.86	0.40	中世土師器		77	
SK 1445	C7-SK245	方	2.95	1.51	0.60			77	21・27
SK 1477	C7-SK277	楕円	0.84	0.68	0.19	中世土師器,珠洲(*431*)		77	27
SK 1478	C7-SK278	円	0.75	0.70	0.21	中世土師器,珠洲		77	
SK 1480	C7-SK280	不整	1.37	0.91	0.24			77	

第16表　岩坪岡田島遺跡　中世末期～近世　溝一覧

遺構	旧遺構番号	遺構種類	規模(m)		出土遺物	特記	挿図	写真図版
			幅	深さ				
SD 1	A-SD01	溝	0.58	0.08			78	
SD 2	A-SD02	溝	0.96	0.08	珠洲		78	
SD 3	A-SD03	溝	0.72	0.06			78	20
SD 102	B2-SD02	溝	0.70	0.13	中世土師器(*119・120*),土錘		78	

3　遺物

（1）土器・陶磁器

A　縄文時代の遺構出土の土器

a　落ち込み

1121号落ち込み（ＳＸ1121，第79・80・83図，図版32）

1～*9*・*16*は，縄文土器で*7*の浅鉢を除いて深鉢。*1*は，口縁端部を欠損。微隆起線文を６段以上施す。*2*は，波状口縁で横位と縦位さらに渦文になるものと思われる微隆起線文を施す。石川県能登町真脇遺跡に類例がある。口縁部から胴部には，黒斑が見られる。内面は胴部下半，外面は胴部上半にそれぞれ煤が付着する。*3*～*6*は，同一個体だが接合しない。口縁部に微隆起線文を４段以上施す。*7*は，口縁が屈曲する浅鉢。内外面ともミガキの後にナデているようで非常に精巧な作り。胎土は，深鉢と異なり雲母を含む。高岡市上野Ａ遺跡に類例がある。*8*は，底部で，内面に輪積み痕が明瞭に残る。*9*は，口縁部に微隆起線文を10段施す。口縁部と胴部に黒斑が見られる。*16*は，小破片だが半截竹管による刺突を縦位に施す。諸磯ｃ式に相当しよう。土器の時期は，口縁部にシワ状となった微隆起線文，胴部に羽状縄文を施すことから前期後葉で蜆ヶ森Ⅱ式に相当する。

b　土器集中地点

１号土器集中地点（ＤＳ１，第81図）

*10*は，深鉢で口縁端部を欠損する。口縁部に微隆起線文を２段以上施す。内面には，輪積み痕が残る。外面は，煤が付着する。時期は，蜆ヶ森Ⅱ式。

６号土器集中地点（ＤＳ６，第81図，図版32）

*11*は，深鉢でほぼ完形。横位で潰れて出土した。波状口縁で微隆起線文を９段施す。胴部には，破損部があり，１孔しか確認できないが，補修孔がある。口縁外面と胴部内面には，煤が付着する。波状口縁部と底部には，輪積み痕が明瞭に残る。時期は，蜆ヶ森Ⅱ式。

７号土器集中地点（ＤＳ７，第84図，図版33）

*27*は，深鉢の胴部～底部。外面全体に木目状撚糸文を施す。胴部には，２個１対の補修孔がある。外面は，煤が付着し，吹きこぼれ状となっている。内面は，胴部下半に煤が付着。土器の時期は，口縁部の文様帯がないため明確にできないがその形状から前期末葉の朝日下層式であろう。

８号土器集中地点（ＤＳ８，第81～83図，図版32・33）

12～*15*・*17*は，深鉢。*12*は，口縁部と底部で胴部を欠損する。口縁部は，微隆起線文を６段施し，端部をユビナデし外面に折り返すような形とする。*13*は，胴部から底部。*14*は，口縁部に微隆起線文を９段施す。胴部下半には，黒斑が見える。*15*は，羽状縄文を施した胴部。輪積み痕が明瞭に残る。*17*は，底部。*18*は，鉢。胴部に草茎状の工具で斜位の後縦位に施文する。口縁端部は，刻む。内面には，輪積み痕が残る。*19*は，浅鉢の破片。ミガキの後ナデで７同様な胎土で精巧な作り。*20*は，台部か。*21*は，円形浮文を貼り付けた後左上から棒状工具による刺突を施した破片。*18*・*21*は諸磯ｃ式からの影響を受けたもの。土器の時期は，蜆ヶ森Ⅱ式。

９号土器集中地点（ＤＳ９，第83～84図，図版33・34）

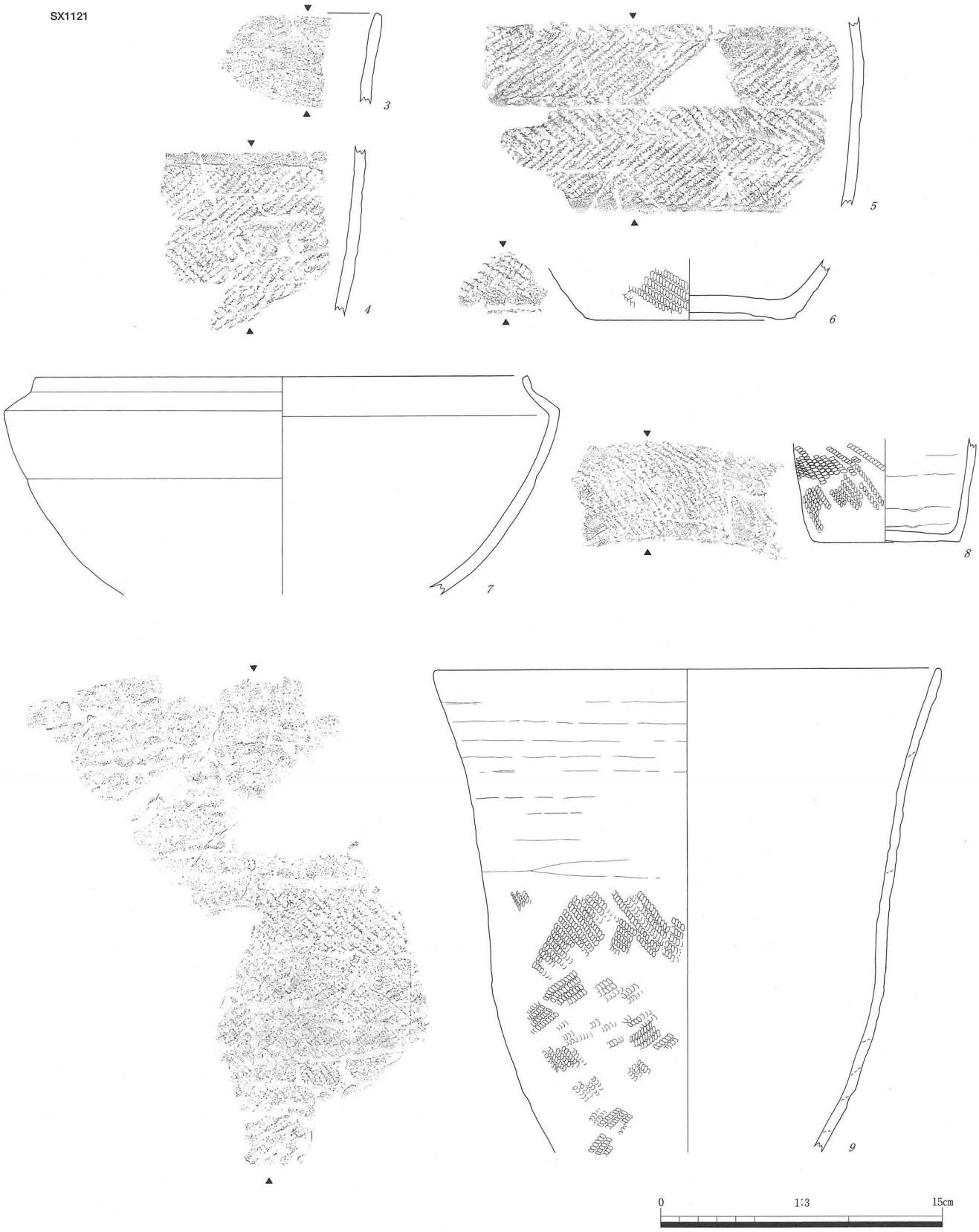
*23*は，鉢。肩部に縦位，胴部に横・斜位の半隆起線を施す。口縁端部は，剥離しているが突起をつける。*25*は，屈曲する深鉢の底部。屈曲部より下には，極細の粘土紐を貼り付けた結節浮線文で横・縦・菱形・鋸歯文を創出する。菱形文内には斜位の半隆起線文，その他は斜縄文を施す。真脇遺跡に

類例がある。*26*は，頸部に半隆起線を３段以上，胴部に木目状撚糸文を施す。外面は，吹きこぼれ状の煤が付着する。胎土は，他のものに比べ非常に粗い。土器の時期は，前期末葉の朝日下層式に相当する。

B　縄文時代包含層（Ⅷ層）出土の土器

*22*は，波状口縁に粘土を貼り付けた耳朶状の突起をもつもの。蜆ヶ森式。真脇遺跡に類例がある。*24*は，鉢の頸～胴部。頸部には，極細の粘土紐を貼り付けた結節浮線文を横位に２条施す。胴部は，Ｖ字の内部に横位の半隆起線，その下に斜縄文を施す。氷見市朝日貝塚に類例がある。土器の時期は，前期末葉の朝日下層式に相当しよう。　（町田賢一）

第79図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/3)
SX1121

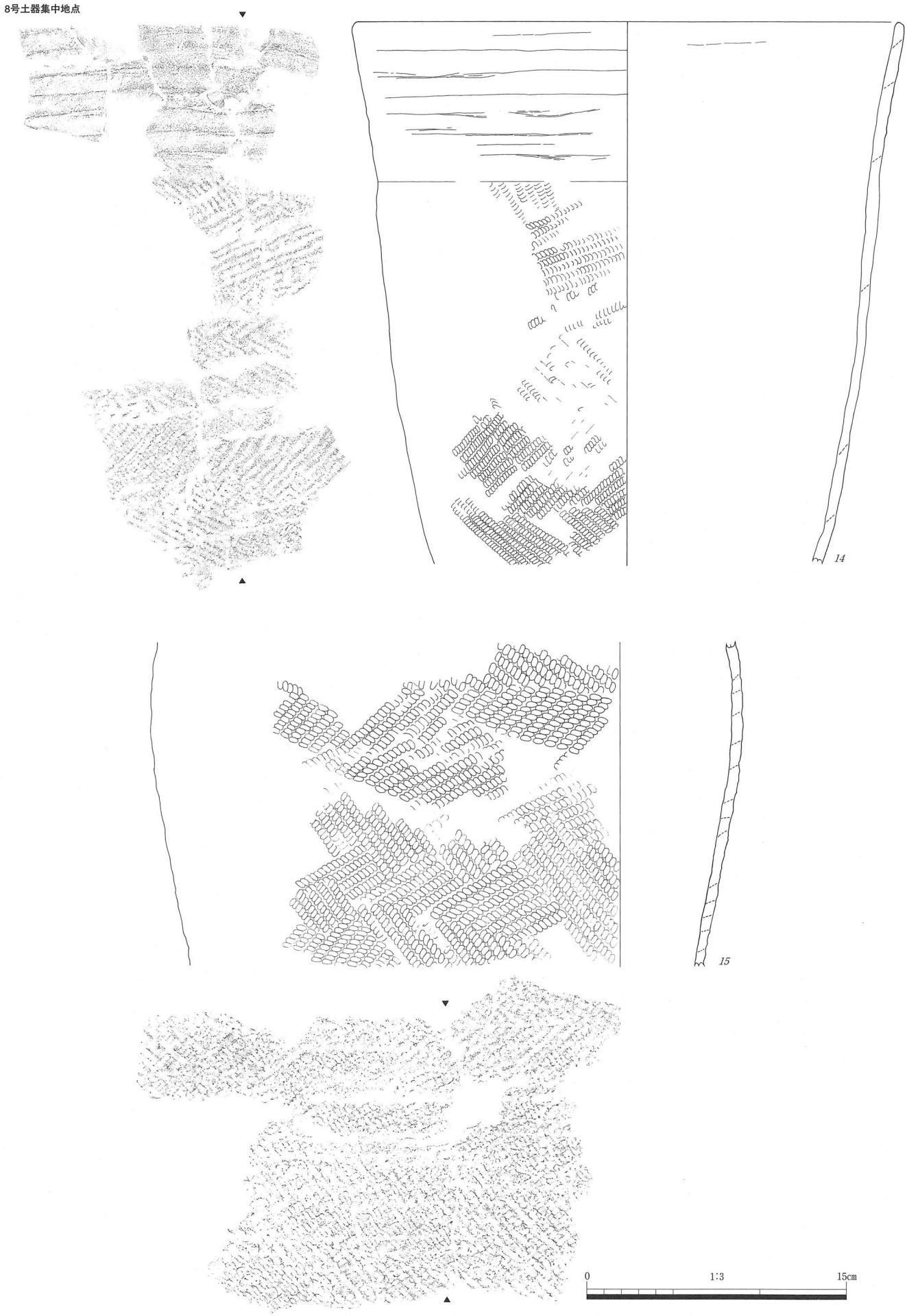


第80図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/3)
SX1121

1・6・8号土器集中地点

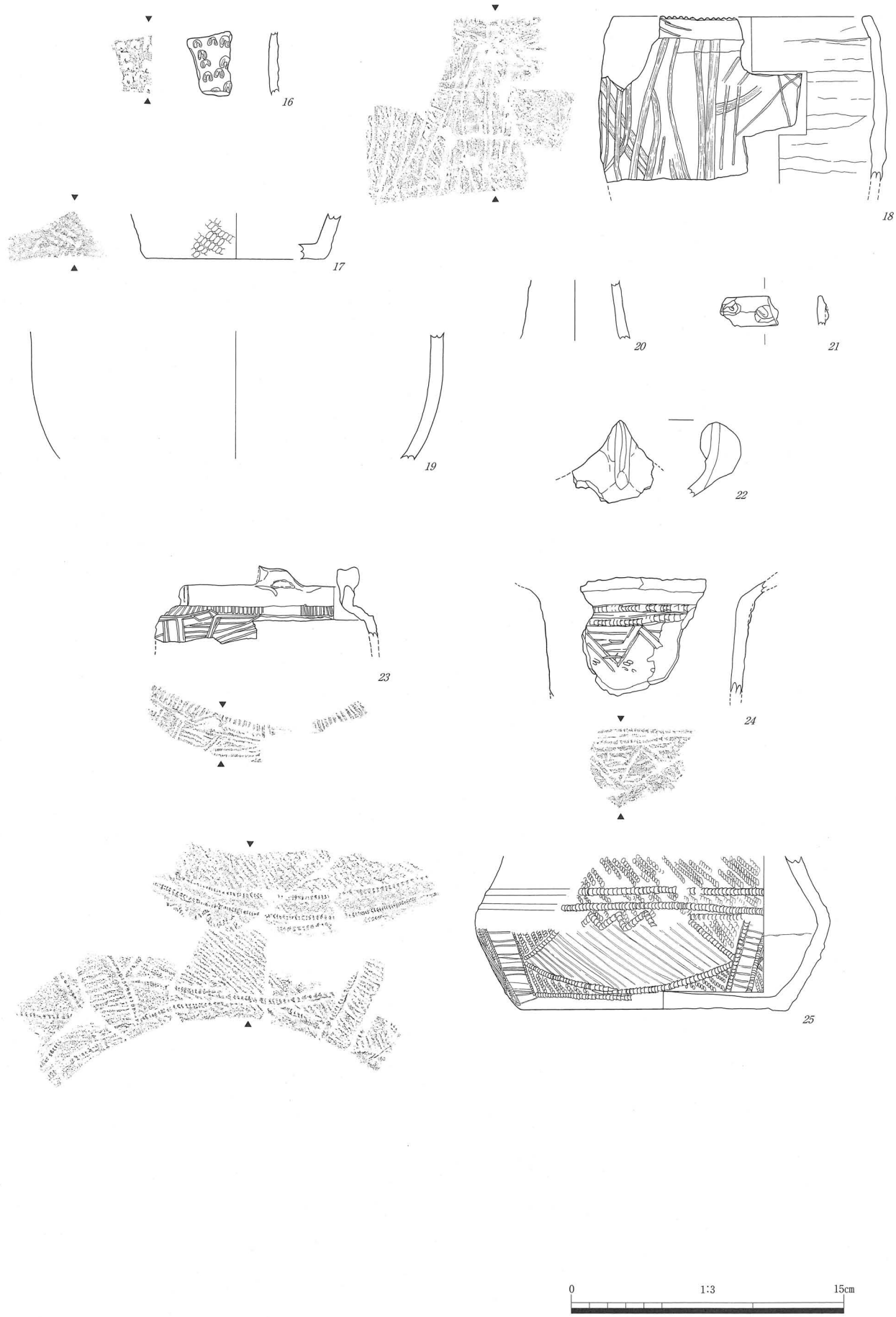
第81図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/3)

1号土器集中地点（*10*）6号土器集中地点（*11*）8号土器集中地点（*12・13*）



第82図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/3)
8号土器集中地点

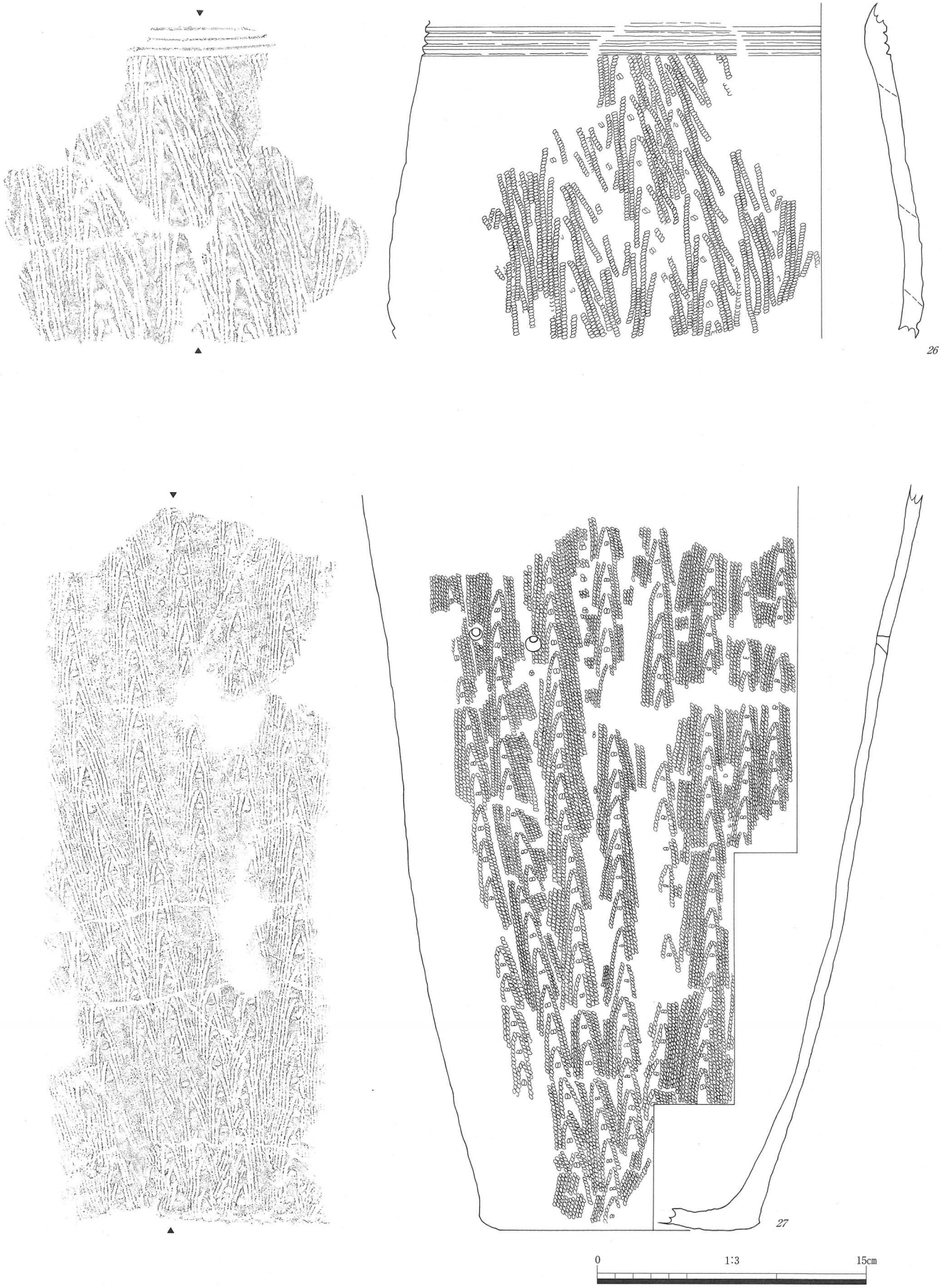
SX1121　8・9号土器集中地点



第83図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/3)

SX1121（*16*）　8号土器集中地点（*17*～*21*）　9号土器集中地点（*23*・*25*）　包含層（*22*・*24*）

7・9号土器集中地点



第84図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/3)

7号土器集中地点（*27*）　9号土器集中地点（*26*）

C　古墳時代～古代の遺構出土の土器・陶磁器

a　竪穴状遺構

1号竪穴状遺構（ＳＩ１，第85図，図版36・39）

*28*は縄文土器深鉢の底部である。平底で，器面は摩滅している。

*29*は製塩土器である。小型の棒状尖底土器の体部上半部分で，器壁は約４㎜と薄い。７世紀のものである。

30・*31*は土師器高杯である。杯部で，*30*は半球状に立ち上がり，口縁端部が外反する。

*32*は黒色土器高杯である。杯部内面はミガキで黒色処理される。脚は短く，裾部が広がる。摩滅のため調整痕は明瞭ではないが，脚部は縦方向のヘラケズリを施す。７世紀のものである。

33～*35*は須恵器である。*33*は杯Ｈ蓋である。口縁部は折れ曲がって垂下し，弱い稜がある。*34*・*35*は杯Ｈ身である。受部は外上方にのび端部は薄く尖る。立ち上がりはやや内傾し，端部は細く尖る。７世紀第１四半期のものである。

b　溝

506号溝（ＳＤ506，第85図）

*36*は黒色土器椀である。外面はヘラ削り，内面はミガキを施し黒色処理する。*37*は土師器椀である。半球状に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。*38*は須恵器杯Ｈ蓋である。端部は折れて垂下し，弱い稜がある。７世紀第１四半期のものである。

579号溝（ＳＤ579，第85図）

39～*42*は土師器である。*39*・*40*・*42*は高杯である。*39*・*40*は受部で，*39*は杯部下位に明瞭な段をもつ。*40*は半球状に立ち上がり，端部は外反する。*42*は脚部で，調整は摩滅のため明瞭ではないが，内面には粘土の接合痕と指頭圧痕がみられる。*41*は甕の口縁部である。「く」字状口縁で，調整は摩滅のため明瞭ではない。

696号溝（ＳＤ696，第85図，図版40）

43・*44*は製塩土器である。口径は約14㎝に復原される。小型の棒状尖底土器の体部上半部分で，ラッパ状に開き，口縁端部は内側に屈曲する。*44*は器面に粘土紐接合痕が残る。７世紀のものである。

45・*46*は土師器である。*45*は椀で内外面摩滅している。*46*は壺の口縁部で，端部は内側に丸く肥厚する。胎土に粗い砂粒を多く含む。

697号溝（ＳＤ697，第86図，図版37・39・57）

*47*は黒色土器高杯である。脚は短く，裾部が広がる。杯部内面は黒色処理される。脚部は縦方向のケズリ，赤彩痕が残る。７世紀のものである。

48・*49*は黒色土器椀である。*48*は有台椀である。摩滅が著しく不鮮明であるが，内面はミガキである。10世紀のものである。*49*は摩滅が著しい。

*50*は土師器有台椀である。細く高い高台が付く。

51・*52*は須恵器である。*51*は杯Ａで，底径は9.5㎝，底外面は回転ヘラ切り後ナデである。*52*は把手付きの甕である。把手は三角形を呈し，頸部直下に取り付けて下方へ折り曲げる。外面は平行叩きとカキメ，内面は同心当て具痕の上を数回不定方向になでている。

53・*54*は珠洲である。*53*は甕の口縁である。*54*は擂鉢である。体部から口縁部にかけてやや内湾し，端部は外方に面を取る。Ⅰ～Ⅱ期に比定され，12世紀後半～13世紀前半のものである。

*55*は土人形である。中空で型合わせ成形のものである。観音菩薩の頭部か。

c　土坑

507号土坑（ＳＫ507，第86図，図版35）

*56*は須恵器杯Ｈ蓋である。外面頂部は回転ヘラケズリ，内面はロクロナデで頂部の突出した部分を不定方向からなでる。７世紀前半のものである。

847号土坑（ＳＫ847，第86図，図版37）

*57*は須恵器甕である。頸部が弧状に強く外反し，口縁部は外方に面を取り，内端は折りたたむようにして肥厚させる。外面は疑似格子叩き，内面は同心円当て具痕がある。７世紀のものである。

1297号土坑（ＳＫ1297，第86図，図版40）

*58*は土師器甕である。球状の体部に，緩やかに外反する長めの口頸部が付く。体部外面は縦方向のハケメ，内面は横方向のハケメを施す。７世紀のものである。

1298号土坑（ＳＫ1298，第86図）

*59*は須恵器杯Ｈ蓋である。頂部は平坦で稜がある。外面頂部は回転ヘラケズリ，内面はロクロナデで頂部に一方向ナデを施す。*60*は古墳時代の黒色土器椀である。半球状に立ち上がり，器壁は厚い。胎土は粗い砂粒と骨針を多く含む。

1378号土坑（ＳＫ1378，第86図，図版35）

*61*は須恵器高杯である。杯部は見込みが平坦で，脚は裾部が広がる。杯部内面には飛び散った粘土粒が溶着している。７世紀後半のものである。

1432号土坑（ＳＫ1432，第86図）

*62*は須恵器杯Ｇ蓋である。内面に小さいかえりが付く。頂部は回転ヘラケズリである。外面端部から内面かえりまで暗灰色を呈し重ね焼き痕とみられる。７世紀第４四半期のものである。

d　土器集中地点

10号土器集中地点（ＤＳ10，第87図，図版35・39・40）

*63*は弥生土器広口壺である。直立した頸部に外反する口縁がつく。口縁端部は三角形に面を取り，木口による連続圧痕で羽状に施文する。外面は縦位，内面は横位のハケメを施す。弥生時代中期中葉のものである。

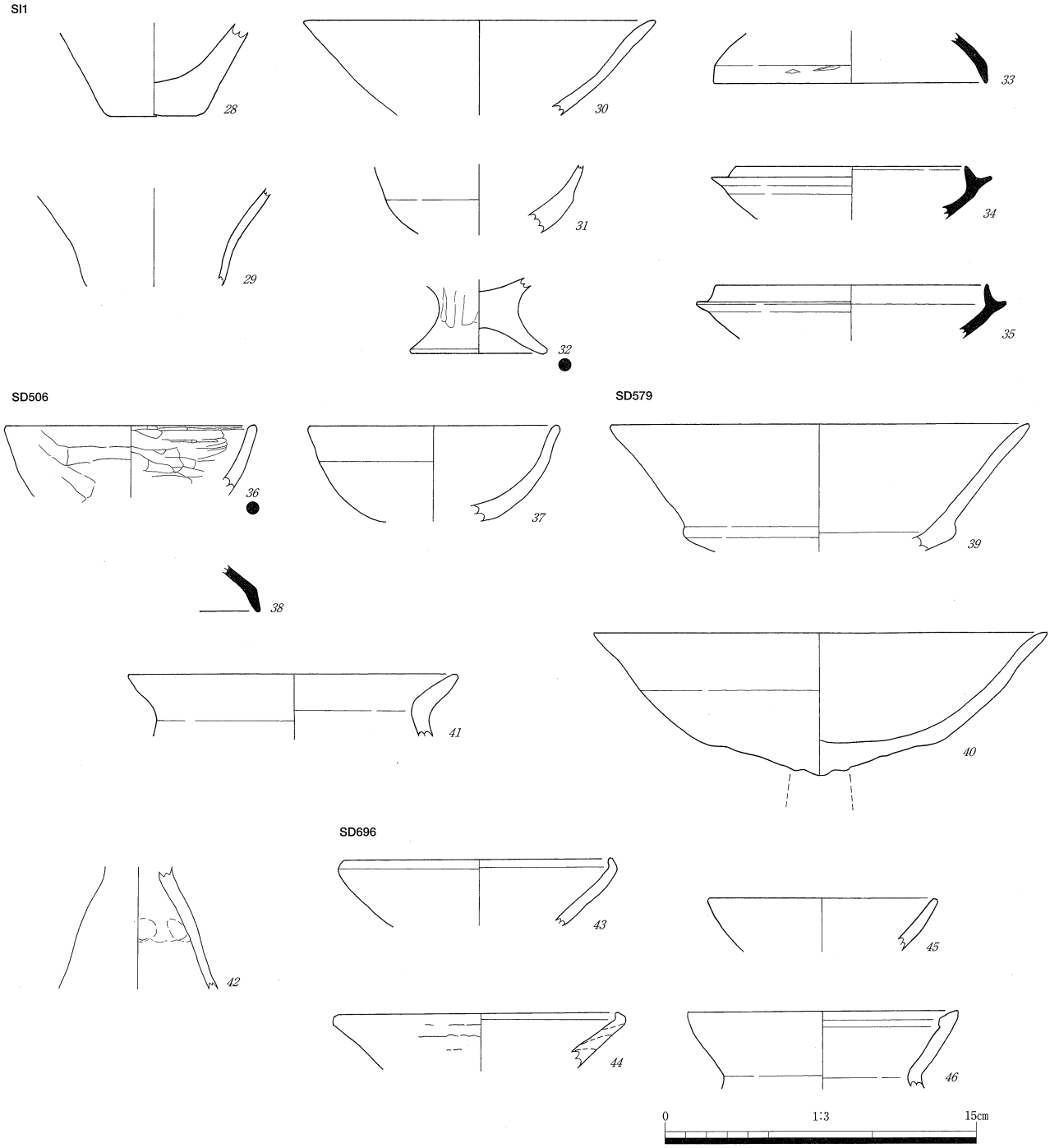
*64・65*は須恵器である。*64*は杯Ｈ蓋である。端部は折れて垂下し，弱い稜がある。*65*は杯Ｈ身である。口径12.0㎝，器高3.5㎝，底径7.0㎝である。受部は外上方にのび，立ち上がりは内傾後上方へ反る。端部は尖らせる。外底面はヘラ切り後ナデ，板状工具で数条押さえた圧痕が残る。底部と体部の境は帯状の回転ヘラケズリ，外面下半と内面はロクロナデ後頂部に仕上げナデを施す。受部端部から外面全面が暗灰色になっており重ね焼きの跡とみられる。*64・65*は７世紀第１四半期のものである。

*66～68・71～74*は土師器である。*66*は甕の底部である。平底で，外面全面に不定方向のハケメが施される。胎土に骨針を含む。*67・68*は椀である。半球状に丸く立ち上がる。*67*は内面ミガキ，外面ヨコナデを施し，*68*は外面に指頭圧痕の凹凸が残る。*67*は外面の一部，*68*は口縁部が部分的に黒変する。７世紀のものである。*71*は鍋である。胎土に粗い砂粒を多く含む。*72・73*は高杯の脚部である。*72*の内面にはしぼり痕がある。*73*は内外面摩滅している。*74*は把手である。円筒状で端部は上方へ反る。胎土は粗い砂粒を多く含み，にぶい橙色を呈する。

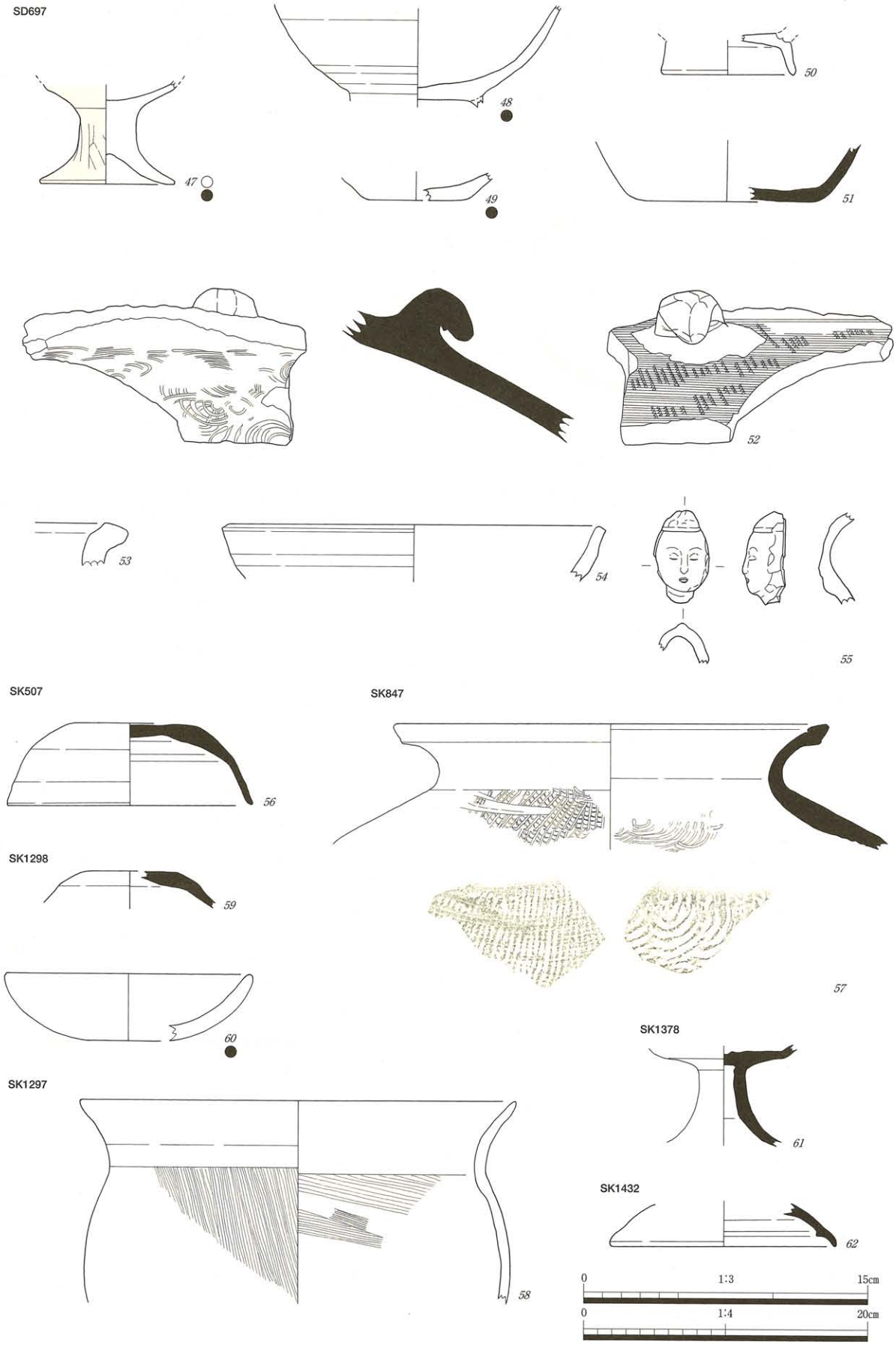
*69・70*は黒色土器椀である。内面はミガキで黒色処理する。外面は口縁部にヨコナデを施し体部は一部に不定方向のナデがみられるが器面は粗い。７世紀のものである。

*75・76*は製塩土器である。小型の棒状尖底土器の，ラッパ状に開く体部上半部分である。口径は約

12cmに復原される。口縁端部は*75*が内側にわずかに屈曲し，*76*は面を取る。器面には粘土紐接合痕が残る。7世紀のものである。



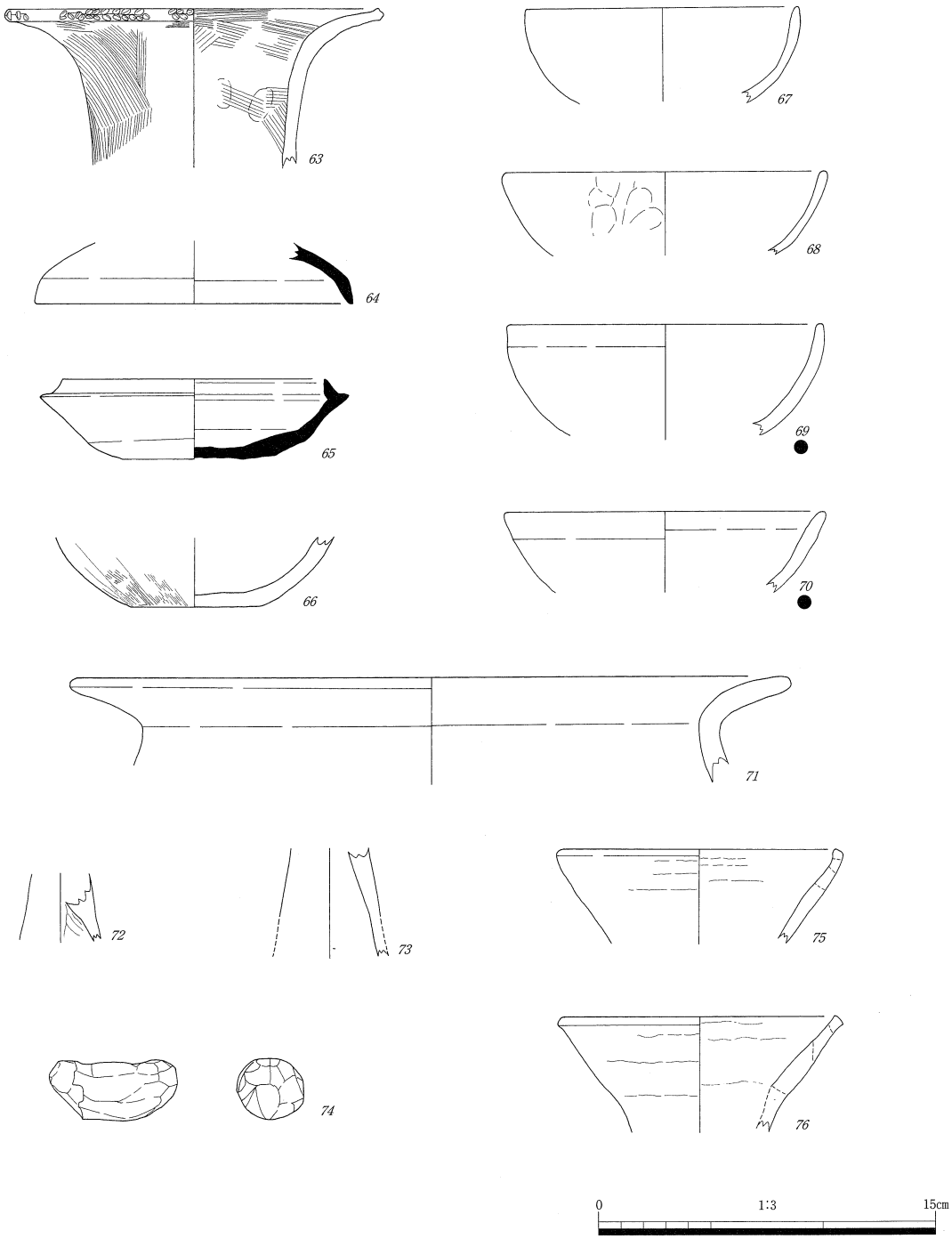
第85図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/3)
SI1（*28*～*35*）　SD506（*36*～*38*）　SD579（*39*～*42*）　SD696（*43*～*46*）



第86図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器（*47～52・55～62*　1/3，*53・54*　1/3）

SD697（*47～55*）　SK507（*56*）　SK847（*57*）　SK1297（*58*）　SK1298（*59・60*）　SK1378（*61*）
SK1432（*62*）

土器集中地点 10



第87図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/3)
10号土器集中地点

D　中世の遺構出土の土器・陶磁器

a　掘立柱建物

3号掘立柱建物（ＳＢ３，第88図）

*77*は中世土師器皿である。口径約９cmの小皿である。ロクロ成形で，口縁部と体部の境で緩く屈曲する。口縁端部に煤が付着し，灯明皿として使用されたものと考えられる。

5号掘立柱建物（ＳＢ５，第88図）

*78*は中世土師器皿である。ロクロ成形で底外面は回転糸切りである。内面全体に薄く煤が付着する。胎土には細かい砂粒を多く含む。12世紀後半のものである。

16号掘立柱建物（ＳＢ16，第88図）

*79*は須恵器甕である。口縁端部は方頭で，外面に薄く平坦な縁帯をもつ。

17号掘立柱建物（ＳＢ17，第88図）

*80*は中世土師器皿である。非ロクロ成形で口縁部にヨコナデを施し，端部外面に面を取る。口縁部にタール状の灯芯油痕が付着する。

23号掘立柱建物（ＳＢ23，第88図）

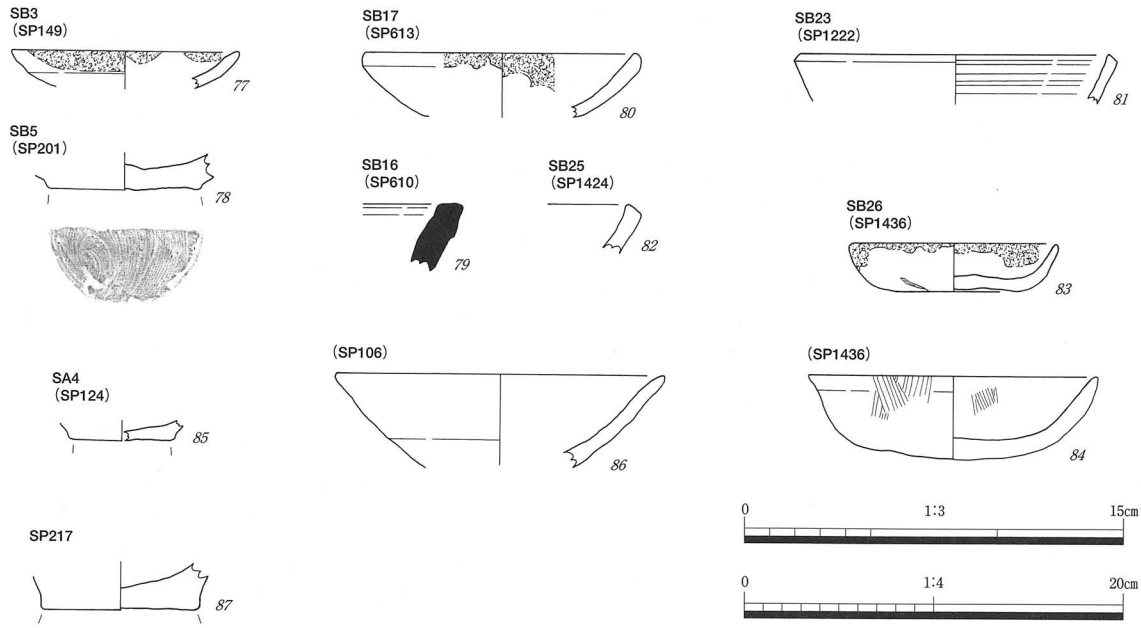
*81*は珠洲擂鉢である。口縁部内端を爪状に挽き上げる。Ⅱ期に比定され13世紀前半のものである。

25号掘立柱建物（ＳＢ25，第88図）

*82*は珠洲擂鉢である。口縁部内端を爪状に挽き上げる。Ⅱ期に比定され13世紀前半のものである。

26号掘立柱建物（ＳＢ26，第88図，図版41）

*83・84*は非ロクロ成形の中世土師器皿である。*83*は口径8.0cm，器高1.9cmの小皿である。平底の底部から，口縁部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。口縁部にヨコナデを施し，底外面は無調整である。内面の調整は摩滅のため明瞭ではない。口縁部に灯芯油痕が残る。*84*は口径11.4cm，器高3.3cmの深身の形態である。全体にいびつな形で調整も粗雑である。底部はやや丸みがあり安定しない。口縁部は内湾気味に立ち上がるが，一部外反気味になる部分もある。口縁端部は丸く収める。調整は摩滅のため明瞭ではないが，口縁部内外面の一部に縦方向のハケ状工具痕が残る。



第88図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器（*77・78・80・83～87*　1/3，*79・81・82*　1/4）
SB3（*77*）　SB5（*78*）　SB16（*79*）　SB17（*80*）　SB23（*81*）　SB25（*82*）　SB26（*83・84*）
SA4（*85・86*）　SP217（*87*）

b　柵

4号柵（ＳＡ４，第88図）

*85・86*はロクロ成形の中世土師器皿である。*85*は底径3.8cmの小皿で，底外面は回転糸切りである。*86*は大型の皿で椀形を呈する。*85・86*とも胎土に細かい砂粒を多く含む。12世紀後半のもの。

c　柱穴

217号柱穴（ＳＰ217，第88図）

*87*は中世土師器皿である。ロクロ成形で底外面は回転糸切りである。底径は約６cm，やや厚い底部である。胎土に骨針を多く含む。12世紀後半のものである。

d　溝

４号溝（ＳＤ4，第89図，図版58）

*88・89*は須恵器である。*88*は甕である。外面に平行叩き，内面に同心円当て具痕が残る。*89*は壺の頸部である。

*90・91*は中世土師器皿である。*90*は非ロクロ成形の皿であるが，調整は摩滅のため明瞭ではない。*91*は柱状高台の底部で，下端が外方へ広がる形態である。底径は5.6cmである。底外面は回転糸切りである。底部と体部を接合した際の空隙が断面に数箇所みられる。12世紀中頃のもの。

*92～94*は土錘である。*92*は欠損しているが，樽形を呈し，直径5.0cm，孔径1.6cm，重量147.3ｇを測り，大型で重い。*93*は樽形を呈し，長さ6.2cm，直径4.8cm，孔径1.8cm，重量は117.0ｇを測り，大型で重い。*94*は欠損しているが，樽形を呈する。

11号溝（ＳＤ11，第89図，図版39・42・53・54・58）

*95*は須恵器壺の底部である。焼成不良で軟質である。

*96*は土師器甕である。胎土に粗い砂粒を多く含み，内外面摩滅している。

*97*は黒色土器有台椀である。内面はミガキで黒色処理し，底外面は回転糸切りである。胎土に細かい砂粒と雲母を多く含む。

*98～106*は中世土師器皿である。*98～101*は有台皿である。高台径は5.7～8.1cmである。高台は外方へ開き気味に貼り付けられ，断面三角形を呈し端部は丸く収める。胎土に骨針と細かい砂粒を多く含む。*98*は底外面に回転糸切り痕が残る。*100*は切り離し後に底部全体に粘土を厚く貼り付け，ロクロ回転を利用して高台を作り出しており，高台内は渦巻き状に盛り上がっている。*102*はロクロ成形の皿で底部は欠損している。胎土に骨針と細かい砂粒を多く含む。*103～105*は柱状高台の皿の底部である。底径は3.6～5.5cmで，*103・104*は小皿である。高台の形態は，円柱状に垂直に立ち上がり，*104*は下端がやや広がる。底外面は回転糸切りである。胎土は骨針と細かい砂粒を多く含む。*103*は見込みに圏線状のロクロナデ痕が残る。*104*は見込み中央を円形に若干窪ませる。*106*はロクロ成形で，口縁部を上方へ屈曲させるように立ち上げる。胎土に細かい砂粒を多く含む。*102・106*は12世紀代，*103～105*は12世紀前半～中頃のものである。

*107・108*は珠洲である。*107*は擂鉢である。口縁部は方頭を呈し水平口縁で，珠洲Ⅳ期に比定され，13世紀末～14世紀中頃のものである。*108*は甕の底部である。*107・108*はともに胎土に骨針を含む。

*109*は古瀬戸卸皿である。底外面は回転糸切りである。内面と外底面の一部までハケ塗りで灰釉が施釉される。古瀬戸中期様式Ⅰ～Ⅱ期に比定され，13世紀末～14世紀初頭のものである。

*110*は越中瀬戸皿である。外面は畳付までをロクロナデ，高台内面は碁笥底状に削り出す。内面上部に鉄釉を施す。17世紀～18世紀のものである。

111～*118*は土錘である。*111*～*116*は樽形，*117*・*118*は球形を呈する。*111*は長さ6.5cm，直径5.1cm，孔径1.8cmで大型のものであるが，欠損している。*112*は長さ5.9cm，直径5.1cm，孔径1.3cmで大型のものであるが，欠損している。*113*・*115*は欠損しており，孔径は2.1cmである。*114*はほぼ完形であるが，ややすり減っており，長さ5.0cm，直径4.2cm，孔径1.7cm，重量は75.2ｇである。*116*はほぼ完形であるが，端部がややすり減っており，残存長4.9cm，直径4.7cm，孔径1.7cm，重量80.8ｇである。*117*は欠損しているが，直径4.0cm，孔径は1.1cmである。*118*は欠損している。

102号溝（ＳＤ102，第90図）

119・*120*はロクロ成形の中世土師器皿である。*119*は柱状高台で，底径は4.5cm，底外面は回転糸切りである。12世紀前半のものである。*120*は底径5.4cm，底外面は回転糸切りである。内面から外面にかけて中空状に膨らむ穴が開いているが，胎土に含まれた植物質のものが燃えて消滅したものと考えられる。12世紀後半のもの。*119*・*120*とも胎土に細かい砂粒を多く含む。

103号溝（ＳＤ103，第90図）

*121*は土錘である。欠損しているが，孔径は1.2cm，重量は63.1ｇである。

104号溝（ＳＤ104，第90図，図版58）

*122*は土錘である。樽形を呈し，長さ5.2cm，直径4.2cm，孔径1.4cm，重量は93.0ｇである。

*123*は中世土師器皿である。柱状高台で底外面は回転糸切りである。*123*は内面中央を直径2.6cmの円形に深く窪ませている。窪みの周囲は軽くナデているが，底部に体部を貼り付けた際の粘土接合痕が残る粗雑な調整である。12世紀前半のものである。

140号溝（ＳＤ140，第90図，図版53・58）

124～*126*はロクロ成形の中世土師器皿である。*126*は柱状高台で底外面は回転糸切りである。*124*は底部は薄く，外面回転糸切りで，内面には圏線状のロクロナデの跡が残る。12世紀後半のものである。*125*は口縁端部が外方へやや肥厚し，弱い面取りをしている。内面には煤が付着する。12世紀代のものである。*124*～*126*のすべての胎土に骨針と細かい砂粒が多く含まれる。

*127*は玉縁口縁の白磁碗で，太宰府分類碗Ⅳ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半のものである。

*128*は土錘である。樽形を呈し，長さ5.4cm，直径4.8cm，孔径1.7cmであるが，摩滅している。

301号溝（ＳＤ301，第90～95図，図版36・37・39・42・48・50・51・53・54・58）

129・*130*は土師器である。*129*は小片のため詳細は不明であるが，鍋か。胎土に砂粒を多く含む。*130*は高杯の脚部である。裾部が屈曲外反する。

131～*134*は須恵器である。*131*は甕で，口頸部は外傾し，端部は帯状に肥厚して直下に波状文を施文する。７世紀末～８世紀のもの。*132*・*133*は杯Ｇ蓋で，かえりは小さく，外湾して端部は尖る。７世紀第４四半期のものである。*134*は杯Ｂで，底外面は回転ヘラ切りである。

*135*は黒色土器椀である。内面はミガキで黒色処理し，底画面は回転糸切りである。

136～*156*は中世土師器皿である。*136*・*137*は口径約７～7.8cm，器高1.9～2.0cm，底径4.7cmの小皿である。ロクロ成形で底外面は回転糸切りである。胎土に骨針を含む。12世紀後半のもの。*138*～*144*は口径7.6～9.6cm，器高1.3～2.0cmの小皿である。底部から口縁部にかけて丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。口縁端部は丸く収める。非ロクロ成形だが，調整は摩滅のため明瞭ではない。*145*～*154*は口径約11～14cm，器高2.3～2.5cmの皿で，非ロクロ成形である。*145*・*146*・*148*～*153*は口縁部外面に幅の狭い一段のヨコナデを施す。内面の調整は摩滅のため明瞭ではない。*146*・*151*は端部外面に弱く面を取り，*152*はつまみ上げるようにやや幅の広い面を取る。*148*～*150*・*152*～*154*は端部を丸く収める。

147・*154*はヨコナデ幅が若干広く，二段に分けてナデている。*147*は見込みの縁辺部を指頭で外方へ押し出すようにしているが，*154*は緩やかに内湾して底部へ向かっている。*155*は柱状高台である。高台下半は裾広がりに挽き出され，高台径は6.8cmである。底外面は回転糸切り，内面中央に一方向のハケ状工具痕が残る。12世紀前半のものである。*156*はやや厚底で柱状高台に近い。底径は5.8cmである。12世紀中頃のものである。*155*・*156*は胎土に骨針を多く含む。

*157*は土師器椀である。摩滅のため調整は明瞭ではないが底外面は回転糸切りである。

158～*205*は珠洲である。*158*～*173*は甕である。口径は，*160*～*166*が40～50cm，*167*・*168*が60cm以上に復原される。外面には平行叩き，内面には円礫の当て具痕が残る。外面叩きは頸部よりやや下がった位置から行われる。*160*・*167*は嘴状の口縁部を水平に挽き出す形態で，Ⅱ期のものである。*158*・*161*～*166*・*168*はⅡ～Ⅲ期のものである。*158*・*164*～*166*は短い頸部が内屈し，口縁端部はやや垂下して丸く収める。*161*・*163*は短い頸部が内屈し，口縁端部は丸く肥厚する。*162*・*168*は方頭を呈する口頸部がくの字状に屈曲する。*168*は漆継ぎされるが，約１㎜のずれがある。*159*は方頭を呈する口頸部がくの字状に屈曲し，Ⅳ期に比定される。*169*～*173*は底部である。外面の叩きは，*170*～*173*は底部直上まで行われる。底外面は砂底で，*172*には板状圧痕が残る。*174*～*179*は壺である。*174*は大型の壺で，口縁部は外傾して端部に面を取り，内面及び端部に櫛状具を用いた波状文を施す。Ⅱ～Ⅲ期に比定される。*175*は頸部は外傾し，口縁端部は嘴状に外方へ挽き出す。叩打成形の壺で，体部外面は平行叩きである。口頸部内面に，焼成後細かく打ち欠いたような連続する小円形の窪みがある。Ⅲ～Ⅳ期に比定される。*176*はⅠ期のもので，ブリッジ状の横耳を貼り付けた四耳壺で，肩部に櫛目波状文を施す。*177*はⅡ期のもので，頸部下に櫛目波状文がめぐる。*178*・*179*はロクロ成形の長胴の壺で，底外面は静止糸切りである。*180*～*205*は擂鉢である。*180*は小型の鉢で，口径約16cmである。口縁部は先細りし端部を丸く収め，Ⅰ～Ⅱ期に比定される。*181*～*183*はⅡ期のもので，体部は直線的に立ち上がり，口縁部は端面が外傾する。*184*はⅡ期のもので，端部はやや丸みをもち，水平口縁となる。内面には１単位2.3cm幅に11条の卸目原単位を用いた，縦・横に交わる波状の卸目を有す。*185*・*186*はⅡ～Ⅲ期のもので，体部は直線的に立ち上がり，口縁部は水平口縁となる。*187*・*188*・*191*～*193*は，Ⅱ期のもので，内湾する口縁部内端を爪状に上方へ挽き上げる。卸目原体は*188*が2.5cm幅に16条，*191*が2.4cm幅に11条を数える。*189*・*190*は体部はやや膨らみをもって立ち上がり，口縁部は内湾し水平に面を取る。口径は*189*が約35cm，*190*が約31cmに復原される大型のもので，Ⅱ期に比定される。*190*は外面に粘土紐接合痕があり，内面の一部には漆が付着する。*194*・*195*はⅣ期のもので，口縁部端面が外傾し，やや拡張する。卸目原体は*194*が2.4cm幅に９条，*195*が1.7cm幅に７条を数える。*195*は内外面に煤が付着する。*196*～*205*は底部である。底外面は静止糸切りで，*196*・*204*は板状圧痕が残る。*203*・*205*は幅広の櫛歯原体で卸目が密に施される。櫛歯原体の単位がわかるものは，*200*が2.2cm幅に９条，*201*が1.7cmに８条，*202*が1.6cm幅に８条，*203*が３cm幅に13条，*204*が2.1cm幅に13条，*205*が3.3cm幅に10条を数える。

*206*は古瀬戸瓶子である。肩が張り体部下半は直線的な形態で，いわゆる梅瓶である。肩部は蕨手文の連続押捺による唐草文と梅文で飾られる。外面はロクロナデで，内面はロクロナデの後縦方向のナデで指頭圧痕があり，頸部近くには連続する縦方向の強い指頭圧痕が残る。鉄釉を流しかける。古瀬戸中期様式Ⅰ～Ⅱ期に比定され，13世紀末～14世紀初頭のものである。

*207*は瀬戸美濃天目茶椀である。口縁端部は短く外反する。鉄釉がかかる。大窯Ⅳ期前半に比定され，16世紀末のものである。

208～*210*・*213*は中国製白磁碗である。*208*は口縁端部内面に稜を持ち，外方に尖る。上端部は水平にする。胎土と釉調は灰白色である。太宰府分類碗Ⅳａ類に相当し，12世紀後半のものである。*209*は，施釉後に口縁部の釉を掻き取り口禿としたもので，胎土は明るい灰白色，釉調は明オリーブ灰色を呈する。太宰府分類碗Ⅸ類に相当し，13世紀後半～14世紀前半のものである。*210*は底部で，断面三角形の低い高台が付く。全面に施釉後高台部分の釉を掻き取る。高台内端に砂が付着する。胎土は明るい灰白色，釉調は明るい灰緑色を呈する。*213*は瓶である。口縁部は外方へ折れてやや垂下する。太宰府分類壺Ⅲ類に相当する。

211・*212*は中国製青磁である。碗で，口縁端部は丸く，やや外反する。*211*は外面に鎬蓮弁文をもつ。胎土・釉調は明るい灰白色を呈する。太宰府分類の龍泉窯系碗Ⅱｂ類に相当し，13世紀中頃のものである。*212*は外面に分割線をヘラ彫りする。

214～*221*は土錘で，樽形が多く，球形のもの（*217*）もある。*214*は長さ5.8cm，直径3.6cm，孔径1.8cm，重量は55.8ｇである。*215*は長さ5.2cm，直径4.7cm，孔径1.8cm，重量107.3ｇを測り，大型で重い。*216*は長さ4.4cm，直径4.4cm，孔径1.3cm，重量75.0ｇである。*217*は長さ4.8cm，直径4.3cm，孔径は1.5cm，重量84.5ｇである。*218*は欠損している。*219*は長さ4.2cm，直径3.1cm，孔径1.1cm，重量26ｇと薄く軽いが，表面は摩滅しており，すり減ったものとも考えられる。*220*は欠損しており，直径3.9cm，孔径1.7cmである。*221*は長さ4.9cm，直径3.7cm，孔径1.6cm，重量は46.4ｇである。

401号溝（ＳＤ401，第95・96図，図版48・50・51・52・54）

*222*は須恵器杯Ｂである。摩滅が著しい。

*223*は土師器椀である。内外面摩滅している。

224・*225*は非ロクロ成形の中世土師器皿である。*224*は口径7.8cm，器高1.5cmの小皿である。口縁部に薄く煤が付着し，灯明皿として使用されたものと考えられる。底部から口縁部にかけて丸みを帯びて緩やかに立ち上がる器形である。*225*は口径約13cmである。口縁部の広い範囲にタール状の灯芯油痕が付着する。*224*・*225*とも調整は摩滅のため明瞭ではない。

*226*は古瀬戸天目茶椀である。削り出し高台で，鉄釉がかかり底外面は露胎である。古瀬戸後期様式Ⅰ期に比定され，14世紀後半のものである。

227・*228*は中国製青磁である。*227*は碗で，体部は直線的に開く。内外面無文で，胎土は灰白色，釉調は灰オリーブ色を呈する。太宰府分類の龍泉窯系碗Ⅰ１ａ類に相当し，12世紀中頃～後半のものである。*228*は皿で，体部中位で屈曲し，内面は段状になる。胎土は灰白色，釉調はオリーブ黄色を呈する。同安窯系皿Ⅰ２ａ類に相当し，12世紀後半～13世紀前半のものである。

*229*は土錘で，欠損している。

230～*254*は珠洲である。*230*～*234*は甕である。外面平行叩き，内面に円礫の当て具痕が残る。*230*は肩が球状に張り出し，コの字状の長頸が付く。口縁端部は嘴状に挽き出す。*231*も口縁部を嘴状に挽き出し，垂下させるもので，*230*・*231*はⅠ２期に比定される。*232*は底部で，上半は叩打成形，下半はロクロ成形である。底外面は板状圧痕が残る。*233*・*234*は口縁部が方頭を呈し，くの字状に屈曲する。*232*～*234*はⅣ期に比定される。*235*～*241*は壺である。*235*は肩が張る球胴形の壺で，内外面ロクロナデを施す。*236*はⅠ２期のもので，口縁部が外反し，外方に面を取り端部は丸く収める。*237*・*238*は四耳壺で，Ⅰ期に比定され，肩にブリッジ状の横耳をつけ，櫛歯波状文がめぐる。*239*～*241*は長胴形の壺である。*242*～*254*は擂鉢である。*242*は片口鉢で，体部が内湾して立ち上がり，口縁端部は水平口縁となる。*243*は波状の卸目を有する。*244*は口縁部が内湾し，端部は先細りして水平口縁と

なる。*242*～*244*はⅠ期に比定される。*245*・*246*は体部が直線的に開き，波状の卸目を有するものでⅡ期のものである。*246*は口縁部内端を爪状に上方へ挽き上げる。卸目原体は*245*が1.7cm幅に11条，*246*が1.2cm幅に11条を数える。*247*は水平口縁であるが，端面はやや丸みをもち櫛歯波状文が施される。*248*は水平口縁で端面はやや拡張する。卸目は1.9cm幅に９条を数える。*247*・*248*はⅢ～Ⅳ期に比定される。*249*はⅠ期のもので，口径17.6cm，器高8.0cm，底径7.0cmの小型の鉢である。体部が内湾して立ち上がり，口縁端部は丸みをもち，外面に弱い面を取る。内外面に粘土紐接合痕が残る。全面ロクロナデで底外面は静止糸切りである。*250*はⅡ期のもので，器壁は厚いが，口径は21cmに復原され，小型の鉢である。体部は直線的に開き，口縁端部は方頭で端面は外傾する。*251*～*254*は底部で，全面ロクロナデを施し，底外面は静止糸切りで板状圧痕が残るものもある。

402号溝（ＳＤ402，第97図）

*255*は珠洲甕である。長頸がコの字状に外屈し，口縁部は嘴状に挽き出され垂下する。外面は平行叩きが頸部よりやや下がった位置から行われ，内面は円礫の当て具痕が残る。Ⅰ期に比定される。

414号溝（ＳＤ414，第97図）

*256*は珠洲擂鉢である。口縁部は内湾して端部は先細りし，端面は外傾する。Ⅰ～Ⅱ期に比定され，12世紀後半～13世紀前半のものである。

415号溝（ＳＤ415，第97図）

257・*258*は珠洲擂鉢の底部である。内外面ロクロナデで底外面は静止糸切りである。*258*は１単位2.1cm幅に８条の櫛歯原体を用いた卸目が施される。

453号溝（ＳＤ453，第97・98図，図版58）

*259*は弥生土器高杯の脚部である。棒状の脚部で外面はナデ後ハケ目を施し，内面には粘土紐接合痕としぼり痕が残る。弥生時代後期のものである。

260～*266*は須恵器である。*260*～*263*は杯Ｂである。*260*・*261*・*263*は高台が外方へ開き気味に付き，*262*は内傾する。*261*は底外面は回転ヘラ切り後ナデ，高台内に連続する爪状の細い工具痕が２条めぐる。*264*・*265*は高杯で，*264*は３方透かしが入り，その上に一条の凹線が入る。７世紀第１四半期のものである。*266*は大型品の口縁部で，鍋か。端部は上方へつまんで断面三角形を呈する。

267・*268*は非ロクロ成形の中世土師器皿である。*267*は口径8.7cm，器高1.8cmの小皿である。口縁部はやや外反し端部は丸く収める。調整は摩滅のため明瞭ではない。口縁部の広い範囲に，厚いタール状の灯芯油痕が付着している。*268*は口径約11cmで，口縁部に幅の狭い一段のヨコナデを施す。

269・*270*は古瀬戸である。*269*は小型の製品で合子か。底外面は糸切りで，内面に灰釉がかかり外面は露胎である。中期様式のもので13世紀末～14世紀中頃のものである。*270*は天目茶椀である。削り出し高台で，内面は鉄釉，外面は錆釉がかかる。後期様式Ⅱ期で14世紀末～15世紀初頭のものである。

271・*272*は中国製青磁碗である。*271*は外面に縦の櫛描文がある。胎土は灰白色，釉調は灰オリーブ色を呈する。太宰府分類の同安窯系碗Ⅰｂ類に相当し，12世紀後半～13世紀前半のものである。*272*は底部で，低い角高台をもち，見込みに圏線がある。釉は高台畳付より内側を剥ぎ取る。胎土は灰白色，釉調は灰オリーブ色を呈する。

*273*は中国製白磁碗である。高台はやや高く，外面は露胎で回転削りを施す。

274～*278*・*281*～*296*は珠洲である。*275*～*278*は甕である。*275*・*276*はⅠ期のもので，長頸が外反して立ち上がり，口縁部は嘴状に垂下する。*277*・*278*は底部で，*277*はロクロナデ後，底面よりやや上

の位置まで叩打成形が行われ，底外面は砂底である。*277*は内外面ロクロナデで，底外面に板状圧痕が残る。*274*・*281*～*289*は壺である。*274*は口縁部は方頭を呈し外屈する。*281*はⅠ～Ⅱ期のもので，口径約13cmに復原される小型の壺で，頸部は弧状に外反し，口縁端部は外方に面を取る。*282*・*284*は頸部がくの字状に外屈し，口縁端部は外面が肥厚する。*283*は口縁がほぼ直立し，端部は丸く収める。*282*～*284*はⅠ２期に比定され，12世紀後半のものである。*285*はⅠ～Ⅱ期のもので，頸部がくの字状に外屈し，口縁端部は外方に面を取る。*286*はⅠ～Ⅲ期のもので，口縁部外端を下向きに突出させる。*287*～*289*は底部である。*287*・*289*は長胴の壺で内外面はロクロナデし，底外面は*287*に板状圧痕が残り，*289*は静止糸切りである。*288*は内面はロクロナデ，外面は縦方向のケズリを施す。*290*～*296*は擂鉢である。*290*～*293*は口径約15～24cmに復原される小型の鉢で，*292*は片口が付く。口縁部は内湾し端面は水平となるもので，*290*・*292*・*293*は端部が先細りする。Ⅰ期に比定され，12世紀後半のものである。*294*はⅡ期のもので，体部は直線的に開き，口縁端部は内端を爪状に仕上げ，端面は外傾する。*295*～*296*は底部で，内外面ロクロナデ，底外面は静止糸切りである。*296*の卸目は，１単位2.5cm幅に14条の櫛歯原体を用い直線的に施される。

*297*は加賀甕である。体部破片で，外面に斜格子と菊花の刻印を有する。刻印は湯上谷窯のⅡ－301類で，13世紀後半～14世紀初頭のものである[注18]。内面は横方向のナデと指頭圧痕を残し，外面はナデて平滑にする。灰白色を呈するが，焼成はやや不良で外面は一部が橙色がかる。

279・*280*は土錘である。*279*は完形で，樽形を呈し，長さ5.3cm，直径4.5cm，孔径1.4cm，重量93.5ｇで，大型のものであるが，重量はやや軽い。*280*は欠損しており，球形で，孔径1.7cmである。

914号溝（ＳＤ914，第98図，図版48）

*298*は珠洲擂鉢である。内外面ロクロナデで，底外面は静止糸切りである。卸目原体は2.9cm幅に11条を数え，直線的に施入される。

1104号溝（ＳＤ1104，第98図）

*299*は須恵器杯である。口径約19cmに復原される大型品である。

*300*は中世土師器皿である。口径約11cm，器高は2.5cmである。非ロクロ成形で，平底から口縁部への立ち上がりはやや角張る形態である。調整は摩滅のため明瞭ではないが口縁部にヨコナデを施す。

1209号溝（ＳＤ1209，第98図，図版38）

*301*は土師器鍋の把手である。断面は楕円形で，先端は丸い。摩滅しているが，体部との接合部にハケメが残る。胎土に細かな砂粒と雲母を多く含み，骨針もみられる。

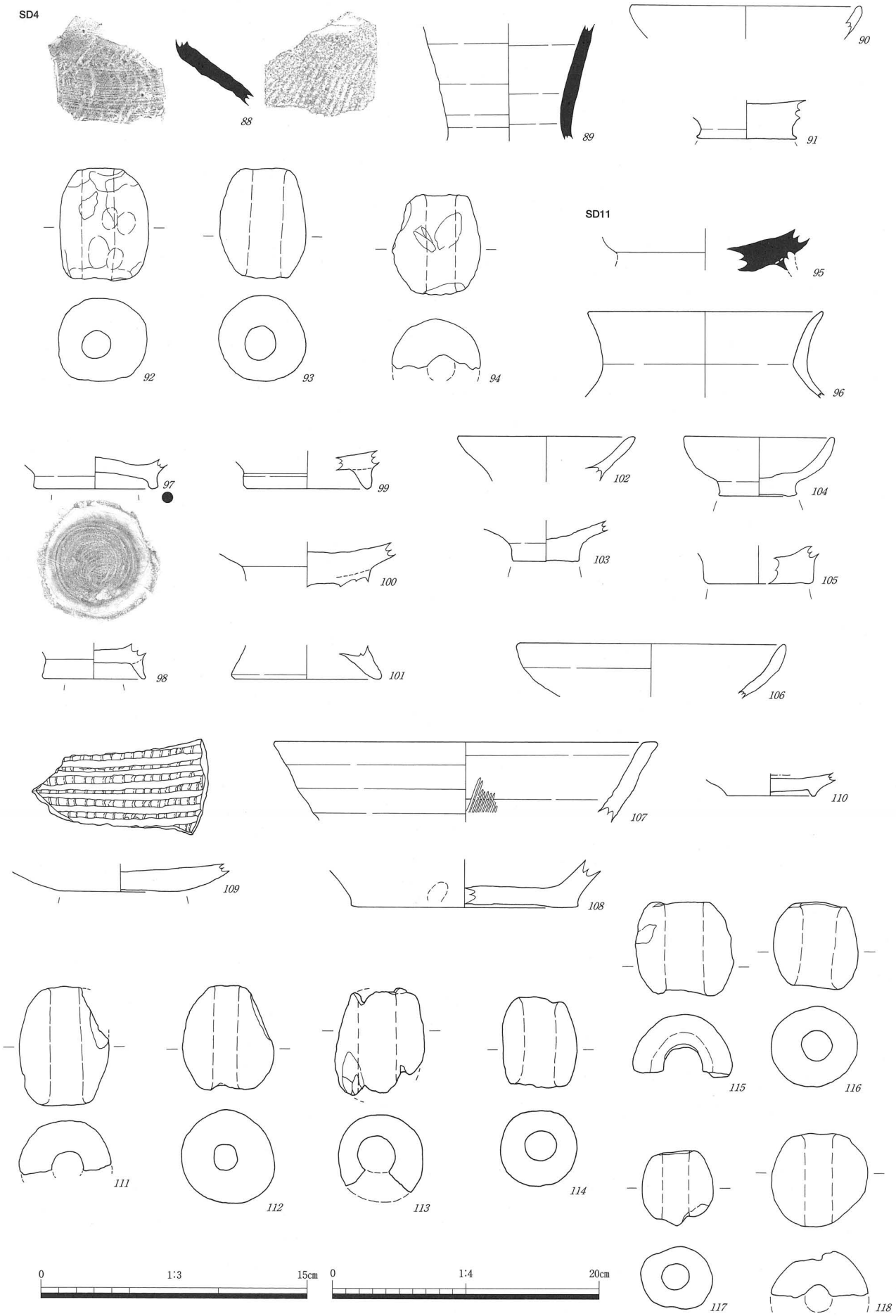
1485号溝（ＳＤ1485，第98図，図版36）

*302*は須恵器杯Ｇ蓋である。かえりは形骸化して小さく端部は丸い。７世紀第４四半期のもの。

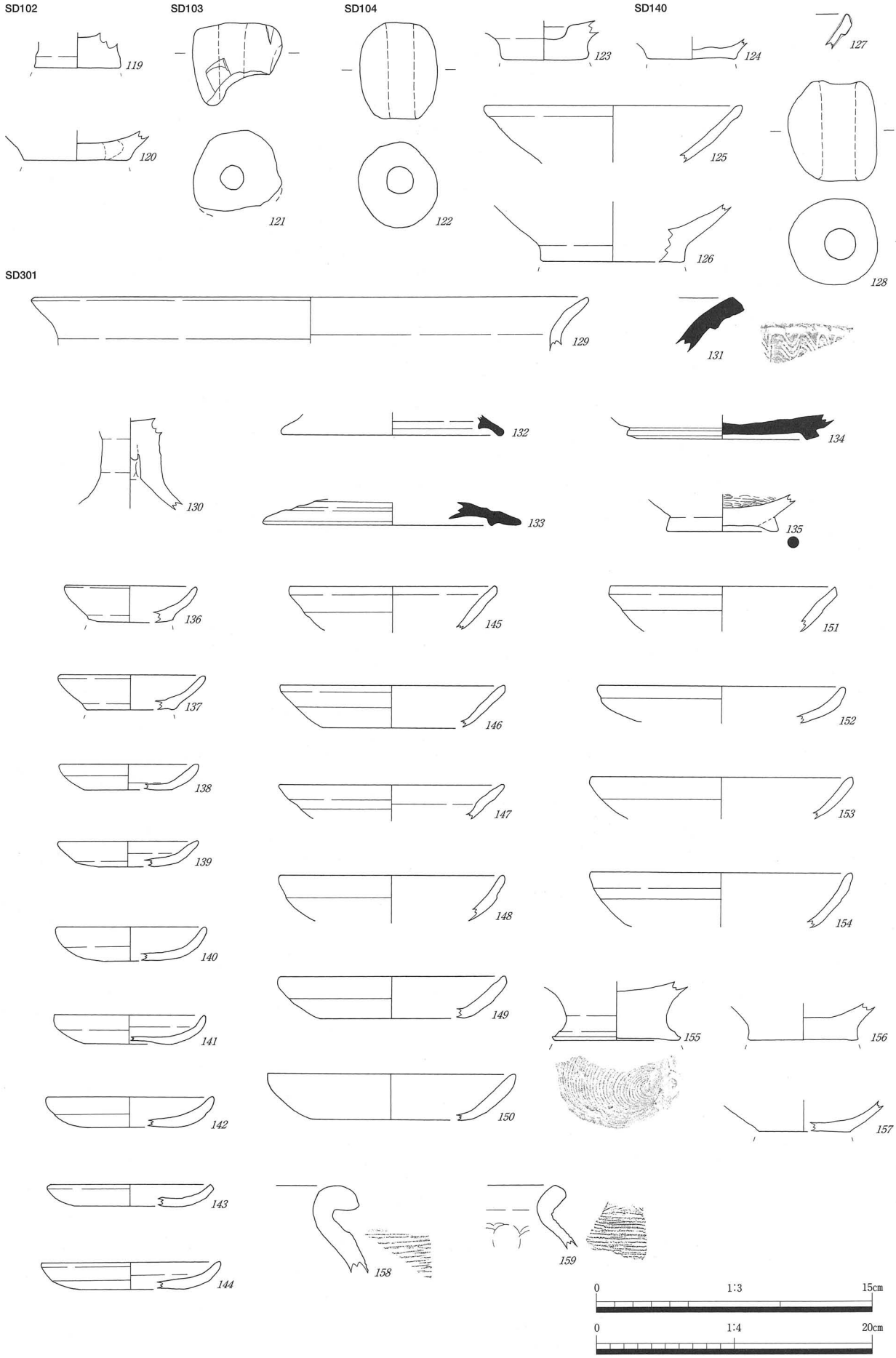
1504号溝（ＳＤ1504，第98図，図版36）

*303*は須恵器杯Ｇ蓋である。口径約20cmの大型品である。かえりは小さく端部は丸みをもつ。端部から外面にかけて暗灰色を呈し，重ね焼きの痕とみられる。７世紀第４四半期のものである。

注18　望月精司　1990「第４章　遺物　第３節　押印等について」『湯上谷窯跡発掘調査報告書』石川県小松市教育委員会
年代については垣内光次郎氏にご教示頂いた。

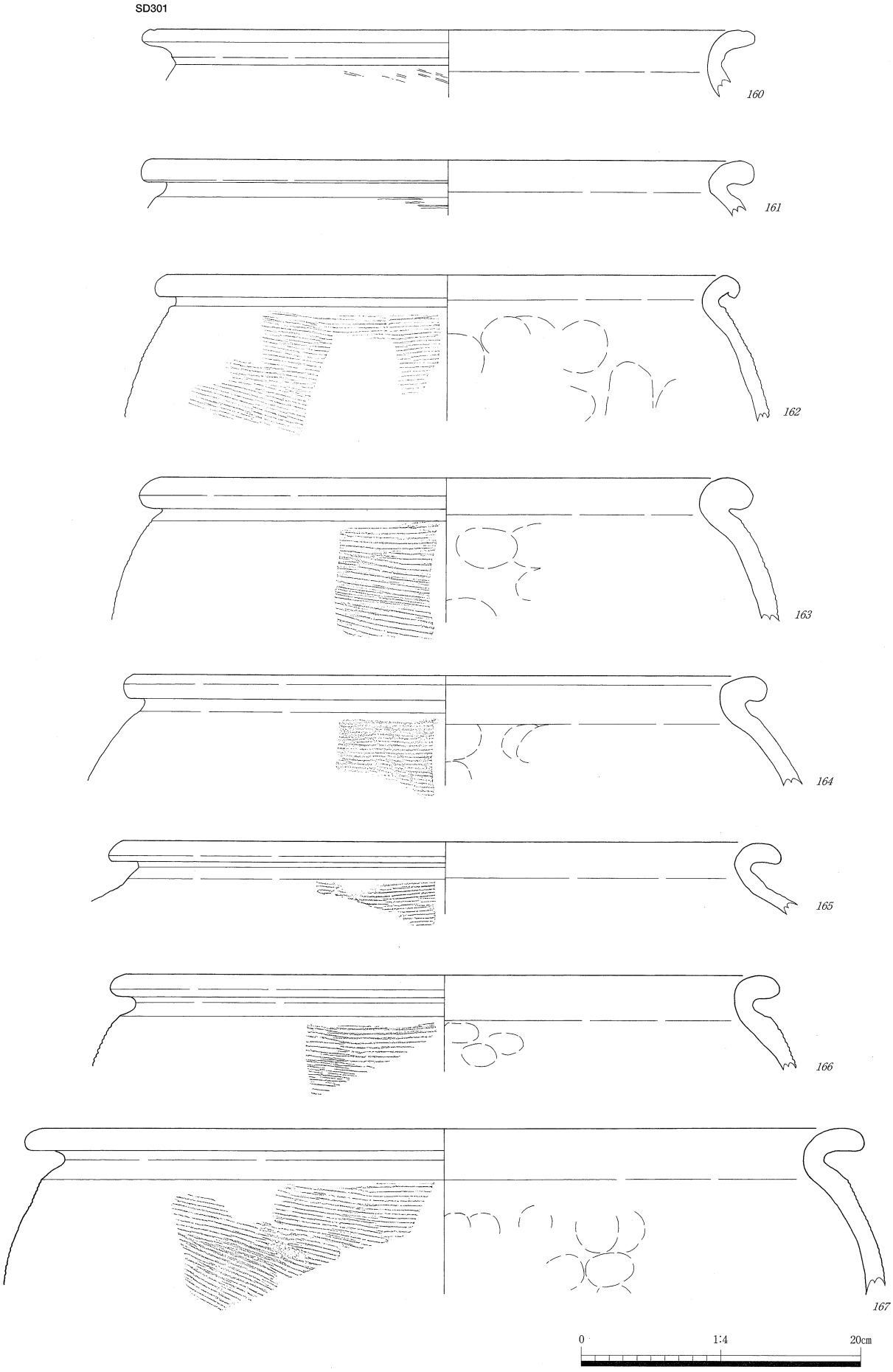


第89図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(*88～106・109～118*　1/3，*107・108*　1/4)
SD4（*88～94*）　SD11（*95～118*）

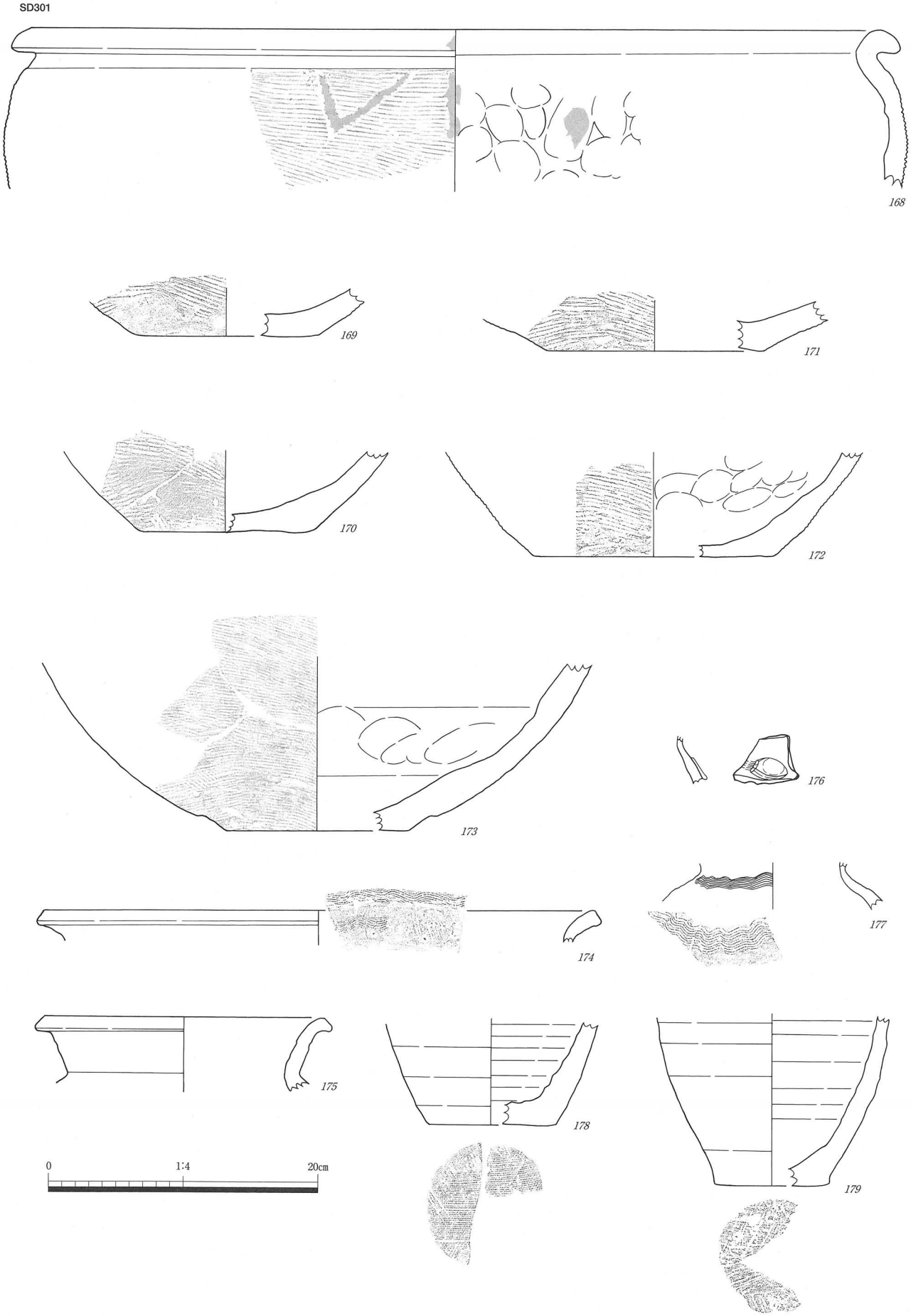


第90図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器（*119～157*　1/3，*158・159*　1/4）

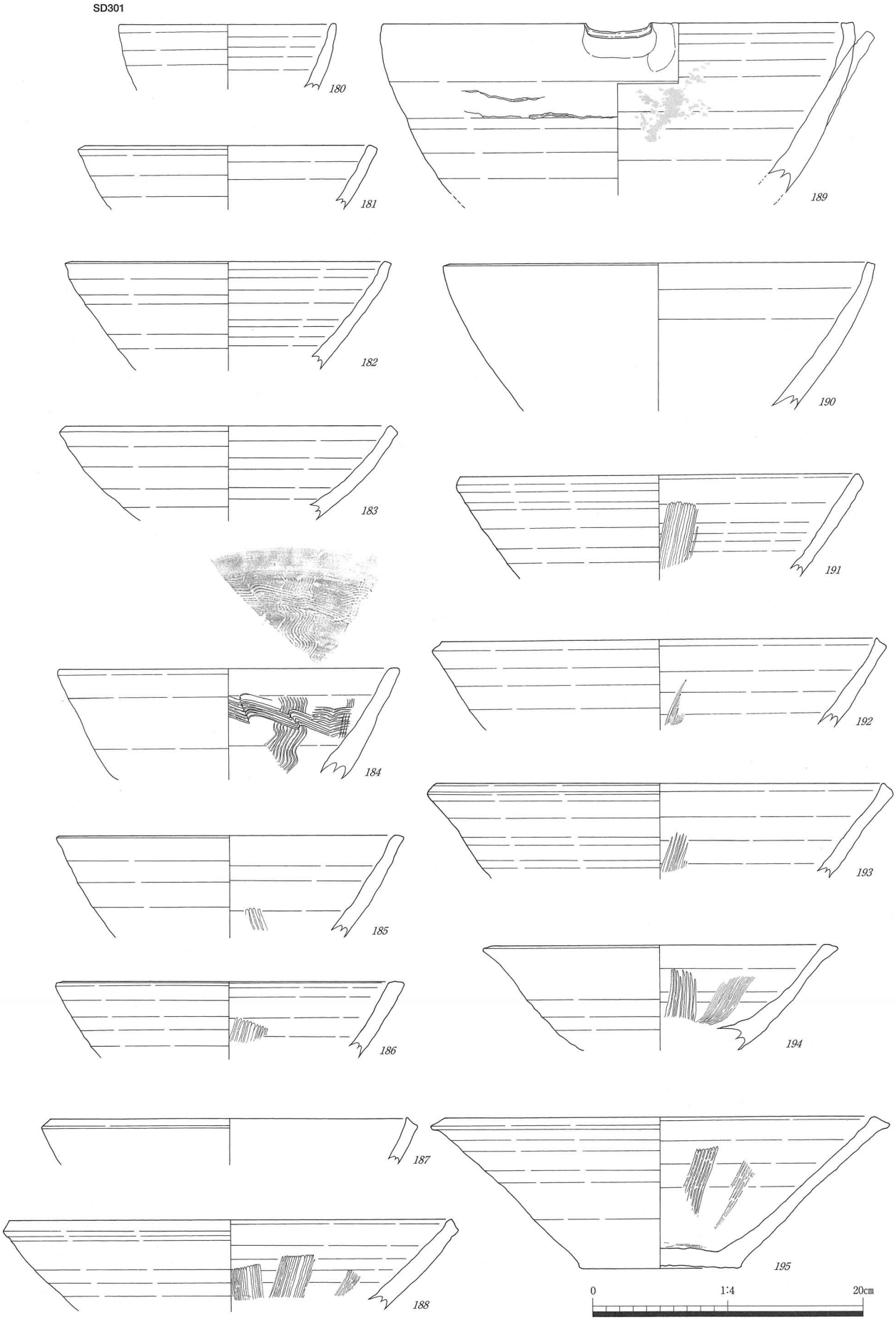
SD102（*119・120*）　SD103（*121*）　SD104（*122・123*）　SD140（*124～128*）
SD301（*129～159*）



第91図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/4)
SD301

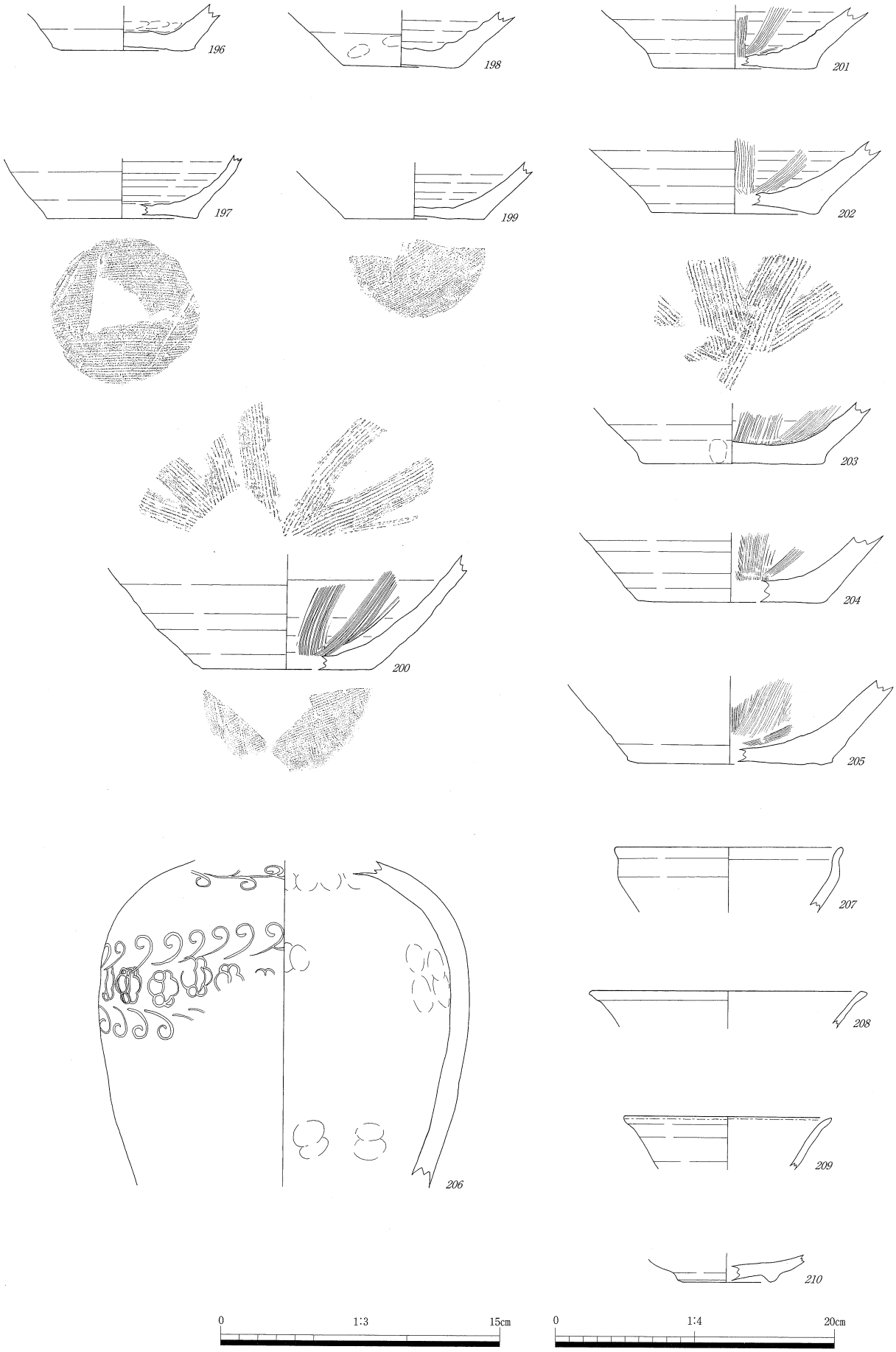


第92図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/4)
SD301

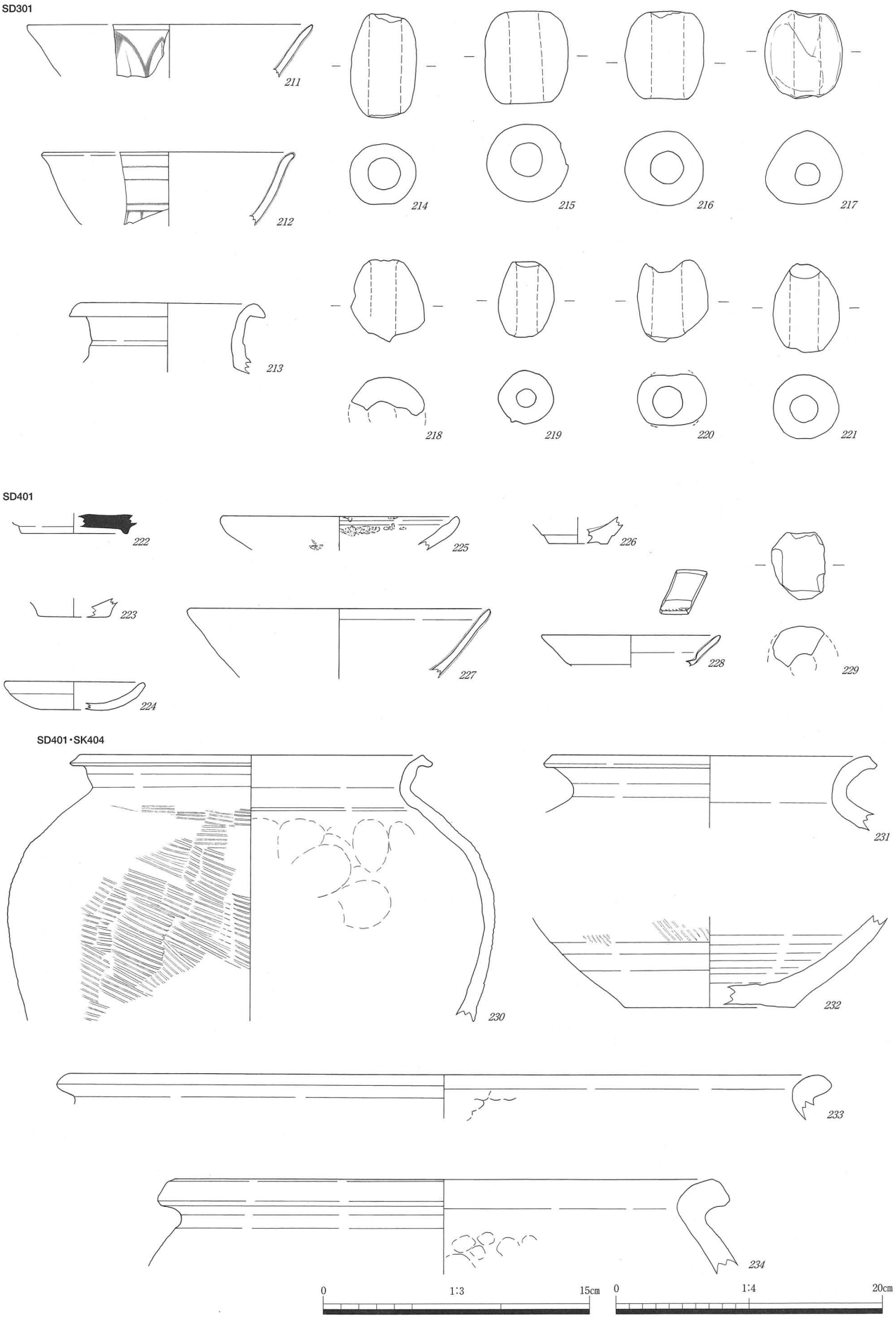


第93図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/4)
SD301

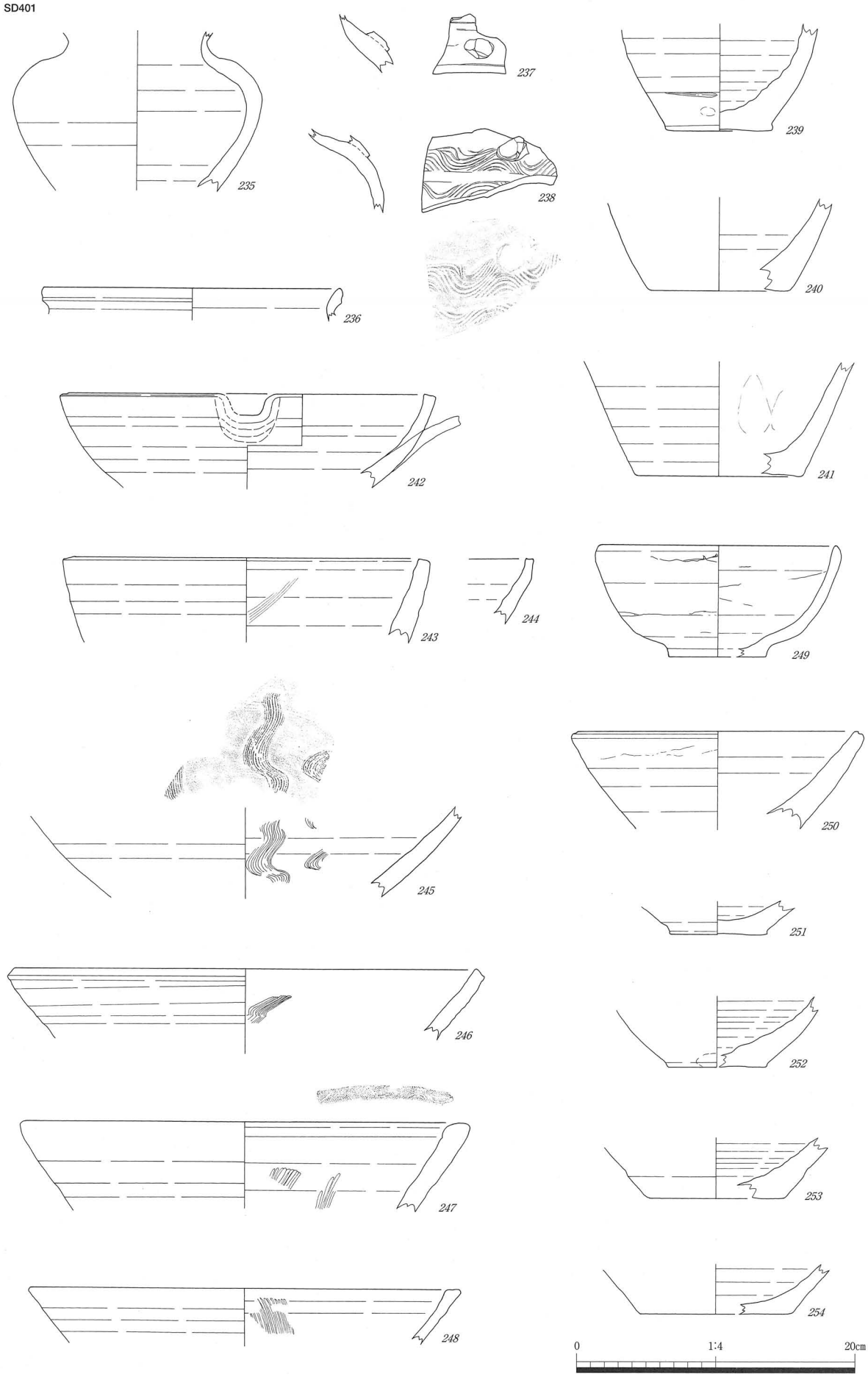
SD301



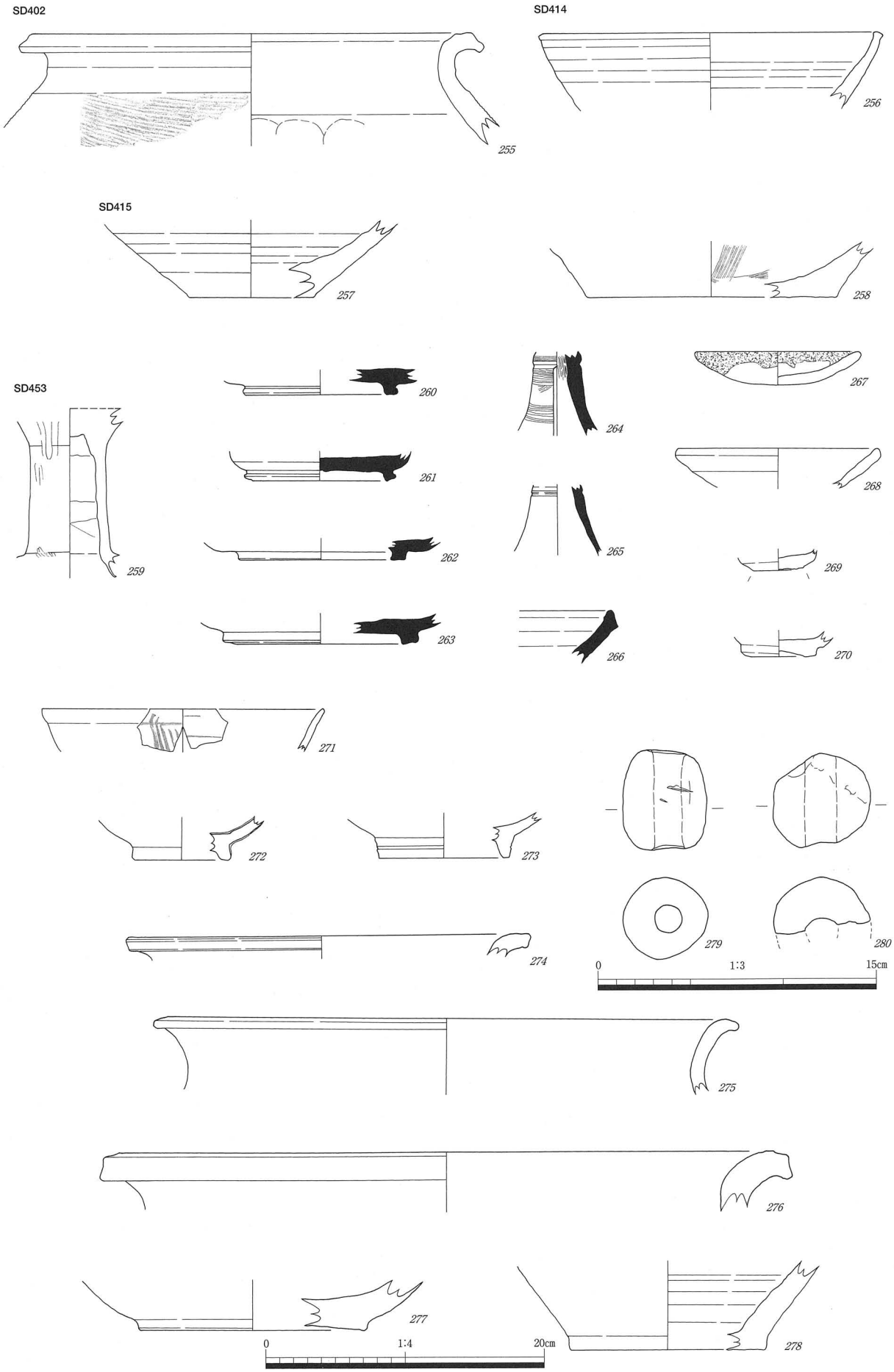
第94図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　（*206～210*　1/3，*196～205*　1/4）
SD301



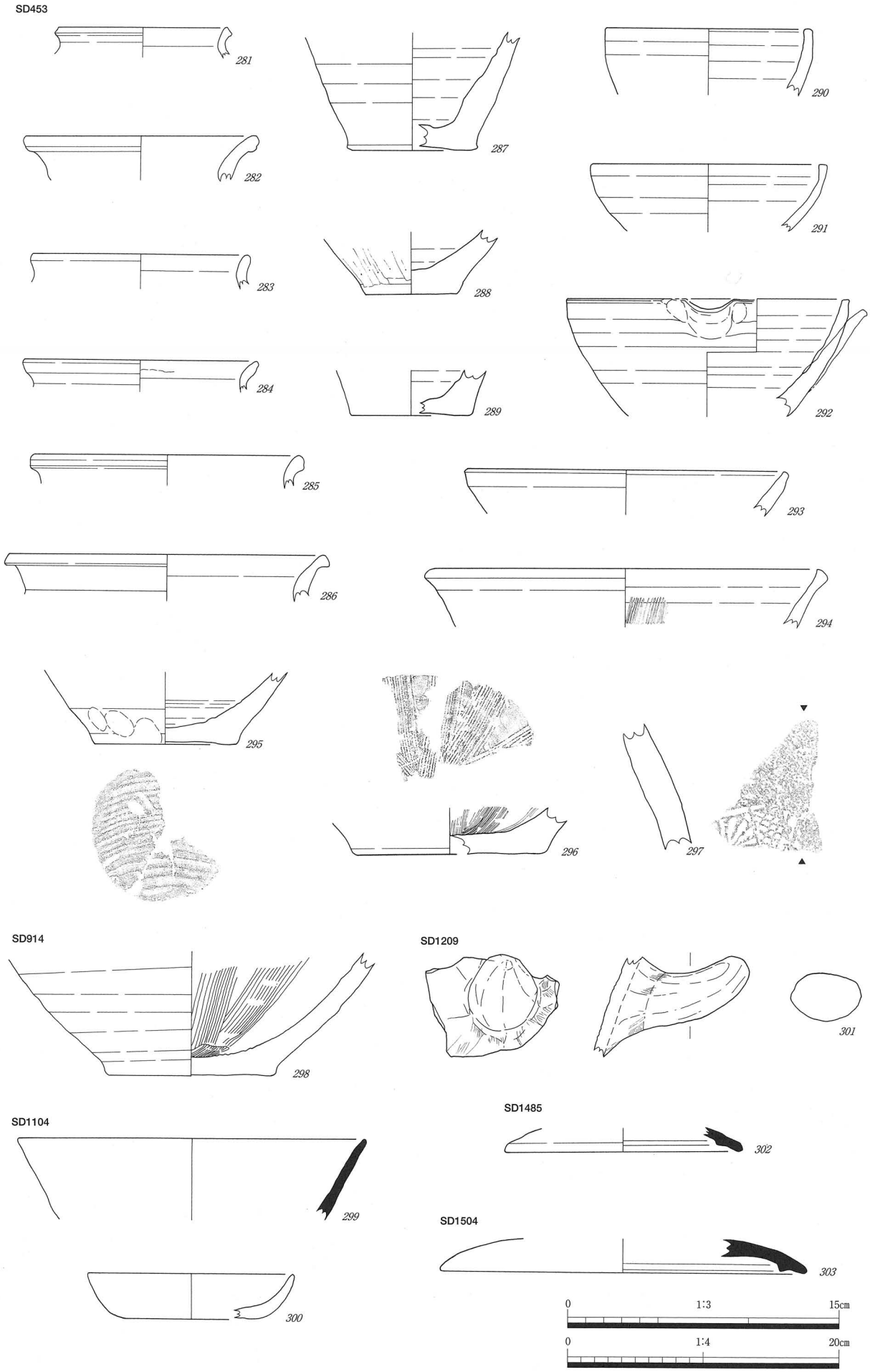
第95図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　（*211*～*229*　1/3，*230*～*234*　1/4）
SD301（*211*～*221*）　SD401（*222*～*229*・*231*～*234*）　SD401・SK404（*230*）



第96図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/4)
SD401



第97図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(*259*～*273*・*279*・*280*　1/3，*255*～*258*・*274*～*278*　1/4)
SD402（*255*）　SD414（*256*）　SD415（*257*・*258*）　SD453（*259*～*280*）



第98図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(*297・299～303*　1/3，*281～296・298*　1/4)

SD453（*281～297*）　SD914（*298*）　SD1104（*299・300*）　SD1209（*301*）　SD1485（*302*）
SD1504（*303*）

e　井戸

451号井戸（ＳＥ451，第99図）

*304*は縄文土器の深鉢である。縦位に縄文を施し、後期前葉気屋式か。

*305*は須恵器杯Ｈ身である。受部は短く外上方にのび，端部は丸い。立ち上がりは低く内傾した後立ち上がる。７世紀のものである。

*306*は中世土師器皿である。非ロクロ成形であるが，調整は摩滅のため明瞭ではない。口縁端部は弱い面取りを施す。器厚は底部より口縁部に厚みがある。

503号井戸（ＳＥ503，第99図，図版42）

307・*308*は中世土師器皿である。*307*は口径約８㎝，*308*は口径7.9㎝，器高1.7㎝である。非ロクロ成形であるが，調整は摩滅のため明瞭ではない。口縁部は内湾して立ち上がり，底部から口縁部にかけて丸みを帯びた形態である。内面には薄く煤が付着し，灯明皿として使用されたと考えられる。

504号井戸（ＳＥ504，第99図）

*309*は中国製白磁碗である。釉は体部と高台部の境まで施され，高台の一部にもかかる。高台の高さが不明で，太宰府分類Ｖ類またはⅥ類に相当し，11世紀後半～12世紀後半のものである。

508号井戸（ＳＥ508，第99・100図，図版43・44・50・52・57）

310～*312*は土師器甕である。*310*は小片で内外面摩滅のため詳細は不明である。*311*はくの字口縁の甕で，胎土に粗い砂粒を多く含む。*312*は頸部は弧状に外反し口縁端部は丸く収める。

313～*315*は須恵器である。*313*は杯Ｂ蓋である。頂部は平坦で稜をもち，口縁端部は丸く巻き込む。全面ロクロナデを施す。９世紀のものである。*314*は杯である。*315*は壺である。*315*は口径16.5㎝で，頸部は長く外方に開き，口縁部は強く外屈して端部は外方に面をとる。

316～*349*は中世土師器皿である。非ロクロ成形で，*316*～*345*は口径7.5～9.5㎝，器高1.3～1.9㎝の小皿である。*346*～*349*は口径12.2～16㎝，器高は復原できるもので３㎝である。小皿は，見込みに一方向ナデ，口縁部にヨコナデを施し，*317*・*320*～*322*では，見込みのナデがヨコナデに先行することがわかる。底外面は無調整で，型などに押し当ててのばす工程で生じるのか，平坦な器面に無数の細かいひび割れがみられる。ひび割れの状態は，細かくとぎれた網目状のものや，中心から放射状に割れるものがある。底部から口縁部にかけて丸みを帯びた形態であるが，底部が平底に近く短い口縁のもの（*343*）もある。口縁端部は丸く収める。胎土は肉眼観察ではほとんどのものに骨針を含む。またＳＥ508の中世土師器のうち，*324*・*330*・*340*・*342*・*349*について土器成分分析を行った結果，比較資料の手洗野赤浦遺跡の中世土師器と異なる特徴がみられ，胎土中に含まれる珪藻化石，鉱物片，岩石片が岩坪岡田島遺跡に近い西山丘陵や小矢部川・庄川流域の堆積物に由来する可能性があり，遺跡周辺で採集された粘土や砂を材料とした可能性が高いことが明らかになった[注19]。

*350*は中国製白磁碗である。口縁端部はやや外反し丸く収める。胎土は明るい灰白色を呈する。分類は，高台を欠損しているため限定できないが，太宰府分類の碗Ｖ２類またはⅥ類，Ⅶ類に相当し，11世紀後半～12世紀後半のものである。

351～*353*は珠洲である。*351*は壺である。叩打成形の壺で，口縁部から肩部にかけてはロクロナデを施し，頸部よりかなり下がった位置から平行叩きが行われる。短頸がくの字状に外屈し，口縁部は外面に肥厚して面を取る。口頸部の器壁は体部の厚みの半分程の薄さで挽き出されている。Ｉ２期に比定され，12世紀後半のものである。*352*は擂鉢である。器高が低く扁平に復原されるが，小破片のため明確ではない。口縁部は端面が外傾する。Ｉ～Ⅱ期に比定され，12世紀後半～13世紀前半のもの

注19　第二分冊　自然科学分析　パリノサーヴェイ株式会社　「Ⅶ．手洗野赤浦遺跡・岩坪岡田島遺跡の土器成分分析」

である。*353*はブリッジ状の横耳が付く四耳壺で，肩に櫛歯波状文がめぐる。Ⅰ期に比定される。

*354*は用途不明の土製品である。円盤状の粘土塊を掌の中で二つに折り曲げるように握りつぶしたものをそのまま焼成したもので，指の痕が克明に残る。胎土は骨針を含み，色調はにぶい黄褐色を呈し，焼成は良好である。

*355*は土製品で破片のため全体の形状は不明だが，二方に粗雑ながら平坦面を作り出しており，一方は煤が付着することから，手あぶり型の暖房具の一部かと考えられる。

1001号井戸（ＳＥ1001，第100図，図版48・53・57）

356・*357*・*359*は中世土師器皿である。非ロクロ成形であるが，調整は摩滅のため明瞭ではない。*356*・*357*は，口径8.0～約９㎝，器高は1.1～1.4㎝の小皿である。厚い底部から口縁部が短く立ち上がる形態である。*359*は口径13.8㎝，器高は2.9㎝である。口縁部は内湾して立ち上がり，底部から口縁部にかけて丸みを帯びた形態である。*357*・*359*は胎土に骨針を含む。

*358*は土師器椀である。口径は約14㎝である。ロクロ成形で，器壁は薄く端部は丸く収める。胎土に骨針を含む。古代の遺物が混入したものと考えられる。

360～*364*は珠洲で，Ⅰ期に比定され，12世紀後半のものである。*360*～*363*は擂鉢である。*360*・*361*は口径約20～22㎝，*363*は口径17.8㎝，器高7.8㎝，底径8.6㎝を測る小型の鉢である。口縁部は内湾し，端部は水平に面を取る。底外面は静止糸切りである。*364*は甕である。頸部はコの字状に外反し，口縁端部は嘴状に挽き出される。

*365*は中国製青磁皿である。体部中位で屈曲し，口縁端部は外反する。見込みに圏線をもち櫛描文を有する。肉厚で上質の品ではない。胎土は明るい灰白色，釉はオリーブ灰色で，底部の釉を掻き取る。太宰府分類の同安窯系皿Ⅰ２ｂ類またはⅠ３ｂ類に相当し，12世紀中頃～後半のものである。

366～*368*は中国製白磁碗である。口縁部は屈折し，上端部は水平にする。端部内面に稜が付き，外方に尖る。*367*・*368*では内面の上半に沈線がある。底部を欠損しているため限定できないが，太宰府分類Ⅴ類またはⅧ１・３類に相当し，12世紀中頃～後半のものである。

*369*は土製品で破片のため全体の形状は不明であるが，粗雑ながら箱状の平坦面を削り出していることから，手あぶり形の暖房具の一部かと考えられる。

1006号井戸（ＳＥ1006，第101図，図版49）

*370*は須恵器杯Ｂである。底径は12㎝で，体部はロクロナデ，底外面は回転ヘラ切りである。高台は外方へ開く。８世紀のものである。

371～*373*は中世土師器皿である。口径12.8～15.8㎝に復原されるが小片のため明確ではない。非ロクロ成形であるが，*371*・*373*の調整は摩滅のため明瞭ではない。*372*は外面にやや幅の狭い一段のヨコナデを施し，端部は丸く収める。胎土に骨針を含む。*373*は口縁端部に面を取り，内端をつまんで尖らせる。

374・*375*は珠洲擂鉢で，口径約20㎝に復原される小型の鉢である。*375*は口径20.3㎝，器高7.1㎝，底径11.0㎝である。体部は内湾して立ち上がり，口縁部は端部に弱い面を取るが，丸みをもつ。Ⅰ期に比定され，12世紀後半のものである。

1101号井戸（ＳＥ1101，第101図）

*376*は土師器長胴甕である。摩滅が著しいが体部外面にハケメが残る。胎土に粗い砂粒を多く含む。

377・*378*は須恵器杯の小片である。

1103号井戸（ＳＥ1103，第101図）

*379*は珠洲甕である。口縁部を欠損するが，頸部は長頸とみられる。Ⅰ～Ⅱ期に比定され，12世紀後半～13世紀前半のものである。

1105号井戸（ＳＥ1105，第101図）

380・*381*は珠洲である。*380*は甕である。体部は肩が張り，口縁部はくの字状に外屈する。口縁端部は垂下し円頭とするが，端部に叩打具が当たり窪んでいる。Ⅲ～Ⅳ期に比定され，13世紀中頃～14世紀中頃のものである。*381*は擂鉢である。卸目は間隔を開けて施入される。

*382*は土錘である。小型のものであるが欠損しており，残存部の重量は僅か3.9ｇである。

1106号井戸（ＳＥ1106，第101図）

383・*384*は須恵器である。*383*は杯Ａである。底外面は回転ヘラ切りである。端部は外反気味に細く挽き出される。*384*は瑤である。頸部は外反し，口縁部との境に凹線がめぐる。７世紀のもの。

1204号井戸（ＳＥ1204，第102図，図版40・46・53）

385・*386*は土師器長胴甕である。*385*は口縁部，*386*は胴部で，同一個体の可能性がある。体部内外面に縦方向のハケメ調整を施す。

*387*は中世土師器皿である。口径は約10㎝，器高は1.6㎝の小皿である。非ロクロ成形であるが，調整は摩滅のため明瞭ではない。平底から口縁が内湾気味に短く立ち上がる。胎土に骨針を含む。

388・*389*は珠洲である。*388*は壺である。内外面にロクロナデを施し，底外面は静止糸切りである。*389*は擂鉢である。口縁部は先細りし，方頭で端面が外傾する。Ⅰ～Ⅱ期に比定され，12世紀後半～13世紀前半のものである。

390・*391*は中国製青磁碗である。*390*は腰の張る器形で，高台部を欠損しているが高台内部の刳りが浅く底部が肉厚のものである。高台内は露胎である。釉は灰オリーブ色を呈する。太宰府分類の龍泉窯系碗Ⅰ２類に相当し，12世紀中頃～後半のものである。*391*は体部内面に片彫りの分割線を有する。釉は灰オリーブ色を呈する。太宰府分類の龍泉窯系碗Ⅰ４類に相当し，12世紀中頃～後半のものである。

1205号井戸（ＳＥ1205，第102図，図版50）

*392*は珠洲甕である。体部は球胴形に膨らみ，口縁部は器壁の厚みを減じて弧状に外反し，端部は外側に肥厚して弱い面を取る。外面の叩打成形は頸部よりかなり下がった位置から行われる。Ⅰ２期に比定され，12世紀後半のものである。

1229号井戸（ＳＥ1229，第102図，図版46・49・53）

393・*394*は中世土師器皿である。*393*は口径12.7㎝である。非ロクロ成形で外面は一段のヨコナデを施し，底部は無調整である。内面の調整は摩滅のため明瞭ではないが，外面よりやや広い幅でヨコナデが施されているようである。形態は，内面の見込み縁辺部を指頭で外方へ押し出すようにし，やや深身になっている。器厚は押し出した部分が若干薄くなり，口縁部の方がやや厚い。外面の一部には薄く煤が付着し，灯明皿として使用されたものと考えられる。*394*は口径13.8㎝である。非ロクロ成形であるが，摩滅のため調整は不明である。口縁部に面は取らないが，上方へつまみ上げて尖らせる。胎土に骨針を含む。

*395*は中国製青磁碗である。底径はやや小さく，高台内部の刳りが浅く底部が肉厚のものである。内面に片彫蓮花文と櫛歯２～３本の原体を用いた櫛描文を有する。釉はわずかに青みがかった緑灰色で透明感がある。胎土は灰白色である。太宰府分類の龍泉窯系碗Ⅰ２類に相当し，12世紀中頃～後半

のものである。

*396・397*は珠洲である。*396*は甕である。長頸で，口縁部は外方へ折れて嘴状に挽き出され端部は垂下する。Ⅰ期に比定され，12世紀後半のものである。*397*は擂鉢である。底部と体部の境が明瞭でなく，全面にロクロナデを施す。卸目はまばらで，一単位2.2cm幅に18条の卸目原体を用い，曲線文を描いて施入される。Ⅱ期に比定され13世紀前半のものである。

1299号井戸（ＳＥ1299，第102図，図版51）

*398*は中世土師器皿である。非ロクロ成形で，摩滅のため調整は明瞭ではないが，口縁部にはヨコナデを施し，端部外面に弱い面取りがみられる。器壁が厚いので大型の皿の可能性もある。

*399*は珠洲擂鉢である。体部は直線的に開き，口縁部はやや丸みをもつ方頭で，端面は外傾する。卸目は１単位2.6cmに15条の櫛歯原体を用いる。Ⅲ～Ⅳ期に比定され，13世紀中頃～14世紀中頃のものである。

*400*は須恵器杯の小片である。

ｆ　土坑

144号土坑（ＳＫ144，第103図，図版45）

*401*は中世土師器皿である。口径9.2cm，器高2.4cm，底径4.3cmの小皿である。外形は，直線的に大きく開く形態であるが，内面は見込みが広く，口縁部が緩やかに内湾して立ち上がる。端部は丸く収め，内側にやや肥厚する部分もある。ロクロ成形で，底外面は回転糸切りである。見込みの調整は摩滅のため明瞭ではない。胎土に細かい砂粒を多く含む。

189号土坑（ＳＫ189，第103図）

*402*は土錘である。欠損しており，重量は28.3ｇである。

404号土坑（ＳＫ404，第103図）

*403・404*は中世土師器皿である。口径は約15cmである。非ロクロ成形で，器厚は厚く，口縁部に二段のヨコナデを施し，端部は上方へつまむようにして断面三角形を呈する。全体に黒変しており，胎土に骨針を多く含む。12世紀中頃～後半のものと考えられる。

*405*は珠洲擂鉢である。口径は30.8cmに復原される。体部は直線的に開き，口縁部は内端を爪状に挽き上げる。卸目はまばらに施入され，原体は2.5cm幅に11条を数える。Ⅱ期に比定され，13世紀前半のものである。

429号土坑（ＳＫ429，第103図）

*406*は中国製青磁碗である。内面に片彫りの分割線を有する。釉は灰オリーブ色，胎土は灰白色を呈する。太宰府分類Ⅰ４類に相当し，12世紀中頃～後半のものである。

450号土坑（ＳＫ450，第103図）

*407・408*は珠洲擂鉢である。*408*は口縁部が内湾し，口縁端部の直下で摘んで強くなで，端面は外傾する。Ⅱ期に比定され，13世紀前半のものである。

540号土坑（ＳＫ540，第103図）

*409*は中世土師器皿である。口径は13.6cm，器高は3.3cmである。非ロクロ成形で，平底の底部から内湾気味に口縁部が立ち上がる。胎土にやや粗い砂粒を多く含む。調整は摩滅のため明瞭ではない。

562号土坑（ＳＫ562，第103図）

*410*は土錘である。欠損しているが，樽形を呈し，残部重量は7.8ｇである。

607号土坑（ＳＫ607，第103図，図版45）

*411*は中世土師器皿である。口径は8.9cm，器高は2.1cmである。非ロクロ成形で，底部から口縁部にかけて丸みを帯びて緩やかに立ち上がる形態である。口縁部は丸く収める。調整は摩滅のため明瞭ではないが，口縁部のヨコナデ幅は狭く，外面は口縁部に連続する細かい指頭圧痕が残る。胎土に骨針を含む。

727号土坑（ＳＫ727，第103図）

*412*は中世土師器皿である。ロクロ成形で，底外面は回転糸切り，底径は4.4cmである。胎土に細かい砂粒を多く含む。

743号土坑（ＳＫ743，第103図）

*413*は須恵器杯Ｂ蓋である。口縁部は小さく折り曲げ端部は丸く収める。内面端部は強くなでて上方へ反らし稜ができている。

*414*は土師器椀である。底外面は回転糸切りである。

*415*は珠洲擂鉢である。底外面は静止糸切りで板状圧痕がある。

845号土坑（ＳＫ845，第103図）

*416*は珠洲甕である。口縁部はくの字に外屈し，端部は方頭で，長めに挽き出される。Ⅱ～Ⅲ期に比定され，13世紀前半～中頃のものである。

891号土坑（ＳＫ891，第103図）

*417*は珠洲甕である。口縁部はくの字に外屈し，尖頭状に拡張される。外面は平行叩き，内面は円礫の当て具痕が残り，叩打成形は頸部からやや下がった位置から行われる。Ⅱ期に比定され，13世紀前半のものである。

896号土坑（ＳＫ896，第103図）

*418*は珠洲擂鉢である。内外面ロクロナデで，底外面には板状圧痕が残る。

903号土坑（ＳＫ903，第103図，図版37）

*419*は須恵器猿面硯である。平面形は硯頭が緩やかな弧状を呈し，硯側は直線的で風字状を呈する。海陸の境はなく，硯頭部が反り返る。側面は焼成前にヘラケズリして面を取り，硯面側が鋭角となる。縁端部は硯面・硯背に比べ濃い暗灰色を呈し，滑沢を有する。硯面はナデ調整であるが，一部に格子目叩きが残る。硯背は自然釉のため叩きの有無は不明瞭である。硯面は中央部が擦れて滑らかになっており，その一部にやや不明瞭ではあるが，墨痕がみられる。

1003号土坑（ＳＫ1003，第104図）

*421*は中世土師器皿である。口径8.8cm，器高5.2cmの小皿である。ロクロ成形で，内面は回転ナデの凹凸が顕著であり，底外面は回転糸切りである。胎土には細かい砂粒を多く含む。

1241号土坑（ＳＫ1241，第104図）

*422*は中世土師器皿である。口径7.3cm，器高1.4cmの小皿である。非ロクロ成形で口縁部にヨコナデを施すとみられるが，摩滅のため調整は明瞭ではない。胎土に骨針を含む。

1296号土坑（ＳＫ1296，第103図，図版49）

*420*は珠洲甕である。口径は70.6cmである。体部は肩が球状に張り出し，口縁部はくの字状に外屈して端部は方頭を呈する。外面は平行叩き，内面は円礫の当て具痕が残る。Ⅱ期に比定され，13世紀前半のものである。

1300号土坑（ＳＫ1300，第104図，図版38）

*423*は須恵器杯の小片である。外面端部が暗灰色を呈し，重ね焼き痕とみられる。

*424*は珠洲壺である。端部は強く外反し，外方に面を取る。Ⅰ期に比定される。

425・*426*は土師器椀である。調整は摩滅のため明瞭ではないが，底外面は回転糸切りである。*425*は，器壁が薄く，内湾して立ち上がる大型の椀である。胎土は中世土師器に比べ精緻で，赤色粒を多く含む。*426*は口径11.8cm，器高4.0cm，底径5.4cmである。口縁部を上方へ立ち上げるように屈曲させる形態である。器壁は中世土師器に比べ薄く，ロクロ目をあまり残さない精巧なつくりであるが，胎土に細かい砂粒を多く含み，器面がざらつく点は*425*と異なる。

*427*は土錘である。寸胴形を呈し，長さ5.3ｇ，直径4.4cm，孔径1.7cmで大型のものであるが，摩滅欠損しており，残存部重量は89.5ｇである。

1371号土坑（ＳＫ1371，第104図）

428・*429*は非ロクロ成形の中世土師器皿である。口径10.8cm，器高は*428*が1.7cmである。*428*は器壁が薄く，底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる形態である。*429*は器壁がやや厚く，口縁が外傾気味になる形態である。*428*・*429*とも調整は摩滅のため明瞭ではない。

1402号土坑（ＳＫ1402，第104図）

*430*は珠洲壺である。口径は約12cmに復原される。口頸部は弧状に外反し，端部は垂直方向に面を取る。Ⅰ期に比定され，12世紀後半のものである。

1477号土坑（ＳＫ1477，第104図）

*431*は珠洲擂鉢である。口縁端部は内端を上方につまみ上げる。Ⅱ期に比定され，13世紀前半のものである。

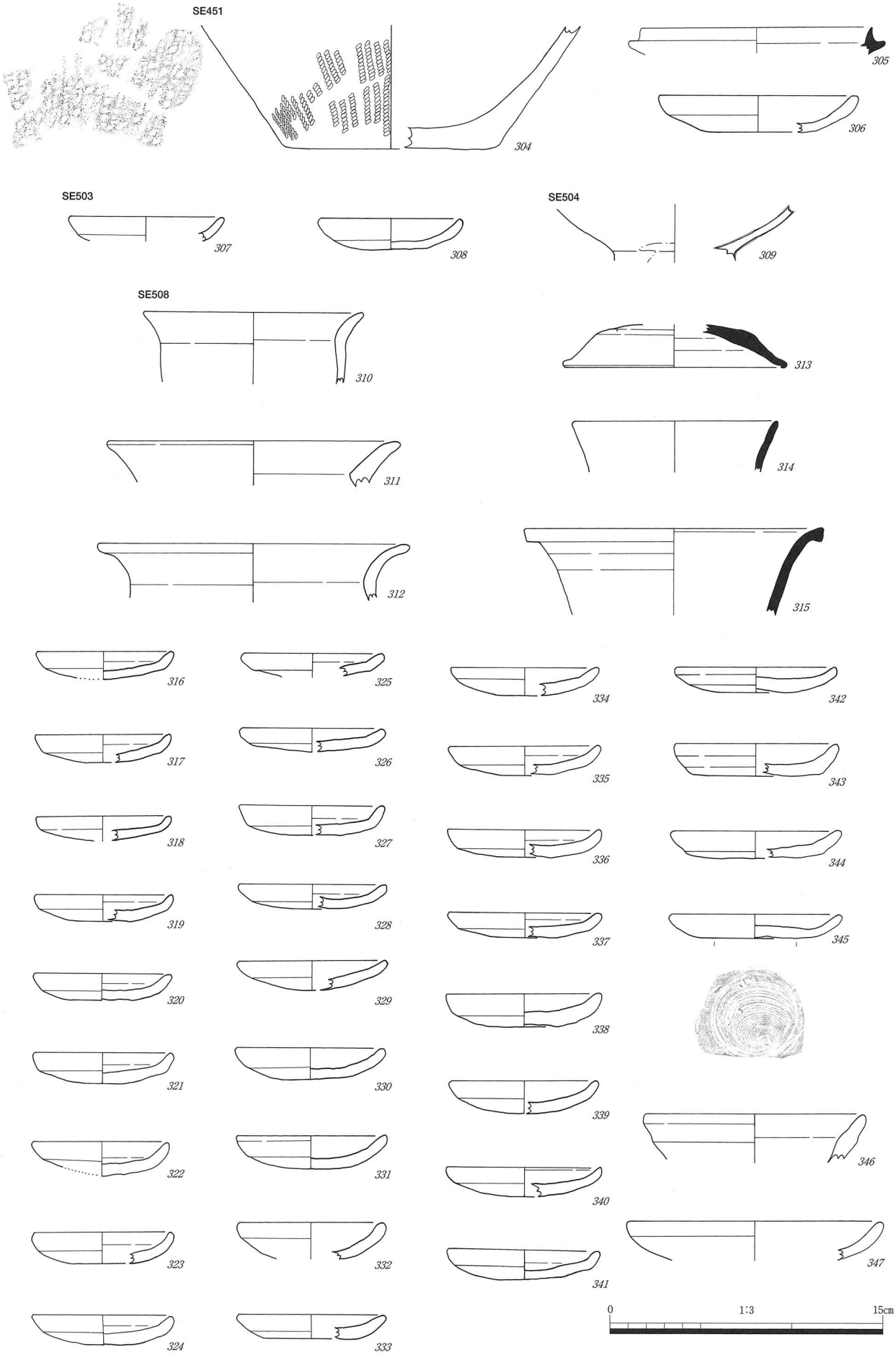
ｇ　地割れ

10号地割れ（ＳＸ10，第104図）

432～*435*は土師器椀である。口径は*432*が約13cm，底径は4.8～5.6である。*432*は回転撫でを施し，端部はやや肥厚し丸く収める。*433*～*435*は底部で底外面は回転糸切りである。*432*～*433*は胎土に骨針を多く含む。

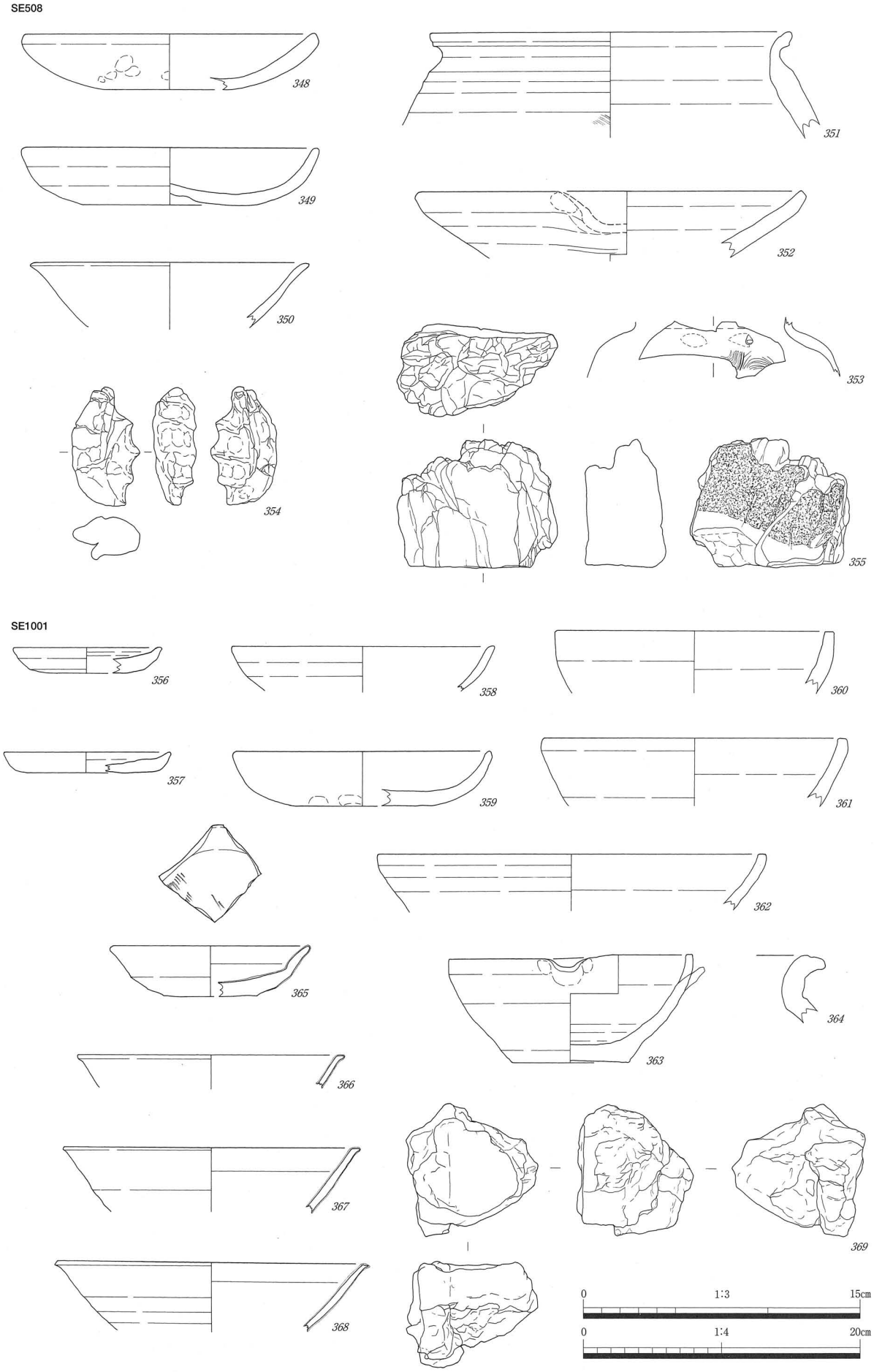
12号地割れ（ＳＸ12，第104図）

*436*は瀬戸美濃皿である。丸皿または端反皿の底部で，内外面に灰釉がかかる。底外面の釉は薄く，高台内に輪ドチ痕が残る。大窯Ⅰ期～Ⅱ期に比定され，15世紀末～16世紀前半のものである。

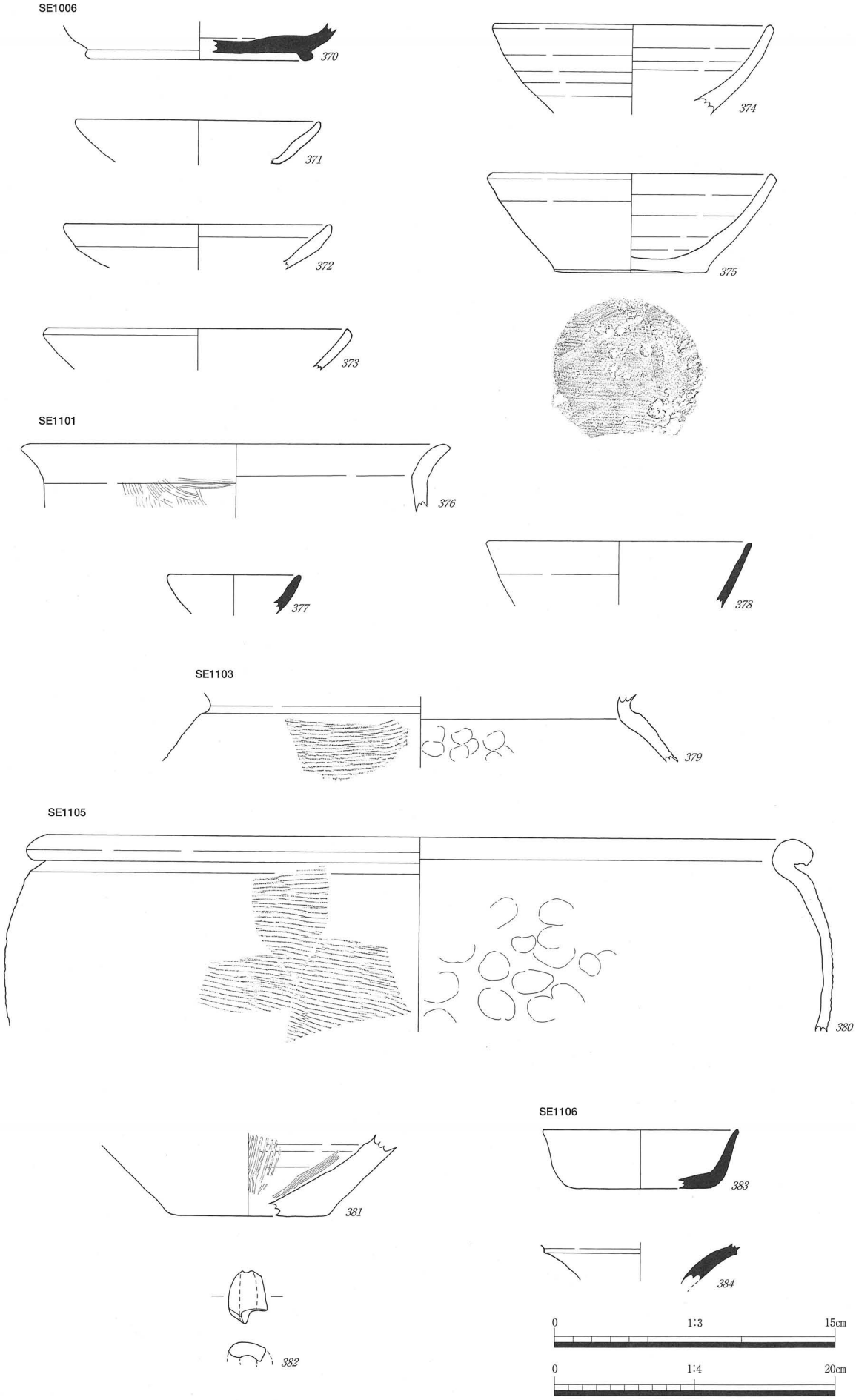


第99図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/3)

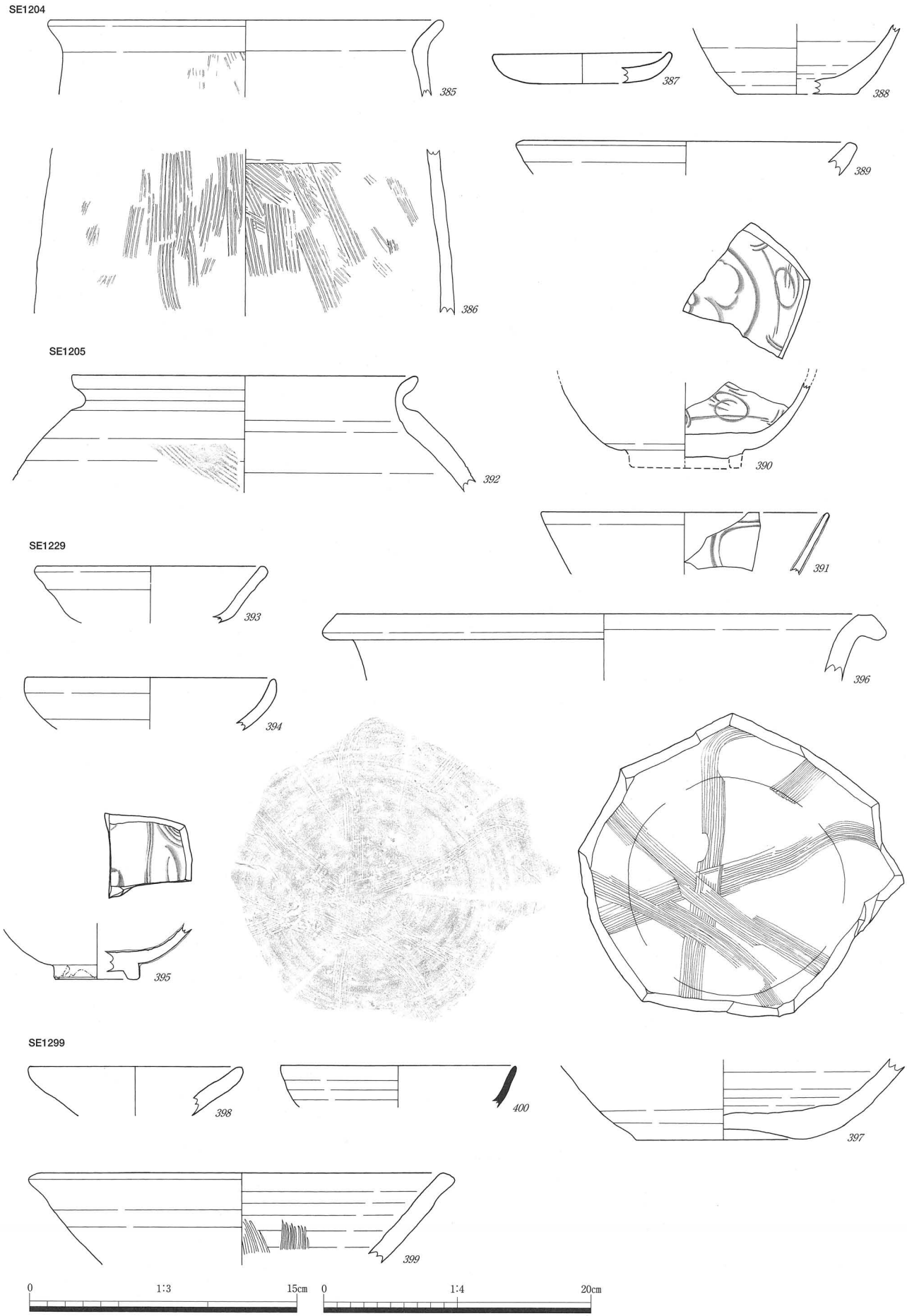
SE451（*304*～*306*）　SE503（*307*・*308*）　SE504（*309*）　SE508（*310*～*347*）



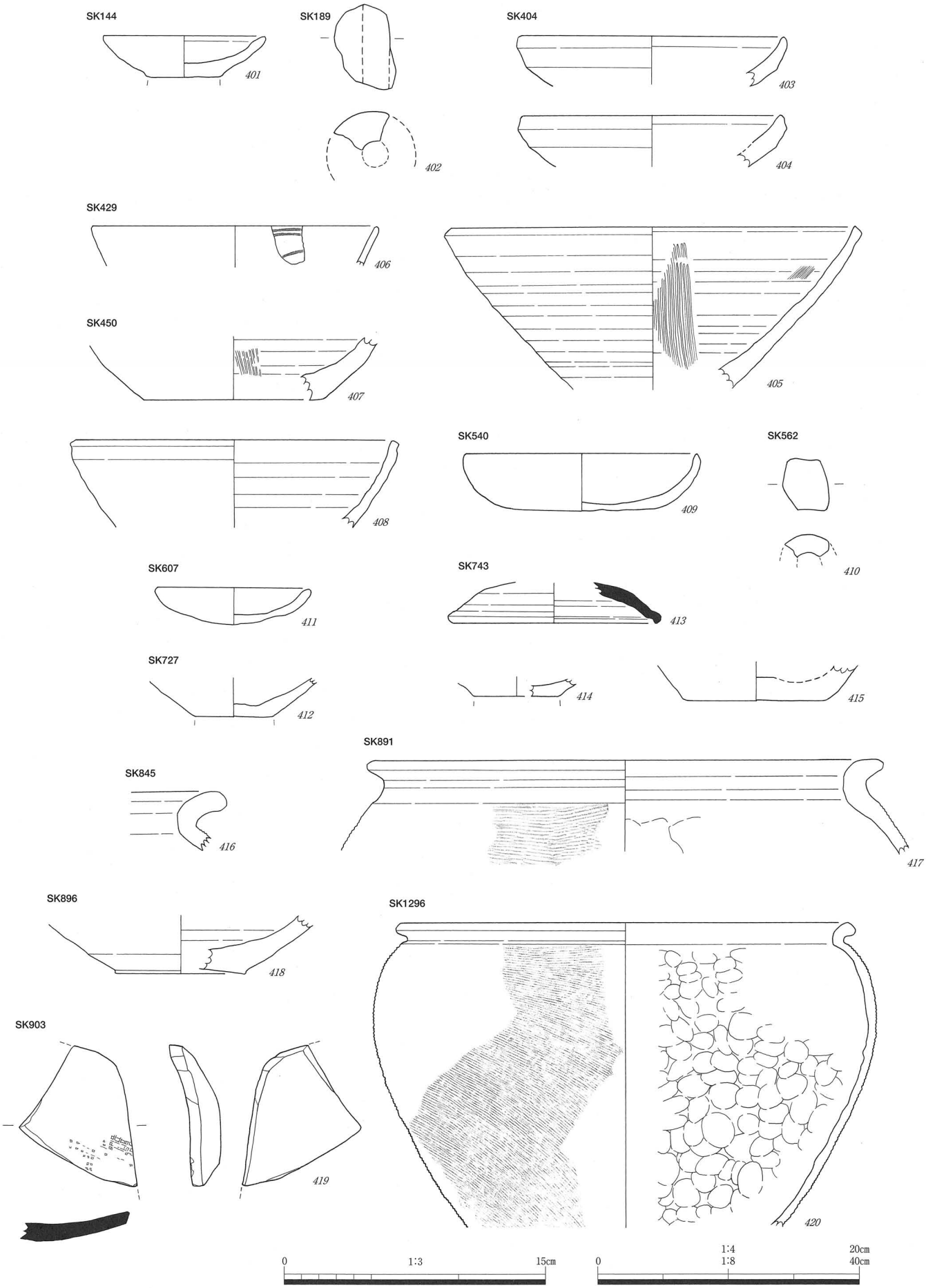
第100図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器（*348～350・354～359・365～369* 1/3，*351～353・360～364* 1/4）
SE508（*348～355*）　SE1001（*356～369*）



第101図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器（*370～373・376～378・382～384* 1/3, *374・375・379～381* 1/4）
SE1006（*370～375*）　SE1101（*376～378*）　SE1103（*379*）　SE1105（*380～382*）
SE1106（*383・384*）

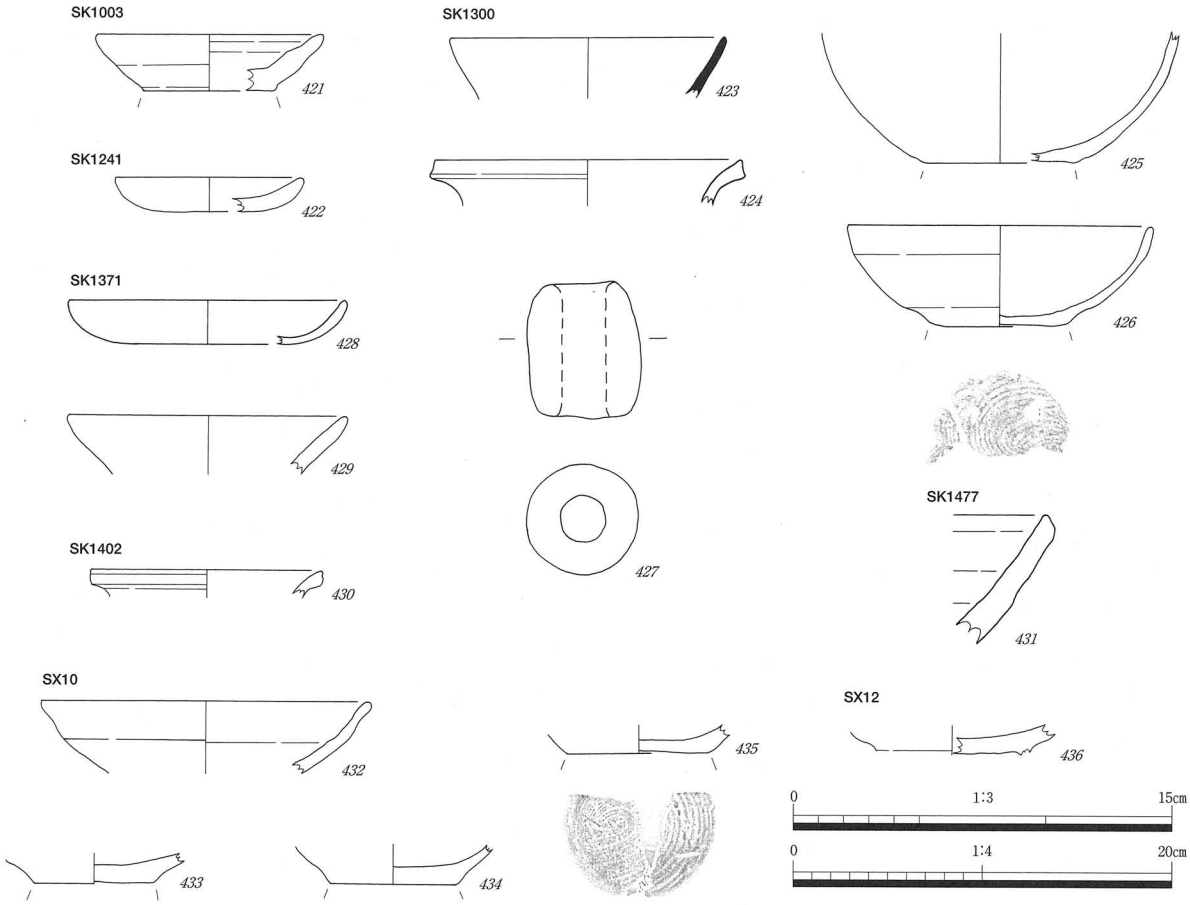


第102図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器（385～387・390・391・393～395・398・400 1/3, 388・389・392・396・397・399 1/4）
SE1204（*385～391*）　SE1205（*392*）　SE1229（*393～397*）　SE1299（*398～400*）



第103図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器（401～404・406・409～414・419 1/3, 405・407・408・415～418 1/4, 420 1/8）

SK144（*401*）　SK189（*402*）　SK404（*403～405*）　SK429（*406*）　SK450（*407・408*）
SK540（*409*）　SK562（*410*）　SK607（*411*）　SK727（*412*）　SK743（*413～415*）　SK845（*416*）
SK891（*417*）　SK896（*418*）　SK903（*419*）　SK1296（*420*）



第104図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　（*421*～*429*・*432*～*436*　1/3，*430*・*431*　1/4）

SK1003（*421*）　SK1241（*422*）　SK1300（*423*～*427*）　SK1371（*428*・*429*）　SK1402（*430*）
SK1477（*431*）　SX10（*432*～*435*）　SX12（*436*）

E　包含層出土の土器・陶磁器

土師器（第105図，*438*～*446*・*452*～*461*，図版38）

438～*446*は椀である。*440*は底外面回転糸切りで貼り付け高台の痕跡がある。見込みにはロクロ目を残し，底部の器壁は厚い。*441*～*445*は無台の椀で，口径12.2～16.0cm，器高2.9～5.1cm，底径5.7～7.1cmである。*442*・*443*は底外面に回転糸切り痕が残るが，内外面摩滅しているものが多い。*444*は摩滅が著しいが，底外面に板状圧痕がある。*440*・*441*・*444*は９世紀末～10世紀のものである。*446*は底外面の高台内縁辺部に菊花状の絞り出し痕を残し，中央はやや抉るようにナデ消す。底部は厚く，断面三角形の低い高台が付く。胎土は細かい砂粒と雲母を多く含む。11世紀前半のものである。

*452*は有台皿である。体部は外方へ大きく開き，口縁部は外反し端部は尖り気味になる。高台接合部の上面にあたる内面の見込み縁端部を指頭で押さえている。底外面は回転糸切りで高い高台が付く。９世紀末～10世紀のものである。

453～*460*は高杯である。*453*・*454*は杯部下位に稜をもつ。*455*～*460*は脚部でハ字状に開くものと裾部で屈曲外反するものがある。*455*・*459*は内面にしぼり痕がある。*461*は甕である。平底で，胎土に粗い砂粒を多く含む。

黒色土器（第105図，*437*・*447*～*451*，図版39）

*437*は古墳時代の椀である。半球状の器形で，内面全面から外面の体部上半が黒色になっている。

447・*448*は椀である。*447*は底外面回転糸切りで，胎土に骨針を多く含む。*448*は底外面の外縁と，回転糸切りの端を約３㎜残した内側を回転ケズリによって抉り，低い疑似高台を作り出している。９世紀末～10世紀のものである。

449～*451*は有台椀である。*449*は断面三角形の高台を貼り付ける。*450*は高台部を欠損し，高台内側は強くなでる。*451*は口縁部はやや外反し，底部は厚く平坦で，高めの高台が付く。内面はミガキで黒色処理し，体部外面はロクロナデ，底外面は回転糸切りである。10世紀のものである。

須恵器（第106図，*462*～*486*・*488*～*490*，図版35・36・37）

462～*464*は杯Ｈ蓋である。*462*は口径12.6cm，器高4.0cmである。外面頂部はヘラケズリ後ナデ，外面体部と内面はロクロナデである。７世紀第１四半期のものである。*463*は口縁部の屈曲が緩やかで端部はやや外反する。７世紀前半のものである。*464*の外面頂部はヘラ切り後，調整は軽くなでるだけで器面の凹凸を残す。外面体部と内面はロクロナデである。７世紀のもの。

465～*467*は杯Ｈ身である。受部は外上方にのび，立ち上がりは短く内傾する。７世紀第１四半期のものである。

*468*は杯Ｇ蓋である。小さく短いかえりがつく。外面頂部は回転ヘラケズリである。７世紀第４四半期のものである。

*469*は高杯である。杯部は全面ロクロナデで，体部下半に凹線がめぐる。７世紀のものである。

470・*471*は杯Ａである。*470*の底部は回転ヘラ切りである。*471*は底外面はヘラ切り後不定方向に軽くなで，内面はロクロナデ後，見込みに仕上げナデを施す。７世紀のものである。

472～*474*は杯Ａまたは杯Ｂである。*474*は大型の杯で口径約20cmに復原される。口縁端部はわずかに肥厚し，端面が内傾する。

475・*476*は杯蓋である。*475*は疑宝珠状のつまみである。*476*は扁平なつまみで，外面頂部は回転ヘラケズリ，内面は一方向の仕上げナデを施す。９世紀のものである。

477～*479*は杯Ｂ蓋である。*477*・*478*は頂部ヘラ切り後ナデ，内面はロクロナデで頂部に仕上げナデ

を施す。口縁部は小さく折り曲げ，端部は丸く収める。8世紀後半～9世紀のものである。*479*は全面ロクロナデで，口縁端部は折り曲げ，やや外反して断面三角形を呈する。8世紀後半のものである。

480～*486*は杯Bである。高台は，*480*・*485*は低くほぼ垂直に付き，*481*～*484*・*486*は外方へ開き気味につく。*484*・*482*は高台内を回転ヘラケズリで平坦にするが，*485*は軽くなでるのみでヘラ切り痕が残る。*486*は口径15.9cm，器高4.8cm，底径10.6cmである。ロクロナデ後見込みに仕上げナデを施す。*482*・*486*は7世紀末～8世紀のものである。

*488*は壺類の蓋で，鋭角に折れ，鋭い稜がある。*489*は壺で，肩に稜をもつ。

490・*491*は甕である。*490*は頸部は外反し，上方に面を取る。*491*は頸部が外傾し，口縁端部は内湾気味に立ち上がり端面は内傾する。頸部に2条の凹線がある。7世紀後半のものである。

灰釉陶器（第106図，*487*，図版36）

*487*は椀である。高めの貼り付け高台で，高台内には薄く墨痕が残り，転用硯とみられる。東濃産で，東山72号窯式[注20]に比定され，10世紀後半代～11世紀初頭のものである。

中世土師器（第107・108図，*492*～*573*，図版45～47）

*492*は柱状高台に近い厚い底部に，内湾して立ち上がる体部がつく器形で小杯とした。口径7.9cm，器高3.3cm，底径4.0cmである。調整は摩滅のため明瞭ではないが，全面ロクロナデ，底部は回転糸切りとみられる。胎土に骨針を含む。

493～*497*はロクロ成形の小皿である。口径は8.6～10.7cm，器高1.4～2.0cm，底径3.9～4.9cmである。外方へほぼ直線的に大きく開く形態である。全面にロクロナデを施し，底部は回転糸切りである。すべて胎土に骨針を含み，*494*・*497*は細かい砂粒も多く含む。*495*は器壁が薄く作工も精緻である。口縁部は部分的に端反になっている。色調は灰白色を呈する。

498～*505*はロクロ成形の大型の皿で椀形に近い形態をとる。口径は11.9～14.9cm，器高は復原できるもので3.1～4.6cm，底径は4.2～5.8cmである。*498*・*501*・*504*は器厚が薄く，*499*・*500*・*502*・*503*・*505*はやや厚い。*498*～*500*・*503*～*505*は骨針を多く含み，*499*・*500*・*501*は細かい砂粒も多く含む。

506～*521*は柱状高台の皿の底部で，底外面は回転糸切りである。底径は*506*～*520*が4.0～4.7cmで小皿にあたり，*521*は6.5cmで大型である。*509*・*511*は糸切りの上に板状圧痕があり，*511*は強く押さえられて段が付いている。高台の形状は，円柱状のもの（*507*・*515*～*517*・*519*・*520*）と断面台形状に裾が広がるもの（*506*・*508*～*514*・*518*・*521*）がある。*506*・*507*・*509*・*510*・*513*～*517*・*520*は胎土に細かい砂粒を多く含む。*506*・*507*・*511*・*513*～*515*・*520*・*521*は骨針も多く含む。*514*は見込み中央を棒状具または指頭で押さえて窪ませている。*507*は底外面に棒状のもので斜めに突いた孔があるが，貫通はしていない。*508*は見込みの中央を窪ませているが，さらに中心を突くように押さえた小孔がある。*510*は見込みの中央を指頭で押して窪ませている。*512*は底部外面から内面に向かって貫通する孔がある。*511*は胎土に粗い砂粒と骨針を含む。*516*は見込み中央に，棒状具で斜め方向に無造作にあけられた孔があり，貫通はしていない。*518*は底部外面に貫通しない孔があり，孔の内面には棒状具で無造作に掻き取った横方向の削痕がみられる。孔の奥には体部を接合した際にできた粘土の盛り上がりがみられ，柱状高台に体部を接合する前に孔を開けたものと考えられる。

522～*545*は柱状高台とならないロクロ成形の皿の底部である。底径は3.9～7.0cmである。*528*・*529*は内面に薄く煤が付着する。*524*・*537*は底部外面に板状圧痕がある。*527*・*539*・*542*は底部が柱状高台に近い厚みをもっている。*522*・*523*・*530*・*531*・*535*・*537*・*540*・*544*は胎土に細かい砂粒を多く含む。*545*はやや粗い砂粒を多く含む。胎土に骨針を含むものも多い。

注20　斉藤孝正他　1981「猿投窯・尾北窯・美濃窯における灰釉陶器の変遷」『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』多治見市教育委員会

*546*は有台皿で，貼付け高台であるが高台部は摩滅して原形をとどめない。胎土に骨針を多く含む。

547～*573*は非ロクロ成形の皿である。口縁部をヨコナデ，底外面は無調整で，見込みの調整は摩滅のため不明のものが多い。口径は7.8～14.0cm，器高は1.4～3.6cmである。*547*・*548*・*553*・*554*・*556*・*564*は，底部から口縁部にかけて丸みを帯びて緩やかに立ち上がる形態である。*549*は器壁が厚く，底部から口縁部への立ち上がりは角張っている。*550*・*552*・*555*もやや角張った器形で*550*は口縁部が外反する。*559*・*562*は底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる器形で，*559*は器壁が厚い。*562*は口縁部が外反する。*557*・*565*は口縁部が外反し開く形態で，幅の広いヨコナデを施し底部との境界には稜ができる。*558*は平底に外傾する口縁部が付くやや深身の形態で，器壁は厚い。内面の口縁部と見込み縁辺部にハケ状工具痕が一部残るが，ナデ消されている。*560*は口縁部，底部の境がなく，全体に丸みを帯びた器形で，口縁部は丸く収める。器厚は一定でなく，極端に厚い部分もある。外面にヨコナデはみられず，軽くナデていると思われるがほとんど無調整である。内面には口縁端部にのみヨコナデがみられ，以下は一方向ナデを施す。口縁よりやや下がった位置に2箇所，布状圧痕が残るが，その大きさは，一辺約4㎜の小さなものである。*563*は平底で，口縁部を強くヨコナデし，底部との境界には稜ができる。*565*は平底の底部から口縁部が外反して立ち上がり，端部は丸く収める。*566*は見込み縁辺部を外方へ押し出すように広げる形態で，口縁部のヨコナデは上方へつまむようにして，口縁端部を尖らせる。*567*は底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる形態である。*568*は底部から丸みを帯びて立ち上がり，口縁部はやや外反する。*569*は口縁部が端反となる。全体が黒変している。*570*は上方へつまむようにしてやや幅の広い面を取る。*571*は外傾する口縁部に幅の広いヨコナデを施した，やや深身の形態である。*572*は深身の形態で二段のヨコナデを施す。底外面には板状圧痕がある。*573*は一段のヨコナデを施し，端部は外面に面を取る。*547*・*548*・*550*・*552*・*560*・*569*は口縁部に，*549*は口縁部と見込みの一部に灯芯油痕がみられる。*553*も口縁部から内面にかけて薄く煤が付着し，灯明皿として使用された可能性がある。

珠洲（第109～112図，*574*～*642*，図版50・52）

574～*591*は甕である。*574*は口頸部はくの字状に外屈し，口縁部は方頭で長めに挽き出される。*575*は口頸部が短く下向きに屈折し，端部は尖頭とする。*574*・*575*はⅡ～Ⅲ期に比定され，13世紀前半～中頃のものである。*576*は頸部がくの字状に屈折し，口縁部はやや長めに挽き出して端部は肥厚し円頭とする。Ⅲ期に比定される。*577*・*579*は頸部はコの字状に外反し，口縁端部は円頭となる。外面叩打成形は，*577*は頸部よりやや下がった位置から，*579*は頸基部から行われる。Ⅱ期に比定され，13世紀後半のものである。*578*は体部は球状に張り出し，短い頸部がくの字状に外屈して端部は円頭とする。Ⅲ～Ⅳ期に比定され，13世紀中頃～14世紀中頃のものである。*580*は頸部がやや短く，口縁端部は垂下して方頭となるもので，Ⅱ期に比定され，13世紀前半のものである。*581*～*583*は口縁部を水平またはやや下向きに長めに挽き出し，端部は円頭としたもので，Ⅱ～Ⅲ期に比定され，13世紀前半～中頃のものである。*584*は口縁部は断面三角形を呈する。*585*・*587*は頸部はくの字状に外屈し口縁部は方頭となる。*586*は口縁部は短い円頭となり，体部の膨らみは少ない。*584*～*587*はⅣ期に比定される。*588*・*589*は頸部がくの字状に外屈し，*588*は方頭，*589*は端部が肥厚するやや丸みのある方頭を呈する。Ⅳ～Ⅴ期に比定され，13世紀末～15世紀前半のものである。*590*・*591*は底部である。ロクロナデで，*590*は底面よりやや高い位置から叩打成形が行われる。*591*の体部下部には煤が付着する。

592～*606*は壺である。*592*～*600*はロクロ成形の壺である。*592*～*594*は口径10～13cmに復原される。*592*・*593*は口頸部が弧状に外反し，口縁端部は垂直方向に面を取るもので，Ⅰ期に比定され，12世紀

後半のものである。*594*は口縁部は方頭で，端面が外傾する。*595*～*597*は肩部に櫛目波状文がめぐる。*598*～*600*は底部で，*598*・*600*は底外面に板状圧痕が残る。*598*の体部下端には指頭圧痕と櫛歯状の工具痕が残っており，欠損した肩部には櫛目波状文が加飾されていた可能性もある。*601*～*606*は叩打成形の壺である。*601*は口縁端部が外屈し方冠頭としたもので，頸部には櫛目波状文がめぐる。Ⅱ～Ⅲ期に比定され，13世紀前半～中頃のものである。*603*・*604*は口頸部は直立に近いがやや外傾し，口縁端部は方頭で端面は外傾する。Ⅲ～Ⅳ期に比定され，13世紀中頃～14世紀中頃のものである。*605*・*606*は体部が球状に膨らみ，口頸部は器壁が薄く挽き出され弧状に外反して，端部は外方に肥厚し弱い面を取る。外面は平行叩きが，*605*は頸部の下から，*606*は頸部よりかなり下がった位置から行われる。Ⅰ２期に比定され，12世紀後半のものである。

607～*642*は擂鉢である。*607*～*611*は口径17～24cmに復原される小型の鉢で，*608*は口径19.4cm，器高7.3cm，底径10.0cmに復原される。体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる形態で，卸目はみられない。*607*・*608*の口縁部は端面が外傾する。*609*・*610*の口縁端部は水平に面を取る。*611*は口縁部下を摘んでロクロナデし，端面は拡張して外傾する。*607*～*611*はⅠ期に比定され，12世紀後半のものである。*612*は体部が直線的に開き，口縁部は方頭で端面は外傾する。内面に波状の卸目を有し，卸目原体は2.7cm幅に11条を数える。Ⅱ期に比定され，13世紀前半のものである。*614*・*615*は口縁部が内湾し，端面は拡張して水平口縁となる。Ⅳ期に比定され，13世紀後半～14世紀中頃のものである。*616*は端部が先細りし，端面は外傾する。Ⅰ～Ⅱ期に比定される。*613*・*617*は口縁端部内端を爪状に仕上げる。Ⅱ期に比定される。*618*は肉厚で端部はやや外反し，端面は外傾する。Ⅲ～Ⅳ期に比定される。*619*・*620*は直線的に開き，口縁部端面は外傾する。*619*の卸目原体は，2.4cm幅に９条を数える。*621*は口縁端面は水平となる。*622*～*624*は口縁部端面が内傾する。*624*の卸目原体は1.9cm幅に７条を数える。*619*～*624*はⅣ期に比定され，13世紀後半～14世紀中頃のものである。*625*～*627*・*629*は口縁端部が拡張して内傾し，端面に櫛目波状文を有す。卸目は口縁部より一段下がった位置から密に施される。Ⅴ期に比定される。*628*は口縁端部の面が不明瞭になり，形骸化するが，端面に波状文を有する。卸目は，一定の高さから密に施される。Ⅵ期に比定される。*630*は口縁端部が外屈し，端面が丸く肥厚する。波状文は端面の外端に雑に施入される。*630*は，Ⅶ期に比定される。*631*～*642*は底部である。体部は内外面ロクロナデを施し，内面には卸目が施入される。卸目の単位がわかるものは，*631*は2.8cm幅に10条，*632*が3.3cm幅に16条，*634*が1.5cmに７条，*637*が1.5cm幅に７条，*638*は2.3cm幅に９条，*640*が3.2cmに13条，*641*が2.1cm幅に９条を数える。底外面は静止糸切りで，板状圧痕が残るものもある。

中国製白磁（第113図，*643*～*654*，図版53）

643～*650*は碗である。*643*～*646*は口縁部が肉厚の玉縁となるものである。*645*は体部外面は露胎で回転ケズリを施す。太宰府分類Ⅳ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半のものである。胎土は灰白色で，*644*・*646*は比較的白っぽい。*647*の口縁部は，外反して丸く収める。太宰府Ⅱ～Ⅳ類に相当し、11世紀後半～12世紀中頃のものである。*648*～*650*は口縁端部の釉を剥ぎ取り口禿としたものである。口縁部は直線的で外反せず先端を尖らせる。太宰府分類Ⅸ類に相当し，13世紀後半～14世紀前半のものである。*651*・*652*は皿である。*651*は胎土は灰白色を呈し黒色粒が多く混じる。体部下半は回転ケズリを施す。体部と高台の境から高台内側は露胎である。高台は４箇所抉り込みがあり，見込みには４箇所目跡がある。森田分類Ｄ群に相当し，14世紀後半～15世紀のものである。*652*は平底で，外面は露胎である。釉は薄く，貫入がある。太宰府Ⅵ１ａ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半のものである。*653*・*654*は壺である。*653*は平底の底部で全面に釉がかかる。*654*は壺の肩部で，外面に灰白色の釉がかかる。

中国製青白磁（第113図，*655・656*，図版53）

*655・656*は壺類で，梅瓶または水柱の胴部破片である。外面に櫛目状の渦文を有する。13世紀～14世紀前半のものである。

中国製青磁（第113図，*657～669*，図版53）

*657～667*は碗である。*657・658・660*は外面に片彫りの鎬蓮弁文をもつ。太宰府分類の龍泉窯系碗Ⅱｂ類に相当し，13世紀前半のものである。*660*は底部で，高台内部の刳りが浅く，底部は肉厚である。見込みには圏線をもつ。釉は高台の外側までかかり，畳付の一部にも垂れている。*659*は外面に細いヘラによる蓮弁文をもつ。龍泉窯系で，上田ＢⅡ類に相当し，14世紀前半のものである。*661*は内面に片彫蓮花文を有する。太宰府分類の龍泉窯系碗Ⅰ２類に相当し，横から見た葉文が加わるⅠ２ｂ類になる可能性もある。12世紀中頃～後半のものである。*662*は分割線の中に茸状（略化した花文または雲文）の文様がヘラ彫りに近い片彫りで施文される。太宰府分類の龍泉窯系碗Ⅰ４類に相当し，12世紀中頃～後半のものである。*663*は口縁部が外反する。胎土はやや粗く，釉はオリーブ灰色を呈し透明感があるが貫入がある。太宰府分類の龍泉窯系碗Ⅳイ類・上田分類ＤⅡ類に相当し，14世紀後半～15世紀前半のものである。*664*は口縁部が外反し，端部は肉厚で丸く収める。胎土はやや粗く，釉はオリーブ灰色を呈し，半濁している。太宰府分類の龍泉窯系碗Ⅳ類・上田分類ＤⅡ類に相当し，14世紀後半～15世紀前半のものである。*665*は底部で，やや高い高台をもち，高台外端に幅広の面取りをする。高台内側は深く抉る。腰が深く，見込みが広い。内外面無文である。釉は高台部の一部にまで垂れている。胎土はやや粗く，底部の焼成が不良のため下半は酸化して赤みを帯びる。太宰府分類の龍泉窯系碗Ⅳイ類・上田分類ＤⅡ類またはＥ類に相当し，14世紀後半～15世紀前半のものである。*666*は内外面無紋である。太宰府分類の龍泉窯系碗Ⅰ１ａ類に相当し，12世紀中頃～後半のものである。*667*は体部外面に縦の櫛目文を有する。太宰府分類の同安窯系碗Ⅰ１ｂ類に相当し，12世紀中頃～後半のものである。

*668・669*は皿で，体部中程で大きく外反する形態である。*668*は，稜花皿の可能性もあるが，小片のため不明である。15～16世紀のものである。*669*は，口縁端部を波状に抉る。内面にヘラ彫りの文様を有す。龍泉窯系の稜花皿で，15世紀のものである。

八尾（第114図，*670*）

*670*は甕で，Ｎ字状口縁を呈し，暗褐色の自然釉がかかる。13世紀後半～14世紀前半のものである。

山茶椀（第114図，*671*）

*671*は器壁が薄く，口縁端部は小さく内湾する。東濃型の第７または第８型式に比定され，13世紀後半～14世紀初頭のものである[注21]。

古瀬戸（第114図，*672～677*，図版54）

*672*は卸皿である。口縁端部は拡張して上方に面を取り，内端部をつまみ出す。内面から外面口縁部に灰釉がかかる。後期様式Ⅲ期に比定され，15世紀前半のものである。

*673*は平椀である。底外面は回転糸切りである。高台径は5.3cmで，断面四角形の貼り付け高台である。内面に灰釉がかかる。中期様式Ⅲ期に比定され，13世紀前半のものである。

*674*は天目茶椀である。灰釉がかかり，高台周辺は露胎である。高台は細く低い貼り付け高台で，内側に回転糸切り痕が残る。中期様式Ⅱ期に比定され，13世紀前半のものである。

*675・676*は合子蓋である。*675*は縁部最大径6.4cm，糸切り痕の残る底径2.8cmである。傘の縁部は横に伸び，脚部は高い。頂部は中央が凹み，小粘土塊を貼り付けているが欠損のため意匠は不明である。外面に鉄釉がかかる。後期様式Ⅲ～Ⅳ期に比定され，15世紀前半～中頃のものである。*676*は縁辺最

注21　藤澤良祐　1994「山茶椀研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第３号

大径は4.5cm，糸切り痕の残る底径は1.9cm，器高は1.3cmである。傘部は斜め下方に弧状に垂れ下がる。頂部中央に小粘土塊を貼り付けてつまみとし，４本の粘土紐隆帯を垂下させ，間隙に貼花文を添付する。釉は外面にかけられるが，内面の一部にも鉄釉が流れている。鉄釉の上から灰釉を施したものとみられ，外面は灰オリーブ色を呈する。中期様式Ⅰ～Ⅲ期に比定され，13世紀末～14世紀前半のものである。

*677*は直縁大皿である。体部は直線的に開き，口縁端部は断面がやや丸みをもった方形を呈する。外面には細かなロクロ目が残る。内外面の一部にわずかに漆が付着する。後期様式Ⅱ期に比定され，14世紀末～15世紀初頭のものである。

瀬戸美濃（第114図，678～682，図版54）

678～*680*は天目茶椀である。*678*は口径約12cmに復原され，口縁端部は短く外反する。*679*は口径約12cmに復原される。体部は内湾し，口縁端部はやや外反する。鉄釉を施す。*680*は底径3.4cmである。鉄釉を施し，底外面は錆釉がかかる。*678*～*680*は大窯Ⅰ期に比定され，15世紀末～16世紀初頭のもの。

681・*682*は皿である。*681*は端反皿で，灰釉がかかる。*682*は丸皿で，灰釉がかかる。大窯Ⅱ期に比定され，16世紀前半～中頃のものである。

瓦器（第114図，*683*・*684*）

683・*684*は火鉢である。*683*は口縁部は内湾し，上面と内端に広く面を取る。口縁部外面に隆帯を２条貼り付け，間に雷文の印刻を連続して行う。外面はロクロナデ，内面は不定方向ナデを施す。胎土は粉質で骨針を含み，焼成は軟質で外面は灰黒色を呈する。*684*は口径17.6cmで，口縁部は内側に直角に折れ，上面に広く面を取る。口縁部外面に沈線と雷文の印刻を有する。ロクロ成形で内面には指頭圧痕が残る。胎土は雲母を多く含む。硬質で，にぶい褐色を呈する。17世紀以降のものである。

越中瀬戸（第114・115図，*685*～*706*，図版55・56）

*685*は天目茶椀である。口径約14cmに復原され，口縁端部は短く外反する。17世紀前半のものである。鉄釉を施す。

686・*687*は丸椀である。*686*は体部は直立気味で，口縁端部は丸く収める。口径は約10cmに復元される。鉄釉を施す。17世紀のものである。*687*は体部はロクロナデ，外面体部下端から底部にかけてはロクロ削りを施す。鉄釉の上から灰釉を流しかける。17世紀のものである。

*688*は香炉である。口径は約11cmに復原される。体部は直立し，口縁部は上方に面を取り内端が肥厚する。口縁部内面から体部外面にかけて透明感のある灰釉がかかる。

689～*698*は皿である。*689*は口径7.6cm，底径3.0cmで，底部は回転糸切りである。鉄釉を施す。17～18世紀のものである。*690*は口径10.6cm，器高2.0cm，底径4.5cm。体部下半から底部にかけてはロクロ削りで，高台を碁笥底状に削り出す。鉄釉を施し，見込みと底外面は露胎である。見込みには釉止めの段がある。17世紀前半～中頃のものである。*691*は底部回転糸切りで，内面には鉄釉が施され重ね焼き痕が残る。17～18世紀のものである。*692*～*698*は底外面はロクロ削りで，底径は4.8～6.4cmである。*692*・*696*は鉄釉，*693*・*697*・*698*は灰釉を施す。見込みと底外面は露胎である。*695*～*697*は菊の印花がある。*692*・*693*・*695*～*698*は17世紀前半～中頃，*694*は17～18世紀のものである。

*699*は壺蓋である。つまみを欠損する。中央が窪み，縁部が立ち上がって折れ端部は水平よりやや垂下気味になる。回転糸切りである。外面に鉄釉がかかる。18～19世紀のものである。*700*は壺である。広口の壺で，短く立ち上がる口縁が付く。鉄釉がかかる。17～18世紀のものである。

*701*は火入である。体部は垂直に立ち上がり，口縁部は弧状に外反する。外面から内面口縁部より

やや下がった位置にかけて鉄釉を施すが，口縁端面は釉剥ぎし露胎となっている。

702・*703*は匣鉢である。底外面糸切りで*702*は全面に，*703*は底外面を除いた部分に錆釉がかかる。*702*・*703*とも17～18世紀のものである。

*704*は瓶である。底外面は回転ヘラ切りである。内外面に透明な鉄釉がかかり底外面は露胎である。

705・*706*は擂鉢である。体部は直線的に開き，口縁部は外面に面を取り，下端が垂下する。内外面に錆釉がかかる。17世紀のものである。

唐津（第115図，*707*～*709*，図版56）

*707*は皿で見込みに胎土目が残る。底部は削り出し高台である。16世紀末～17世紀初頭のものである。*708*は内野山窯系の皿で，内面に銅緑釉を施す。蛇の目釉剥ぎをし，砂目が残る。17世紀後半～18世紀前半のものである。*709*は鉢で，内面に草花文の鉄絵が描かれる。

伊万里（第115図，*710*～*712*，図版55）

*710*は碗である。高台内に銘がある。*711*・*712*は皿である。*711*は碁笥底状を呈し，内面に染め付けがある。*712*は陶胎染付で，見込みは蛇の目釉剥ぎをし，内面に唐草文の染付がある。17世紀後半～18世紀前半のものである。

陶器（第115図，*713*～*715*）

713～*715*は近世以降の産地不明陶器である。*713*は小型の器種で，胎土はにぶい黄褐色を呈する。*714*は大型の器種の底部で，平坦な底部には円形の脚の痕跡が残る。脚部と体部の割れ口に，脚と体部を貼り付ける前につけたとみられる筋状の工具痕が数条残る。胎土は灰褐色を呈し，粗い砂粒，白色粒，雲母等を多く含む。*715*は壺または鉢類の転用で，外面に粘土を貼り付けて器壁を厚く強化したもので，内面には溶解した鉱物が付着する。内面と外面の高台付近まで黒褐色の釉がかかる。

人形（第115図，*716*・*717*，図版57）

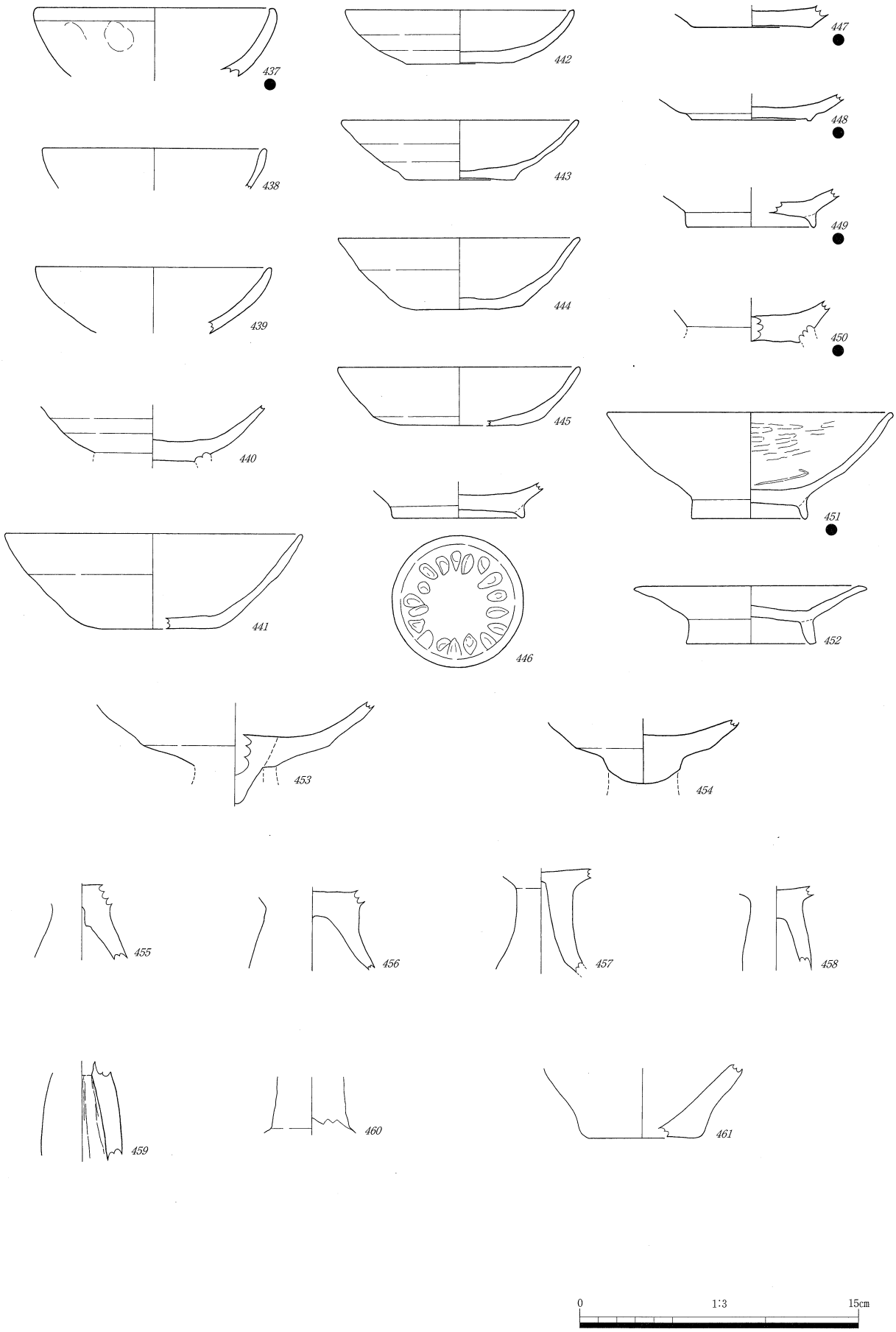
*716*は伊万里の人形で，全面に白磁釉がかかる。型打成形で，側面に継ぎ目が残る。

*717*は土人形の天神である。型打成形で，中空となっている。

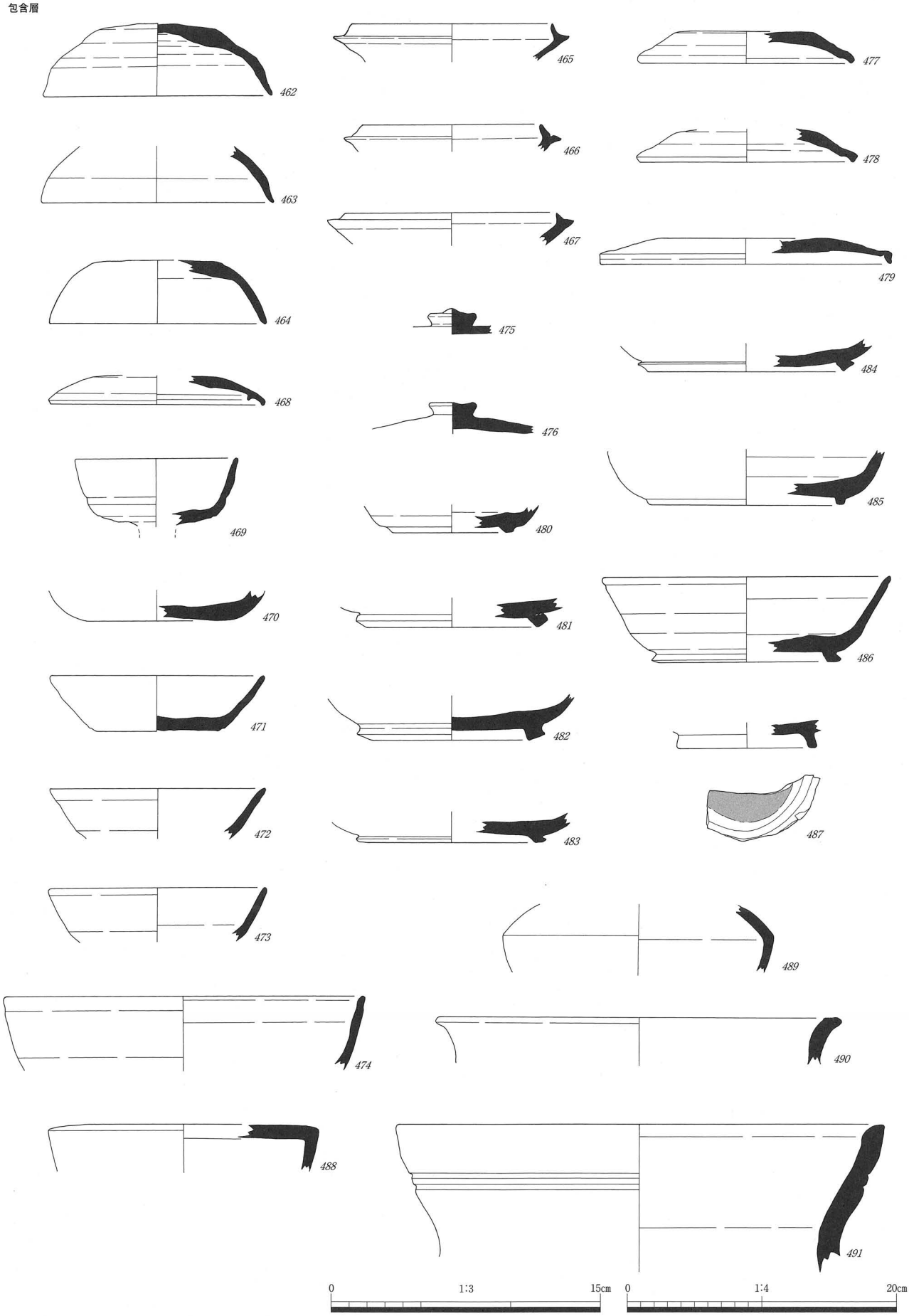
土錘（第116図，*718*～*749*，図版59）

形態は*721*・*723*は球形，*719*・*724*・*726*～*728*・*732*・*733*・*738*・*739*・*743*・*749*は樽形，*725*・*735*～*737*・*741*・*742*・*744*～*748*は寸胴型を呈する。*719*は長さ3.4㎝，直径3.0㎝，孔径1.2㎝の小型のものであるが，摩滅し欠損しており，残存部重量は18.8ｇである。*720*は長さ3.1㎝，直径2.5㎝，孔径1.4㎝，重量12.9ｇと薄く軽いが，表面は摩滅しており，すり減ったものとも考えられる。*721*は完形で，長さ3.7㎝，直径3.7㎝，孔径1.3㎝，重量30.3を測り，小型で軽い。*724*は長さ3.7㎝，直径2.9㎝，孔径1.0㎝の小型のものであるが，やや摩滅しており，残存部重量は26.5ｇである。*725*は長さ4.1㎝，直径3.9㎝，孔径は1.2㎝であるが，摩滅し欠損している。*727*は完形で，長さ4.4㎝，直径3.3㎝，孔径1.4㎝，重量は31.9で，小型で軽い。*728*は長さ4.4㎝，直径3.6㎝，孔径1.2㎝，重量34.6ｇで，小型で軽い。*732*は長さ5.9㎝，直径4.8㎝，孔径1.9㎝の大型のもので，ほぼ完形であるが摩滅しており，残存部重量は114.2ｇである。*738*は長さ6.3㎝，直径5.5㎝，孔径1.9㎝，重量164.8ｇで，大型で重い。*739*は直径4.6㎝，孔径1.6㎝であるが，摩滅し欠損しており，残存部重量は119.5ｇである。*743*は長さ6.1㎝，直径4.2㎝，孔径1.2㎝であるが，摩滅し欠損しており，残存部重量は95.9である。*745*は長さ7.9㎝，直径4.8㎝，孔径1.7㎝の大型のものでほぼ完形であるが，やや摩滅し欠損しており，残存部重量は161.7ｇである。*746*は長さ7.9㎝，直径4.8㎝，重量146.6ｇで，大型で重い。*718*・*722*・*723*・*726*・*729*・*730*・*731*・*733*～*737*・*740*～*742*・*744*・*747*～*749*は欠損している。

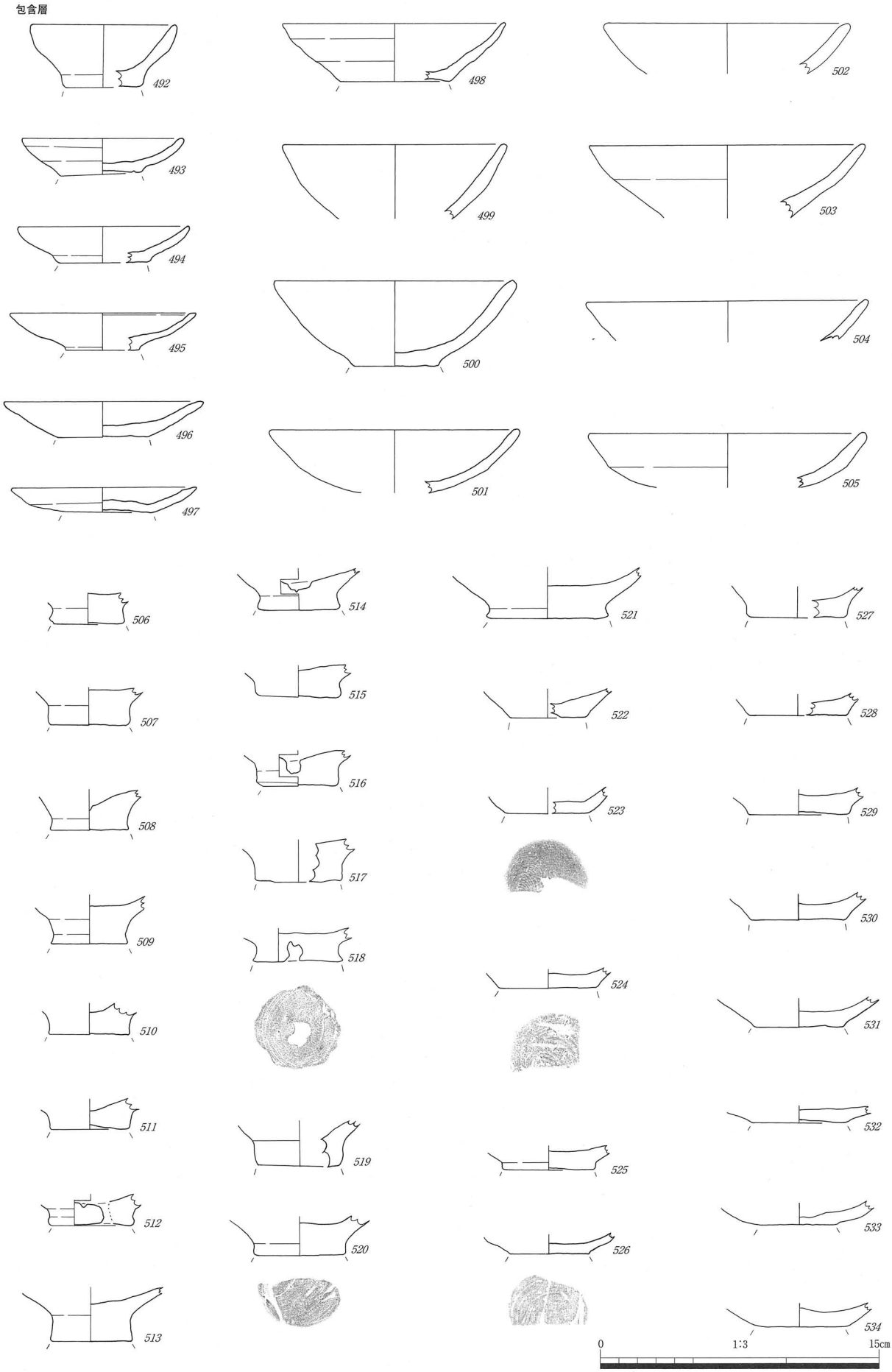
包含層



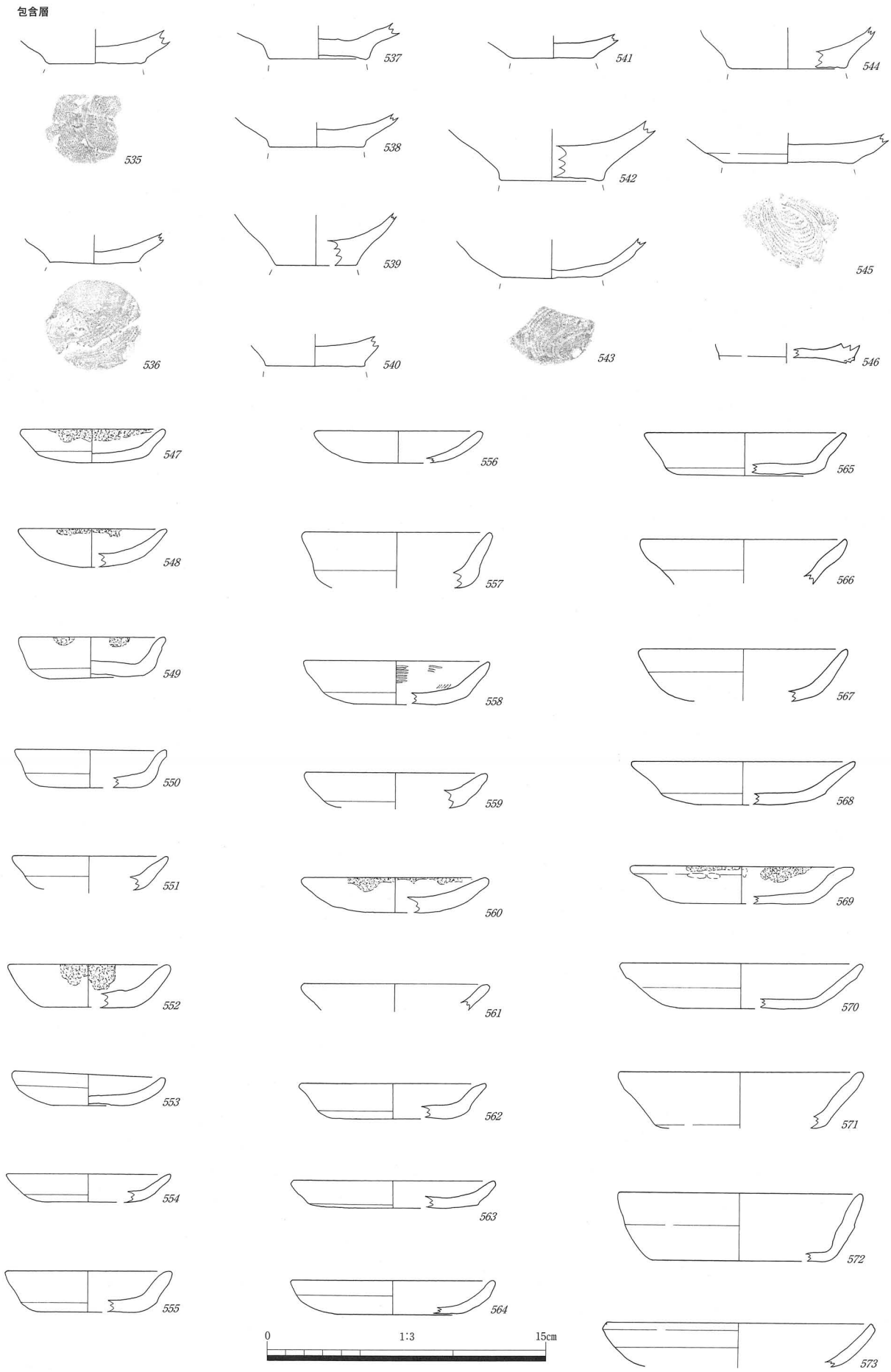
第105図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/3)
包含層



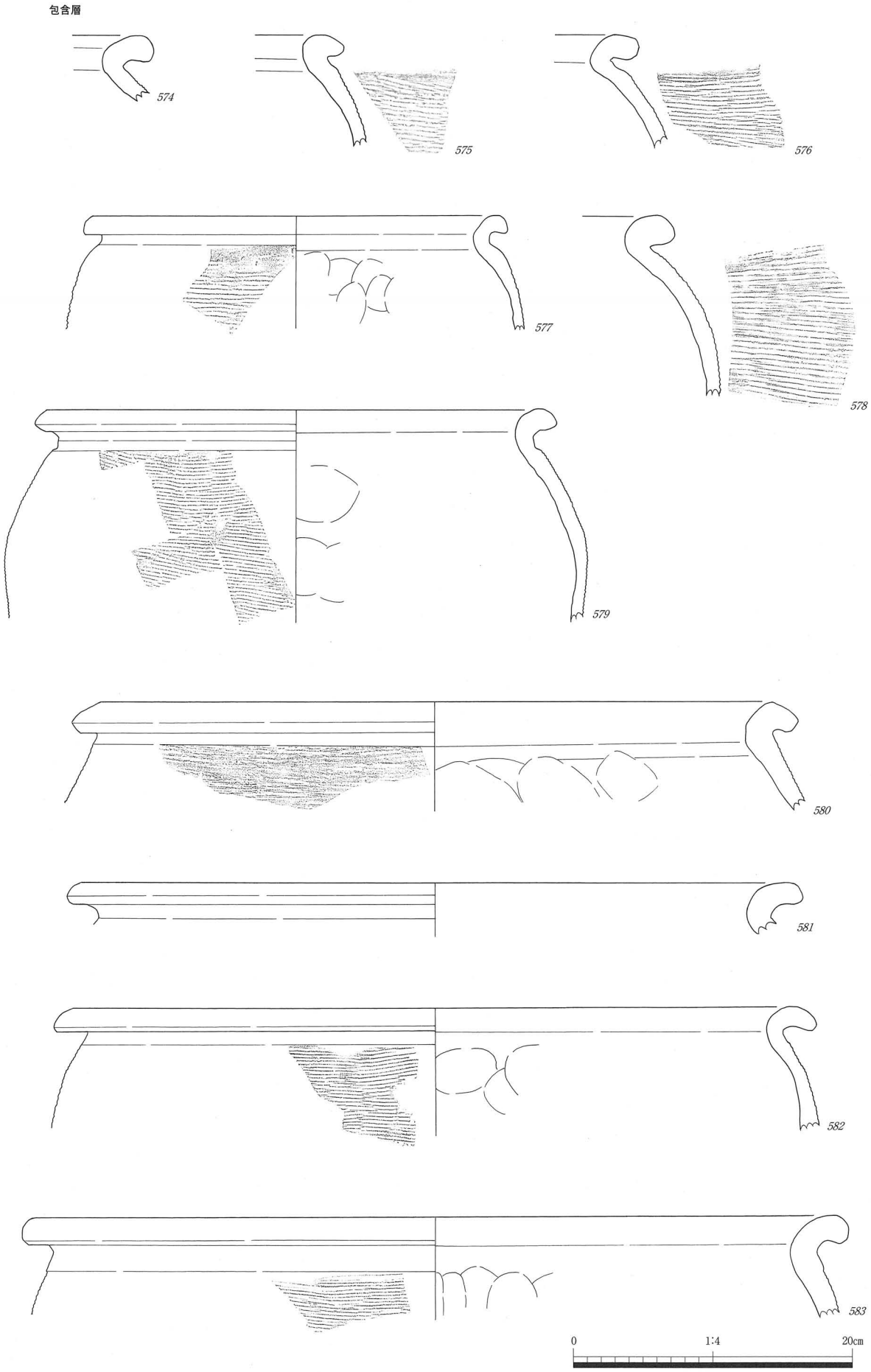
第106図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(*462*～*487*・*489*～*491*　1/3，*488*　1/4)
包含層



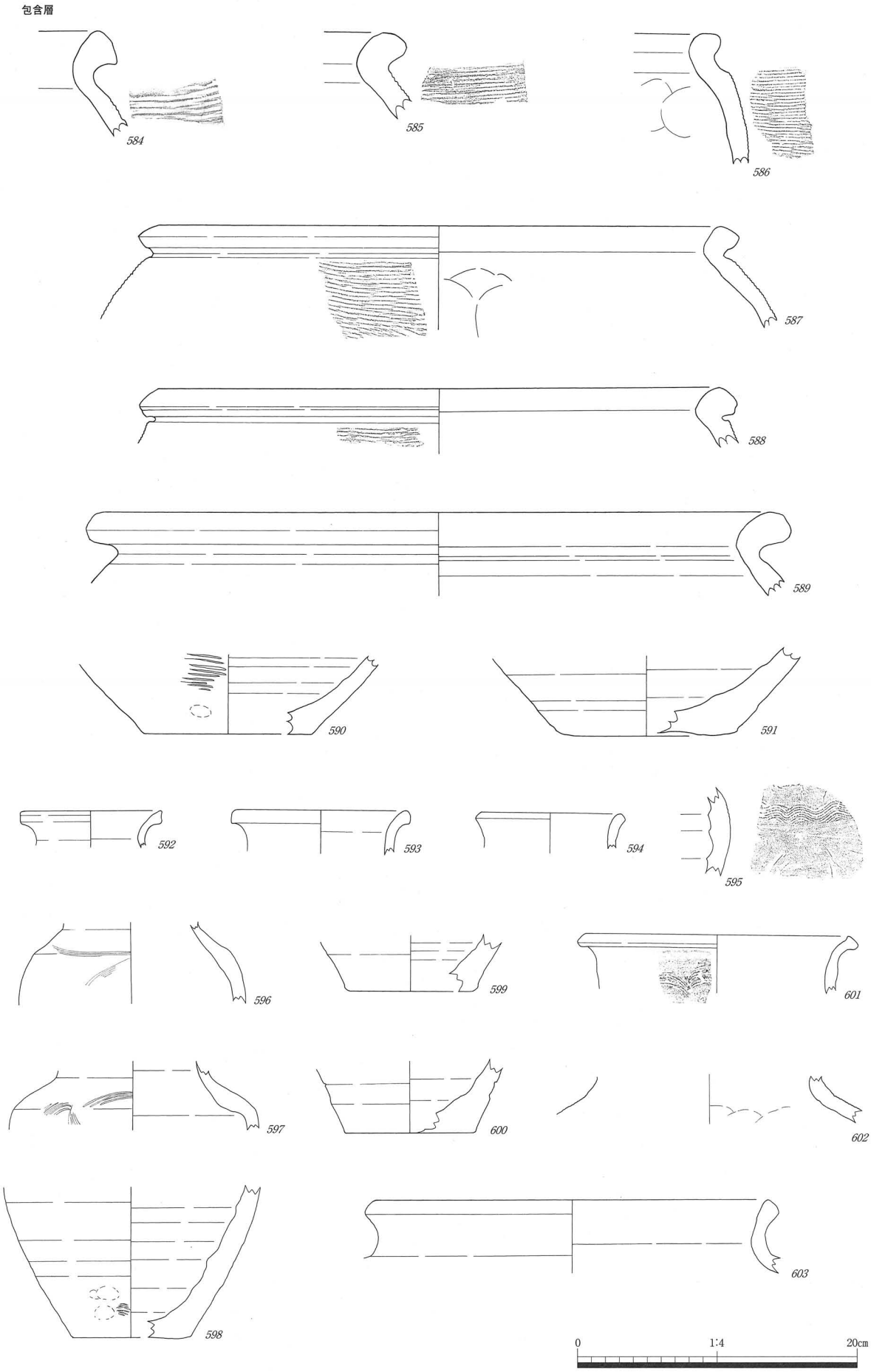
第107図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/3)
包含層



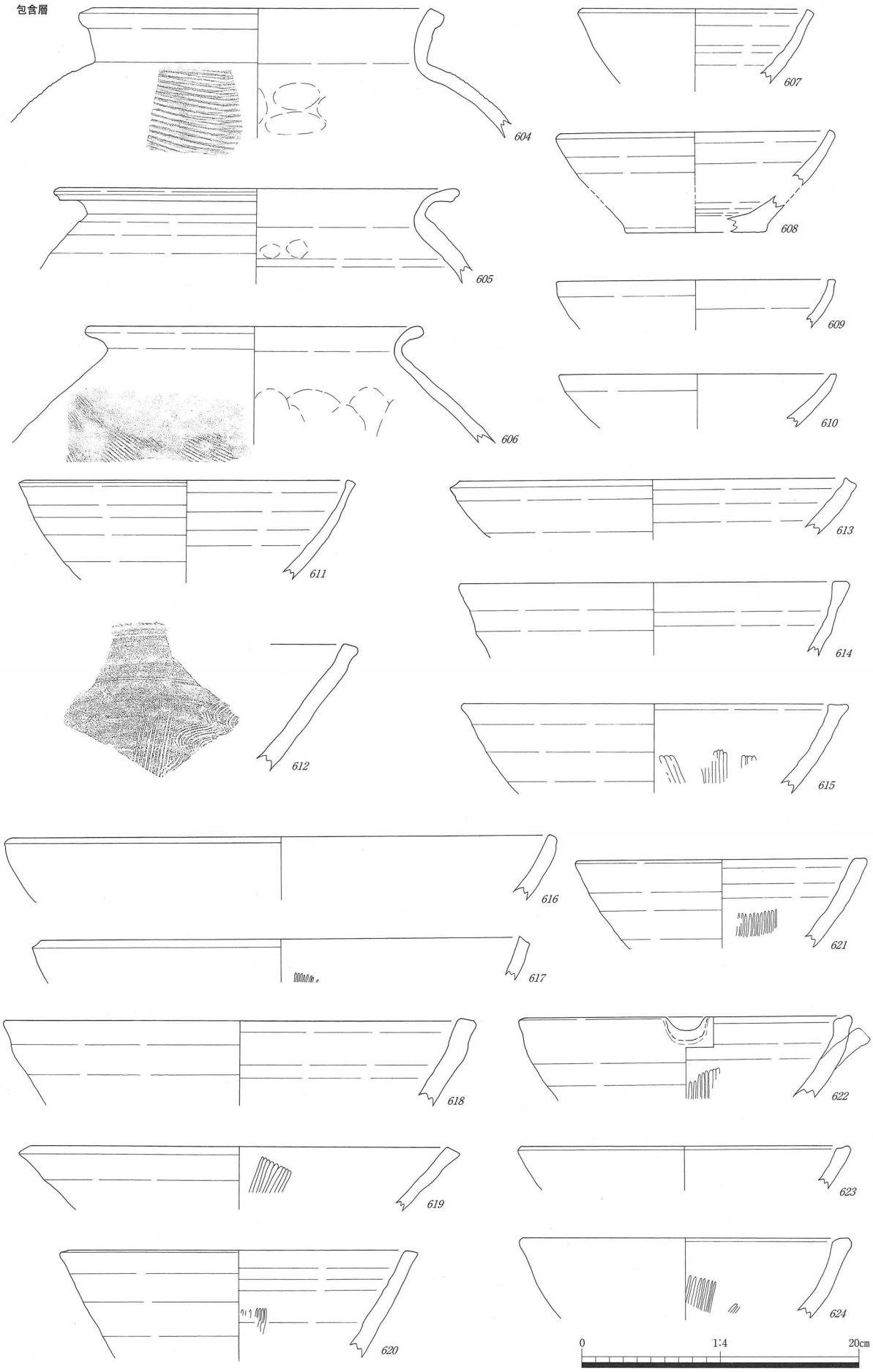
第108図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/3)
包含層



第109図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/4)
包含層



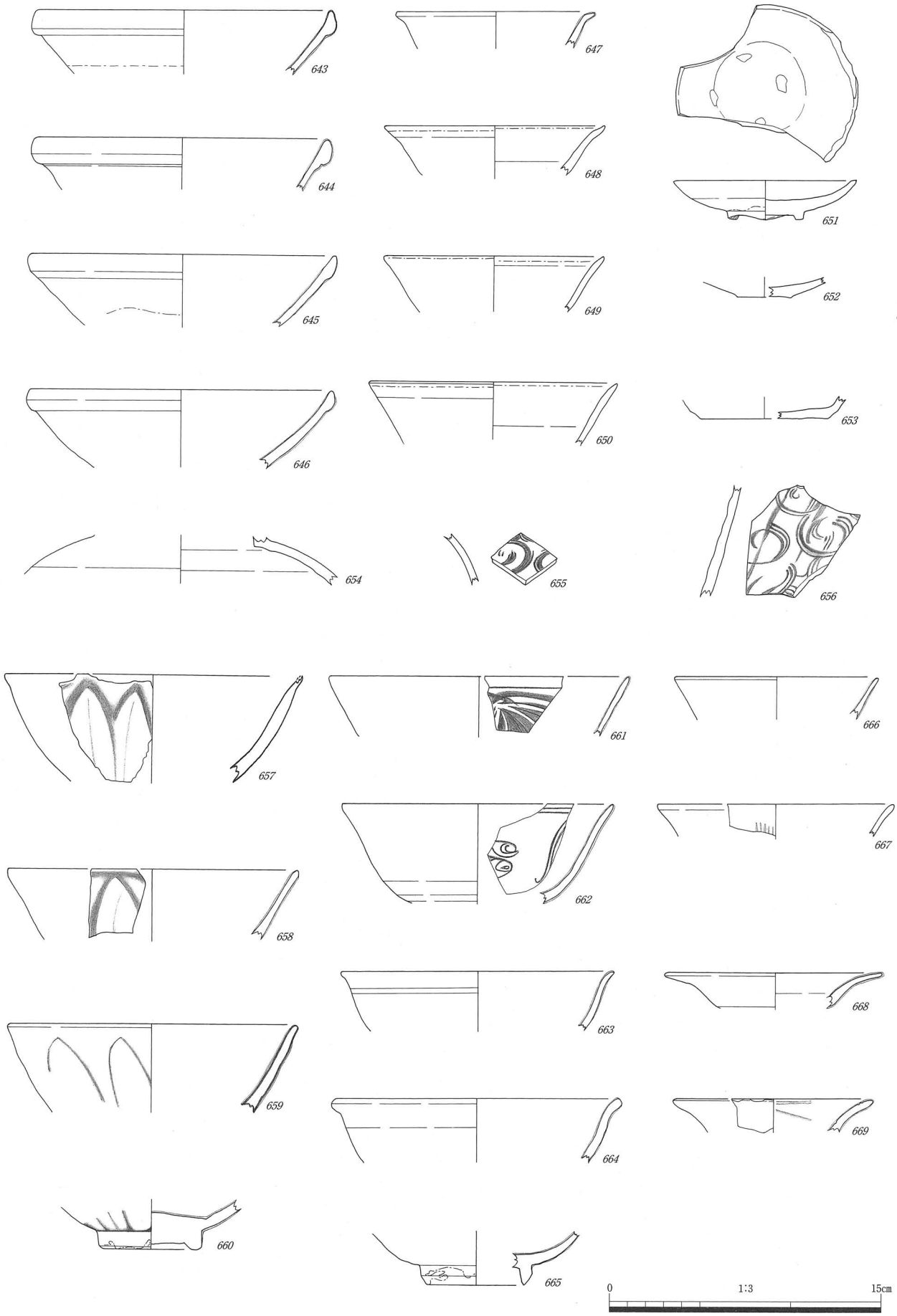
第110図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/4)
包含層



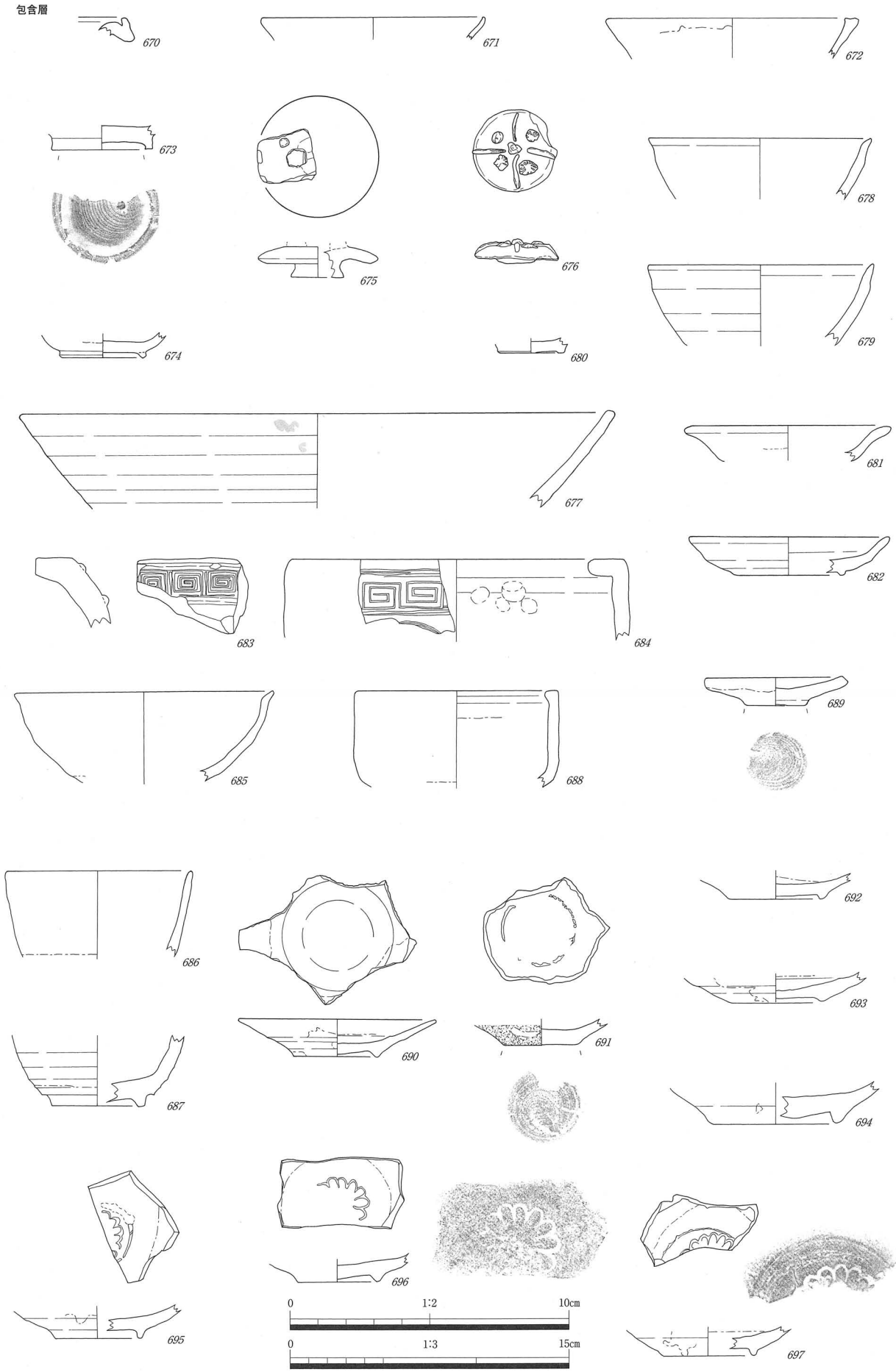
第111図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/4)
包含層

第112図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/4)
包含層

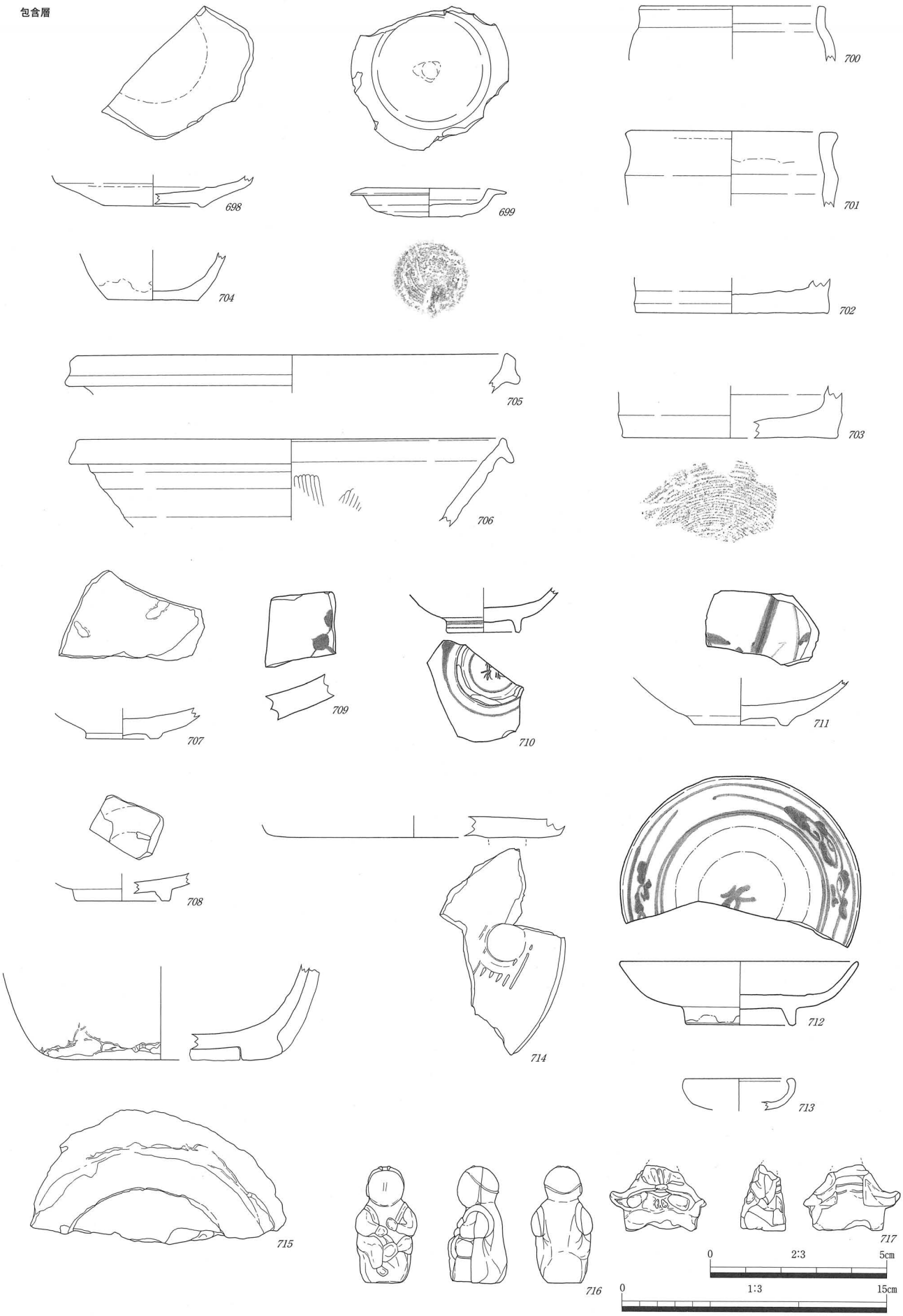
包含層



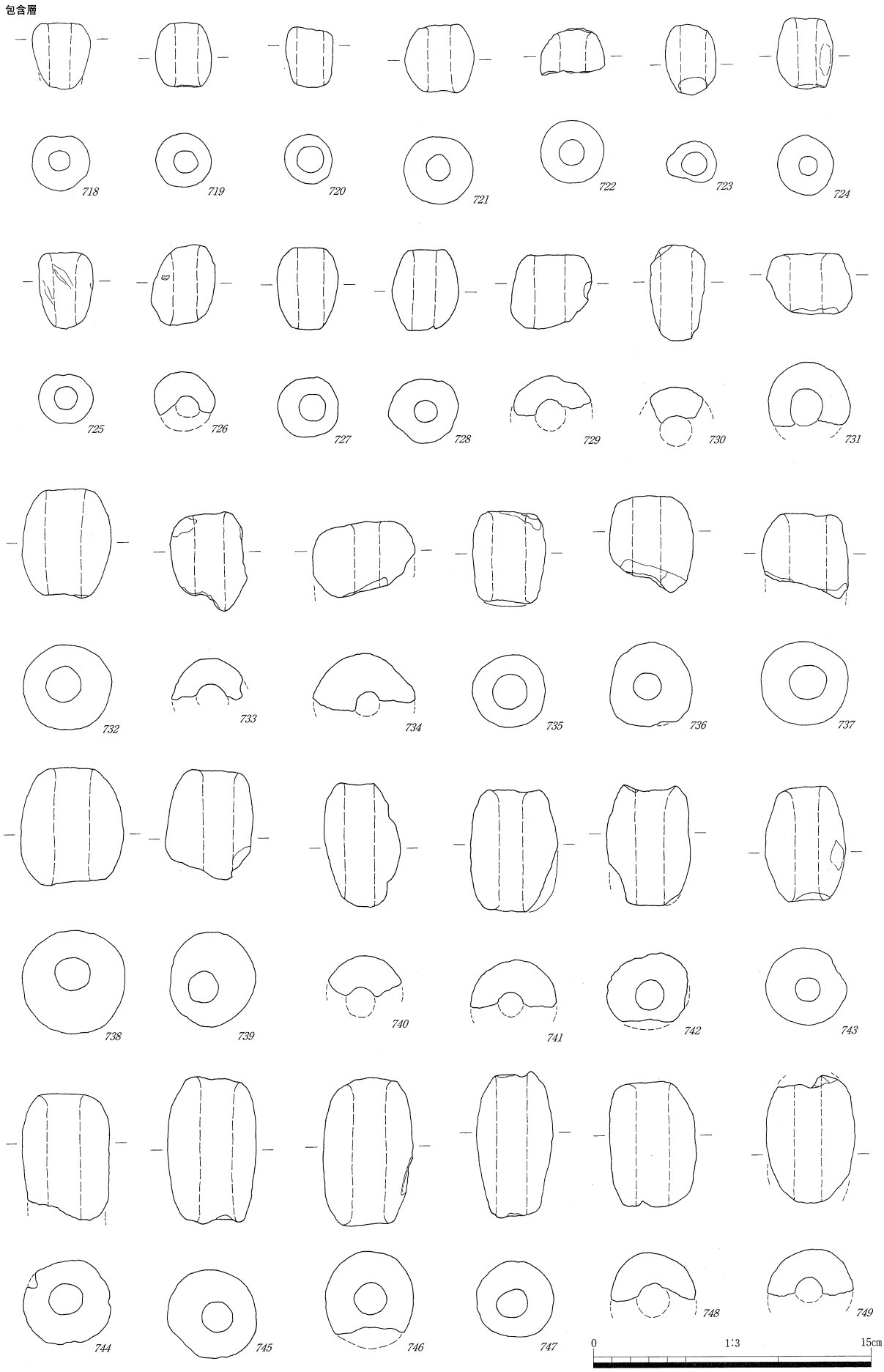
第113図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/3)
包含層



第114図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　（拓本696・697　1/2，1/3）
包含層



第115図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　（*716*　2/3，*698*～*715*・*717*　1/3）
包含層



第116図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　土器・陶磁器　(1/3)
包含層

（2）木製品

横櫛（第117図，*1*，図版60）

ＳＥ1291から出土した。材はイスノキである。背は上方に向かって膨らみ，背とほぼ平行に，歯の挽き出し位置を決める切り通し線が両面に２条ずつある。歯は３㎝あたり30枚と細かく挽き出されており，梳櫛である。表面は平滑に研がれている。

下駄（第117図，*2*～*4*，図版60）

材は，*3*はアカマツ，クロマツ等の二葉松類，*2*・*4*はスギである。*2*・*3*は連歯下駄で，表土及び包含層から出土した。*2*は平面形は長楕円形で，後歯付近が最大幅となる。全長は20.0㎝である。歯は磨り減っており特に後歯の磨滅が著しい。前壺は右寄りに穿たれ左足用とみられる。*3*は平面形は長方形で隅を丸く切り落とす。歯は左側が磨り減って傾斜している。*4*はＳＤ301から出土した。無歯下駄である。平面形は楕円形で，全長13.8㎝，幅8.3㎝と小型である。

柄？（第117図，*5*，図版60）

細長い板の先端に半円形の突起部を作り出したもので，柄であろうか。ＳＤ４から出土した。先端は焼け焦げている。材はスギである。

紡錘車？（第117図，*6*，図版61）

直径5.9㎝の円形を呈し，中央に穿孔がある。紡錘車であろうか。ＳＤ301から出土した。材はケヤキか。紡錘車は一般に目が通った材を使用することが多く，*6*のように瘤状の部分を使用する例は珍しいので，紡錘車とすれば流通品である可能性は低い[注22]。

曲物（第117図，*7*，図版61）

ＳＥ1009から出土した。材はヒノキである。側板は樺皮綴じされ，打合せ部分のみ内面ケビキがある。底板と側板は釘結合で，木釘孔がある。

円形板（第117図，*8*～*10*，図版61）

材はすべてスギである。*8*は包含層から出土した。直径約38㎝に復原される。蓋か。対称位置にある小孔は，把手を装着するためのものであろうか。円形の押圧痕が一箇所にみられる。*9*はＳＥ1001から出土した。曲物の底板で，木釘孔がある。放射性炭素年代は12世紀末～13世紀である[注23]。*10*は半径約９㎝に復原される小型品である。

漆器（第117図，*11*～*14*・*16*，図版62・63）

漆器の材は*14*のみブナで，他はすべてケヤキである。木取りはすべてヨコ木取り（柾目）である。*11*はＳＫ1302，*12*・*14*はＳＤ11，*13*・*16*はＳＥ1001から出土した。*11*は椀で，体部は緩やかに立ち上がり口縁部は欠損する。底部は薄く高台は欠損する。総黒色系漆で，漆絵はなく，高台裏は露胎である。下地は炭粉漆下地である。*12*は体部は緩やかに立ち上がる大ぶりの器形で，椀または鉢の可能性もある。無台である。総黒色系漆で，外面下半の塗膜はほとんど剥離している。下地は炭粉渋下地である。*13*は無台の椀または皿である。総黒色系漆で，外面は剥離が著しい。下地は炭粉渋下地である。*14*は椀で，体部は下半の器壁が厚く，高台裏はＵ字状に削り出す。外面は黒色系漆，内面は赤色（朱）漆である。下地は炭粉渋下地である。*16*は皿である。平らな底部に直線的に開く短い口縁部が付く。無台である。内面にロクロ挽きの際のカンナ痕が筋状に残る。底部外面は不定方向から削り，ほぼ中央にＵ字状のロクロの爪痕がある。*12*・*13*・*16*は12～13世紀，*14*は近世のものである。

木地皿（第117図，*15*，図版63）

ＳＤ４から出土した。体部は緩やかに立ち上がり，口縁端部は外反する。体部下半から底部は厚み

注22　株式会社パレオ・ラボ植田弥生氏のご教示による。
注23　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所「Ⅸ．放射性炭素年代測定　１．手洗野赤浦遺跡・岩坪岡田島遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定」

があり，無台である。材はケヤキである。

井戸枠（第118～123図，*17*～*51*，図版64～72）

17～*49*はＳＥ1001の井戸枠である。*17*～*22*は横桟である。材はスギである。*17*・*20*は上段横桟で，下段横桟に比べ遺存状況は悪く，欠損している。*17*は西面，*20*は北面のもので目違い枘である。*18*・*19*・*21*・*22*は下段横桟で，目違い枘で井桁に組まれる。水没していたためか遺存状況は良好である。長さ81.4～84.8cm，幅10.4～15.2cm，厚さ2.6～3.4cmである。*18*は縦板の圧痕が残る。*23*～*26*は支柱である。材は*23*はクリ，*24*～*26*はスギである。*23*は南東隅の支柱で，上部を欠損し，断面は円形で直径4.3cmである。*24*～*26*は断面は方形で*23*と異なり，遺存状態が良好であることから，井戸の修理に伴い新しく設置し直された可能性もある。*24*～*26*は筋状の圧痕があり，転用材か。*27*～*49*は縦板及び添板である。上部は欠損し，下部はほぼ水平に切られている。東・西・南面は幅広の縦板を２枚立て，中央や隅に幅狭の添板を外側から当てる。北面は幅狭の板を11枚重ねて当てており，ここでは内側の板を縦板，外側の板を添板と呼ぶことにする。材はスギが多く，*32*・*36*・*37*・*41*・*43*がヒノキである。*27*・*29*は東面の縦板で幅38.4cm・35.2cmと幅広である。下段横桟の圧痕があり，裏面の下部には手斧痕が残る。*28*は東面の中央添板である。幅15.8cm。*30*・*34*は西面縦板で，*30*の残存長は91.4cm，幅は*30*が37.2cm，*34*は37.2cmである。上段と下段の横桟の圧痕が残る。*31*は西面南隅添板，*32*は西面中央添板，*33*は西面北隅添板である。幅は10.7～20.6cmである。*31*・*32*・*33*は出土時には横桟に接していないが，筋状の圧痕があるので転用材か。*35*は南面東隅添板，*36*は南面中央添板である。幅は12.6cm～14.4cmである。*37*・*38*は南面縦板で，*37*の残存長は91.2cm，幅は*37*が34.8cm，*38*が36.4cmである。*37*は上段・下段横桟の圧痕と手斧痕，*38*は下段横桟の圧痕と手斧痕がある。*39*～*43*は北面縦板である。幅は12.8～17.8cmである。*40*・*41*・*42*には下部に手斧痕が残る。筋状の圧痕もある。*44*～*49*は北面添板で，幅は11.7cm～14.4cmである。*44*・*47*・*49*は下部に手斧痕がある。年輪年代の測定結果は，*27*が1187年，*34*が1193年である[注24]。

50・*51*はＳＥ1291出土の板で，井戸内で他の数枚の板とともに出土しており，井戸の縦板であった可能性がある。材はスギである。両端を欠損している。

柱（第124図，*53*・*54*，図版73）

*53*はＳＢ８を構成するＳＰ1510の柱である。材はスギである。断面形は不定形で，径は8.2cmである。底面は水平に切られている。

*54*はＳＢ３を構成するＳＰ234の柱である。材はクリである。断面形は不定形で，残存長54.5cm，径は10.2cmである。底面は不定方向から削り，ほぼ水平にしている。

用途不明品（第123～126図，*52*・*55*～*77*，図版73～76）

52・*55*～*57*は棒状の加工木である。*52*はモチノキ科の材で，中空になっており貫通している。残存長20.8cm，直径1.7cmである。一方は斜めに切られている。ＳＥ1291から出土しており，井戸祭祀に関わる祭祀具であろうか。*55*はＳＤ301から出土した。先端は丸く削り，途中に段をもつ。材はスギである。*56*はＳＤ11から出土した。先端に円形の孔があり，もう一方は焼け焦げている。材はヒノキである。*57*はＳＤ301から出土した。材はスギである。

58～*62*は板状の加工木である。*58*～*60*は先端に枘状の突起がある。材は*58*がスギ根，*59*・*60*がスギである。*59*はＳＤ11，*60*はＳＤ４から出土した。*59*は平面形は台形状を呈し底辺側には弧状の抉りがある。先端の突起部には孔をもち，下半には段がある。*61*・*62*はＳＥ1001から出土した。材はスギである。*61*は小孔が４箇所あり，２対のものと考えられる。*62*は方形に切られているが一方は破損して

注24　第二分冊　自然科学分析　光谷拓実「Ｘ．手洗野赤浦遺跡・岩坪岡田島遺跡出土木製品の年輪年代」

いる。

*63*はＳＸ12から出土した。両端に枘状の突起があり，部材か。材はヒノキ科である。

64・*66*はＳＥ508から出土した。材はスギである。*64*は５箇所に穿孔がある。*66*は２辺が直角で，隅を切り落としている。折敷の一部か。

*67*はＳＤ４から出土した。断面は正方形で，全面に細かい刻みが入れられている。材はスギ。

65・*68*・*69*はＳＤ11の肩付近で折り重なって出土した板状の木製品である。*65*の平面形は欠損のため全容は不明だが，出土状況から*68*・*69*と関連するものと考えられ，放射性炭素年代の測定結果は10世紀末～12世紀中頃である[注25]。材はスギである。*68*・*69*は表面は現状では木目が筋状に浮き出ているが，元来は縦引き鋸または槍鉋によって平滑に仕上げられたものとみられる。裏面は蛤刃の手斧痕が全面に残る。手斧の刃は木目に対して直角に当てられ，ほぼ均等な間隔で木目に沿って奥から手前へと連続して削られる。横に張り出す帯状の部分と如意頭文の意匠に象られた部分からなり，如意頭文形の部分の規格は二者同じであるが，帯状の部分は長短がある。左右対称とすれば，横幅は*68*は約42㎝，*69*は約57㎝に復原される。縦幅は両者15.7㎝，厚さは*68*が1.3㎝，*69*が1.2㎝である。如意頭文形の部分の両端は裏面からハート形の抉りが入れられている。帯部の端部の角度は60°で切断されている。*69*の材はスギで木取りは柾目である。用途は不明であるが可能性として，絵巻などにみる意匠の作例から，懸魚または枠にはめ込み固定する建具類等[注26]に使用されたことなどが考えられる。懸魚とすれば切勾配60°の破風板に取り付けられたと考えられ，このような切勾配の建築は中世においては社殿が想定される[注27]。

*70*は棒状の加工木で，一部が焼け焦げている。ＳＤ11から出土した。

*71*は，先を尖らせた棒状の加工木で，縄文時代の流路ＳＤ1123から出土した。全長は289㎝，径は２㎝である。樹種はスギである。用途は，流路から出土し，先を尖らせていることから魚撈用のヤスか。

*72*は板状の加工木で，ＳＥ1229から出土した。材はスギである。

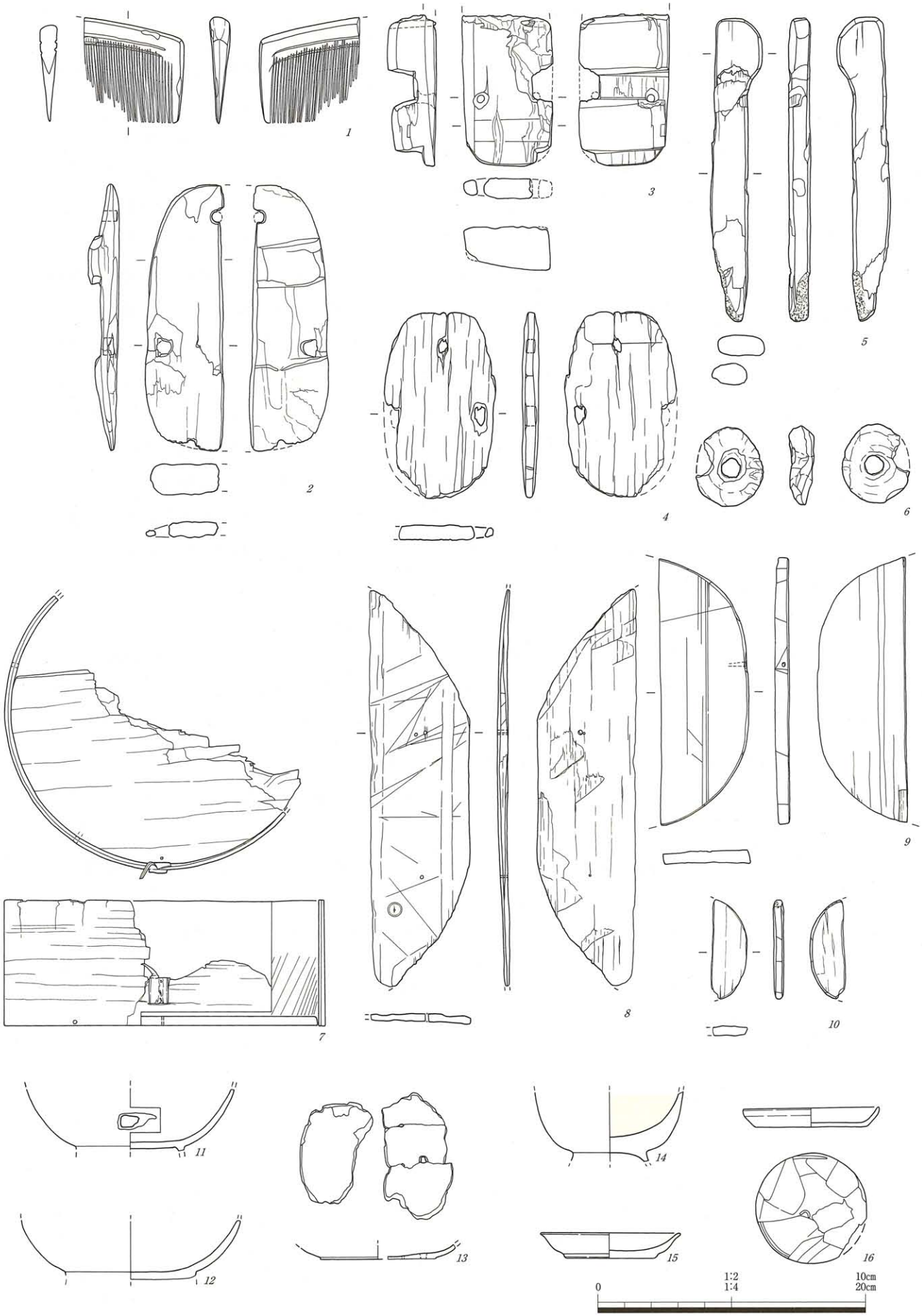
73・*74*は板状の加工木で，ＳＫ1305から出土した。材はスギである。*73*は長方形を呈し，*74*は３箇所に穿孔がある。

*75*は板状の加工木で，ＳＫ1301から出土した。中央に長方形の孔があり，その両側に７箇所穿孔があるが，両端は欠損する。材はスギである。

76・*77*は長方形の板状の加工木で，*76*はＳＸ12，*77*はＳＥ451から出土した。材はスギである。

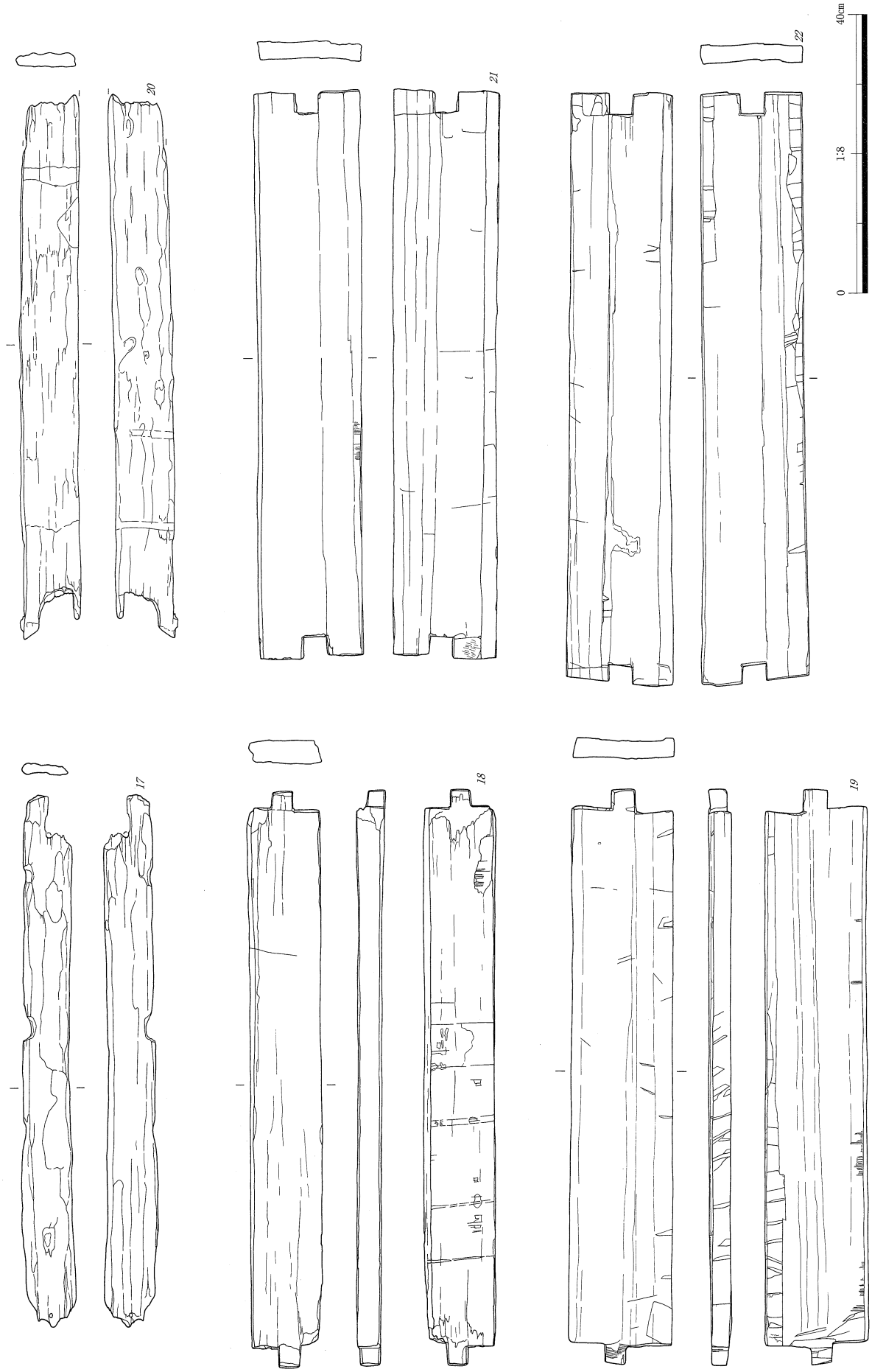
（越前慎子）

注25　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所「Ⅸ．放射性炭素年代測定　１．手洗野赤浦遺跡・岩坪岡田島遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定」
注26　佐々木孝雄氏より，絵巻などによれば，如意頭文の形の意匠は衝立や格狭間の建具の他に建物や正門の外壁にも装飾として使用されている旨をご教示頂いた。
注27　窪寺茂氏のご教示による。

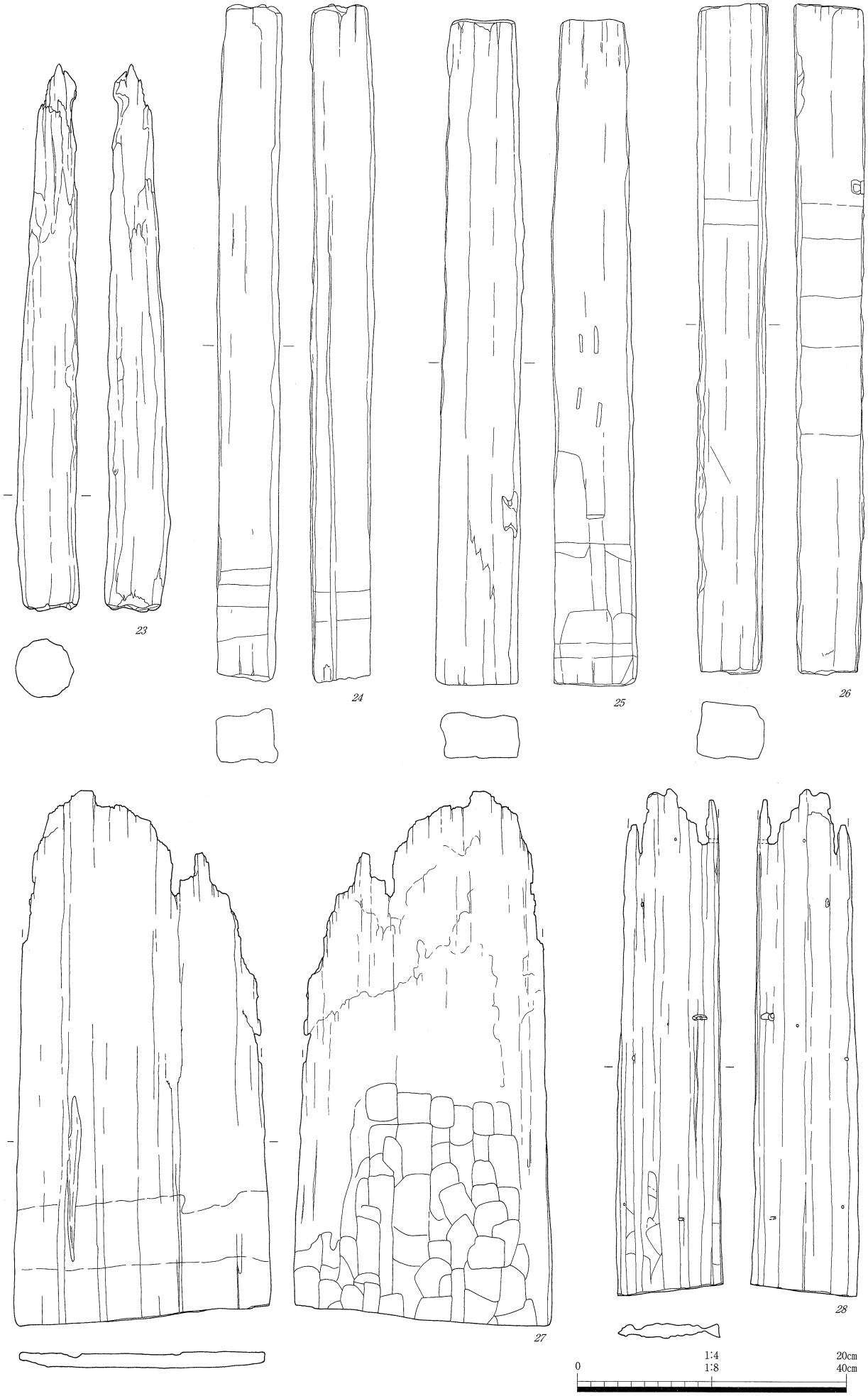


第117図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　木製品（*1*　1/2，*2*～*16*　1/4）

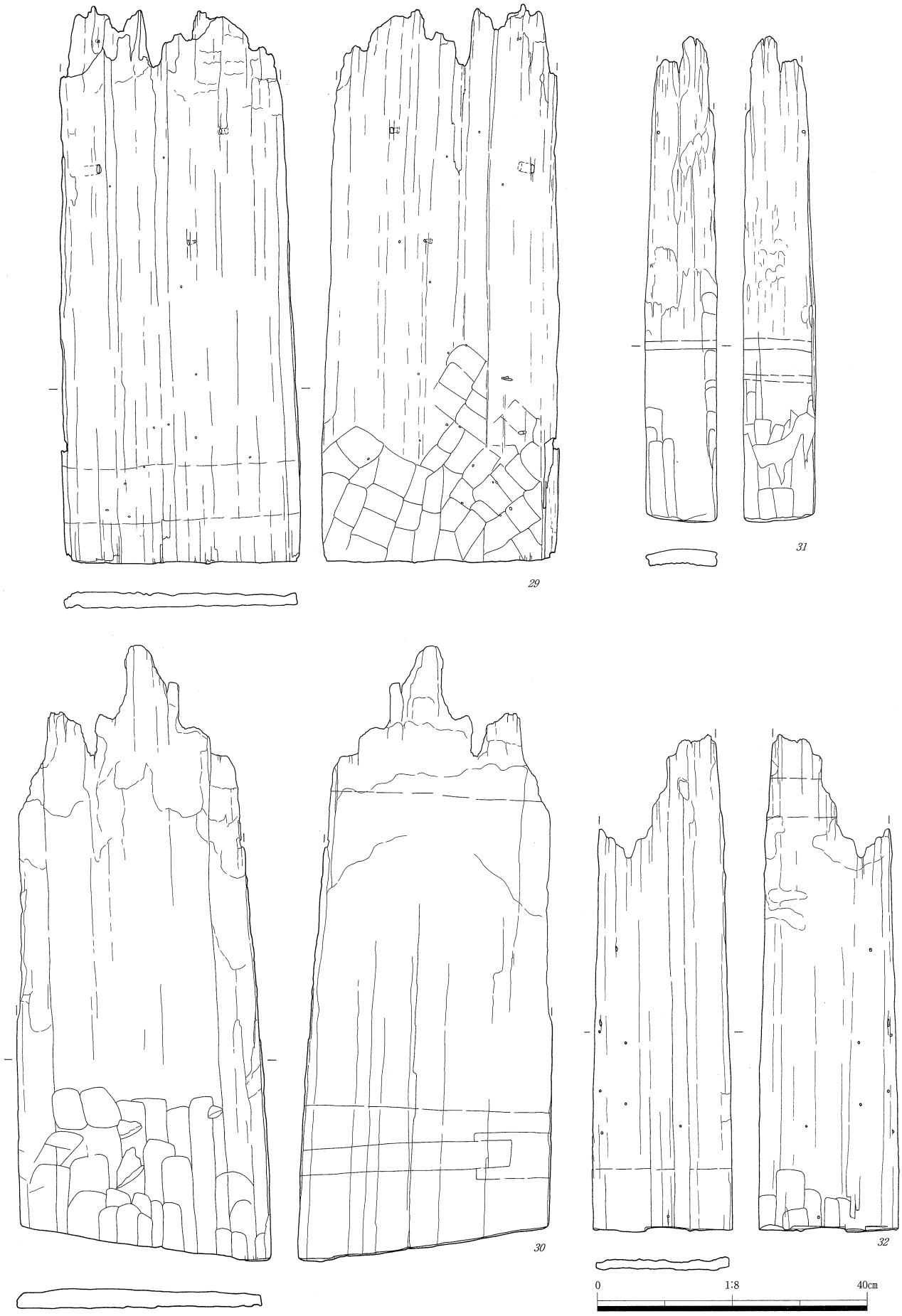
SD4（*5・15*）　SD11（*12・14*）　SD301（*4・6*）　SE1001（*9・13・16*）　SE1009（*7*）　SE1291（*1*）　SK1302（*11*）　包含層（*2・3・8・10*）



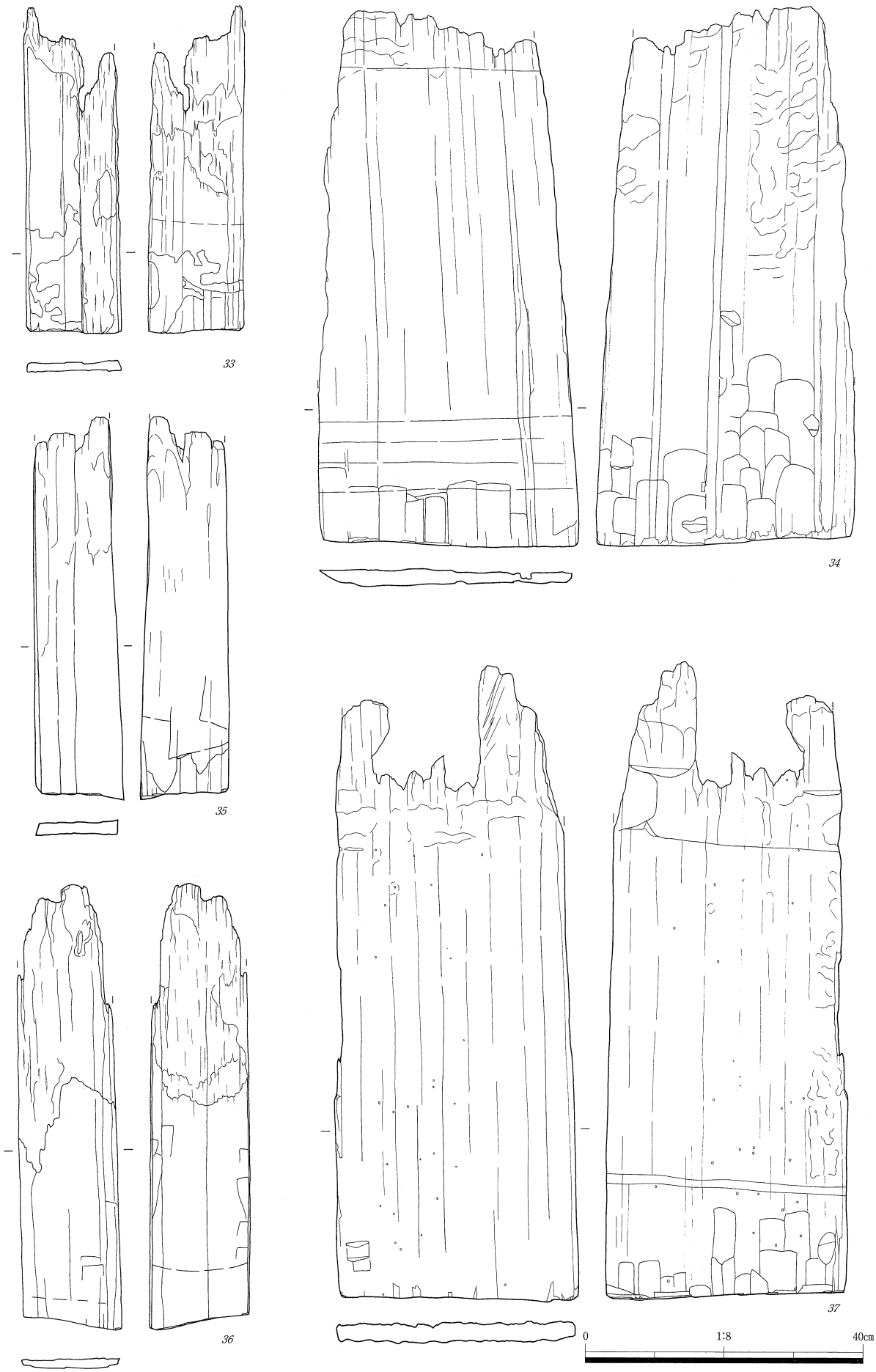
第118図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　木製品　(1/8)
SE1001（*17～22*）



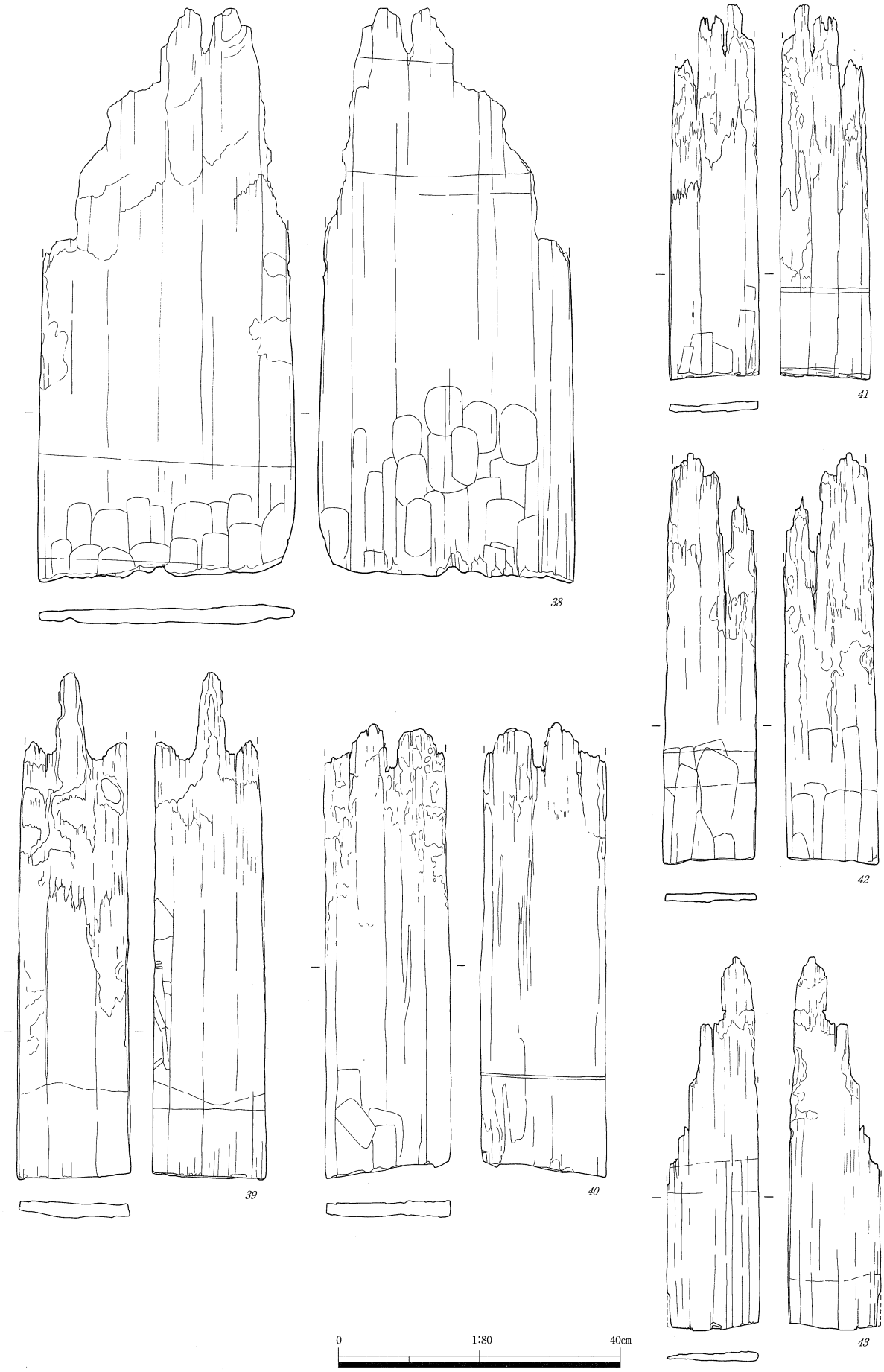
第119図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　木製品　(*23*～*26*　1/4，*27*・*28*　1/8)
SE1001



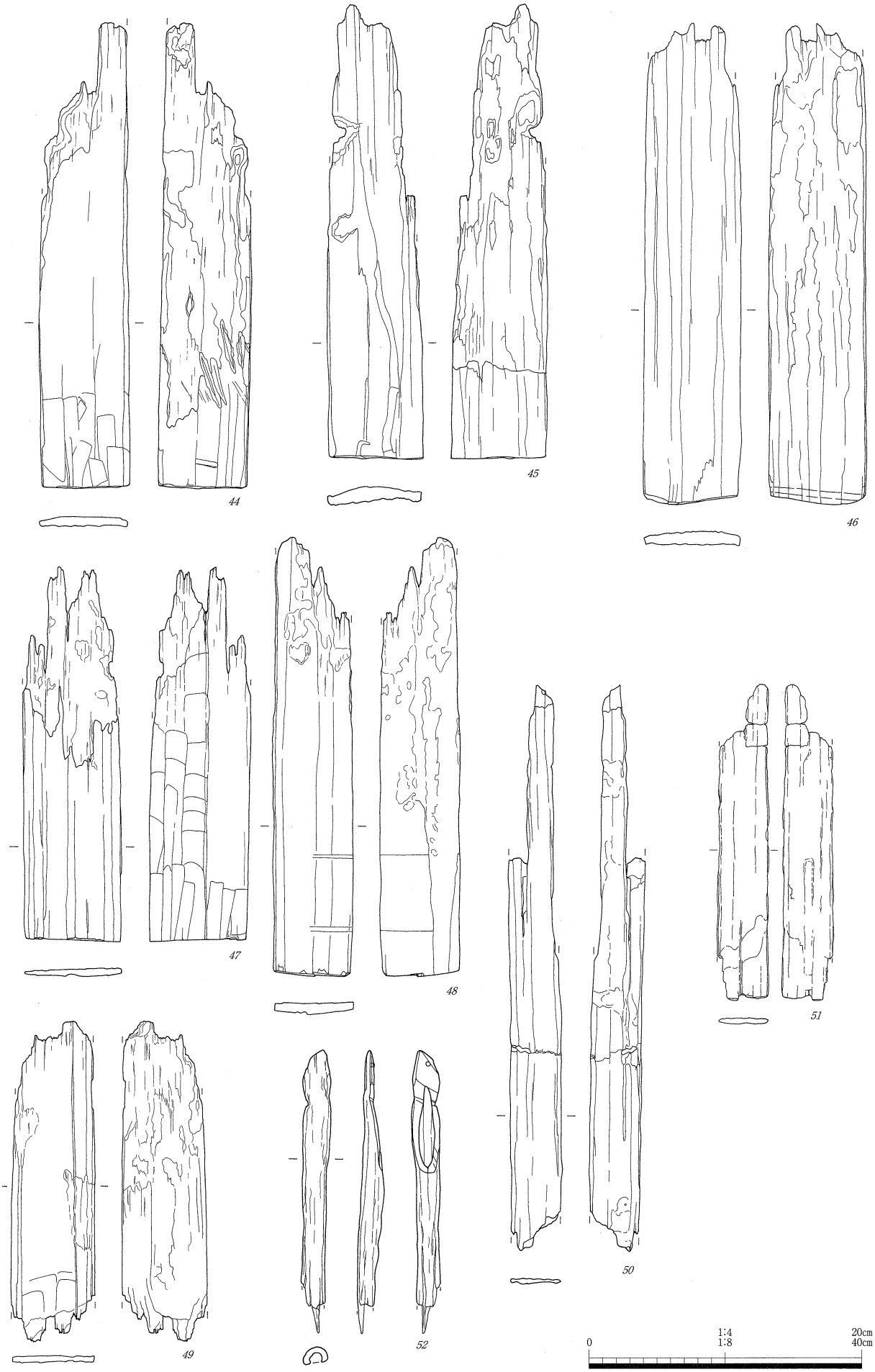
第120図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　木製品　(1/8)
SE1001（*29～32*）



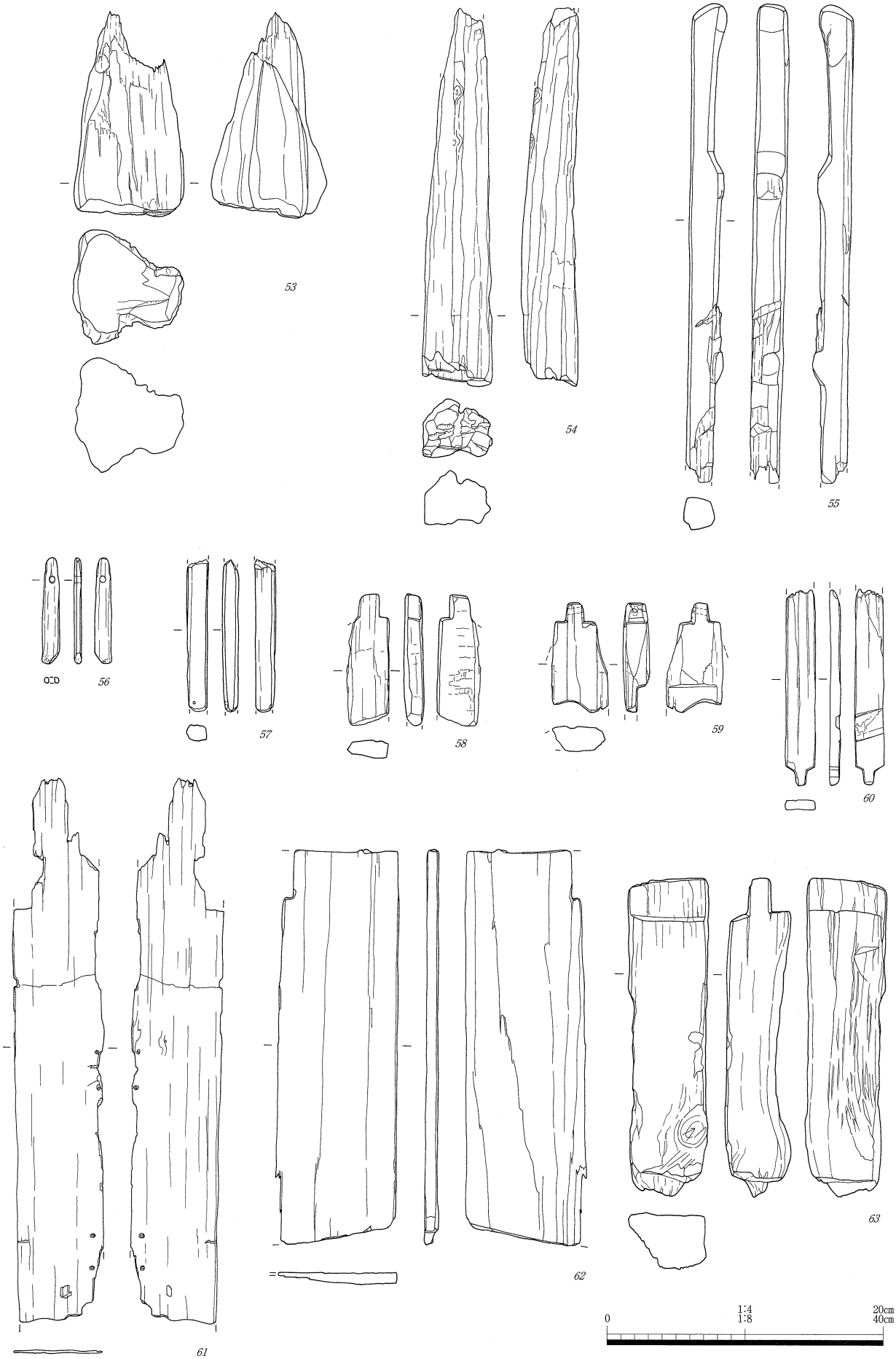
第121図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　木製品　(1/8)
SE1001（*33*～*37*）



第122図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　木製品　(1/8)
SE1001（*38*～*43*）

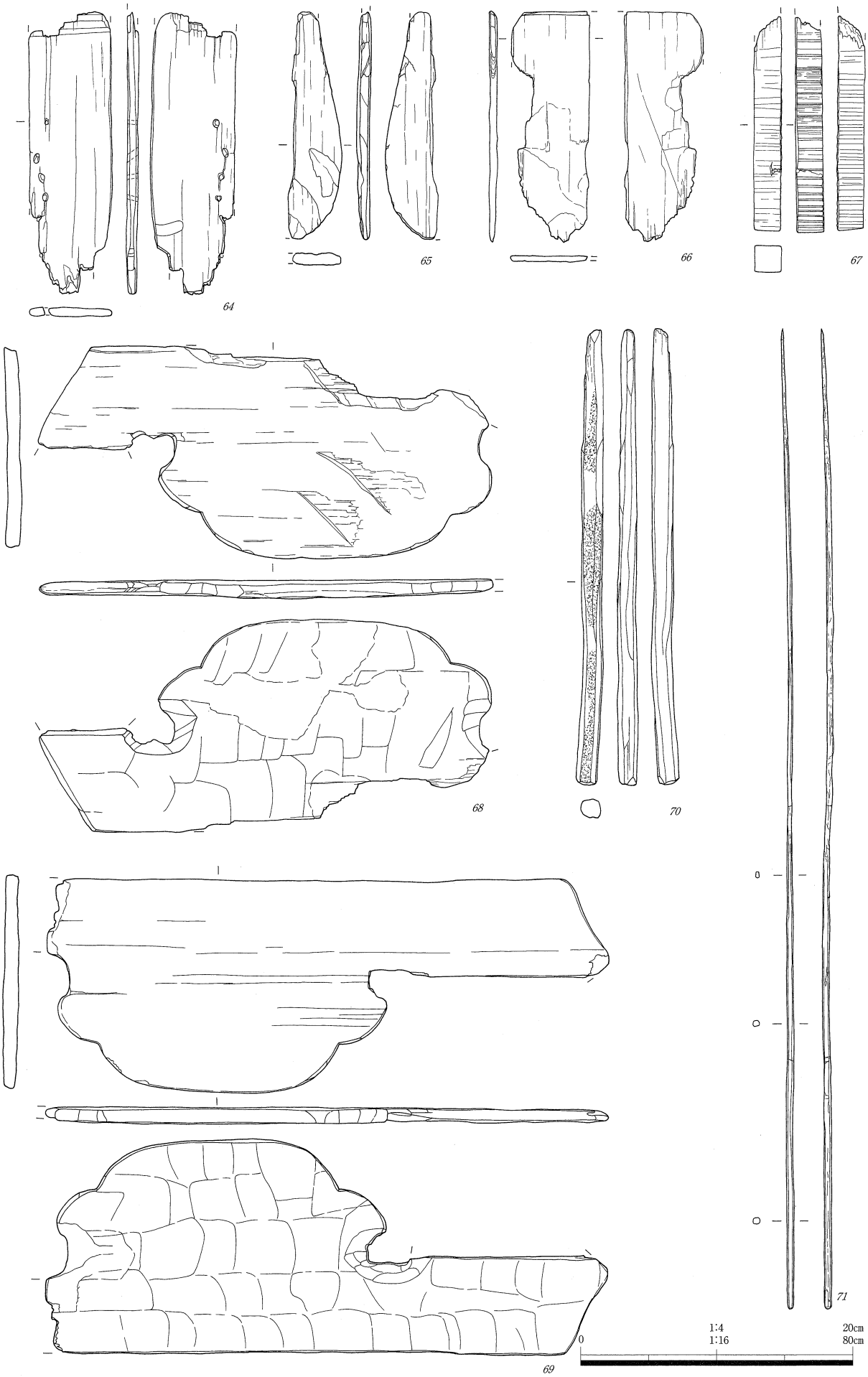


第123図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　木製品（*52*　1/4，*44*～*53*　1/8）
SE1001（*44*～*49*）　SE1291（*50*～*52*）

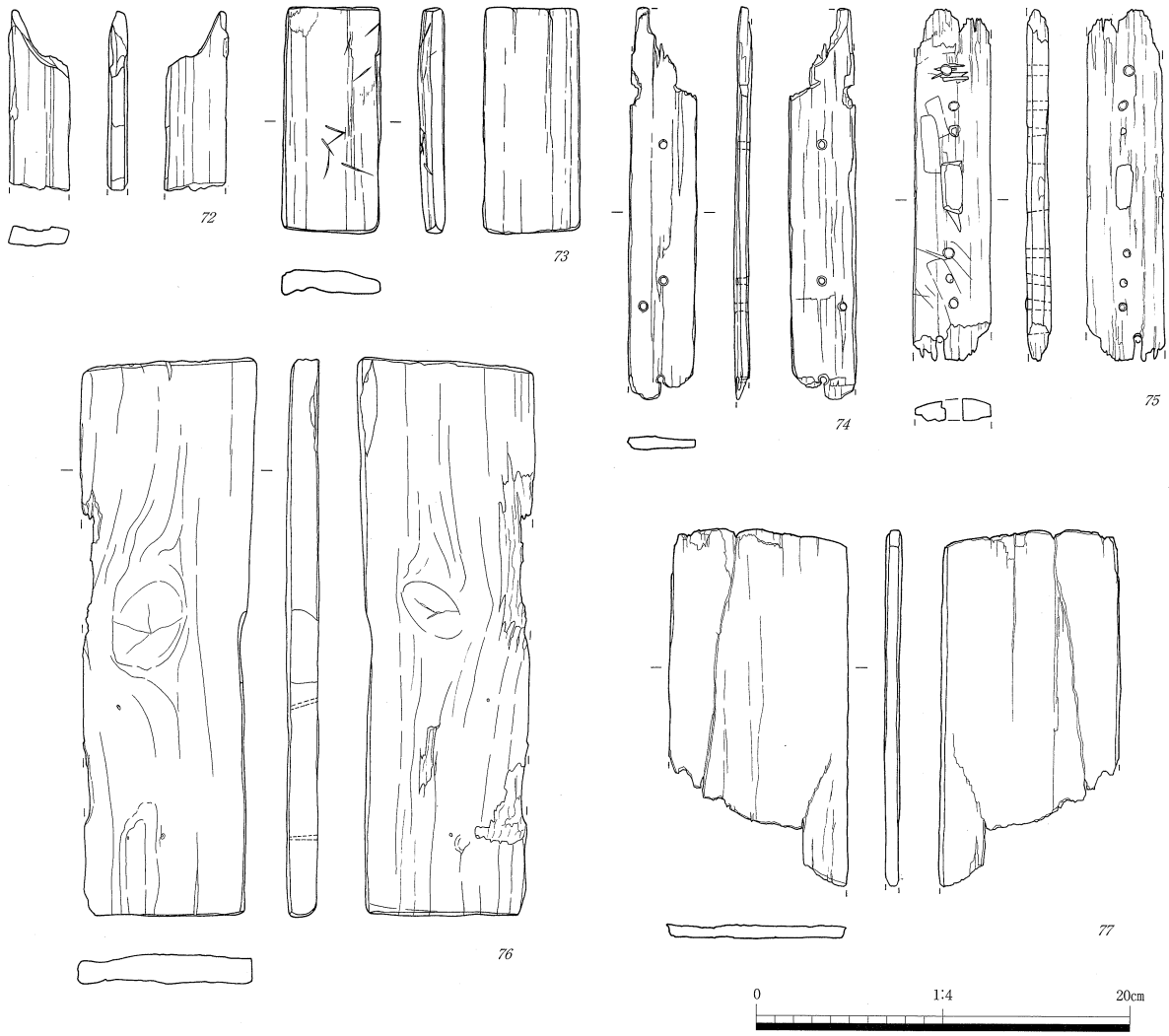


第124図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　木製品　（*53・55～60・62・63*　1/4，*54・61*　1/8）

SB3　SP234（*54*）　SB8　SP1510（*53*）　SD4（*60*）　SD11（*56・59*）　SD301（*55・57*）
SE1001（*61・62*）　SX12（*63*）　包含層（*58*）



第125図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　木製品（*64*～*70*　1/4，*71*　1/16）
SD4（*67*）　SD11（*65*・*68*～*70*）　SE508（*64*・*66*）　包含層（*71*）



第126図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　木製品　(1/4)

SE451（*77*）　SE1229（*72*）　SK1301（*75*）　SK1305（*73・74*）　SX12（*76*）

（3）石製品

石鏃（第127図，*1*，図版77）

*1*は，凹基の石鏃。石材は，泥岩。8号土器集中地点のＳＤ1123肩部から出土した。

扁平片刃石斧（第127図，*2*，図版77）

*2*は碧玉製で，完形である。擦切技法で成形後，研磨して仕上げている。刃部に線状痕が顕著にみられる。ＳＤ301から出土した。

剥片（第127図，*3*・*4*，図版77）

*3*は，石器の破片。縁辺部に加工を施す。石材は，流紋岩。ＳＸ1121から出土した。

*4*は，剥片。不純物が多く，この部分を残して石器を作っていったものと考える。石材は，流紋岩だがいわゆるグリーンタフ。ＳＸ1121から出土した。

磨石・敲石（第127図，*5*・*6*，図版77）

*5*は磨石で，正面と側面に磨面がある。石材は，凝灰岩。ＳＸ1121から出土した。

*6*は，敲石。背面を磨面として使用した後に正・背・側面に敲打痕を残す。帯状に煤が付着する。石材は，凝灰岩。3号土器集中地点から出土した。

凹石（第127図，*7*，図版77）

*7*は正面中央に凹みがある。石材は，花崗岩。2号土器集中地点から出土した。

砥石（第128・129図，*8*～*20*，図版78）

12・*15*・*20*はＳＤ301，*17*はＳＥ508，*18*はＳＥ1105，*19*はＳＫ428，その他は表土及び包含層から出土した。

*8*は鳴滝産の頁岩製で，仕上げ砥として使用されたものである。激しく使用されており本来の形をとどめていない。*9*は砂岩製で，中砥に使用されたものである。主要な砥面は正面のみで裏面側は破損しているが，表面が摩耗しており破損後も使用されている。*10*～*12*・*15*・*16*・*18*は凝灰岩製で中砥に使用されたものである。*10*は細い長い面が砥面とされており，手持ち砥石と考えられる。*11*は4面が砥面とされており，3面に浅い溝状の砥面がある。被熱して煤が付着している。*12*は被熱しており，平滑な砥面が3面ある。*15*の主要な砥面は表裏である。側面には消費地での加工痕がある。被滅している。*16*は主要な砥面は正面のみで裏面側は破損しているが表面が摩耗しており破損後も使用されている。砥面が平滑でなく波打っており，置き砥から手持ち砥石に転用されたものと考えられる。*18*は3面が砥面とされており，砥面は平滑ではなく波打っている。手持ち砥石に転用されている。被熱しており煤が付着している。*13*は凝灰岩製で，主要な砥面は表裏面で波打っている。手持ち砥石として使用したもので，仕上げ砥であろうか。*14*は鳴滝産の頁岩製で，仕上げ砥である。主要な砥面は正面のみで裏面側は破損しているが，表面が摩耗しており破損後も使用している。両側面と小口面には生産地での鋸引きの加工痕がある。*17*・*19*は砂岩製の中砥である。*17*はほぼ全面に砥面があるが，各砥面は波打っている。手持ち砥石としてかなり使用されている。*19*は主要な砥面は3面あり，砥面は平滑でなく波打っている。置き砥から手持ち砥石に転用されている。*20*は凝灰岩製で仕上げ砥である。置き砥で，主要な砥面は表裏である。砥面は平滑であるが一部に斜め方向の線状痕がみられ，刃先などの研磨に使用された可能性がある。右側面には加工痕がみられるが消費地のものと考えられる。

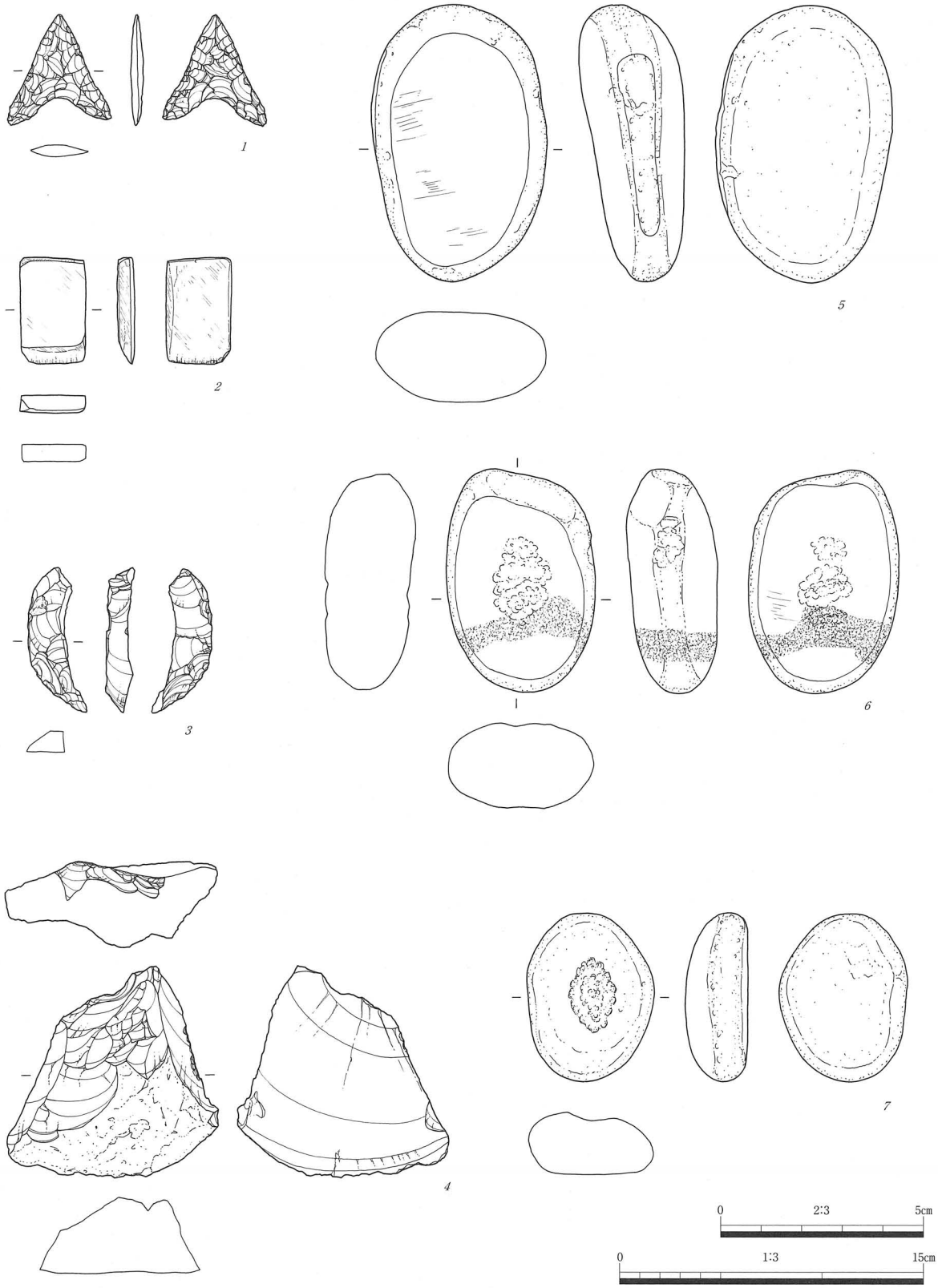
火打ち石（第129図，*21*，図版77）

*21*はめのう剥片で，垂直打撃で剥離された縦長剥片である。火打ち石か。ＳＥ504から出土した。

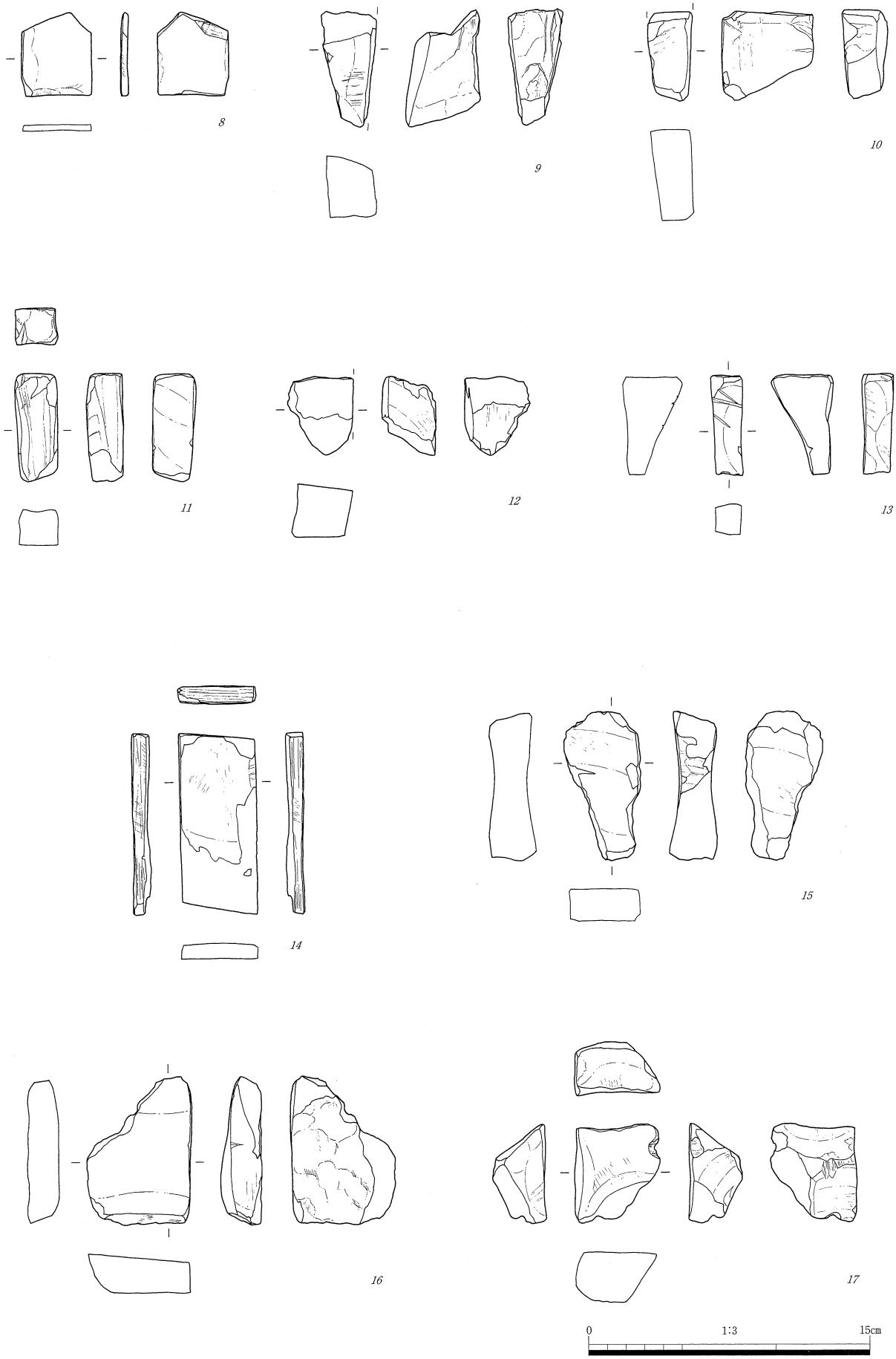
石鍋（第129図，*22*，図版77）

*22*は滑石製の石鍋である。口縁部断片で，再加工された痕跡があり，温石に転用された可能性がある。ＳＤ301から出土した。

（越前慎子・町田賢一）



第127図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　石製品（*1*・*3*・*4*　2/3，*2*・*5*～*7*　1/3）
SD301（*2*）　SX1121（*3*～*5*）　土器集中地点2（*7*）　土器集中地点3（*6*）　土器集中地点8（*1*）



第128図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　石製品　(1/3)

SD301（*12・15*）　SE508（*17*）　包含層（*8～11・13・14・16*）

第129図　岩坪岡田島遺跡　遺物実測図　石製品（*21*　2/3，*18*～*20*・*22*　1/3）
SD301（*20*・*22*）　SE504（*21*）　SE1105（*18*）　SK428（*19*）